





迷

リ

3

猫

の

馬

楽

組

小高まな

ひよこなしの二人組

第一幕 捨て猫の拾い方

女は、足下を見下ろした。
人が豆粒のような小ささで歩いているのが見える。
スカートの裾が、風でふわりと揺れる。
一つ息を吸う。
そして女は、ビルの屋上から飛び降りた。

それは三日間続いた雨が止み、憎らしいくらい快晴の日だった。
神山隆二は、切れた珈琲と煙草を買いに普段蟄居している自宅からしぶしぶ出てきた。
日差しがまぶしい。
ほどほどに人通りのある道をだらだらと歩く。家から一番近いコンビニが徒歩十分というのはやっぱりよくない。家から二分のところにあったコンビニは昨年末閉店した。たかだか珈琲と煙草を買うのに五倍も歩くなんて非生産的だ。

などと墮落しまくったことを思いながら、のぼしっぱなしの茶色い髪を右手でかきあげる。
ジーンズのポケットに両手を突っ込んでだらだらと歩く。

『やー』

上から何かかけ声のようなものが聞こえた気がして、上を見る。
ぎよっとする、とはこのことだ。
ビルの上から女が一人ふってきた。
え、何自殺？
思わず立ち止まる。急に立ち止まった隆二の背中に真後ろを歩いていたサラリーマンがぶつかった。スーツ姿の彼はちっと舌打ちする。

すみません、ともごもごと呟いて頭を下げる。

その間に、女は隆二の鼻先を通り過ぎて地面に落下した。

アスファルトに頭をのめり込ませて、足だけが二本飛び出ている。なんかで見た事ある光景にしばし考え、

「すげきよかよ」

有名な小説の一場面を思い出し、口の中で言葉を転がすようにしてつつこむと、その足を通り抜けてコンビニを目指した。

こうも暑いと変な輩が増えるな。

『って、ちょっとまったー！』

後ろから声が聞こえる。女の声にしては高すぎず、耳に心地いい程度の高さで、隆二は少し感心する。声量はともかく。

『ちょっとあんた！ その茶髪にギンガムチェックのシャツきた、むっつりしたそのあんた！ あんた、あたしのこと見えてるんでしょう？ うら若き乙女がビルから飛び降りてきたって

いうのに無視するなんて一体どういう了見よっ！ ひとでなし！』

ギャギャー騒ぎつつ、近づいてくる。

『聞いてるんでしょ！ 逃がしはしないわよっ！』

女は隆二の前に両手を広げて立ちふさがる。しかし、それは丁度コンビニの前。隆二は女の鼻先で曲がり、すっと店内に入った。

入ってすぐの角を曲がる。窓際、雑誌のラックの前を通り過ぎる。週刊誌には毒々しい字で「怪奇！ ミイラの謎！」という文字が踊っていた。

いつも飲んでいるインスタントコーヒーを手に取り、レジにむかい、

「マルボロ」

すっかり顔なじみになった店員にそう声をかける。店員はいつも通り三箱用意してくれた。

『ちょっとちょっとちょっとと！ 何無視してくれちゃってんのよ！』

慌てて店内に入ってきた女が耳元でぎゃーぎゃー騒ぐ。

相変わらず愛想のない店員に代金を支払う。

もっと愛想のいい可愛い女の子もいるのに。なんでこいつはこんなに愛想がないんだか、同じ店なのに。

黙ったまま金銭の授受が行われる。

『ちょっと、聞いてるの！？ 聞いてるでしょう！？ なんとかいいなさいよ！ あ、だからって「なんとか」ってだけいう、そんなお約束な展開は許さないんだからね！ 無視しないでよー！』

乱暴にビニールに入れられたコーヒーと煙草を持ち、コンビニを後にする。ついでに入り口のところにあったバイト情報誌をとると、袋の中に押し込んだ。そろそろなにか仕事を探さないと

。

『あんた、あたしのことをなんだと思ってるのよ？ 馬鹿にしてるの！？』

ぎゃーぎゃー騒ぐ女を通り抜ける。

「なにしてそりゃあ」

小さく口の中だけで呟く。

「頭湧いた幽霊だろ」

あっついなー、と空を睨み、家路を急いだ。

『ほんっとむかつく、聞こえてるのに無視するとか最低、どういう育て方されたの？ お母さんが泣いてるわよ』

喚いたまま、結局家までついてきた幽霊が、わざとらしく右手を目元にあてて泣きまねをする。芸が細かい。

出かける前に湧かしておいたお湯をカップに注ぎ、念願のコーヒーを一口すする。昔の知り合いはインスタントなんて邪道だ！ なんて言っていたけれども、世の中楽が一番だろう。

『もう、なによ、ティータイム？ あ、コーヒーか。コーヒーブレイク？ 可愛い女の子放り出してコーヒーブレイク？ あたしのハートがブレイクしちゃうわよ、まったく！』

意味がわからない。

「あんたさ」

ダイニングの椅子に腰をかけると、両手を体の真横で握りしめて叫び続けていた女を見る。

「そんなに喋っててよく疲れないよね？」

心底感嘆して呟く。喋るのって疲れるし。

女は何故かぼかん、っと大きく口をあけてこっちをみる。

「……何？」

そんな顔をされる理由が思いつかず、問いかけると、

『あなた、あたしが見えるのっ！？』

勢いよくこちらに身を乗り出してくる。テーブルの上に手をつけて、結局勢い余ってめり込んだ。

「は？」

驚いたかのように見開かれた、アーモンド形の瞳をみつめる。

「あんた、散々喋ってたのに。気づいてたんじゃないわけ？」

『え……、最初は見えてるのかと思ったけど、あまりに無視するから違うのかと思ってた……』

もっと無視しとけばよかった。

「じゃあ、なに家までついてきてるわけ？」

呆れて問うと、

『暇だったから』

何故か女は自信満々に答えた。

「ああ、そう」

変な幽霊。思いながらコーヒーをもう一口。

『ちょ、じゃあ、なんで無視してたのよっ！』

「道ばたで会話したら、空気と会話している怪しい人だろ」

肩をすくめる。

『あなた、自分が空気と会話する怪しい人になりたくないなんて緩い理由で、あたしみたにかわいくて、チャーミングで、美しくて、うら若き乙女の呼び声を無視したの！？ 最低だわ』

「いや、ふつう無視するだろ」

自分で可愛いとかチャーミングとかいうのもどうかと思うし。

「で、あんたなんだよ。こんなとこまでついてきて」

『暇だって言ったでしょう？』

女は、ついさっき言ったのにもう忘れちゃったの？ と小馬鹿にした顔をする。なんとなく腹が立ったが、ぐっと堪えた。

いちいち怒っていたら、多分、話が先に進まない。話を先に進める必要があるのかも、甚だ疑問だが。

「暇ってなあ。っていうか、幽霊ってそういうものなのか？ 本来なら怨念とか未練とかそういうものがあるんじゃないのか？」

忙しいかはともかく、こんな風にぶらぶらはしては行かないはずだろう。

『だって』

と、幽霊の女は不満そうに唇をとがらせると、

『あたし、自分がなんだったかわからないんだもの。記憶喪失、っていうの？』

一瞬の沈黙。

時間をかけて女が言った意味を飲み込むと、

「……幽霊って、記憶喪失だったりするんだ」

へー、驚いたと言うと、

『ん？ 今のはバカにしたわね？』

にらまれた。そりゃあ、バカにしたくもなる。

「じゃあ、生前の記憶とかまったくなし？ 自分が誰だったか、とか」

『うん』

それは困った。お引き取りを願おうにも、未練はもとより、なにもわからないならば成仏していただくのも困難だ。

「ビルから落下したってことは、飛び降り自殺とかだったのかな」

唯一の手がかりをもとに、死因の特定に走るが、

『あ、あれ？ あれは単に暇だったから遊んでただけ』

はたはたと片手をふる。こいつうぜー。ちょっと思った。

「遊んでたって」

『なんていうか、バンバンジー感覚？』

「バンバンジー……？」

『……あれ、違う？』

首を傾げる。

「……多分だが、バンジージャンプ？」

『そーそれ！』

あなた物知りねーと笑う。お前がばかなだけだろ。

『最初はね、ビルの上から道行く人を見てたりして、そういうのが楽しかったんだけど。段々飽きて来ちゃって。そしたら電気屋さんのテレビでバンジージャンプ？ やってて、楽しそう。それで、試しに飛び降りてみたらすっごい爽快感で！』

「あー、そう」

『でも、みんな気づいてくれないからつまんなかったんだけど。そしたら、あなた、立ち止まるじゃない？ だからこれは見えてるな！！ って思ったの』

満足そうに女は微笑む。

それから、

『まあ、ともかく。そんなわけであたし自分がどうしたらいいかわかんないし、一人だと暇だし、幸いあなたあたしがみえるみたいだし！』

腰に手をあててなぜか上から目線で幽霊女は言った。

『ここにおいて頂戴』

「ご自由に」

ある程度予想できた言葉に、さらりと返事した。

『え、そんなあっさり！！』

逆に女が焦ったような声を出す。

『言い出しておいてなんだけど、あなた、そんなに簡単に他人を家においていいの？ そんな不用心でいいの？ 大都会は危ないのよ？ 大都会の闇！ 家出少女達を待ち受けるものとは一体！ みたいな』

なんだろうか、そのやすっぽい特集番組みたいなあおりは。そもそも、家出少女に該当しそうなのはそちらだし。

「いいの？ とか言われたって。一般の防犯対策効かないんだから追い出したって意味ないだろ。追い出せないし」

でていけ！ と言ったところで、幽霊ならば居座ることは簡単だ。ドアだって窓だって壁だつてすり抜けられるのだから。

『え、じゃあ本当にいいの？』

「あー、まあ」

『嬉しい！ あなたいい人ね！』

言いながら両手を広げてこちらに向かってくる。

半身をかわして避けた。

女はそのまま、壁にめり込む。

足がびよんと壁から生えた。裸足の足。

『何よ！』

すぽんと顔を引き抜いて、女が睨む。

「なれなれしいだろ」

言うと、

『もう、照れ屋さんなんだからあ』

しょうがないわね、といった体で返された。

今からでも遅くないから、放り出そうか。ちょっとだけ思った。

「……勝手にしろ」

でも、色々諦めてそう言う。

ずっと一人でやってきたのだ、幽霊の一人ぐらい家に置いても問題ないだろう。人間じゃなくて、幽霊なのだから、間違いが起きる訳もないし。

「まあ、しかしあれだ。名前ないと呼びにくいな」

『じゃあつけて頂戴』

優雅に微笑むと、女は言った。

なんで偉そうなんだろうこいつ。

幽霊女の頭の上からつまさきまでゆっくりと見る。

眉の上で切りそろえられた前髪の下から、つりめがちの瞳がのぞく。よく見ると瞳は緑色だった。

鎖骨の下でゆるくカールしている髪も緑色がかっている。

白いワンピースからすらりとした手足が伸びている。ふわふわ浮かんでいるからわかりにくい、女子の平均身長以上はあるかもしれない。

全体的に上手く配置された形のいいパーツ達。なかなか人間だったころは、美人でモテたことだろう。

惜しむべきはなんの起伏もない胸か。ぺったんこにもほどがあるだろ。見た目十代後半ぐらい、これから成長する……予定だったのか。これは無理そうだな。

女は、自分で言ったくせにつまらなさそうに髪の毛を指先に巻き付けている。毛先をじっと見つめている。幽霊にも枝毛ってあんのかな。

なんだか猫みたいだなー、と思う。気まぐれで自由気ままで。

そういえば以前、少しだけ猫の面倒をみていたことがある。一緒に住んでいた人間が飼っていただけだが。あの猫はもうちょっと大人しかったぞ。

少し昔を思い出してため息。その話は忘れよう。

もう一度、上から下まで眺め、

「マオ」

一言告げた。

沈黙。

『あ、それ、あたしの名前？』

一拍置いてから女が言った。人差し指で自分の鼻を指差す。

「ああ」

忘れかけていたコーヒーを一口。

『マオ、マオ』

女は小さく呟く。

『ねっ、ねっ、どういう意味？』

下から顔を覗き込んでくる、小首を傾げて。それはさながら、テーブルから生える、女の生首。

「猫、中国語で」

『猫！』

「猫っぽいから」

『猫っぽい！』

何故復唱する。

「気に入らないなら自分で考えろ」

めんどうになってそういうと、女の視線から逃れるようにそっぽを向いた。

『いい、いい！ 気に入った』

隆二の視界にぐるっとまわりこむ。

『ありがとう！ ええっと……』

言って首を傾げるので、

「あー。神山隆二」

名乗った。

『隆二ね！』

「呼び捨てかよ」

『あたしのことも呼び捨てでいいのよ？ その、マオ……って』

何故か視線を床に向け、少しだけ頬を染めて言う。

「あー」

『よろしくね、隆二！』

顔をあげてにこやかに微笑む女を見て、

「あー、よろしく」

ため息まじりに苦笑しながらも、隆二は頷いた。

「マオ」

名前を呼ぶと、ぱっと花が開いたように、嬉しそうに、マオは笑った。

「ほらほら、おいで」

彼女は、片方の手を伸ばしながらそう言った。

何度かそれを繰り返すうちに、相手は警戒しながらも少し近づいて来た。

そして……、

「痛い！」

彼女は伸ばしていた方の掌をひっこめると、押さえ、小さく悲鳴をあげた。

その際に彼女をひっかいた猫は逃げていく。

その後ろ姿を見送ったあと、彼は彼女の掌をとる。

「血は出てない、な。とりあえず、あとで消毒しておけよ」

「はい」

彼女は素直に返事をする、掌を見つめたため息をついた。

「これで今週入ってから三日目だ……」

「……今日は火曜日だったと記憶しているが？」

彼は唇を皮肉っぽく歪めてそう言うと、彼女はふくれた。

「どうせ、毎日毎日ひっかかれていますよーだ！」

そのまま、べえっと舌を突き出す。彼はそれを呆れたように見ていたが、少し経つとそれをひっこめ、真剣な顔をして言った。

「……茜、やっぱり野良は警戒心が強いから気をつけた方がいいんじゃないか？ 傷口から何か病原菌に感染してしまってから嘆いても遅い」

「隆二、そうは言うけれども、」

不服そうに頬をふくらませる彼女を遮る。

「というか、人に平気で近づいていくような野良は駄目だろう。生き残れない」

そう言うと彼女は少しうつむいた。

「そっか、そうだよね……」

そのとても残念そうな様子を見るに耐えなくて、彼は続けた。

「だから、餌を与えたいならばここに置いておけばいいんじゃないか？」

そうやってほらっと、物陰からこちらを見ている猫を指さす。

「あ、そっか」

彼女は嬉しそうに笑うと、煮干しの入った袋を取り出し、地面にばらまく。それから、猫の方に手を振った。

「それじゃ、私たちは行くからゆっくり食べて大きくなるのよ」

どこか間の抜けたその言葉に苦笑しながら、彼は歩き出した彼女の後をついていく。

夕暮れ時の土手を二人で歩く。

「そんなに猫が好きならば、飼えばいいだろう」

「う～ん、でもねえ」

彼女は彼の言葉に首を傾げる。

「それはそれで色々と問題があるからな。餌代とか糞とか。飼いたいのはやまやまだけど。それに、先生は私が猫と触れ合うのあまりいい顔しないから」

「だろうな。おまえ、ただでさえ体弱いのにその自覚ないから」

「何よ、その言い方」

「あまり無茶をするな、と言っているんだ」

冷たい言い方ではあるが、それが口下手な彼にとって「ものすごく心配だから無茶はしないでくれ」を表す言葉だと気づき、彼女は少しくすぐったそうに、でも嬉しそうに微笑んだ。

「うん、気をつける。ありがとう。……あれ、でも、飼ってもいいの？ 前は嫌そうにしていたのに」

「毎日毎日、野良に餌をやりに行くのにつき合わされるよりは幾分ましだ」

「……そう」

彼女は小さくため息をついた。それから、あ～あと大げさに嘆く。

「なんだ、てっきり隆二もついに猫の可愛さに気づいたのかと思ったのに」

「俺は未だに思うぞ。あんな懐かない生き物のどこがいいのか、と」

彼女はわかってないなあ人差し指を顔の前で数回振り、続ける。

「確かに猫って、こちらが気を引こうと一生懸命になっても向こうは冷めた目で見てくるだけよね。だけど、時々、本当に向こうの都合でしかないのだけど、気が向くと甘えてくるのよ。不思議なものでね。ちっとも懐かないから嫌いだ、って思っていた猫も一度甘えられると手放せなくなるのよねえ」

まるで恋する乙女のような目をして猫について語る彼女を見ながら、彼は小さく肩をすくめた。彼女はそれを見咎め、あ～と叫ぶ。

「何よ、今の態度は！」

「思ったことをありのままに表現しただけだ」

「もう、隆二はいつもそうなんだからっ！ そういうときは嘘でも、『そうだね』とか言ってくれればいいじゃない！」

「そうだね」

「白々しい！」

「嘘でもいいと言っていたらろう？」

むきになる彼女が愛らしく、彼は楽しそうに笑う。めったに笑わない彼の笑みを見て、彼女も結局それ以上言及するのはやめた。

代わりに違うことを呟く。

「……そういえば、隆二って猫に似ているわね」

そういうと、彼は不愉快そうに片方の眉を上げた。

「俺が、猫に？」

「そうよ、似ているわよ。だって、最初はあるにつけどんどんで、人がせっかく助けてあげた

のに、全力で嫌がるし、すぐにふらりとどこかに行っちゃうところし、気まぐれだし、でも優しいし、そっくりじゃない」

「似てない」

何もそこまで否定することはないだろうと、我ながら思うのだが何故かむきになって言い返すと

「似ている！」

彼女の方もむきになって言い返してきた。

「似てない」

「似ている！」

「似てない」

「似ているっ！」

「似てないったら似てない」

「似ているっていったら、似ているの！」

途中で子どもの喧嘩みたいな状態になったことにお互い気づき、黙る。自分達はいま、一体何をしていたのだろうか。

「……なんでそんなに否定するのよ」

「そっちこそ、なんでそんなにむきになるんだよ。似ていると茜が思うなら俺が何と言おうと似ていると思いつづければいいじゃないか。思うだけなら自由だぞ」

「私ね、猫が好きなの」

脈絡の無い言葉に眉をひそめる。

「それは十分すぎるほどよく知っているが、何で今それを？」

「私、隆二のことも好きよ」

いきなりのまっすぐな言葉に、歩いていた足を思わず止める。

彼女はまっすぐに彼を見つめて言った。

「勿論、それは隆二が猫に似ているから好き、なんている理由じゃない。隆二に対する想いと猫に対する思いが同じ訳でもない。でもね、私は隆二も猫も好きだから、私の好きな隆二が私の好きな猫のことを好いてくれたら嬉しい。そうすれば、隆二も猫ももっと好きになれると思うの。だから……、」

段々、彼女は自分が何を言いたかったのかわからなくなり、言葉が尻すぼみになる。

少しの沈黙。

「……わかった」

彼は口元に微苦笑を浮かべながら、ぽんぽんと彼女の頭を撫でて、でも恥ずかしいので視線は合わせないで言う。

「まあ、善処するよ。猫を好きになれるように」

そういうと彼女はくすぐったそうに笑った。

そして、彼女は最後に照れ隠しの意味もこめて言った。

「隆二も、猫を飼ってみればいいのよ。そうすれば、絶対そのかわいさに気づくから」

にゃ～

彼女が言い終わると同時に、鳴き声がした。

彼女は意中の人に会いに行く乙女のように顔を輝かせ、視線をさまよわせる。

既に、大好きなはずの彼のことなど視界に入っていないようだった。

それを見ながら彼はため息をついた。彼女が仕組んだのではないかと思わせるぐらい、絶妙のタイミングだったと思って。

それから、もしかしたら自分が猫が好きになれないのは、柄にもなくヤキモチを妬いているからかもしれないと思った。猫にヤキモチを妬いているなんて、みっともなくって彼女にはいえないが。

でも、もしヤキモチを妬いていると言ったら彼女は少しは喜んでくれるのだろうか。それならば、いつか機会があるときになら言ってみてもいいかもしれない。

彼がそんなことをつらつらと考えている間にも、彼女はダンボールを見つけだす。慌ててそちらにかけていき、中を確認すると、腕を組んで傍観者に徹していた彼を手招きする。

「ちょっと、隆二来て」

その声にせかされて、いささか早歩きでそこまでいった彼に、彼女はダンボールを抱えさせる。中をのぞいてみたら、予想通り子猫が震えていた。

黒い子猫だった。黒猫は不吉だといわれるが、薄汚れているがそれでもわかるような、綺麗な毛並みをしていた。黒というよりも、漆黒。

緑の瞳でじっとこちらを見てくる。

「……茜？」

「けがしているみたい、捨て猫かしら？ かわいそうに、まだこんなに小さいのに」

不可解そうに彼女の名を呼ぶ彼を、彼女はまったく相手にしない。

「茜？」

もう一度、先ほどよりも強く名を呼ぶ。

「ねえ、隆二」

彼女は再び彼を遮り、彼の前に回り込み言った。

「助けてあげなきゃね」

彼は数秒、何を言おうか悩んだが、結局何も言わずに歩き出した。

彼女が一度言い出すときかない性格なのはよく知っているし、大体さっき自分で飼えばいいじゃないかと言ったばかりだ。

それ以前に、こんな嬉しそうな彼女に駄目といえるわけが無い。

もし、神様とやらがいるのならばいぶんと卑怯だと思う。

彼女は彼の隣を歩きながら、幾分嬉しそうに、そして少し哀しそうに猫の鼻先をつつつく。それから、顔をあげて言った。

「これで、隆二も猫のかわいさがわかるわね」

彼は何も言わず、呆れたようなため息で返した。

にゃ～

嬉しそうに鳴く「恋敵」が恨めしかった。

第二幕 猫への餌のやり方

少女は呼びだされた。そして大変無責任な指令をうけとった。
どこに逃げたのかもわからない実験体を探せと言われた。
組織の末端である少女に拒否権はなく、しびしびと立ち上がった。
幸い、目撃情報は沢山あった。
とりあえず、その最後の目撃情報の場所に向かう事にした。

工藤菊はいつものようにコンビニでバイト中だった。

この今時「菊」なんていう名前をもっている十九歳の少女は大のオカルト好きである。彼女曰く、「累の怪談」で憑依される少女とか、「四谷怪談」の伊右衛門の末娘とか、「番町皿屋敷」の下女とかに共通して見られる「お菊」という名前には「死者の声を聞く」という意味があって、「菊という名前をもつ私は死者の声を聞かなければ」ということらしい。

見た目は、完全に今時ギャルなのに。

ちなみに、オカルトは好きなものの彼女に靈感は皆無である。未だに死者の声を聞いたことはない。

そんな彼女が最近ニュースで話題になっているミイラ事件に興味をしめさないわけはなかった。

ミイラ事件。二カ月程前から、発見される屍体。最初の屍体の身元はまだ若い女性だったが、肌はかさかさに乾燥し、というか、体全体が乾燥し、まるでミイラのような状態で路上にて発見された。

その後も、一週間に一度のペースで、計七人が被害に遭っている。全員がミイラのような状態で発見されている。

「猟奇的よねー」

と、菊は呟いた。店内には今、客がいない。

「被害者が若い女性が多いっていうのも、なんかねー」

「これはきっと人間の仕業じゃないわ！」

「吸血鬼とか？」

「チュパカブラかも！」

オカルト、都市伝説、全般が彼女の守備範囲である。

「チュパ……？」

「それとも新種のなにかかしら？ だって血は抜かれていなかったのだから、チュパカブラではないわよね」

「ね、ちゅぱかぶら？ って何？」

同僚バイトと盛り上がる。主に菊一人で盛り上がる。

ドアの開閉に伴う音楽が流れる。車の音が店内に流れ込んでくる。

「っと、いらっしゃいませー」

入って来たのは常連の青年だった。男性にしては少し小柄で、イマイチ愛想のない人だった。今日もグレーのシャツとジーンズという極めてラフな格好だ。

ひょろっとしていて不健康そうで、何をしている人なのか気になっている。

定期的に来て、インスタントコーヒーと煙草を買って行く。煙草はいつもマルボロを三箱。菊はそそくさとマルボロを三箱用意した。

レジにやってきた青年はいつもと違って、おにぎり二つとサラダを持っていた。

そのまま何も言わない。

「……あれ、あの、煙草は？」

思わず聞いてしまう。

青年は一瞬右肩の辺りを鬱陶しそうに見てから

「今日はいい、です」

そう言った。

そのまま、おにぎりとサラダを買って店を出て行った。

「珍しい、煙草買わないなんて……」

「ねー？ 禁煙かなー、カノジョに怒られたとか？」

同僚が小さく呟いた。

「え、カノジョいんの？」

「いや、知らないけど」

「いるなら見てみたいわー」

「なんかでも、面食いっぽいよねー」

「あー、なんかわかるー。超美人な人とか連れてそうー」

「で、尻に敷かれてそうー」

「えー、それはわかりかねるー」

そのまま、あの人の恋人はどんな人間か、ということで盛り上がりだした。

『偉いじゃない！ ちゃんと禁煙して！ 見直したわ！』

おにぎり二つとサラダが入ったコンビニ袋を下げてあるく隆二の背後でマオが言った。

「んー」

適当な相槌をうつ。だから外で話かけんなって。

マオが居着いて一週間が過ぎた。

最初は割と、今から思うと比較的、大人しくしていたが、しばらくしたら慣れたのか煙草を吸っている隆二の目の前で、

『煙草は体に悪いのよ！』

と突然言い出してきた。

『あなた、死ぬわよ！』

「インチキ霊能力者かなんかか、お前は。死ぬわよ！ とか言って壺でも売りつけんのか」

『れっきとした科学的事実！ 煙草は体に悪いのよ！ 禁煙しなさい！』

居候の分際で偉そうに。大体幽霊が科学的とかって言葉を使うのはどうなんだ。

無視してもよかったが毎日のように同じ事を言われると、さすがに精神的にしんどかった。相手をするのが。

増税で値上がりしたし、多少節約してもいいだろうとそれに従っている。

事なかれ主義、万歳。

自宅に戻り、バイト情報誌を見ながら、買って来たおにぎりを咀嚼する。

ぱりぱりの海苔も、少し堅いお米も、久しぶりに食べるとそう悪いものでもないような気がした。

ぱらぱらと、バイト情報誌の短期バイトの辺りを見る。

貯金はまだまだ余裕があるが、最近予想外の出費が続いている。金銭に余裕があるにこしたことはない。何か適当なものはないかと思っていると、

『りゅーじー、テレビ』

襖をあけっぱなしにしている部屋から、マオの声がする。そっちを見ずにリコモンをいじった。

正午からはじまるサングラスの司会者の番組がマオはどうやら好きらしい。今はまだお昼のニュースをやっていた。

2DKの部屋。一部屋が寝室、もう一部屋にはテレビと赤いソファーだけを置いていた。ソファーは以前、もらったものだ。

マオはその赤いソファーが気に入っているようで、よくそこに寝転がり、テレビを見ている。どうやらテレビもやたらと好きらしい。隆二一人だとそんなに見るのがなかったテレビが、マオが来てからフル稼働だ。

「ミイラ事件の続報です」

テレビが告げる。

ああ、あの事件、まだ解決してなかったのか。

ふっとマオをみると何故か真っ青な顔をしていた。隆二が見ているのに気づくと『あ、あたああたし、さ、散歩行ってくるね』

慌てて立ち上がろうとしてこける。幽霊もこけるんだな—とか思いつつも

「マオ」

ひとこと呼ぶと、びくっと動きをとめた。

「ここに座れ」

テーブルの向かいの椅子を指差す。マオはしばらくおどおどと視線をさまよわせたあと、ゆっくりと腰掛けた。律儀に正座している。

怒られる気、満々だな。

「お前の仕業か」

テレビを指差す。話題はとっくに、どこぞの国で世界一大きいピザのギネス記録に挑戦したとか、そんな緩いものになっていたが。

『……はい』

マオはおどおどと視線をさまよわせ、小さい声で呟いた。

ミイラ事件、まるでミイラのようになって発見される屍体。

それはつまり、

「精気を抜いたな？」

尋ねると、マオは小さく何かを言って、俯いた。

「それは、どういう意図で？」

『……いと？』

目線だけあげて、マオが首を傾げる。

伝わらなかったか、バカだから。

「理由」

『……その、あたし、それがないと、消えちゃうから』

今にも消え入りそうな声で言われた。

「……なるほど」

人の精気を喰らい、存在する幽霊。

まったくもって何者かわからない。

「お前は本当、わけのわからない幽霊だなー」

呆れて呟く。

テレビは、マオの好きなお昼の番組のオープニング曲を流しはじめた。

「あ、テレビ、始まったぞ」

『……え』

マオは上目遣いで何うようにこちらを見て来た。

「なんだ？」

『……お話、終わり？』

「ん？ ああ。確認したかっただけだし。まだなんかあるのか？」

『……そうじゃなくて』

もじもじとスカートの裾を両手でいじりながら、

『……怒ってないの？』

「怒る？ 何故？」

本気でわからなくてそう聞いた。

『だって、あたし……、人、殺しちゃったし……』

「だって、食事だろ？」

『……それは、そうだけど。でも……』

「人間が豚や魚を食べるのとなにが違うんだ？」

マオは上目遣いでこちらを見たまま、首を傾げる。

「無益な殺生だったらやめておけ、と言うが。別に、生きていく、存在していくための殺生ならば構わないだろう。まあ、いただきます、ぐらいいは言った方がいいと思うが」

そこまで言って、片手にもったままのおにぎりを思い出す。

「……うん、いただきます」

なんとなく呟いて、咀嚼した。

マオは黙ったまま、そんな隆二を見つめ、

『……本当に、怒ってないの？』

「ん？ ああ。別に、赤の他人の生き死にとかどうでもいいし」

死んで困るような知り合いも、いないし。

言いながら、サラダの蓋を開ける。

『……ありがとう』

小さく小さく、マオが呟いた。

「ん？」

『ううん』

マオが顔を上げる。何故か、すこしだけ、微笑んでいた。

「まあ、殺さないで済むならそっちの方がいいんだろうけどな」

フォークをサラダにつきたてる。

「死者が出たから、今はこうやってニュースになってしまっているけれども。殺さずに済むのならば、ニュースにはならないだろうし。健康な人間から死なない程度に精気とったら目眩とか、ちょっと体調崩すぐらいで済むはずだろう」

多分、と小さく付け加える。そんな詳しい事なんてわからないが。

『……うん』

「そういうことはできないのか？ 一人から少しずつとか」

『……出来なくは、ないんだけど』

俯きはしないものの、スカートの裾をいじりながら、

『寝てる人とか、意識のない人からとるなら、ちょっとずつっていうのも出来るんだけど。……普通に、活動している人からとっちゃうと、死んじゃう、みたい』

「なるほど。……っていうか、今まで普通に活動している人からとってたのか、お前は」

どうやって精気を喰らうのかは知らないが、それはなかなか、シュールな光景のような気がする。

『うん。お腹が空いた時に、近くにいた人から……。あ、でも、物陰でだよ？』

「白昼堂々と通行人がミイラ化したらもっと大事になるだろうな」

そんな面倒なことになっていなくてよかった、と心底思う。

「っていうか、寝ている人間からとればいいだろ、そんなの。お前なら家の壁すーっと抜けて入れるだろうし」

『あ、でもね。寝ている時も、とれる時ととれない時があって』

「ん？」

『ええっと、なんだっけ。れ、れもん？』

「レモン？」

なぜ、ここにきて果物。それとも、梶井基次郎？

『レモンじゃない。ええっと、のんけ……？ のんれ……？ すいみん……』

「……レム睡眠とノンレム睡眠？」

『そう、それ！』

助け舟を出すと、マオは嬉しそうに両手を叩いた。

レモンは絶対違う。

『ええっと、それで、……どっちがどっちか忘れちゃったけど、とれない時があって。確か、深い眠りのとき？ でも、まあ、それで、……面倒になっちゃったの』

てへ、っと舌を出して笑う。

「面倒になっちゃったって」

そんな理由で活動中の人間から精気を奪っていたのか。

『あ、でも、でも』

呆れたように隆二が呟くと、マオは慌てた様子で、

『隆二が駄目っていうなら、ちゃんと寝てる人からとるよ？』

隆二の顔色を伺うようにして、首を傾げる。

「あー、出来るなら是非、そうしてくれ」

『はい』

元気よく、右手を挙げてマオは返事した。

『……でもね、その、最近ずっと、食べてなくて、あの……』

胸の前で指を組み、上目遣いで小首を傾げて、可愛らしく一言。

『お腹、空いちゃった』

「……それを俺に言ってどうしろと」

『だからね、その……』

何故か少しだけ頬を赤く染めて、

『食べても、いい？』

「それは普通嫌だろう」

即答した。

『……だよね』

あからさまにマオは落胆した。しゅーんっと肩を落とす。

「大体、今までの被害者は若い女性ばかりだったろ。それがお前の好みじゃないのか。食の」

『え、うん。若い女の人美味しい……。でも』

目線だけ隆二に向け、少しはにかみながら、

『隆二なら、いいかなあって』

「なんだそれは」

意味がわからない。

『……なんでもない』

マオは一瞬泣きそうな顔をしてから、俯いた。

なんだかよくわからないが、落ち込ませたことだけはわかった。

「あー、まあなんだ。手伝うぐらいなら」

慰める意味も込めて、そう言う。

『……手伝う？』

「意識がなければいいんだろ？ あんまり穏便な方法じゃないが、道行く人にこうちょっと、意識を失って頂くぐらいならば」

あんまり穏便じゃないというか、立派に犯罪な気もするが。

『いいの？』

ぱあっとマオの顔が華やいだ気がした。

「目立たない方がいいからな、お互い。今は平気でも、あんまりニュースになると、どこからかマオの存在が漏れるかもしれないし。うっかり俺がけしかけたとか言われても嫌だし」

自分を納得させるように呟く。

マオはちょっとだけ顔をしかめてから、

『うん、ありがと！』

嬉しそうに笑った。

「……まあ、俺が飯喰ってからな」

その笑顔に少しでも圧倒されながら、言う。

『うん、待ってる！』

ぴんっと右手を挙げる。そのまま、すいーっと移動して、テレビの前を陣取った。

マオの感情の流れについていけない。

楽しそうに笑いながらテレビを見るマオを見ながら、残りのサラダにとりかかった。

「おつかれさまでーす、お先でーす」

工藤菊は、バイトを終えるとコンビニを出た。今日は大学は休みなので、このまま帰って家で漫画でも読もう。大好きなオカルト漫画の続編、今日にでも宅配便で届いているはずだ。

うきうきしながら、足取り軽くコンビニの横を曲がる。裏道を通り抜ける。

今日の夕飯はなんだろう。実家暮らしなので母親が作ってくれているはずだ。昨日は魚だったから、今日は肉がいいなー、そんなことを考える。

ふいに、どんっと背中に衝撃を感じた。

「えっ？」

何が起きたのか。

振り返ろうとしたところを、今度は首筋に衝撃。

視界が暗くなる。

意識を手放す直前、常連の青年の姿を、見たような気がした。

「……やべ、顔見られたかも」

倒れかけた菊を片手で支えながら、隆二はぼやいた。

『えー、大丈夫？ ドジねー』

非難するようなマオの口調に、誰のためにやってんだ、と思う。まあ、ドジなことは否定しないけれども。

首筋に手刀を叩き込み、気絶させた菊を、そっとアスファルトの上に寝かせる。

『でもすごいねー、あっさり気絶させて。なんかやってたの？ 剣道とか』

感心したように言いながら、両手の拳を合わせ、振り回すマオ。

剣道はおそらく関係ないだろうし、その素振りはどちらかというとバッドを振り回しているようだ。

「そんなとこ。いいから、はやく」

促す。

マオは、はいと返事して、菊の横に座り込んだ。

『いただきます』

両手を合わせて呟く。

これまたご丁寧に。

そう思ったところで、そう言えば「いただきます」とでも言えればいいんじゃないか、と自分が言ったことを思い出した。どれだけ素直なんだ。

どうやって食事をとるのだろうと思いながら見ていると、マオはかがみ込み、倒れた菊の唇に自分の唇を重ねた。

隆二はしばらくあっけにとられてそれを見ていたが、慌てて後ろを向く。

少女二人のキスシーンなんて、見るもんじゃない。

食事って、精気を喰らうって、文字通り喰らうんだな。口から。

屍体で発見された女性達は、普通に活動しているところを、この謎の幽霊にキスされていたわけか。その光景を想像し、なんとも言えない気分になる。

『りゅーじ』

しばらくして、若干舌足らずな声で呼ばれ、振り返る。

『ごちそうさまでした』

立ち上がったマオが、両手を合わせて少し頭を下げた。

「あー、うん」

『……生きてるよね？』

足元の菊を見る。

近づいて確認する。

「大丈夫」

『ん』

マオは満足そうに頷いた。

「いいのか？」

『うん』

マオは頷き、それから何故か、しゃがみこんだ隆二の背中におぶさろうとする。

「やめろ」

それを、身をかかわして避けた。

『酷い』

「酷くない」

『馴れ馴れしいって最初言ってたけど、まだ駄目なの？ もう十分仲いいじゃない！ あたしたち、共犯者じゃないっ！ 同じ穴の貉じゃない！』

「あー、どっからつつこめばいいかわからないけど、だからって馴れ馴れしいことには変わりないだろ」

ため息をつきながら、隆二は立ち上がる。

『でも、少しぐらい、……触らせてくれたって、いいじゃない』

少し頬を膨らませて、マオが言う。

「触れないだろ、幽霊さん」

呆れて言うと、ますます頬を膨らませた。

『……意地悪』

「意地悪くねーよ、事実だよ」

足元の菊を見る。

起こすかどうか少し悩み、起こしたってどこにもプラスになる要素はないな、と判断する。

先ほど顔を見られていたら不審者決定だし、例え顔を見られていなくても、いきなり自分のバイト先の常連客に起こされたら不審だろう。

自分が捕まったら元も子もない。

「ほら、帰るぞ」

言って、菊に背を向けて歩き出す。

『あ、待って』

慌ててマオが隣に並ぶ。

「は一、顔見られたかも知れないし、もうあのコンビニ行けねーな」

『も一、間抜けなんだから一』

だめでしょ、と窘めるようにマオが言う。

「誰のためだと思ってるんだよ、誰の」

些か呆れて言葉を返す。

『ん一、あたしの？ えへへ、ありがとう』

隆二の正面に回り込み、屈託なく笑う。

「どーいたしまして」

マオは照れたように笑い、くるくると、隆二の周りを回る。

「……うぜ」

『んー？』

「隣。視界塞がれて邪魔だから」

言うと、何故かとても嬉しそうに笑い、隆二の隣に移る。そのまま、宙に浮くのをやめ、歩くように移動する。

そして右手を伸ばし、隆二の左手を掴もうとして、

「だからやめろって」

『むー』

空振りに終わった手を見て、マオがふくれる。

『ケチ』

「ケチじゃない」

路地裏を出る。

『酷い、ケチ！ 意地悪っ！』

マオが隣で騒ぐ。

が、人通りの多いところに出た以上、隆二はもう反応しない。

『うわっ、また無視する。さーみーしーいー。ねー、寂しいと兎は死んじゃうんだよおー』

お前は兎じゃないだろう。そもそも、もう死んでいるだろ。

『さみしいさみしいさみしいさみしいしんじょうー』

ぐるぐると、また隆二の周りを回る。鬱陶しい。

『はう、胸の辺りが苦しい。これはきっと、寂しいからだわ。死因は孤独死ね！』

孤独死って、そういうことじゃないような。

『ねーねーねー、りゅーじいー、かなしいよおー、むししないですよおー、りゅーじいーねーねー
ってばあー』

「……はあ」

小さくため息。

「そのうち、頭ぐらいは撫でてやるよ、そのうち」

ぐるぐる回るマオの耳が、顔に近づいた時を見計らい、小さい声で呟く。

『えっ！』

マオが動きを止める。

それにあわせて、立ち止まりそうになるのを慌てて耐える。少しマオを避けて、先に進む。

『え？ え？ 頭撫でてくれるの？ そのうち？ そのうちっていつ？ ねえねえねえ、明日？
明後日？ 明々後日？ 来週？ 来月？ 来年？ 地球が何回まわったとき？ ねー、いつ？

』

慌てて追いつき、隣に並んだマオは、うるさくて鬱陶しいことに代わりはなかった。

そのうちはそのうちだって。

言葉は返さず、家に向かって歩く。

それでも、何かに満足したのか、

『まあ、今はそういうことでもいいけどねー』

それだけ言って、マオは大人しくなった。

なんでこっちが譲歩された形になっているのか。

『しかし、隆二は、優しいのか冷たいのか、わかんないわねー』

楽しそうにくすくす笑いながらマオが言う。

答えずに、小さく肩だけ竦めた。

『ねー、兎は寂しいと死んじゃうっていうじゃない？ 人間はどう思う？』

隆二の隣をふよふよと浮かびながら、唐突にマオがそんなことを言う。

返事がないのを気にすることなく、マオは続ける。

『あたしね、思ったの。人間は、寂しくても死なないの。きっとね、つまらないと死んじゃうの』

隆二は横目で、マオを見た。

『人間はね、寂しいなんていう高等な感情は持ち合わせいないの。人間のいう寂しいはつまらないってことなのよ』

一体どこで仕入れてきた知識なのか、急にそんなことを言い出す。

いずれにしても、隆二にしては、理解しきれていなかった。

『誰かがいなくて寂しいとしても、何かよりどころ、すなわち「楽しいこと」があれば平気なのよ。本とか音楽を好むのはそれが理由』

そして、マオはぽつりと呟いた。

『だから、あたしは貴方がいなくなると死んじゃうのよ？』

聞き流すつもりでいたのに、頭がそれを理解した瞬間、心臓が止まるかと思った。

「なにを言ってるんだ、おまえは」

外であるにもかかわらず、思わず横を向いて尋ねてしまった。

すれ違った女性に変な顔をした。

いくら不意打ちだったからとはいえ、動揺している自分が情けない。

『だって貴方以外にあたしが見えて、あたしによくしてくれる人、あたしは知らないもの。貴方がいなくなったら、あたしはつまらなくて死んじゃうわ』

マオはなんでもないことのようにそう言うと、微笑んだ。

『だから、これからも、あたしの傍にいてね？』

隆二は何かを言おうとして、結局コメントを控えた。

「あの、大丈夫ですか？」

菊は何度かかけられた声に、ゆっくり目を開けた。

「あ、あれ？」

背中が痛い。頭も痛い。

自分の状態を視線を動かし、確認する。

地面に、倒れている……？

「んー？」

首を傾げながら、ゆっくり上体を起こす。

「大丈夫ですか？」

声をかけてくれた少女が、慌てて背中を支えてくれた。

「あ、はい。すみません」

「通りかかったら、人が倒れていたのびっくりして」

「倒れて……」

バイトを終わって、家に帰ろうとして、それから……、

「んー、覚えてない」

頭を振る。

「あ、でも、常連さん……？」

意識を失う直前に、バイト先の常連の姿を見たような気がした。が、まあ多分気のせいだろう。夢か何かだ。

「常連さん？」

少女が首を傾げる。

「いいえ、なんでもないです」

「病院、行きますか？」

心配そうな少女に、

「あ、大丈夫です、多分」

「でも」

「家、近いので。あの五分もかかんなので」

少女に手を借りて、ゆっくりと立ち上がる。

二、三歩あるいてみるが、やはり特に異常はないようだった。

「大丈夫なら、いいんですけれども」

それでも少女は心配そうな顔をしているから、菊は笑ってみせた。

「大丈夫です。家帰って、様子見て病院行きますから、必要なら」

「……そうですか？」

「ええ」

もしかしたら、なんらかの妖怪の仕業かもしれない、と思っていたがそれは黙っていた。のっぺらぼうにびっくりしたとか、そういう展開を期待している。

別の意味で病院に連れて行かれそうだから、言わないけど。

「ありがとうございました」

少女に頭を下げ、家路を急ぐ。

少し体が疲れているような気はしたが、それ以外には特に問題がないように感じた。

家に帰ったら、ちょっと寝よう、と心に決める。

それにしても。

振り返る。

さきほどの少女の姿は、もうそこにはなかった。

「なんであの子、あんな赤い服を……」

全身真っ赤な服を着た少女の姿を思い出し、首を傾げた。

「は！ まさか、あの子自身が何かの妖怪！？ こうしちゃいけないわ！ 帰って、調べなきゃ！ 赤い服を着た少女の妖怪を！」

急に生き生きと、趣味全開で、精気に満ちた発言をすると、足取り軽く家へと向かった。

「子猫だから、抵抗力が弱かったんだ」

「……うん」

「だから、茜が悪かった訳じゃない」

「……うん」

「今度はきっと、元気に生まれてくるさ」

「……うん」

「だから、……もう泣くなよ」

今度は、彼女は答えなかった。子猫を埋めたその土の山の前に座り込み、彼女は泣いていた。彼はどうすればいいのかわからずに、彼女の後ろに立っていた。

「……茜」

「……わかっているけど、でも。でも、やっぱりもっと他に何かが出来たのじゃないかと思うから。それにまだ、……まだ、名前すら付けてあげていないのに」

そのまま膝を抱える。

「……生き物は、いつか死して逝くものだ。自然の理なんだ」

「だから、諦めろというの！！」

彼女は振り返り、彼に向かって怒鳴る。

彼はいつもよりも眉を少し下げ、小さく諦めたように微笑んだ。ゆっくりと首を横に振る。

「違う。だから、黙って送ってやれって言いたいんだ。……それは、自然なことなんだから」

彼が言外に含んだ意味に気づき、彼女は結局、口を閉じた。

そして、すすり泣きだけが響く。

少し経ってから、彼は言った。ためらって、言葉を選びながら

「なあ、茜。……少しだけわかったぞ。懐かれるとかわいいって意味が」

「……うん」

「もっと勉強して、今度は救えるようにしような」

「……うん」

「……ほら、風邪引くから戻るぞ」

そういうと片手を差し出す。彼女は素直にそれにつかまり、立ち上がる。彼女の手を引きながら、彼はゆっくり歩き出す。

「……隆二」

「なんだ？」

振り返ることなく彼は返事をする。彼女は少しためらいながら、けれどもしっかりと口調で言った。

「……もし、私があの子みたいになったときは、黙って見送ってね」

彼は黙っていた。

そして、しばらく経ってから一つだけ呟いた。

「二度と、そんなこと言うな」

体の奥から吐き出したような声でそれだけ言うと、あとは黙って歩く。

彼女は微笑み、彼の背中に額を押しつけた。

そして、彼は嘘をついた。少し、行きたいところがあるんだ。

そう言った彼に、彼女は言った。

「待っています。私はずっと此処で待っています」

彼は帰ると約束した。けれど、帰らなかった。

彼が、たった一度だけその土地に戻ったときには、彼女はもう土の中だった。

第三幕 猫がいる生活

少女は正直、途方に暮れていた。

少女が追っている実験体の情報が、ぷつりと途絶えてしまった。

ただ、それに関係すると思われる女性は見つけた。もしかしたら偶然かもしれないけれども、多分、少女が探しているものに関係している。

それは、目撃情報の最後の場所とも一致していた。

なので、あの辺りに住んでいる知り合いに聞く事にしよう。そうすれば、何かあるだろう。

少女はそう思った。

静寂は嫌いではない。

聞こえてくるのはただ風が動く音と自分が歩く音。後は他に、聞こえてくる音がない。

そんな状態は、嫌いではない。

真夜中、道の真ん中に立って、隆二はそんなことを思う。

いつも隣にいるマオは、眠っていたのでおいてきた。

突然コーヒーが飲みたくなって、でもあいにく切らしていた。

今は便利だよなあ、コンビニなんてあって。そんな年寄りみたいなことを考えながら、コーヒーと思いつきで買ったチョコの入った袋を振り回すようにして持ちながら歩く。

かさかさと、袋の音がする。

静寂は嫌いではない。

寧ろ、心地よいとも思う。

家の鍵を出して、開ける。

『隆二っ！』

「うわっ！」

開けたと同時にマオが飛び出て来た。

『もお、どこ行ってたのよおっ！』

半分泣きそうな顔をして、マオは言った。

「コーヒーを買いに」

そうやって袋をかかげてみせると、マオは頬を膨らませた。

『起きたら一人ぼっちで寂しかったんだからあ！ 起こしてよ、誘ってよ。このカフェイン中毒！』

言いたいだけ言うと、マオは部屋の奥に引っ込んだ。

多分、ソファの上でふて寝している。うつぶせになって、こちらが声をかけても反応しない。それでも、横目だけでちらっとこちらを見てくることだろう。

すっかり慣れたマオとのやりとりを思い、少しだけ笑う。

そう、静寂は嫌いではない。

寧ろ、心地よいとも思う。

ずっと一人で居たから。長い事、一人で暮らしていたから。

昔、一緒に暮らしていた女性がいた。

体の弱い女性だった。

ずっと一緒にいたいと思っていた。

でも、自分は彼女を見捨てた。

彼女が自分より先に死んでしまうことが怖くて、彼女の元から姿を消した。

一度、様子を見に戻った。もう一度、やり直せないか、とも思っていた。

けれども、彼女は既に亡くなっていた。

あの時、誓った。

もう、人とは深く関わらないと。亡くしてしまうのが、怖いから。

それなのに、と少しだけ自嘲気味に唇を歪める。

「マオー、機嫌直せー」

それなのに今、ソファの上で拗ねたマオを、居候猫を宥めている。

「マオ、ごめんな」

ちょっとだけ、マオが身じろぎした。

『起きたら一人で、寂しかったの』

半分だけ顔をあげて、こちらを見る。膨らんだ頬。

「ごめん」

もう一度謝る。

『隆二の唐変木』

「ごめんって」

『いいよ、もう。どーせ、隆二だもん』

そうって、マオは再び顔を枕に押し付けるけど。ちょっと笑っていたからこれでもう大丈夫

。

隆二は少しだけ微笑んだ。

マオは人じゃない。だから、あの時の誓いを破った事にはならない。

幽霊は自分より先に死んだりしない。

だから、大丈夫。

そんなことを思う。

『もう、あたしのことおいてったらやあよ？』

うつぶせのまま、マオが言う。

「うん、わかったわかった」

『もー、てきとー』

言いながらもマオが顔をあげて、笑う。

それに満足すると、コーヒーをいれに台所に向かう。

『りゅーじー』

「んー」

『てれびー』

「ちょっと待て」

マオの声に適当に返事して、ゆっくりコーヒーをいれてから戻る。

マオはソファーに寝転んだまま、足をばたばたさせて、待っていた。

『おそーい』

赤い唇を尖らせて言う。

そのまま甘えるように両手を隆二の方に伸ばす。のを、隆二はさりげなく避けて、

「何チャン？」

リモコン片手に尋ねる。

『んー、とりあえずなんでもいいやあー』

「はいはい」

適当に電源を付ける。

派手な音楽が流れる。

『あたしねー、最初、この小さい箱の中に人が住んでるのかと思ってたわー。なんかこう、薄っぺらくてちいいさい人が』

「へー、バカだなお前」

ソファーに寄りかかるようにしながら、床に座る。

コーヒーは畳の上に直接置いた。もう既に何度か汚しているのだから、今更なにやっても一緒だろう。さらば敷金。

『むー、あたし、バカじゃないもん。バカって言う人がバカなんですうー。隆二のばーかばーか』

「ああ、お前いまバカって何度も言ったな。バカって言ったマオがバカだな」

『っ！！』

マオは驚いたように息を飲み、

『……そうね、そうになってしまうわね。なんてこと、あたし、バカだったの……？ バカって言ってしまったから』

何故だか深刻そうに呟いた。

やっぱりバカだ。

バカは放置して、立ち上がる。

『りゅーじー、どこ行くのー？』

「本」

寢室に置いてある本棚から、適当に本をひっぱり出す。

そのまま元の位置に戻る。

『何読むのー？』

「人でなしの恋」

『ひとでなし？ ああ、あたしのことねー！』

「……まあ、人じゃないけどな、お前」

そういうことじゃないだろう。

マオがソファの上から、肩越しに本をのぞいてくる。

『うげっ、字、いっぱい。いやー』

悲鳴をあげるようにマオが言った。

『隆二は、本、好きなのー？』

ソファーにぱたりと横になったマオが尋ねてくる。

「まあ、嫌いではないな」

『なんでー？ テレビよりも好きなのー？』

「テレビは、あんまり見ないから」

なんとなく、家には置いてあるが、殆どつけていなかった。

『なんでー？』

「本の方が、自分の好きなきに読めるだろ」

『んー？』

テレビから笑い声がする。

「まあ、どちらにしる、暇つぶしの意味しかないけれども」

『暇つぶしー』

なんとなく字を目で追いながら、なんとなくページを追いかける。この本だってもう何度か読んでいる、あらすじは頭に入っている。

『隆二、暇なの？』

「忙しそうに見えるか」

『んーん』

視線を向けると、マオは首を横に振った。

『ずっと、おうちにいるもんね。でかけるのはコンビニに行く時ぐらい？ ねー、ずっと気になってただけど、隆二ってお仕事何してるの？』

「してないよ」

『してないのー？』

「してるように見えるか？」

『見えなあーい』

「だろ？」

『じゃあ、お金どうしてるのぉー？』

「どうって」

マオが横から何度も話しかけてくるから、仕方なく本を閉じ、

「貯金？」

『貯金！』

「前にちょっと仕事したときの残り」

『それで大丈夫なのー？』

「んー、まあ、そろそろ危ないからまたちょっとバイトでも探さなきゃなーって思ってるけれども」

『ふーん』

マオはわかったのかわかってないのかそういうと、

『あ！』

ぽんっと、手を打ち鳴らし、

『あたし、知ってる！ 隆二みたいな人のこと、クソニートって言うんだよね！』

「クソは余計じゃないか、それ」

否定はしないが。

最初のバンバンジーの一件からも思っていたが、どうやらこの幽霊はバカだ。

『そーなの？』

マオが不思議そうに首を傾げた。

「そーなの」

『んー、そっか』

そっかそっか、ニートか、なんて小声で呟いている。本当にわかっているのだろうか。

『あ、でも、あたしもニート！ やった、おそろい！』

それから、やけに嬉しそうな声でそう言った。

「ニートがお揃いって……、駄目だなー俺等」

呆れて笑う。

マオもくすくすと笑い出す。

テレビから派手な笑い声がして、マオがそちらに視線を移した。

『あ！ この芸人さん好きー！』

そのまま、体を動かしてテレビを見る。

やっと大人しくなる、と思い読書続ける。

『面白いのー、この人？』

と思ったら、やっぱり話しかけて来た。

「そーかい」

適当に相槌を打つ。

『テレビは凄いよねー、楽しいー。大好きー』

ソファーに寝転がり、頬杖をついてテレビを見つめながら、マオが言う。

『隆二はー、テレビは好きじゃないのね？ 本の方が好きー』

「あー、まあ」

『ふーむ』

マオは一瞬何かを考えるように黙ってから、
『……あと、隆二は梅干しのおにぎりが好き？』

「え？」

本から顔を上げ、マオの方を見る。

『よく買ってるからー』

マオはテレビをみたまま言う。

そう言えば、そうかもしれない。

「まあ、嫌いじゃないけれども」

『やっぱりねー』

嬉しそうに足をぱたぱたと動かす。スカートの裾がめくれそうになる。

「マオ、スカート」

『ちょっといまいいとこなのー、黙ってー』

テレビに釘付けになっている。

直してやることもできないし、見なかったことにした。

もうすこし、恥じらいというものを身につけて欲しい気もする。いや、どうこうなるわけじゃないけれども。

マオはテレビを見て、楽しそうに笑っている。何がそんなに楽しいのかよくわからない。

『はー』

テレビがCMテレビがCMになると、マオはまた隆二の方に顔を向けた。

『でねー、隆二はー、あとコーヒーが好き』

床に置いたままのマグカップを指差す。

「まあな」

思い出して、一口飲む。

『で、あたしのことは、好き？』

「ぶっ」

飲んだばかりのコーヒーを吹き出しそうになった。

慌てて口を抑え、堪える。

『うわ、やだー、きったなーい』

マオが本当に嫌そうにそう言うと、汚物を見るような目で見てくる。

「ちょっ、おまえっ」

ティッシュで拭きながら、マオを睨む。

『なによおー、あたしが悪いの？』

形の良い唇を尖らせる。

「いいとか悪いとかじゃなくてだな」

『なあにー？ それとも、りゅーじは、あたしのこと、嫌いなの？』

桃色の頬を膨らませて、不満そうに。

「いや、あのなあ」

『あたしは、隆二のこと、好きだよおー？』

緑色の瞳が、上目遣いで見てくる。

思わず、言葉につまる。

「マオ、あの」

『あとねー、テレビも好きだしー、このソファーも好きいー』

隆二の返事を待たず、マオは楽しそうに続けた。

「……あー」

そういう好き、ね。

なんとなく、動揺した自分を恥ずかしく思いながら、

「そりゃどーも」

呟く。

ふんっとマオが少し勝ち誇ったように笑う。

それから、すうっと隆二の肩の辺りに移動すると、

『で、隆二はあたしのこと、好き？ どう思ってるの？』

耳元で囁くようにして、尋ねた。

一瞬息を飲む。

それを気取られないように、ゆっくり息を吐き出すと、

「ちょっと粗相の多い、居候猫だと思ってる」

『む、なによそれー』

また膨れた。

さっきは少しだけ、色っぽかったのに。

「でもまあ、猫は可愛いよな」

それだけ付け加える。

それが今言える、精一杯だと思った。

マオはしばらく吟味にするように隆二の横顔を見ながら黙っていたが、

『うん』

何かに納得したかのように一つ頷き、

『あたし可愛い！』

両手を頬にあて、笑い崩れた。

そういう顔をすると、本当に可愛いから困る。

「あー、テレビ、CM終わったぞ」

かろうじてそう言うと、

『あ！ 本当だ！』

ひょいっと身見を翻し、テレビに向き直った。

気まぐれで、わがままな、それでいて少し甘えん坊の仔猫のようだ、と思う。

静寂は嫌いではない。

でも今は、騒がしいのも嫌いではない。

猫がいる生活も、一人ではない生活も、悪いものではない。

そう、思った。

第四幕 捨て猫の元の飼い主

ソレはU078と呼ばれていた。

U078は、早い段階で自分が何かの実験体であることを悟った。

他の実験体が、「失敗作」と呼ばれ、ゴミのように捨てられていくのを見ながら、いつか自分も消えるのではないかと思っていた。

だから、U078は逃げ出した。

そしてU078は、一人の人間とであった。

その人は、化け物であるU078に優しくしてくれた。

U078という実験体ナンバーではなく、名前と呼んでくれた。

このまま、その人と生きていけるのではないか。そう思っていた。

そんな時、少女があらわれた。

マオが隆二の家に居座りバタバタとした、それでもおおむね平和な日々を過ごして数ヶ月ほど経った。

マオの食事問題も、夜間に寝ている人を片っ端からマオが探したり、たまに菊の時のようなことをしたりしながら、死者を出すこともなく、穏便に済ませていた。新たな死者が出なくなったことから、ミイラ事件についての報道は減っていて、今では週刊誌ぐらいしか報じていない。

行きつけだったコンビニは、菊の件から出入り出来なくなったが、幸いにして別の場所に新しくコンビニが出来た。そこは家から二分と近い。

今日もサンドイッチとコーヒーを買い、コンビニから戻るところだった。

マオも誘ったのだが、この時間にやっている特撮ヒロインの再放送が気に入っているらしく、断られた。誘わなかったら誘わなかったで怒るくせに、誘っても無視するときたもんだ。

『疑心暗鬼ミチコ見なきゃいけないからダメー！』

「……なんだよ、それ」

『疑心暗鬼ミチコ知らないの？ 普段は普通の女子高生で一、変身すると着物姿になるの一。ちょー強いんだよ！ 電信柱の影に落ちてるスーパーの袋ですら、敵だと思ってはっちゃめちやの、ぼっこぼこの、びりびりにしちゃうんだからあ！』

「あー、疑心暗鬼？」

『あなた鬼ね！ 退治してやる！ って言って倒すの。まあ大体いつも、ミチコの本当の敵じゃなくて、ただの悪い人なんだけど』

「ただの悪い人って……」

『でも悪い人は悪い人だから周りからは感謝されるの！ でね！』

そのあと熱心にマオは疑心暗鬼ミチコとやらについて語ってくれたが、正直、なにが面白いのはか隆二にはわからなかった。

それにしても、その特撮ヒロインは今から二十年ぐらい前に放送してたもののはずだ。もしも

、生前から好きだったのだとしたら、マオは今より少し前の人間なのかもしれない。そんなことも考えている。

マオ本人は、自身の出生や死因などに興味はなさそうだが、隆二としてはマオの生前の素性をいつかは調べてあげたいと思っている。そうすれば、無事に成仏できるだろう。幽霊はきっと、成仏した方がいい。仮にマオが成仏するつもりがなくても、出来ないのとならないのとでは天と地ほどの差がある。可能性はあった方がいい。

ただ、それを積極的に行わないのは生来の怠け者であることと、それからほんの少し、すこっしだけでもうちょっとこのままでもいいかなと思うからだ。

そんなことを思いながら歩いていると、アパートの前に見慣れた人物を見つけた。人物というか、服を。というか、色を。

面倒くさいやつが来た。そう思いながら近づく。

向こうも隆二に気づいたらしく、顔をあげると軽く頭を下げた。

「よう、相変わらず、目立つなー、祓い屋の嬢ちゃん」

声をかけると、

「派遣執行官です。何度言えばわかるのですか？」

冷たく言われた。金髪碧眼の美少女が、にこりもしないまま。

「ところで、わたし、目立ちますか？」

「ああ」

頷く。

真っ白い肌、すっと通った鼻筋、光を浴びて光る金色の長い髪の毛。長い手足に、高めの腰の位置。

どこからどうみても完全なる美少女。それでなくても、道行く人が振り返って見る程の、美貌ではあると思う。

ただ、欠点はその壊滅的な服装センス。

「そうですか。さっきから道行く人にちらちら見られている気はしたのですが。そんなに外国人が珍しいんですかね。わたし、国籍は日本なんです」

ひょうひょうとそう言う。

お前がそんな赤い服着ているからだよ、と心の中でつつこんだ。その美貌も、日本人離れした体型も、服装の前にはかすんで見える。

このイギリス人を祖父の持つ、クォータの少女は、何故かいつも赤い服を着ていた。赤いジャケットに、かろうじてオレンジ色っぽいスカート。赤いブーツ、赤いベレー帽。

隆二はひそかに、この格好を鼓笛隊のようだと思っている。

「で、嬢ちゃん」

「エミリです。せめて名前でご呼んでください」

「はいはい。で、どうした？ 今度は何を逃がした？ 人面犬か？ のっぺらぼうか？ テケテケか？」

「いつも何かを逃がすような言い方、しないで頂けますか？」

少しだけ、不愉快そうに少女が言う。

「じゃあ、違う用事なのか？」

「いえ、そうですけど」

少しだけ不服そうに、少女が答えた。

この些か怪しげな少女エミリは、これまた怪しげな研究所の人間だった。オカルト現象を研究する研究所。縁あって、何度かエミリの仕事を手助けしている。

例えば、逃げた口裂け女を探したり、人面犬を探したり。

今ある貯金額のほとんどは、この研究所の仕事を手助けしたことによって得たものだった。

都市伝説の幾つかは、この研究所が作り出したものだ。逃げ出したり実験のために外に放したり、理由は様々だけれども。

そしてエミリは、本人曰く、研究所の派遣執行官。「要は外回りの祓い屋だろ？」と以前言ったら、酷く怒られた。無駄なプライドがそこにはあるらしい。

「まあ、こんな立ち話もなんだし」

その赤い格好、すごく目立つし、

「古いけど、うちで話そうぜ」

言って、エミリの返事は待たずに階段をあがる。古い二階建てのアパート。

「本当に古いですね」

ついてきたエミリが容赦なく言った。

「遠慮とかないのな、嬢ちゃん」

「エミリです」

「まあ、なかなか住めば快適だぞ。駅からも近くて、2DKって部屋は広いのに家賃安いし」

「訳あり物件なんですか？」

「……そこですぐに訳あり物件に行くのがすごいな。そのとおりだけど。前の住人が自殺したとか何とか、まあ、幽霊が出るとか言われてたんだけど、出なかったし」

「まあ、出ても神山さんなら困りませんよね」

「あー、まあ」

今は本当に幽霊が住んでるしな一、とも思い、苦笑する。

意図的に居候させている以上、家賃の値下げ交渉には使えないだろう。

二階に上がる。二階の一番奥が、隆二の部屋だ。

廊下を歩く。

「コンビニに行っていたんですか？」

隆二が持っているビニール袋を指差し、エミリが尋ねる。

「ああ」

「珍しいですね、神山さんがサンドイッチなんて買うなんて。コーヒーはともかくとして。正直

、初めて見ました」

「まあ、色々あって」

肩をすくめる。

「ところで、せっかく遠路はるばる嬢ちゃんが来たところ悪いが、今回は何も聞いてないぞ？
そういう怪しい噂」

部屋の前で、ポケットから鍵を取り出しながら言う。

「まあ、俺のコミュニティなんてあってないようなものだが」

なにせ、ニートのひきこもりだし。

「いえ、ここらにいるはずなんです。最近、消息不明ですが。それでも、被害者というか、それっぽい痕跡はこの街で見つけましたし」

鍵穴に鍵をさす。

「それに、今回、知覚は難しいものですし」

「知覚が難しい？」

鍵を開ける。

「ええ、幽霊なんです」

ドアノブに手をかけて、まわし、ドアを開け、

「ミイラ事件、ご存知ですよね」

開けかけたドアを、慌てて閉めた。

ばたんっ、と派手な音がした。

「神山さん？」

エミリの不思議そうな声。

一つ、ゆっくりと息を吐く。落ち着け。まだ、大丈夫だ。

「悪い。部屋、すっげーちからってるんだった。模様替えしようと思って、だからちょっと外で話そう？」

赤い少女と外で話すのはさぞかし目立つだろうが、今回は気にしてられない。

「わたしは構いませんが？」

「俺が構うの」

だからほら、と隆二がエミリを来た道に戻るように促したところで、

『隆二ー？ 帰って来たのー？』

のんびりしたマオの声がする。

「今の……？」

エミリがドアに視線を向ける。

『疑心暗鬼ミチコ終わっちゃったのー、つまんなーい』

マオの暢気な声。

出てくるなっ。

心の中で叫ぶ。

祈りは通じず、マオがドアから顔を覗かせる。すぽんっとドアから首が生える。

マオは見知らぬ赤い少女を見つめ首を傾げ、エミリはドアの生首を見つめ、

「マオ逃げろっ！」

「G O 1 6！」

同時に叫んだ。

勢いに吞まれてマオが顔をひっこめる。

エミリが隆二を突き飛ばす様にしてドアをあけ、その背中を隆二が蹴飛ばした。エミリが備え付けの靴箱に激突する。

「悪いっ」

一応謝っておく。

「っ」

エミリはうめきながらも鞆から拳銃をとりだし、

「うわ、何物騒なもの持ってる!？」

慌てて隆二はそれを叩き落とすと、部屋の隅に蹴飛ばした。

駆け出そうとしたエミリを出来るだけ死なないように手加減して突き飛ばし、部屋の真ん中でおろおろしているマオのもとに駆け寄る。

ダイニングのテーブルを蹴飛ばすと、玄関を塞いだ。

「マオ！」

斬りつけるように名前を呼ぶと、立ったままの彼女の右手をつかんで走り出す。

『えっ?』

マオの声を無視して、ベランダへの扉をあける。

そのまま、跳躍。

『隆二っ、ここ二階っ!!』

マオの悲鳴だか、叫びだかを聞きながら、隣の少し低い一軒家の屋根に着地。

そのまま、屋根伝いに走り出す。

「待ちなさいっ! G O 1 6！」

背後でエミリが叫んだ。

「とりあえず、ここなら、平気だろ」

ラブホテルの屋上。派手な看板と看板の影に隠れて、隆二が言った。

家からはだいぶ、離れたところに来ている。

「まったく、いつだって急なんだよ、あの嬢ちゃんは。人の家に来るならアポぐらいいれろっつーの」

舌打ちする。

『あの……』

マオがおどおどと、小さく声をかけてくる。

「ん、どうした？」

振り返り、出来るだけ優しく見えるように微笑む。

『……手』

「あ、悪い」

掴んでいた手を離す。

マオは掴まれていた右手首を胸の辺りで左手で抱え込んだ。

その手をしばらく見つめ、

『隆二、あの……』

そこまで言って、マオは足元の辺りを探るように見る。まるで、足元に答えが書いてあるかのように。

それを見て、隆二は、

「U078」

先に言葉を切り出した。

『え？』

マオが顔をあげる。

「それが俺の実験体ナンバーだ」

言って笑った。

神山隆二がU078という実験体ナンバーで呼ばれるさらに前、彼はごくごく普通の少年だった。

彼は貧しい家の三男坊として生まれた。

毎日遅くまで仕事をする父親の背中と、それを手伝う上の兄。

母親の後をついて回り、家事の手伝いをする妹。

余所で働き始めた姉と下の兄。

お腹がすいたと泣く二人の小さな弟。

生まれた時から体が弱く、病気で寝込む彼を、困惑と憎悪と心配をごちゃまぜにした顔で見る母親。

何も手伝わえない彼を、心配しながらも、邪魔者を見るような目で見ると兄弟。

そんな時、村に流れた噂。

ある金持ちが、子どもを欲しがっていると。謝礼は高額。ただ、それは、ある種の人体実験だと。

その話に乗ることにしたのは、親が言い出したのが先か、彼自身が言い出したのが先かは覚えていない。

覚えているのは、彼を連れにきた数人の男。

覚悟はしていたものの、いざとなると怖くなって、泣き叫ぶ自分から視線を逸らし、さっさと家の中に入ってしまった父親。

一言だけ呟いて父親の後を追った母親。

月明かりの下、遠ざかっていく家。

たどり着いたのは、埃っぽい部屋。

そこから先は覚えていない。

眠らされ、次に目が覚めた時には全てが終わっていた。

U078の実験は成功した。人体兵器。死なない兵隊。来たる戦争に向けて、作り出された化け物。

家族を失って彼が手に入れたのは永遠の命と不死身の体だった。そして彼は、人間であることも失った。

「まあ、そんなわけだ」

足を投げ出して座り、シニカルに笑う。

「だから、戸籍上は神山隆二なんて人間、本当はいないんだ」

『だって、そんな、ならどうしてっ』

「どうしてここにいるかって？」

聞かれてマオは頷いた。

「逃げ出したからだよ」

マオと同じように。続けるとマオは痛そうな顔をした。

逃げようと言ったのはリーダー格の少年だった。たった四人の成功した実験体。

自分と他の一人は賛成し、残りの一人は最後まで反対していた。見つかったら何をされるかわからないんだぞ！！ と。

それでも結局逃げ出したのは、このまま研究所にいれば、未来などないことがわかっていたからに他ならない。

逃げて離ればなれになった。

逃げて逃げて逃げて逃げて。

ぼろぼろになった彼を助けたのは、一人の人間だった。どこか影のある、和服の似合う、猫が大好きな女の子だった。

彼女は彼が化け物だと知っても変わらずに側にいてくれた。

彼女とならば普通の人として生きて行ける、そう思った。

そんなとき、少女は現れた。

「嬢ちゃんのはーさんだよ」

『おばあさん？』

「イヤー、しかし、久しぶりに嬢ちゃんにあったけど、ますます似て来たよな一本当」

嫌な部分までそっくりだ、とため息をついた。

哀しくなるぐらいの無表情で自分の前に現れたその人の顔は今でも思い出せる。

死神は無表情を崩さずに宣告した。一字一句間違えずに、その宣告を覚えている。多くが消えていく記憶の中で、それは鮮明に脳裏に焼き付いている。

「私たちはもう貴方達を兵器としては必要とはしていません。そこで選んでいただきたい。ここで、証拠隠滅のためにおとなしく消え去るか、または必要に応じて我々の力になるかを」

死刑宣告を暗唱し、そこでマオに視線を合わせる。

「勝手な話だと思わないか？」

マオはぐっと唇をかみしめていた。泣きそうな顔。

その表情があまりに痛々しくて、見るのに耐えかねて、隆二は思わず言っていた。

「過去の話。あまり気にするな」

そして、自分の隣の床を叩く。

マオは大人しく隣に座った。

手をあげる。マオの頭を撫でる。ゴム手袋を何枚か重ねているかのような感じだったが、しっかり触れた。

さらさらと、細い髪の毛が流れる。

『どうして……』

マオが目を見開く。こぼれおちそうになる緑色の瞳をみて、少し微笑んだ。

「さあ？ 俺も理屈はわからないが。霊体にも触ることが出来るんだ。副作用、みたいなものかな。実験の」

肩を竦め、それでもまたマオの頭を撫でる。

「約束だったもんな」

微笑んで見せる。

マオはまたさらに泣きそうな顔をした。

『だから、嫌がってたの……？ あたしが触るの』

「ああ。人間じゃないことが、ばれたら困ると思ってな」

苦笑する。

そのまま腕をおろす。

今度は、隆二の右手におずおずとマオが手を伸ばした。隆二は避けなかった。

そっと触れる。そのまま手を繋ぐ。

繋ぐことが出来た手を見て、マオは一瞬くしゃりと顔を歪めた。泣きそうとも、笑い出しそうともとれる顔。

『あのね、あたしね』

俯いて、その手を見るようにしながら、マオが言葉を吐き出す。

「うん」

隆二は優しく微笑みながら頷いた。

『実験体ナンバーG O 1 6』

「うん」

『人工的に造られた幽霊』

「うん」

『……今まで、黙ってて、ごめんなさい』

俯いたマオの頭を、空いている左手で撫でた。

「お互いさまだろ」

隆二だって黙っていたのだから。

『……でもあたし、黙ってただけじゃなくて、嘘、ついてたから』

下を向いたまま、ぼそぼそと呟く。

「じゃあ、やっぱり記憶喪失、っていうのは」

『うん、嘘……。そうやって言えば、詳しいこと、聞いて来ないかなって思って』

「そっか」

『本当は、ちゃんと覚えてる。変な水槽みたいなものの中で、目を覚ましたときのことも。外に出る実験とかっていうときに、逃げ出したことも』

「うん」

『本当のあたしは、まだ、作られてちょっとしか経ってないの』

だから、妙に偏った知識や子どもっぽい仕草があったのか、と思う。

人工的に無理矢理詰め込まれた知識ならば偏りも出るし、仕草も子どもっぽくなることもあるだろう。

『ごめんなさい、言わなくて』

「いいってば」

また謝り出したマオの額を軽く小突く。

「黙っていたかったマオの気持ち、良くわかるから。……誰かにこういうこと話すのってためらうよな、嫌われそうで」

マオは泣きそうな顔で一つ頷いた。

『それなのに……、ありがとう。先に話してくれて』

「どういたしまして。まあ、年上の威厳というものを見せようと思ってな」

ふざけていうと、マオは少しだけ微笑んだ。

「さて。嬢ちゃんがこれからどうするか。さっぱり検討がつかないが」

無表情で色々と恐ろしいことをやる少女だ。

「でもまあ、とりあえずここなら大丈夫だろう」

『……うん』

「走り回って疲れた、ちょっと休む」

一度大きく伸びをすると、看板にもたれて隆二は目を閉じた。

マオはその横顔をしばらく見ていたが、やがて隆二の肩に頭を乗せると、同じように目を閉じた。

つないだ手はそのままだ。

「くそつたれ」

彼が呟いた言葉は茜色の空へと吸い込まれた。土手に寝転がった状態で、見るそれはとても眩しい。

「くそ、あのガキ。せっかく助けてやったのに、人の顔を見た途端逃げやがって」

まあ確かに、自分をかばって車に轢かれた男が、額から血を流しながら、それでも平気そうな顔をして、「大丈夫か？」なんて聞いてきたら、怖いけれども。

それでも礼の一つぐらい言っても罰はあたらないんじゃないだろうか？ あんな悲鳴をあげて逃げなくても。

「俺は化け物か、っていうんだ。いや、化け物だけど」

自分で言った言葉に自分で傷ついて、ため息をつく。

怖いのでちゃんとは確認していないが、額は縫う必要がありそうぐらい切れている気がする。肋骨も数本折れた気がするし、足の骨も心配だ。

痛覚はとっくの昔に切ったから痛むということはないし、二、三日すれば歩けるぐらいには傷も回復するだろう。

しかし、その二、三日ずっとこの川原で寝転んでいるわけにはいかない。下手すると警察なり医者なりを呼ばれかねない。

だからと言って、根無し草の自分に行く当てなどあるわけもなく……

「やってらんねえ」

ため息をついた。

まだ秋になったばかりだというのに、風がひどく冷たい。

もう一つ、ため息を。

そもそも、こんな車の「く」の字も見当たらないような小さな村の狭い道を、猛スピードで走り抜ける自動車がいけない。しかも、轢き逃げしやがって。これだから金持ちは嫌いなんだ。もし、轢かれたのが俺じゃなかったらどうするつもりなんだ。

ぶつぶつと口の中で呟きながら、とりあえず今はもう、諦めて寝てしまおうかと目を閉じかけて、

「大丈夫ですか？」

頭上でかけられた声に再び目を開ける。

そこには心配そうな顔をした少女が一人。

「あの、大丈夫ですか？」

「……あんたは、これが大丈夫そうに見えるわけ？」

腕を持ち上げて額から流れる血を拭いながら逆に聞くと、彼女は途端に大きく顔をゆがめた。まるで彼女の方がけがをしたみたいな顔だった。

「そ、そうですね。……でもよかった、しゃべれるならば見た目よりもひどくないみたいですね」

多分見た目よりもひどいと思う。俺じゃなかったら多分死んでいる。心の中で思いながら、彼は一つ息を吐く。

結局、見つかってしまった。

これからの自分の運命を思うと、ため息しか出ない。

化け物として見せ物小屋に売られるか、警察に連れていかけるか、それとも、また研究所に戻されるのか。

彼女は持っていた日傘を傍らに置くと、彼の傍にしゃがみこんだ。そのまま彼に異を唱える隙を与えず、自分のハンカチで彼の額を抑える。

ハンカチが血を吸い込んで赤く染まっていく。

「うわっ、あんた何やってるんだ!？」

いきなりのことで驚いた彼に、彼女は

「え、一応止血を……」

逆に何を聞いているのだろうこの人は? という口調で言い返した。

「別に、そんなのいって……」

彼女の白いハンカチと同じぐらい白いその手が、自分の血で汚れているのが何故だか許せなかった。

振り払おうと動かした手を、彼女は片手でつかむとゆっくりと下に下ろさせる。

「おとなしくしててください。大丈夫、悪いようにはしませんから。それより、動くと傷口が開いてしまいます」

「……あー」

薄倅そうな彼女の意外と力強い口ぶりに驚いて、そしてそれが正論であることは認めなければいけない事実で、結局何も言えずに再び空を見る。

「……この近所に」

彼女がぽつりと言った言葉に、顔をそちらに向ける。

「私の主治医の先生がいらっしゃいます。今からそこに行くつもりだったので、一緒に行きましょう。……あ、でも、そのけがじゃ動かないほうがいいですし、動けませんよね。先生を呼んでできますので、待っていてください。いいですか、絶対に動かないでくださいね」

そう言って彼女は立ち上がる。

額においたハンカチはそのままに。

「おい、あんた」

「大丈夫、私も先生も口は堅いですから」

「……そこじゃない」

それにしても鋭い女だと思う。何も言わないうちからこちらがわけありだと気づくなんて。正

解には、決してたどり着かないだろうが。

化け物だ、なんて。

「名前」

「え？」

「あんた、名前は」

その言葉を口にしてから、俺は何を言っているのだろうかと思った。そんな「人間」の名前を聞いてどうする。

彼女は、驚いたような顔をしてから、すぐに微笑んだ。

「茜。一条茜です」

そうって、先ほどから彼が眺めている空の名前を持った彼女は、微笑んだ。

なんだか、眩しい笑い方だった。

第五幕 好奇心、猫を殺す

どうやら本当に寝入っていたらしい。嫌な夢を見てしまった。昔の夢を。

隆二は体を起こし、小さく伸びをした。

あたりはすっかり夜になっている。

『おはよ』

隣でマオが小さく微笑んだ。

「おー。夜だけど」

くすぐったそうに、マオが笑った。

「マオ、大丈夫か？」

『何が？』

「腹減ってないかってこと。食べないと消えちゃうだろ、お前」

『ああ、うん、大丈夫。昨日、食べたばかりだから』

「ならいいけど。俺の精気をあげられたらいいんだけどな。人間じゃないからどうなるかわかんないしな」

『そっか。だから、嫌がったの？ あの時』

「んー？ ああ、まあ普通にほいほいあげるもんじゃないとも思ったしな」

『……そっか』

マオは何かに納得したかのように頷いた。少しだけ笑っている。

『うん、そっか、ならいいんだ』

「なにが？」

『なんでもない。隆二は大丈夫？ お腹空いてない？』

「ん、あー、別に食べなくても平気だから」

このところ三食ちゃんと食べる癖がついているけれども。

まったく、余計な出費だったあれは。マオの正体が最初からわかっていたらあんなことしなくてよかった。普通の人間のフリ、なんて。

『隆二も、ひとでなしだったんだね』

「まあ、普通にひとでなしなんだがな」

人間じゃないし、道徳的な存在とは言い難いし。

「さって、これからどうするかな」

なあ、マオ？ とマオの方を見る。

マオは何故か、大きく目を見開いて驚いたような顔をしていた。

何をそんなに驚いている？

『隆二、後ろっ！』

マオが叫ぶ。

慌てて振り返る。

銃声。

「っ」

肩に走る痛み。

『隆二っ！！』

マオが叫ぶ。

おろおろと、隆二の肩に手を置く。けれどもその手は何の意味もなさない。

肩から血が流れ落ちる。

『ああもう！ どうしてあたしはこんなときに何にも出来ないのよっ！』

悲鳴に近い声でそういうと、それでも手は必死に隆二の肩を押さえていた。そうすれば、傷が消えるとでも言いたげに。

『隆二、大丈夫？ 痛い？ ごめんね、ごめんね。あたしのせいで、ごめんね』

「平気だって」

一度大きく息を吸い、痛覚を遮断。持っていたハンカチで止血。ここまですれば、あとは放っておいても傷口は塞がる。

自分の体だ、長年の経験で知っている。

「ええ、平気でしょうね、あなたなら。U078、神山隆二」

銃声の主、エミリが無表情のまま言った。

「いきなり撃つか、ふつー？ しかもこの暗闇で」

「何故あなた相手に警告してから撃たねばならないのですか？ ネオンがあるから、だいぶ、明るいですしね」

黒い夜の空に、赤い服と金色の髪がなびく。死神の孫は、死神と同じように無表情で立っていた。

マオを背中に庇い、エミリを睨む。

「よくここがわかったな」

エミリは黙って指先を上を迎える。空。

「……何？」

「衛星で」

「……相変わらず、おたくらぶとんでるねー、規模が。バカじゃねーの」

当たり前のように言われた言葉に、鼻で笑う。

「なんとでも言ってください。それよりも」

エミリは隆二の後ろで隠れるようにしているマオを見る。マオはびくり、と体を震わせると、隆二の背中にしがみついた。

「渡してください、G016を」

「嫌に決まってるだろ巫山戯んな」

「巫山戯ているのはあなたの方です。一体、どういう了見で、ソレを庇い立てしているのですか。わたしたちに逆らう気ですか？」

「一度だって俺があんたらの言うことを聞いた事があったか？ 言う事を聞くふりをして、寝首をかくチャンスを虎視眈々と狙っていた、なら否定しないけど」

エミリは少しだけ顔を歪ませた。多分、不快の感情表現。

「マオは渡さねえよ。うちの居候猫なんだからな」

もう二度と、失ったりはしない。失うわけにはいかない。

右手を後ろに伸ばし、マオの手を掴む。少しのためらいの後、マオが握り返して来た。

もう、一人の生活には戻れない。戻りたくない。

また、同じことを繰り返したくはない。

「もう一度だけチャンスを与えます。G O 1 6を渡してください」

「嫌だ」

即答。それも幼い子どものように舌を突き出すおまけ付き。

エミリは小さく、わざとらしく、芝居がかった動作でため息をついた。

「それではしょうがありませんね」

「そんな、玩具みたいな銃で、俺をどうにか出来ると思っているのか？」

「いくらあなたでも、頭をふっとばされれば、そうそうすぐには動けないでしょう」

そう言ってエミリ銃を構え、隆二は身構える。

先ほどは油断していたが、きちんと注意していれば避ける自信は十分にある。

なにせ、無駄に発達した身体能力を持っているのだから。かつて、生物兵器として使われるための、無駄に発達した身体能力。今使わなくて、いつ使うのか。

マオの手をしっかりと握っていることを確認する。

一つ息を吸う。

注意していれば避ける自信はある。

でも、その後はノープランだ。

ならば、エミリが引き金をひく、その前に。

膝に力を入れて、後ろへ跳躍。

「へ？」

エミリが少し間抜けな顔をして、慌てて銃口を動かすのが見える。でも遅い。

『隆二っ、落ちるよっ！』

マオが悲鳴をあげながら右腕にしがみついてくる。

距離感覚は間違っていなかった。

飛んだ先に床はなく、そのまま落下。

『隆二っ！ 危ないよお』

泣きそうなマオの声。

まあ、確かに無駄に高いこの建物からそのまま落下したら、いくら隆二でも直ぐには動けなくなるだろう。足、折れる。

だから、

「っと」

ぎりぎりのところで、途中の窓枠に左手の指先を引っかける。

撃たれた方の肩だから、少し力が入りにくい。

急に体重をかけたから、しばらく動かないかもしれない。でも、駄目にするなら利き手じゃない方がいい。

下を見る。

この高さからならば、怪我せずに降りられるだろう。

そう判断し、手を離そうとしたその耳元を、何かが横切った。

「え？」

何かは街路樹の根元に突き刺さった。

『やだぁ……』

マオが怯えたように呟く。

上を見る。

エミリが銃を構えてこちらを見下ろしていた。

いやいやいやいや、普通、撃つか？ こんなところで？

人通りの少ない道でよかった。

エミリの指が引き金にかかる。

「やべ」

慌てて窓枠から離れると、地面に着地。

マオを連れたまま走り出す。

もう一発撃った気配がする。

だから普通は撃たないだろうこんな町中で。

細く入り組んだ路地に滑り込む。

これでとりあえずはエミリの視界からは外れただろう。

『……どうするの？』

マオが囁くように尋ねてくる。

「とりあえず、逃げる」

躊躇わずに告げると、路地裏を選びながら走り出した。

『……逃げるのかー』

マオがちょっとだけがっかりした口調で言う。

「何？」

『年上のほーよーりよくみたいなこと言ってたから』

「包容力な」

『もっと画期的な解決方法があるのかと思った』

「三十六計逃げるに如かずって言うだろ。逃げるが勝ちさ」

『誰が言うの？ こーめー？』

「こーめー？」

『この前テレビで見たよ、こーめーの罫です！ って。フリフリ着たおねーさんが言ってた』

「ああ、諸葛亮孔明。……いや、どんなテレビ見たんだよお前よくわかんねーよ」

軽口を叩きながら走る。緊迫感が足りない会話だが、マオの手が震えているのがわかる。

これで少しでも安心してくれれば、いいのだが。

「あー、マオ」

『え？』

慌てたようなマオの声。

だからなんで名前呼んだぐらいで怯えるのか。

抜本的な解決方法がなかったからって、見捨てるわけないのに。

「手、走りにくい。おぶされ」

『……いいの？』

「何で駄目かと？」

『……ん』

手を離すと、マオの両手が後ろから首筋にまわされる。

「よし」

走る速度をあげる。

上体は隆二にしがみついたまま、マオの足は宙を浮く。

『……隆二』

「んー」

『肩、痛い？』

「痛覚切ってるから平気」

『……それ平気じゃないよね。痛いのは体のサインだって、テレビで見たよ』

「どんだけテレビっ子だよお前」

『ごめんね、あたしのせいで……』

「大丈夫だってば、いつものことだし」

『でも……』

「あーもー、ごちゃごちゃうっせーな」

思わず吐き捨てるように言った。

『ごめんなさ……』

「だから怯えるなつーの。拾った猫の世話は最後までちゃんと見るんだよ、俺は。テレビと俺、どっちを信頼するんだお前は」

沈黙。

それから、

『……隆二』

耳元で小さくマオが言った。

「だろ？」

唇があがる。

ああ、そうさ。

もう失わない。無くさない。誰にも渡さない。一人になんて、もうならない。

マオをあの家に受け入れたのは、幽霊だからだ。人間みたいに自分より先に死なないからだ。

成仏することがあっても、理不尽な別れがないからだ。

置いて行くなと頼んだら、きっと本当に置いて行かないでくれるからだ。

だから、こんなところで失わない。

あのときとは違う。

ちゃんと、連れて帰る。あの家に。

工藤菊の日課は、ベランダから双眼鏡で町を眺めることだ。

もしかしたら何か妖怪がいるかもしれない。幽霊がいるかもしれない。化物がいるかもしれない。都市伝説があるかもしれない。

だから今夜も菊は双眼鏡片手に町を眺めていた。

「はぁ」

切なく吐息を漏らす。

今日も何も見つからなさそうだ。

そういえば、この前の赤い服の少女。あれについては結局なにも詳しいことがわからなかった

。

いや、違う。厳密に言えば何となくわかった。ただ、それは菊の望む答えではなかった。

「あ、見た見た。金髪の可愛い子っしょ？　なのに服装赤いあれ」

赤い少女についてなにか知らないかと尋ねたら、あっさりと恋人にそう言われた。普段非科学的なものを否定する彼に言われたのは、なかなかの衝撃だった。あと、可愛い子っていうのにも傷ついた。確かに、可愛いっぽかったけど、顔。

「あの服、どこで買うんだろうねー」

「.....あたしね、妖怪なんじゃないかなーって思ったんだけど」

「んなわけないじゃん」

笑われた。

「だって見かけたの俺だけじゃないよ。太陽とか椿とかも見たって言ってたし、あ、桜子さんも見たって言ってたな。あまりの赤さに眼科行くか悩んでてうけた」

「そんなに.....」

「大学の連中、普通にナンパしてたし。振られてたけど。なんか人探ししてるんだって」

「.....そういう妖怪じゃなくて？」

「違うって。.....菊さ、いい加減認めなよ。世界にはそんなものないって」

そこからいつもみたいにちょっと喧嘩になった。

それも思い出して、ますます溜息。

それだけ大量の目撃情報があるものの、特になんらの被害情報も無く、しかも普通にナンパされているし、どうやらあの赤い少女はファッションセンスがぶっとんだ普通の女の子と結論づけるしかできなかった。

あのファッションセンスのぶっとび具合はそれだけで、奇怪といえば奇怪だが、着ているのが普通の人間であるならば菊の守備範囲外だ。

「……どこにいるの、あたしの助けを待っている幽霊は……」

もうこの際、なんでもいいから現れてくれないうらうか。

そう思っていると、なにか屋根の上をはねるようう動く影が見えた。

「ん？」

あわててよく見ると、それは人のようだった。

素早い動きをしているが、その姿にはなんとなく見覚えがある。

影はこちらに近づいてくる。結構速いスピードで、まっすぐに。

「あ」

影はお向かいさんの屋根にまで来ていた。

「常連さんっ！？」

完全に視認できたその姿に、菊は思わず叫ぶ。

それは最近見かけなくなつたと思つていた、バイト先の常連、ちょっとくたつとした感じの青年だった。

「っ！ コンビニのおおっ」

相手も菊に気づき、驚いたような声をあげたが、丁度それは跳躍の瞬間。踏切に失敗して菊の家の屋根に届かない。

「ひっ」

思わず悲鳴のような声が漏れる。

落ちて行く青年が、やけにスローモーに見える。

ぎゅっと目を閉じる。

かっしゃん、っと金属音がすぐにした。

ああ今の落ちた音落ちた音ですか？ 神様。

半泣きになりながらそう思うと、

「あーちょい、失礼」

青年の音が案外近くからした。

目を開けると、ベランダの手すりに片手で捕まる青年の姿があった。

青年は菊に声をかけてから、片手だけで器用にベランダ内に侵入する。

それをぽかんと口を開けて見つめる。

え、何？ 何があったの？ っていうか無事なの？ 無事ならいいけど。

青年が困つたような顔をして、菊の前で人差し指を立てた。

「出来れば、静かにして欲しい」

言われて、慌ててこくこくと頷く。声なんて出そうもなかったけど。

よく見たら青年の左肩は赤く染まっていた。

青年はどこまでも困つた顔をして、菊を見つめ、外を見つめ、自分の肩辺りを見つめた。

「いや、まあ、ドジはドジだけどさ」

そうして肩に向かって小さく何かを呟く。

思い出す。

あの赤い少女に会った時。倒れていたと少女に起こされた時。あの時、気を失う直前に見たのは、この常連の青年ではなかつたらうか。

彼は屋根の上を走っていた。着地に失敗した後のリカバリーは普通の人間とは思えない動きだった。

肩が血のようなもので赤く染まっているが、痛がるそぶりもないし、なによりもそっちの腕でさっきベランダに掴まっていた。もしかしたら彼の血ではないのかもしれないし、彼の血でも回復したのかもしれない。血が垂れている様子はないし。

何よりも青白くってそれっばい！

「あのっ」

菊は青年の両手を握ると、

「もしかして、吸血鬼とかそういう系統の方ですか！」

今年一番の笑顔で、目を輝かせて尋ねた。

おかしい、なんでこうなった？

「はい、どうぞ」

「あ、どうも」

渡された紅茶を素直に受け取ってしまう。

最初は狭そうな路地裏を選んで走っていたが、世の中にはそんなに路地裏はなく。やはり屋根の上という障害物のないところを、スピードあげて通り抜けた方がいいんじゃないかと思い屋根の上を走っていた。そこで目があつたのが、この目の前の少女で。最初にマオの食事に利用させてもらった、コンビニの店員。バレた、ヤバい、と思ったが別の意味でやばかつたかもしれない。

「うふふ、あたし本当に嬉しいですー。ようやくこうやって吸血鬼の方にお会い出来てー」

ちょっといっちゃっている目で菊が言う。

彼女はどうやら、オカルトマニアのようだ。面倒だし騒がれるよりはいいか、と適当に話をあわせていたら吸血鬼認定されてしまった。おまけにお茶まで出されて。

『ねーこれ、どうするのー？』

背中にへばりついたらマママオが尋ねてくる。

ちょっと首を傾げてそれに答えた。

なんでこうなつていて、これからどうすればいいのか。そんなこと、隆二が聞きたい。

このまま永遠にかくまってくれるといいんだけどな、なんて間抜けなことを思う。しかし、どこかで一度きちんと、エミリのことには片をつかなければ。

「肩、大丈夫ですかー？」

「あー、はい」

「もう治っちゃう系？」

「まあ」

やっぱりすごーい！ と菊は黄色い声をあげた。

まさかいつも行っているコンビニの店員がこんな変人だとは思わなかった。

「何かから逃げてたっぽかったですけど」

「まあ」

「あれですか？ ヴァンパイアハンター？」

なんでそこで目を輝かせる。

「あー、そんな感じの？」

「はー、やっぱり大変なんですねー。闇の眷属ですもんね」

うんうん、と何度も一人で頷く。

「戦わないんですか？」

「あんまり目立つことしたくないし」

『屋根の上走ってたのにね』

お前は黙ってろ。

「対策を練ろうと」

「なるほどー。ちなみに、どんなですか、ヴァンパイアハンター」

「どんな……」

「やっぱり黒服にサングラス？」

「いや。赤い……」

そこで菊の動きがぴたり、と止まった。

「赤い？」

「赤い」

「……もしかして、無駄に全身赤い、金髪の女の子？」

頷く。ほら、やっぱり目立つんだってば、あの格好。

「ご存知？」

「知ってます。一回会いました。その……」

菊はそこで一度躊躇い、

「コンビニバイト終わった後に、倒れてたからって助けられて。っていうかぶっちゃけ、あの時のって常連さんの仕業ですか？ 姿見えたけど」

お茶を吹きそうになった。

『あー、それって最初の時だよ。やっぱり見られてたんだねー』

マオがのんびりと言う。誰のためにやったと思っているんだ。

「いや、うん、まあ、その」

「あ、あたし別に怒ってないんで」

ごによごによと口ごもる隆二に、菊は笑いかける。

「寧ろ、貴重な体験をしたと！ 吸血鬼に吸われても死ななければ吸血鬼にならないそうですしね！」

「あー、うん」

なんだかよくわからないが、咎めてこないならばそれでいい。

それはそれでいいとして。

「あー。嬢ちゃんが言った痕跡ってそれか」

溜息。なんだ、結局自滅に近いことをしたのか。まあ、いずれにしても顔を出されたと思うが

。

「あの子、ヴァンパイアハンターなんですか？」

「まあ、そんなところ」

「じゃあ、あの赤いのは戦闘服みたいなものなんですね！」

菊が納得したように手を叩く。

いや、あれはただの私服……。

「しかしまあ、どうしたもんかな」

小さく呟く。

いつまでも逃げ回っているわけにもいかない。

本気になればエミリー一人ぐらいどうとでも出来るが、殺すわけにはいかない。

不意をついて気絶なりなんなりしてもらって、一度お引き取りを願いたい。

「……やっぱり、頼むしかないか」

また借りを作るのも躊躇われるが。

「あー、お願いがあるんですけど」

「はい？」

赤い服の少女はなにかの妖怪なのかと思ってましたーと熱弁をふるっていた菊は、小首を傾げる。

「電話、借りていいですか？」

電話を一本かけ終わる。番号を覚えていてよかった。

「あとはどこかで嬢ちゃんを捕まえないとなあ」

まあ、適当な場所で待っていれば向こうからやってきそうだけれども。それだと不意をつかれかねないし。

「ヴァンパイアハンターに会いたいんですか？」

「まあ」

「どこにいるか聞いてみます？」

「……は？」

菊が何を言っているかわからなかった。

「いえ、あの子目立つんで。あたしのカレシ無駄に顔広いから、もしかしたらどこにいるか見つけられるかも」

言って菊はケータイを振る。

『あー、若い子の連絡網ってすごってテレビでやってたよー』

マオが言う。

「……お願いしても？」

「いいですよー」

菊はあっけらかんと笑うと、ケータイを耳に当てる。

しかし、あの小さな箱で電話出来るのってすごいよな。

ぼんやりとっていると、

『隆二いま、おじいさんっぽいこと思った？』

マオが呟いた。

「もっしー。ねー、この前の赤い服の子のことだけど。……え？ 違うよ、妖怪だなんて思っていないよ。そうじゃなくて、あの子の探してた人。……そー、その人に会って。葉平どこにいるかわかんない？ ……うん、わかった。うん、メールして。はい」

菊が電話を終える。

「彼が皆にメールして聞いてくれるみたいです。っと、見つかったらどうしますか？」

「あー。なんかこの辺りで、それなりに人気がなくて迷惑にならなさそうなところとか、ないですかねー」

他力本願にも程がある。

「えっと。確か廃工場がありますよ、ここから少し言ったところ」

「あるのか……」

言っというてなんだが、なんておあつらえ向きな。

『廃工場とか危ないよ？ 犯人に呼び出されて殺されちゃう』

マオの腕に力がこもる。どちらかという、こっちが呼び出す犯人側だ。

「じゃあ、そこに来るように伝えてもらうことって」

「いいですよー」

菊はあっけらかんと微笑んだ。

「そうやって、メールしときますね」

「頼みます」

『りゅーじ。……大丈夫なの？』

マオの言葉に、軽く腕を叩いた。宥めるように。

「おっ、はやーい」

菊がケータイを片手に笑う。

「目撃情報あります。すごい形相で走ってたそうですよ」

やっぱりかかわりたくないかもしれない。ほんの少しそう思う。

「伝言、つたえるように頼みますね」

「お願いします」

一度頭を下げる。

それから左肩をゆっくり回した。

ここで時間をつぶせたことで、左肩も動くようになってきた。これで平気だろう。

「あの、それじゃあ」

立ち上がりながら声をかける。

「あ、行きますか？ ろくにおかまいもできませんで」

「いえいえ。お茶、ごちそうさまです」

なんとなく間の抜けた会話をしてしまう。さっきから、ちっとも緊迫感というものが生まれない。まあ、それならそれでいい。

「あー、あと図々しいお願いだとは思いますが。俺のことは」

「秘密にするんですよね？ 大丈夫です」

菊がとってもいい笑顔で頷いた。

「あたし、人間との約束は結構頻繁に破っちゃいますけど、妖怪さんたちとの約束は絶対に守るんです」

それから小声で付け足した。

「まあ、初めてなんですけどね。約束するのはもちろん、見るのも」

ほんのちょっぴり不安になった。

浮かれて誰かにぺろっと言いきりそうだけども、この子。

まあ、それならそれでその時考えるし、第一この子の調子じゃ周りの人に信じてもらえなさそうだし。

「あの、でもお願いが」

菊は少し、神妙に呟く。

「……はい」

少し背筋を正した。

「また、来てもらえますか、うちのコンビニ」

真顔で言われたたわいないお願いに、緊張していた気持ちが緩む。少し笑いながら、

「それはちょっと」

「えーっ」

菊は露骨に傷ついた顔をした。

「なんですか！ 正体、ばれちゃったからですか？」

「いや、近くに別のコンビニできたから」

事実を答えると、菊はぽかんと間抜けな顔をして、

「ええっ、そんな庶民的な理由……」

がっかりしたように呟く。その後すぐに、でもそれはそれでおいしい？ とか呟きだしたけど

。

「まあ、コンビニは行くことがあったら行きます。それじゃあ、どうも」

これ以上ここにいると話が長引きそうだ。

隆二は一度軽く頭をさげると、来たときと同じようにベランダから跳躍した。

あっさり立ち去る隆二を、ちょっとつまらなさそうに菊は見送ってから、小さく呟いた。

「またのご来店、お待ちしております」

第六幕 上手の猫は爪を隠す

エミリは憤慨していた。

G016に逃げられただけじゃない。

探していたら、見知らぬ大学生ぐらいの男性に声をかけられた。いつものことだと無視しようとしたら、

「あの、神山って人からの伝言なんですけど」

その男性はこともあろうか、そう言ったのだ。

曰く、廃工場に來い、と。

一体何様のつもりなのか。

どうせ先回りして何か仕掛けるつもりなのだろう。こっちだってそれぐらいわかる。いつまでもお嬢ちゃん、じゃないのだ。

荒々しく足音を立てながらエミリは廃工場に向かった。

「G016!!!」

これ見よがしにシャッターが開けられた廃工場。

無人のように見える中に向かって、エミリは叫んだ。

「いるんでしょっ、出て來なさいっ！」

返事はない。

気配もない。

もとより、居るのは不死者と幽霊だ。気配なんて感じられなくて当たり前だ。

銃を構えたまま、中に入って行く。

薄暗い。

ゆっくりと、進む。

中の物はすべて撤去されたあとらしい。がらん、としている。

部屋の真ん中まで来た。

「神山隆二っ！」

吠えるように名前を呼ぶと、

「はいはい」

かるーく返事が返って来た。

声がした方を見る。見上げる。上。

落下してくる影。

高い天井に掴まっていたのか、と思った時には遅かった。

真上から降りて来た隆二に組み敷かれた。

「ぐっ」

「駄目ー」

銃を持った右手も軽々と捻られる。掌から転がり落ちた銃は、隆二のズボン、尻ポケットに入

れられた。

「暴発すればいいのに」

苦し紛れに呟くと、

「ここで暴発したところで嬢ちゃんの不利に変わりはない」

隆二が笑った、ような気がした。

顔が見えない。

「……頭を撃てばしばらくは動けないでしょう、と言ったのは私でしたね」

フルフェイスのヘルメット。

「どこで手に入れたんですか？ 盗品？」

「失礼な。借りたんだよ。知らない人に。未承諾だけど」

「それを盗品というのです」

吐き捨てるように告げる。

何度か脱出を試みるが、常人離れした力には勝てない。

視界に、ふよふよと上空を浮かぶマオの姿。なんでそんなに眉根を寄せているのか。泣きそうな顔をしているのか。泣きたいのは、こちらだ。

「降参、してくんない？」

隆二の声。

泣きたいのはこちらだ。でも、泣かない。

「嫌です」

エミリはきっぱりとそう告げると、少しだけ口角をあげた。

そして、

「今です！」

叫んだ。

ほぼ同時に、隆二はエミリから飛び退く。不穏なものを感じて。

マオの手を掴むと、そのまま頭を抱え込んだ。

いくつかの銃声。

それから衝撃。

隆二は小さくうめく。

何か高い音が響く。とても近くから。

五月蠅いな、なんだこれ。そんなに騒ぐな。

『隆二っ、隆二い！』

「……へーき」

腕の中、悲鳴のように名前を呼ぶマオの頭を撫でる。

『りゅーじっ』

マオの頭をすり抜けて、赤い雫が落ちる。

赤い水たまりが出来る。

なんだこれ、雨漏り？　なんて、一瞬、脳が事態を理解するのを拒否する。

これまた無様に、喰らったものだ。

『隆二っ』

「だいじょうぶ」

喋ると同時にこみ上げて来た塊を飲み込む。

「ヘルメットは英断でしたね」

エミリの言葉に振り返る。

エミリの後ろ、入り口に立つ三つの人影。

「……増援部隊、ってやつ？」

かすれた声で尋ねると、エミリは頷いた。

乾いた笑いが漏れる。

「……やばいなあ、平和ボケ？」

エミリはいつも一人で行動しているから忘れていた。彼らは組織なのだと。

エミリが近づいてくる。後ろの影は構えたまま。

被っていたヘルメットを脱ぐと、エミリに向かって投げつける。常人離れした力で投げられたソレは、エミリの足元に叩き付けられ、その形を歪ませた。借り物だけど、ごめん持ち主。

そのままなんとか後退し、距離をとる。増援部隊が撃った弾が足に当たったのはご愛嬌だ。今更足に一発当たったところで、何かが変わる訳じゃない。マオの悲鳴があがるだけだ。

エミリから奪った銃を構えてみせる。

『隆二い』

クリアになった視界に、マオの泣き顔がうつる。

「……泣かなくて、いいから」

安心させるように微笑んでみせる。

でもマオの表情は変わらない。

被害状況を確認するのが憂鬱になる。

治って来た箇所もあるが、さっきまで居た場所にできた赤いみずたまり。あんまりきちんと見たくはない。

それにしても、ヘルメット、やっぱり被ったままにしとけばよかったかな。銃を構えたままの人影を見て思う。

マオを背中に隠すようにして、エミリと対峙する。

「銃、撃ったことありませんよね？　降参、しますか？」

エミリが尋ねてくる。

体の処理が追いつかない。それでも笑ってみせる。

「誰がそんなこと」

『待って！』

マオが叫んだ。隆二の言葉を遮るように。

隆二は視線を背後に動かす。

エミリは黙って動かない。

マオは隆二を庇うように両手を広げて彼の前に立つ。

『あたし、行くから。だからもうやめて』

「……マオ？」

血と一緒に、言葉がこぼれ落ちる。

何を、言っている？

『いいよ、もう』

マオは振り返ると小さく微笑んだ。口元は笑みをかたどっているが、目元はまったくその反対で、その顔はやけに頭にきた。

それは神山隆二の大嫌いな表情だった。

もう、どうでもいいと全てを諦めた者の顔。

昔、自分と仲間達が嫌というほどした顔。

なんで、そんな顔をしている？

なにがそんな顔をさせている？

どうしてそんな顔をしている？

そして、マオのその顔は嘗て愛した、今でも一番大切な女性の唯一認められなかった表情に似ていて、

「しょうがないよ、双子は忌み嫌われるものだから」

一瞬、だぶった。

そんな顔は見たくなかったから、必死に道化を演じてきた。

そんな顔は見たくなかったから、例え黒い茨の道でも突き進んできた。

そんな顔は見たくなかったから、犠牲の羊になることだって厭わなかった。

そんな顔は見たくなかったから。

今だって、見たくない。

『ありがとう。楽しかったから、もういいや』

マオは早口で告げる。

『そんなけがまでして、守ってくれなくてもいいよ。拾った猫がまた、元の飼い主のところへ戻っただけだと思って』

エミリの方を見る。

『あたし、行くから。帰るから。だから、もう隆二のこと傷つけないで』

「……もう、逃げませんね？」

ゆっくり吐き出したエミリ言葉に、マオは小さく一つ頷き自嘲気味に嗤った。

『何処に逃げたらいいのかわからないから』

それから再びやけに無表情で自分を見る隆二の方を振り返る。

『隆二、怒ってる？ その、ごめんね。散々巻き込んで置いて。どうせなら、もっとはやく、あ

たしがこうしていればよかったよね。そうしたら、隆二がけがするなんてことなかったのに……

。ごめんね』

隆二の頬に手を添えた。

『ありがとう。楽しかった』

そうって隆二の唇に自分の唇を重ねる。食事の意味を持たない、初めての行為。

隆二が、ほんの少し驚いたような顔をした。それがおかしくて少しだけ笑う。

そのまま、隆二の頭を抱えるようにして抱きついた。

『あのね、隆二。最初にね、会ったとき、本当はとても怖かったの。最初は、あたしのことを見
える人がいるんだ！ って素直に嬉しかった。でも、すぐに怖くなってしまった。気づかれる
んじゃないか、あたしがまだ存在して少ししか経たない未熟者だと、本当は存在してはいけ
ない者だと』

隆二の耳元で、囁くようにして語る。隆二からの返事はない。

それで、構わなかった。

『そして、……これが一番怖かったんだけど、また名前をもらえないんじゃないかと思って
凄く怖かった。あの人達は、あたしのことを、それとかあれとか認識番号で呼んでいたの。だ
から、貴方が名前を付けてくれたとき凄く凄く安心して嬉しかった。あたしは「マオ」という存
在にはじめてなれた。嬉しかった、ありがとう』

そう言って、少し黙る。あと他に、言いたいこと、なんだっけ？

『あたし、隆二の事、大好き。大好きだから、触れないのわかってても腕組んでみたかったし、
手を繋いでみたかったし。大好きだから、もし、隆二がいいよって言うてくれたら、隆二を、食
べたかった。男の人、美味しくないの、知ってたけど』

楔だった。

神山隆二という存在は、マオにとって世界とつながる楔だった。離れてしまえば、もう戻れ
ない。そんなこと、わかっている。でも、

『その、後でちゃんとけがの治療してよね』

でも、だからこそ、彼を犠牲にするわけにはいかない。

あの水槽の中で本当は終わるはずだった。

たまたま逃げ出せたけれども、そのあともあのままだったら、きっとすぐに捕まっていただ
ろう。

それを、少しの間だけでも、楽しい日々を過ごせた。隆二が知らないものを沢山教えてく
れた。

それだけで、満足だ。

『それじゃあ、ね』

隆二の返事を待たず、隆二と視線を合わせないまま、手を離すとエミリの方へと移動する。

エミリの前に降りる。

『逃げて、ごめんなさい』

「そうですね。研究班はかんかんです。覚悟して置いた方がいいですよ」

そうって歩き出す。その後をマオはゆっくりと追う。

「待てよ」

それを隆二は引き留めた。

自分が思ったよりも大きな声だった。いつもよりかすれていたのは、大目にみて欲しい。

振り向いたエミリと振り向かないマオ。

銃を構えたままの三人組。

「ふざけるな」

ゆっくりと息を吐く。

足に力をいれて、立ち上がる。

三人組が撃とうとしたのを、エミリが片手で制した。

大丈夫。まだ立てる。

「見くびるな。拾った猫を犠牲にする程、落ちぶれていない。俺は欲ばりだから全部手に入れたがるし、事実、それだけの力もあると思うぞ、なあ、嬢ちゃん？」

決して気は抜かず、それでも傍観者に徹していたエミリに話をふる。

エミリは軽く目を見開き、

「……そうですね、おそらくそうなのでしょう」

単純に、それだけ言った。

それを聞いてにやりと笑うと続ける。

「ほら、嬢ちゃんだってこうってるさ。疑心暗鬼ミチコよりも、俺の方が強いさ」

おどけてみせる。

「けがさせて悪いと本当に思っているなら、迷惑かけてしまったと思っているのならば、そうやって消えるんじゃだめだろ。本当にそう思っているのならば、俺にお詫びと恩返しをしろ」

自分でも段々何を言っているか、わからなくなってきた。

ただ一つだけいえるのは、今、この居候猫を見放すことができないということ。

『でもっ！』

マオが振り返る。また、泣きそうな顔をしているな。そう思って目を細める。

なんだか酷く不愉快だ。

何が？ そういう顔をしているマオが？ そういう顔をさせてしまっている自分が？

マオはそのまま、叫ぶように言葉を投げつける。

『でも、あたしは何も出来ないもの！ 隆二がけがしているのに何も出来なかったし、恩返しもお詫びもきっと出来ない』

「そのうち肉体がもてるかもしれないぞ？ そのうち霊体であるからこそ出来ることがあるかもしれないぞ？ 半永久的に生きられるんだからな。そういうチャンスにいつか恵まれるさ。それがいつのことかわからないが、きっと研究所に行けば得られないことだと思う」

そうってやわらかく微笑んだ。

エミリが驚いたような顔をしたのを、視界の端に捕らえる。それはまるで自分が笑うのは気味

が悪いみたいじゃないか、失礼な。

「マオが来てから、言わなかったけど、十分楽しかったんだ。それだけで本当は十分だったんだ。一人の、生活が長かったから」

こころなしか視界が揺らいできた。血の生成が追いつていない。

がんばれ、常人離れした俺の体。

あやまちを、繰り返すな。

「あの赤いソファーに座って、二人でだらだらとテレビでも見よう。あのソファー、やっぱり一人には大きすぎるんだ」

マオの瞳が揺らいた。

「だから、なあ、マオ」

一呼吸置く。

「一緒に帰ろう」

そうやって両手を広げてみせる。

マオが一度きつく目を閉じる。

何かを振り切るような動作だったが、それはほんの一秒足らずで、隆二の方へ向かって動き出した。

銃声。

マオが一瞬驚いたかのように目を見開き、それからすぐにゆっくりと目を閉じ、崩れるようにして倒れていく。

それを視界に捕らえた瞬間、走り出す。体が悲鳴をあげるのを無視する。

が、位置的に有利だったエミリが先に彼女を捕らえた。

舌打ちすると隆二は、再びエミリとの間合いを取り直す。

「それは？」

彼女が持っている先ほどとは、別の銃について尋ねる。

「なんでも研究班が開発した霊体にも効く銃だそうで、原理はわからないので省きますが。試作品ですし換えの弾もないので不安だったのですが、効いて良かったです。ついでに、今G O 1 6に触れるのも研究班が作ったこの手袋のおかげです」

そういつてから隆二を見て、少し呆れたように笑う。

「安心して下さい。麻酔銃のようなもので眠っているだけです」

それでも隆二は彼女を睨むのをやめない。

「そんなこと言われて納得すると思っているのか？」

「いいえ。思っていません。ですが、その怖い顔はやめてください。さっき、貴方が微笑んでいるのを見てわたしはとても驚いたのですよ」

「失礼だな」

鼻で笑う。

エミリはそんな隆二を見るとため息をついた。

三人組が銃を構えたまま近づいてくる。

「どうして、そんなにG O 1 6に執着するのですか？」

エミリに抱えられたマオにちらりと視線をうつし、隆二は訥々と騙り始めた。

「ウサギは寂しいと死ぬらしい。小鳥も構ってやらないと死ぬらしい。そいつはもう、コトリとな」

自分で言った、然して面白くもない冗談に、意味もなく喉をふるわせる。

エミリが眉をひそめた。あるいは隆二を哀れむように、あるいは理解しがたいと言いたげに。

「それとこれにどういう関係があるのですか？」

「黙って聞け。だがな、マオは言った。人間はつまらないと死んでしまうんだ、ってな。そういうことは今の俺にはいまいちよく分からないが、ここしばらく一人で居た俺にはマオがいた期間がやけに新鮮に感じられてな」

一度言葉を切り、軽く目を閉じる。

「もっとも、ほとんど振り回されていたんだがな」

苦笑しながら付け加える。

「だが、不思議なことに、一人で今までどうやって過ごしてきたのか思い出せない。笑えるだろう？ 一人で居た時間の方が長いはずなのに。だから、マオがいないと俺はつまらなくて死んでしまうかも知れない」

エミリの軽く眉間にしわを寄せた表情が、何を意味するのか隆二にはわからなかった。

「……嬢ちゃん、猫を飼ったことは？」

「いいえ。ありませんが……」

「そうか。俺の知り合いで猫が大好きなやつがいてな。どれぐらい好きかというのと、毎日毎日飽きもせず野良に餌をやりに行くぐらい好きなやつだった。それで、その関係で何度か世話をしたこともあるんだが、猫っていうのは人になつかないで家になつく、とも言われている。それぐらいそっけないんだ」

話の流れが見えない、とでも言いたげにエミリが首を傾げる。それに構わず話を続ける。

「いつも冷静で冷淡で、こちらが気を引こうと一生懸命になっても向こうは冷めた目で見てくるだけだ。だがな、時々、向こうの都合でしかないんだが甘えてくるんだ。不思議なものでな。ちっとも懐かないから嫌いだ、って思っていた猫も一度甘えられると手放せなくなるんだ。まあ、この辺は人それぞれかも知れないし、俺も実際に世話をしてみるまでそんなの嘘だと思っていたんだがな。……そうだ、嘘だと思うなら、嬢ちゃんも一度猫を飼ってみればいい」

つまり、なにが言いたいかというのと、

「俺にとってマオはそういうもんだ。わかるか？」

エミリは心持ち頷く。

「同族意識でも哀れみでもなんでもない。ただ居てくれるとありがたい、っていうだけなんだ」

自分で言う前から、それが自分の台詞だとは到底思えなかった。

かつて自分が愛した女性を看取る勇気がなかったそのときに。別れ際、彼女の前で自分は決めていたはずなのだ。

もう二度と何かに深く関わらないと。

マオが人ではないとはいえ、居てくれてありがたいという台詞が、まさか自分の口からでるなんて。

でも、マオとなら永遠だってありえる、死ぬわけないのだから。そんなことを、思っている。

全く一体、どういう心境の変化なのだろうか？

この変化を彼女は喜んでいるのだろうか？ 恨んでいるのだろうか？ 悲しんでいる？

どことなく後ろめたさを感じて、少し軽めの口調で隆二は付け加えた。

「そうだな、俺とあんたらの関係に少し似ているな。利用しあっている。ただ、決定的に違うと言えるのは、あんた達とはいつ寝首をかこうかタイミングを狙っているが、マオとはそんなことがないところだ。理解してもらえたか？」

エミリは首を横に振った。

「言いたいことは理解できます。ですが、それがどうして、けがを負ってまでG016に執着する理由になるのかが分かりません。ただの、実験体でしかないのに」

「考え方の違いだな。まず、根本的なところが俺とあんた達とでは違っているな。あんたらはあいつのことを実験体として扱っているが、俺にとっては最初から、そうだな、これからもただの居候猫でしかない。そもそも、それを言うならば俺だって実験体なんだしな」

そこまで言って、そういえば肝心なことを聞いていないことを思い出した。

「ところで、あんた達はどのような目的でマオを造ったんだ？」

「不老不死です」

「不老不死？」

眉をひそめる。

「なんだ、まだやってたのか、あんたら。いい加減懲りろよ」

死なない、老いない体の持ち主、かつての実験体は呆れて言う。

「……怒っていらっしゃいますか？」

エミリが少しだけ、怯えたような顔をした。

「いや」

怒ってはいない。ばかにしているというべきであろう。

人間ってなんて進歩が無いんだろう。まだ、それを望んでいるなんて。

年もとらずに死ねないということがどういうことだか、実際に不老不死になってみないとわからないだろうか。だが、想像することぐらい出来るだろ？ 自分の友人や恋人がどんどん年をとっていき死んでいくのをただ見ていることしか出来ない。

きっと、それを望んでいる連中はなってから後悔するだろう。

不死者はそう思ったが、口には出さなかった。

今更言ったって無意味だから。別にそれを自ら望んだ赤の他人が、後から後悔しても彼にとっ

ては株価が昨日よりも上がったのと同じ程度のことだ。

代わりに再び質問をする。

「なんたって、未だにそれを？」

「今、それなりに日本は平和だと思いませんか？ 医学も発展して、平均寿命というのものがびています。それは、日本以外の多くの大国にも当てはまります」

「ああ」

「財産というの、平均して暮らすのに困らない程度あります。聞いた話によると、贅沢を望まなければアルバイトでもそれなりに食べていけるそうですね？」

自分の方を見るのは、同意を求めているからだ気づくのに少し時間がかかった。

確かに隆二はたまにアルバイトするだけのフリーターだ。食べていく、という概念が薄いので失念していた。

「そうだな。とりあえず、家賃と光熱費は払えている」

「一部の多くの財産を持つ者は、お金を払って買えるものはほとんど手に入れてしまい、別の新しい何かを願っています」

「それが不老不死？」

「ええ」

「なるほどね。一生遊んで暮らせる以上の金があるやつなんかはもったいないと思うわけだ。一生遊んで暮らしても余ってしまうわけだし、実際一生遊んで暮らすのもなかなか難しいというか、辛いしな」

「みたいですね。よくわかりませんが」

「それで、不老不死と幽霊にどんな関係があるんだ？ 不老不死になりたければ、俺みたいになればいいだけだろう？ それとも、研究所にはもう、俺たちを造ったときの資料は残っていないのか？」

「資料は残ってはいるのですが、不完全なものです。それに、その『お金持ち達』は自分達の肉体が改造されることは拒んでいます。不老不死にはなりたいが、もしかしたら途中で死にたくなるかも知れない。そのときに死ねないというのは嫌だ」

「わがまま」

小さく呟いた。

「それに、貴方のような飛び抜けた身体能力が欲しいというわけでもありません。ですから、私たちは新しく何かを考える必要に迫られたのです」

「別にわざわざそんなわがままな連中の言うことを聞いてやらなくても、他にやることはあるだろう？」

エミリは隆二を見て小さく嗤った。

「もし私たちが拒絶すれば国際問題に発展しかねませんよ？ 一応、研究所は日本にありますが、今は世界各国との共同研究所扱いになっていますから。それに、莫大な研究資金をあなたの言う『わがままな連中』が投資してくださっているので、ご機嫌を損ねるわけにはいきません。他にも色々、『社会の役に立ちそうな』研究を抱えていますから」

「……面倒だな」

「幽霊を造っているのは、不老不死の研究の一環です。というか、最初は幽霊を作るつもりじゃなかったんですよ」

一度こちらに視線を向け、問いかける。

「愚問かもしれませんが、ホムンクルスってご存知ですか？」

「ん、ああ。あれだろ？ 錬金術にでてくる人造人間」

人間の精液を、馬糞と共にフラスコに密閉し、四十日間経過すると、この精液は生命を生じる。人間に姿は似ているものの、まだ透明で真の物質ではない。さらに四十週間、人の生き血で養い、一定の温度を保つと、人間の子供と同じように成長する。身体は、女性から生まれた子供よりもずっと小さい。

なんていう作り方を、記憶の中からひっぱりだしてきて考える。

「それで、ホムンクルスがどうしたって？」

「その、ホムンクルスは自然とあらゆる知識を身につけているが、フラスコの外で生きることはできないってというのはご存知ですか？」

「そういえば、そんなのだったかも」

「そんなのだったんです。そこで研究班の人間は考えたんです」

「『あらゆる知識を身に付けているならば不老不死についても知っているのではないかって？』」

「……はい」

相変わらず、わかりやすい思考をしている人々だ。隆二は少しばかり苦笑する。

「ですが、やはり実験は失敗した。研究班は肩を落として、もう一度挑戦するかどうか話し合おうとしていた、そのときに気づいたんです。フラスコの近くに幽霊がいることに」

「……変な風に作用したってことか？」

「おそらく。もし幽霊が死んだ人間の魂だという説を信じるならば、死んだホムンクルスの霊だったんだと思います。そして、一応それで落ち着いています。ただ、これでも我々は一応科学者なので、科学的に証明できないことは信じていないのですが」

「……ふーん」

まあ、確かに、科学者か否かと聞かれたら科学者だろう。人の脳や内臓に手を加えて不死者をつくるぐらいなんだから。

それに、病気の特効薬の発明とか新しい機械の製造とかに、実はこの研究所は関わっている。非人道的なことも行っているんで、決して表沙汰にはならないが。

「なんか、失礼なこと考えていませんか？」

顔に出ていたらしい。不機嫌そうな顔をされた。

「いやいやまさかそんなことないよ」

答える自分も白々しい。エミリは信じていなそうな顔をしてこちらを見た。

「話の続きですが、幽霊というのは不老不死です。肉体がないのだから当たり前なのですが。それでホムンクルスの研究を進める一方で、幽霊についての研究もはじめました。それがG O 1 6

達です。人がものを認識するのは、ものが光を反射するからなのは当然ご存知ですよ？」

一つ頷く。

「ならば、その光の反射をあやつることが出来たならば、存在しないものをさも存在しているようにみせかけることも、逆に存在しているものを見えなくすることも可能なわけです。理論上は。G016達はその光をあやつって作ったとされています」

「そういうものかね？」

それで、あんな幽霊が出来るものだろうか。

「が……、正直私は嘘だと思っています」

重要なことをやけにさらりとあっけらかんと言われて、一瞬間き逃しそうになった。

「え？」

「実は派遣執行官であるわたしには詳しいことは説明されていませんし、詳しい理論やなにやらはまったくとっていいほどわかりません。説明されても、正直、理解できるかどうかさえも怪しいですし……。研究班もそれを理解しているのでしょう、余計なことまでこちらに語ってきません。ですから、平気で研究班は嘘をつくんです。秘密保持のために」

そうやってエミリは肩をすくめた。

「……あんな、今随分なことを言ったな」

「そうですか？ まあ、組織なんてそんなものです」

まさか十六歳の小娘に組織について語られるとは思っても見なかった。

「まあ、そんなこんなで出来たのがマオ、と」

「ええ。ただ、G016の製造工程には何かしらミスがあったようなのです。失敗作というか」

「ミス？」

「本来ならば、あんなに確立した自我は持たないはずなのです。霊というのは精神体ですから、あまり不安定なのはよくありません。多少の感情は埋め込みますがG016の場合は違います。ころころとよく感情が変わり、不安定で……」

まあ、確かによくわからない感情の発露をする幽霊だ。

「ましてや逃げ出すはずなど、自意識をもつはずなど、ありえないはずなんです」

エミリがそうやって言い切る。

この少女は気づいているのだろうか？

自分が如何に自然の道理に反したことを行っているのかを。感情を持っていることをミスと言いついてしまうことの残虐性を。

自分達が行っていることが、どういうことになるのかを。本当に理解しているのだろうか？

「若気の至り」

「はい？」

思わず呟いた言葉に、エミリは眉をひそめて隆二を見てきた。

そう言う表情のある顔をしていれば年相応に見えるのになといつも思う。もったいない。せつかく、祖母譲りの綺麗な顔立ちをしているのに。

「……なるほど、マオが作られた経緯についてはよくわかった」

「そうですか」

エミリが頷く。

「ただ、納得はできない」

エミリが少しだけ眉をひそめた。

「まあ、それがつまり何を意味するかというと……」

少し体に力を入れる。

「今更だが、俺たちの間に話し合いの余地はないってことだ。話し合いをしても構わないが、一晩かかっても終わらないだろう。一度植え付けられた価値観というのはなかなか払拭できないしな。まあ、俺があんたらと話し合いで何かを解決したことはないし、ここ最近では敵対してすらいなかったからな」

「……そうですね」

エミリは一瞬の躊躇の後、ため息をついた。味方から新たに受け取った銃を隆二に向ける。

黒い三人も同じようにした。隆二を囲むように並んでいる。

「でも、最後にもう一つ聞いてもいいですか？」

「人にもものを尋ねるときに銃口を向けると、研究所では教育しているのか？」

そいつは愉快的な教育方針だ、そう言ってやると、エミリは不愉快そうに眉をひそめたものの大人しく銃を降ろす。

「それで？」

「もし、仮に、貴方のところに行ってG016が存在していけると思っているのですか？ 聞いたとは思いますが、まだ試作段階なので定期的に人の精気を摂取する必要性があります。貴方はそれをちゃんと、得ることが出来ますか？ 貴方に幽霊のために自分の精気を分けてくれる人間の知り合いがいるとは、とてもじゃないが思えません。ならば、無理矢理奪うことになるでしょう。そうなれば、いずれそれは、他者にばれるかもしれません。そうしたらどうするおつもりなのですか？」

確かにその危険性はある。今だって問題視しているし、未だに答えは出ていない。それについては、いや、その他の問題についても考えればきりが無い。

それでも、そのリスクを犯さざるを得ないのは……、

「だが、戻ればマオは消去されるだけだろう？」

そんな事態は避けたいから。

エミリは少し、眉を上げた。

「言ってたよな。マオは失敗作だ、って」

エミリが頷くのを確認するよりも早く、隆二は続ける。

「あいつらが失敗作を残しておくなんて考えられない。俺たちを造っていた頃はばんばん失敗作を棄てていったんだしな。消されると分かっているところに連れて行かせられるか」

エミリは何も言わない。

沈黙は何よりも雄弁な肯定。

思い出すのは、あの失敗作と言われて消されていった自分と同年代の子どもの顔。そして、い

つ自分の番になるのかといった恐れ。

自分は成功作として扱われていると気づいたときにも、それらは忘れることが出来なかった。あのころは、ずっと悪夢にうなされていた。後ろめたさと罪悪感で。

そんな気持ちに知り合いを、それも居候猫をさせることなど、隆二には出来なかった。

「それに俺たちがとる精気だって食物連鎖だと考えればいいだろう？ 人間っていうのは不思議だよな。豚やら鶏やらいつも平気で殺して食べているくせに、普段食べない犬や兎を食べることを異端とする。どちらも生き物の命を奪っているという事実は変わらないのに。それならば、命を奪ったりしない程度の精気をとることはまだかわいい方だろう？」

隆二はじっとエミリを見る。

「それは詭弁にしか過ぎません」

少し沈黙が続き、エミリは絞り出すようにして言った。

「そうだな。詭弁かも知れない。だけど、本当のことだろう？」

笑う。皮肉っぽく。

「あいにくと俺は、神様を信じちゃいねえんだ。あんたら造物主を崇めるつもりは毛頭ない」

そして、小さく息を吐いた。喉に渴きを感じる。

「まったく、今日で一年分は動いたし、しゃべったぞ。これで残り一年は動かずにしゃべらずにいても誰からも怒られないな」

ついでに血も十年分は確実に流したな、と思う。

軽口をたたく。口元には笑みが浮かんでいるが、しかし目元は笑っていない。見据えるようにエミリを見ている。

それをみてエミリは一つため息をついた。

「やはり、素直に譲り渡してくれる気はないのですね？」

「根本的にマオは物じゃないしな。あいつが心の底から戻る気があるならば話は別だが。……マオにそういう感情を抱かせる自信はあるか？」

「わかりました」

エミリは銃を構える。足下にマオを横たえた状態で。

「貴方のような協力者が居なくなるなんて、残念です」

銃声。

今度はきちんと避け切れた。

引き金がひかれる直前に跳び上がる。

そのまま黒い三人の一人の背後に。首筋に手刀を叩き付けて、一人昏倒。

隣の一人が慌ててこちらに銃口を向けてくる。昏倒したばかりの味方を投げつけてやる。とっさに力ない体を受け取り、バランスを崩したところに横から薙ぐような蹴りを。これで二人昏倒。

最後の一人が駆けてくる。激情に駆られたように。

「ばっ！ 無茶ですっ！」

エミリが叫ぶ。

一発左手に弾をうけるが、それは一旦忘れることにする。駆け寄って来た相手の拳を、その左手で受ける。結構痛かった。

そのまま相手の手を捻り、ついでに腹部に一発蹴りを。

「っと、お仲間がどうなってもいいわけ？」

エミリが銃口を向けてくるから、そいつの首を左手で拘束し、そのこめかみに奪った銃を当てる。

拘束された本人がうめきながらも小さく舌打ちした。

「随分、動けるんですね。そのけがで」

エミリの言葉に思わず笑う。

「動けるようになるための時間稼ぎ手伝ってくれてありがとう」

どうしてマオを作ったのか。それに興味がなかったといえば嘘になる。だが、わざわざ今このタイミングで訊いたのは、血の生成を間に合わせたための、傷口を少しでも治すための、時間稼ぎに他ならなかった。

ひっかけられたことを知り、エミリがくしゃりと表情を歪める。

「まあ、怒るなって」

こっちがけがを治したことだって時間稼ぎにしかになってないんだから。まだ少し、くらくらする。

エミリが一步二歩、近づいてくる。

「撃つよ？」

右手の銃を軽く動かしてみせる。

「撃てませんよ」

エミリがバカにしたように笑う。

「撃てるって」

そりゃあ、良心がとがめないわけじゃないけど。

「メンタリティの問題じゃありません」

「は？」

「セーフティがかかったままだ、バカ」

答えたのは拘束されている本人だった。

言われて隆二は手の中の銃を見つめ、

「.....そうなんだ？」

一体どこがどうなっているのかわからないまま、それを遠くの方へ力一杯投げた。

「.....あ、はったりだった？」

投げてからエミリに尋ねる。マオがこの間見ていたドラマにそんなシーンがあった。セーフティがかかってるぜ？ とかはったりかました後にグーパンチしていたが。

「教えません」

エミリはにこりともせず answers。

「丸腰ですし、観念してください」

「うーん、あのさ」

首筋に回した腕を見る。

「このまま俺が腕に力こめたら、あっさり首の骨って折れると思うんだ。だからごめん、彼が人質なのに変わりはない」

エミリの眉が吊り上がる。

「俺の、ことは、かまいませんっ」

人質がかすれた声をあげる。

エミリの眉がますます吊り上がる。

「俺に殴りかかってくるとことか、そういうこと言っちゃうとことか、この人新入り？」

「.....わかりますか」

「そんな気がした。嬢ちゃんよりは年上っぼいのになー」

「バカに、するなっ！」

「バカをバカにして何が悪いのさ」

呆れて笑う。

「命あっての物種だ。そういうこと言うなって。がんばれ世に憚れそれじゃあまた」

流れるように告げると、きゅっと首をしめた。頸動脈を圧迫。

かくっと、気を失う人質。彼自身が着ていた上着で両手を縛っておいた。なんとなく、おまけ的な気持ちで。それから持っていたナイフも頂いた。

「.....役に立ちませんね」

立ち上がった隆二に、エミリが呆れたように告げる。

「こんなのしか来ないなんて、嬢ちゃん人望ないの？」

「慢性的に人員不足なんです。あと、エミリです」

「そっか、がんばれ」

気を取り直したようにエミリが銃を構え直す。

「降参しましょう？」

「この状況でも降参を持ちかけられる嬢ちゃんが俺は結構好きだよ」

「エミリです」

「でも、俺をどうにかしたいならエクスカリバーぐらい持って来ないと」

実験体の抹消に使われていた武器の愛称をおどけて言ってみせると、

「許可が下りなかったんです」

真顔でそう言われた。

「って、許可申請したのかよ。マジでやる気だったのかよ.....。もうやだ、若者こええ。ゲーム脳ってやつだな」

思わず嘆く。エミリは大げさに嘆く隆二を観察するような目で見ていたが、小さく息を吐くと銃を構えた。狙いを定める。

その瞬間を見逃さず、隆二はエミリの懐へと飛び込む。

エミリが慌てて、狙いを定めなおす。

だが、遅い。

隆二の卓越された身体能力は、目で追うのが精一杯の速さでエミリの懐へとその体をもぐりこませた。

それでも、隆二がマオを抱えてエミリの喉元に先ほどのナイフを突きつけるのと、エミリが隆二の額に銃口を押しつけるのは同時だった。

「おとなしくG016を渡してくれませんか？」

「お嬢ちゃんこそ、今日はもう帰ってくれないか。それにしても不意打ちとは酷いなあ」

「このタイミングを狙っていたくせによく言いますね」

喉元のナイフを忌々しそうに見ながら、エミリは言葉を吐き出す。

「別に演技でもなんでもないぞ。俺は至って真剣かつ深刻に嘆いていたからな」

ナイフをさらに近づける。エミリは反射的に、少しだけ体を反らした。特にそれを気にとめたりせずに、隆二は続ける。

「さて、別に引き金を引いて俺の頭を打ち抜いてもらってもいいんだが。そうした場合お嬢ちゃんはマオを連れて帰れない。お嬢ちゃんが引き金を引く前に、俺は刺す。よくて相打ちだ」

「だから、降参しろ、と？」

「なんか不満？」

「父が言っていました。あなたは本気になれば研究所をつぶすほどの力を持っていると。でも先ほどから見ている限り、手を抜いていらっしゃいますよね？ その結果のけがではありませんか？」

「ずいぶんと俺はおっちゃんに買いかぶられていたみたいだな。そんなに凄くはない」

「でもあなたなら、このままわたしたちを殲滅するぐらい造作もないのでは？ 大体、貴方自身が先ほどおっしゃっていたではありませんか。『全部手に入れる力がある』と……」

「そりゃあ、まあ。嬢ちゃんを殺すなんて赤子の手をひねるようなもんだけど、」

そこで一度言葉を切って、言葉を探す。

色々物騒な言葉が思いついたが、あえてそれは却下し、なるべく穏便に聞こえそうな言葉を選ぶ。

「……ほら俺あっちこっち痛いし。それに、お嬢ちゃんをここで殺しちゃったら次はもっと手強い祓い屋が、」

「派遣執行官です」

「それがくることになるんだろ？ それだと面倒だからな。研究所と敵対すると身分証明書とか偽造してもらえなくなるし。そうすると割と困るんでな。部屋借りたり、アルバイトしたり、そういうのできなくなるし」

「それはわたしが弱いと？」

うめくようなエミリの言葉に、眉を片方あげる。

まさか、そう返されるとは思わなかった。

「普通の女の子としては驚くべき強さだと思うから気に悩む必要はきつとないぞ。いや、気にした方がいいのか？ そのままじゃ、彼氏も出来ないからな」

腕に抱えているマオに思い出したように視線をやる。堅く目を閉じたまま、動かない。少しばかり不安になる。

「なあ、こいつ、いつになったら起きるんだ？」

エミリは一瞬、何のことを言われたかわからずにまじまじと隆二の顔を見てしまった。見てしまってから彼の視線の先に気づく。

「G O 1 6ですか？」

「あ〜、言おうと思ってたんだが、それじゃあ味気ないからマオ、な。せつかく俺が無い知恵しぼって考えたんだし。ほら、嬢ちゃんも祓い屋っていうと怒るだろ？ それと同じだ」

エミリは眉をひそめて何かを思案した後、不本意そうに言い直した。

「マオ……さん、でしたら、明日のお昼ぐらいには」

「そうか」

「でも、聞いても無駄ですよ。わたしが連れて帰りますから」

隆二は肩をすくめた。

「さっきの新人君じゃないが、研究所の人間は命とかいうやつを粗末に扱いすぎる。俺がとやかく言えた立場じゃないんだがな。人っていうのは簡単に物に成り下がる。まあ、生きることを放棄して、ただ『存在する』ことにした人間もいるがな。生きる屍っていうか」

言ってから、ある意味それは自分にもあてはまるのではないかと思った。生きることをせずに、ただ存在することにした不死者。

生きているから死ぬのであって、死なないものは生きていない。そんな理屈を並べ立てたって、結局他人には生きる屍にしか見えないのかも知れない。

そこまで考えてから首を左右に振った。いずれにしても、今はまだ問題視する場面ではない。そういうことは、無事に助かってから考えるべきだ。

「だから、簡単に殲滅できるとか言うなよ」

エミリは酷く不可解そうな顔をした。

それが自分の言葉によるものではなく、表情による物だと気づくのに少し時間がかかった。意識してみれば、自分は酷く弱々しい笑みを浮かべていた。

それにしても、笑みを浮かべるたびにそんな顔をされてしまっては、まるでいつも自分が仏頂面のようなではないか。それは事実だが。

「もっとも、これはある人の受け売りなんだがな」

そう言って肩をすくめる。

誰のか、とはエミリは聞いてこなかった。聞いても無駄だと思ったのかも知れない。なんせ自分の知り合いはほとんどもう死んでいるから。

そう結論付けて次の台詞に行こうとした隆二は、エミリが隆二をじっと見つめていることに気づいた。先ほどまでの鋭い視線とは違う、どこか哀れむような目で隆二を見ていた。

それからエミリは何度か言葉を選ぶように口を動かし、小さな声で言った。

「……大切な人だったのですね」

「は？」

何故エミリがそういったことを聞いてくるのか、わからずに隆二は間の抜けた顔をする。確かに、それを言った彼女は、とても大切な人だった。いや、大切な人だが。

エミリはわずかにうつむいていた顔を上げ、隆二を見つめる。

「とても懐かしそうで優しそうな顔をなさっているからです。自分の宝物を見るような……」

隆二はエミリを数秒見て、額に手を当てて嘆息した。

「どうして嬢ちゃんは、面と向かってそういうことをいうかな。恥ずかしいじゃないか。そんな冷静に人の顔を分析しないでくれ」

そう言って、手を額から離す。

意識的に先ほどとは違う、真剣な顔をつくる。

エミリが身構えたのが分かった。

「だから、」

そう言って、隆二は笑みを浮かべた。今度は、酷く楽しそうな笑みを。

「だから、俺は殺されるわけにも殺すわけにもいかないんだ。大切な人との約束だからな」

そう言って、持っていたナイフを半回転させ、刃の部分を握り直し、柄の部分でエミリの喉をついた。

「っ」

瞬間、エミリが焦ったような顔をして、でもすぐに瞳を閉じた。

気を失い倒れそうになったエミリを、マオを抱えているのとは逆の手で受け止める。

「……やりすぎてない、よな？ 大丈夫だよな？」

動かないエミリの顔の前に掌をかざし、息をしているのを確かめる。

ナイフで切った掌をぼんやり眺める。満身創痕すぎて、これぐらいなんでもない。

マオをちゃんと抱え直し、その頭をなんとなく撫でようとして、血まみれの掌に気づきやめる。代わりにマオを抱えたまま、地面に倒れ込んだ。

このまま眠りたい。目が覚めたら全部どうにかなってないかな。

投げやりなことを考えていると、

「……もしかして、全部終わりましたか？」

穏やかな声かけられる。

視線を向けると、入り口に和服姿の男性が立っていた。

「おー、おっちゃん。呼び出して悪い」

マオを抱えているのと反対の手をあげると、男性はつつかと寄って来た。

「いえ、遅れてすみません。非番で自宅にいたもので」

「ああ、家、遠いんだっけ」

中年のその男性は温和そうな顔を、痛ましそうにひそめた。

「だいぶ、お怪我をされているようで」

「まあ、ぼちぼち？」

「すみません」

「気にしなくていいって」

ゆっくりと上体を起こす。

「悪い。色々あるんだけど、とりあえず今は家に戻りたい」

「はい。お送りします。その格好じゃ、外歩けませんしね」

言われて改めて自分の全身を見下ろす。真っ赤だった。

「職質物件だなこりゃ」

苦笑いする。それから倒れている黒服三名と赤服一名を指差す。

「これらの後片付けも」

「はい、引き受けます」

「本当、申し訳ない」

「いえ、こちらの不手際ですので」

右手を出されたので素直に掴まる。そうして立ち上がると、車のキーを渡された。

「すぐそこに止めてあります。とりあえず乗っていてください。こっちをどうにかしたらすぐにお送りします」

「頼む」

素直にそれを受けると、マオを抱えて倉庫から外にでる。

今は一体何時ぐらいなんだろう。もうよくわからない。

出てすぐに止めてあった黒塗りの車に乗り込む。

倒れ込むようにして後部座席に座ると、目を閉じた。

あとのことは、あとで考えよう。

今はとりあえず、マオと一緒に帰れることを喜ぼう。

眠ったままのマオの顔を見て、少しだけ笑った。

間幕劇 Has the cat got your tongue?

「約束を、して」

彼女は言った。

彼は腕を組み、彼女ではない方向を見ながら聞いていた。

彼女はそんな彼に構わず、続ける。

「人は簡単に『もの』になってしまう。だから貴方は、誰も殺さないと、自分も殺されないと約束をして」

彼女の言葉が耳に痛い。耳をふさぎたい衝動に、寧ろ耳を千切り取りたい衝動にかられる。その衝動を必死で押さえつけ、それでも彼女を見ることは出来なかった。

「決して生きた屍にならないで。貴方は生きていて。どんなにめちゃくちゃでもかっこわるくても構わないから、生きていて」

それはなんだか、一生の別れのようにも聞こえた。

それは彼女も覚悟をしているということなのだろうか。このまま二度と逢えないことを。

「それから、」

彼女は微笑んだ。

「私は此処で待っています。ずっとずっと。だから……」

彼女は彼の頬を両手で挟むと、無理矢理自分の方を向かせる。彼は体勢を崩し、片手を畳の上についた。

「だから、絶対に帰ってきなさい。いつになっても構わないから」

彼が何も言えないでいると、彼女は額を彼の額に押しつけた。

「……約束ぐらい、しなさいよ」

その声がかすれたようなことに気づく。彼女がそんな風に物を言うときは、泣くのを我慢しているときだと言うことを彼はよく知っていた。

いつもいつも、彼女にはそんな気持ちばかり抱かせている。

また泣かせてしまうのは忍びなくて、こちらも少し押し殺した声で返した。

「……ああ」

彼が小さく呟くと、彼女はそっと彼の額に唇でふれた。

「約束、だからね」

そのまま、自分よりも頭一つ分は高い彼の頭を抱える。彼は抵抗しない。軽く目を閉じる。

「……ああ」

「帰って、きなさいよ。待っているから」

「……ああ」

「本当に、わかっているの？」

「……わかっては、いる」

彼の言葉に含まれた意味合いに彼女が気づかなかったはずがない。

彼女は今までだって、彼の言葉の裏を簡単に読んでいたのだから。けれども、彼女は何もそれ

については触れなかった。

ただ、またかすれた声で言った。

「……ずっとずっと、待っているからね。ずっとずっと……。ねえ、――」

そうして、彼女だけには教えた彼の本当の名前を呼んだ。

その懐かしい響きに、彼は小さく唇を噛んだ。本当に今生の別れだと思ったから。

「待っているから……」

そして、彼女は歌った。頭の上から聞こえてくる、心地よい歌声に彼は目を閉じた。

「指切り拳万、嘔吐いたら針千本飲ます」

いつまで経ってもどこか子どもっぽいところのある彼女は、何か約束事をするときに必ず指切りをした。

最初に指切りを求められたときは、どうしたらいいかわからずにどこかくすぐたかったが、いつの間にかそれにもなれて、どこか心地よさを感じるまでになっていた。

けれども今は、断罪の言葉に聞こえる。

彼女は人を責めたりしないと知っているのに、そう聞こえる。

そして、決して指を絡めることなく彼女は歌い終りを告げた。

「指きった」

結局、彼女には二度と会えなかった。

否、逢おうとはしなかった。

自分は嘔吐きだ。針を千本飲まされても文句は言えない。

いや、もし今彼女が目の前に現れて、針を飲ませようとしたならば、拒みはしない。

むしろ、喜んでそれを飲み込もう。

彼女に会えるならば、針を飲み込むぐらいなんでもない。

決してかなわぬ夢であることは重々承知である。

第七幕 居座り続ける居候猫

さよなら、と自分は言った。

そうやっていった自分を、彼はひきとめてくれた。彼はそのとき、怒っていた。

あんな風に怒ってもらったのも初めてだなあ、と思う。

怒ってまで自分を引き留めてくれただなんて、考えてみればとても嬉しいことじゃないか。

そう、だからあたしは彼のところに帰らなくちゃ。

そうして、恩返しとお詫びをしなくちゃならないんだもの。恩返しとお詫びが出来るなんて、なんて素敵なことなんだろう。

彼はそうやって、あたしに居場所を提供してくれる。

……でも、どうして、どうして、急に体が動かなくなってしまったんだろう。この先で隆二が待っていてくれているのに、

はやく帰らなくちゃ……。

だから、ねえ、隆二。

行かないで。

待っていて。

お願いだから、あたしを置いていかないで！

マオがうっすらと目を開けたとき、最初にうつったのは、あの赤いソファーにもたれてとてもつまらなさそうな顔で本を読む隆二だった。

『……隆二？』

夢かも知れないと思って声をかける。

だって、どうして彼が自分の目の前にいるのだろうか？

隆二は目を開けたマオに気づくと、つまらなさそうな顔はそのままで言った。

「おはよう、マオ。いや、もうおはようじゃないか？」

時計に視線を移した隆二はどうでもよさそうな声でそういう。

視線をそれに移したら、午後一時をさしていた。

「大丈夫か？　なんかお嬢ちゃんに変な銃で撃たれていたが」

隆二はまたつまらなさそうな顔のまま、マオに尋ねる。

その顔がわずかに心配そうにゆがめられているなんていうのは、自分の都合のいい思いこみだろうか？

自分の置かれた状況を確認する。視界に入る赤。マオの大好きな、隆二の家の、赤いソファー

。

少し混乱している記憶を整理する。

そうだ、あのとき自分は撃たれて……、そして、どうして今、隆二の家にいるんだろう？　そ

の間に一体何があったのだろうか？

『……隆二、あれから何があったの？』

「死闘の末、全員を無事気絶させて、とりあえず知り合いに丸投げしてきた」
始終一貫してつまらなさそうにそこまで言うと、隆二は再び視線を本に移す。
ゆっくりと時間をかけてその言葉を理解し、呟いた。

『それじゃあ……、あたしは』

言ってしまうとそれはまるで消えてしまうかのように、マオはゆっくりと慎重に、問う。

「マオ？」

隆二が本を閉じて、マオを見る。

『あたしは、まだここに居ていいの？』

「ん？ ああ」

その台詞に多少面食らったように、隆二が頷く。

「だからなんで駄目だって思う」

隆二はそこまで言って、言葉を切った。

マオの顔が何故か泣きそうなくらい歪んでいたから。

どうしたのだろうか？

また自分は何か、まずいことをやってしまったのだろうか？

また何か、彼女を泣かせるようなことをやってしまったのだろうか？

そう思った次の瞬間には、隆二はマオに抱きつかれていた。

『ありがとう』

ほとんどすすり泣くかのような声でマオは言う。

『ありがとう。守ってくれて、助けてくれて、待っていてくれて』

小さな声で、何度も何度もマオは呟く。

「……別に」

そういうものの、自分はなんだか酷く優しそうな声をしていると思った。無意識のうちに、マオの頭を撫でていた。

『だけど、ありがとう。もう、迷ったりしないから。もう二度と、消えることを選択したりしないから。存在を維持していくためならば、どんなことでもする覚悟だから』

隆二の肩に顔をおしつけるようにしているからマオがどんな顔をしているのかわからない。少し顔を動かせば分かることではあるが、何故か隆二はそうする気が起きなかった。

『だから、ずっと、ずっとここに置いていて。あたしが、何か出来ることがみつかるまで。……できれば、見つかってからも。お願い……』

「ああ。むしろ、それは俺のほうからもお願いしたいな。きっと、人生が愉快そうだ」

少し笑いながらそう言うと、マオも顔をあげて小さく笑った。

それから、隆二の姿を見る。あちらこちらに傷痕があり、包帯の巻かれた体。

『……痛い？』

「いや。……すぐに治るさ」

安心させるように微笑む。自然とそう答えていた。

『……あの人、また、来るかな？』

「いや、それについてはまた別の」

ピンポン。

隆二の言葉を遮るようにチャイムがなる。

マオがおびえたように隆二を見る。慌てるマオを片手で制す。

「大丈夫。多分、解決編のはじまりだから」

そうして笑ってみせると、玄関に向かう。

ドアをあけ、そこに立っている人を見ると口元に笑みを浮かべた。ほらやっぱり。

「昨日はどうも」

「いいえ、こちらこそ」

昨日、倉庫に来た男性が笑っていた。

隆二は来客をダイニングに通す。

突然現れた和服を着た男性に事態が把握できず、しばらくマオはその人を見ていたが、男性が彼女の方を見て会釈したところ、慌てた。

『隆二、もしかして、その人！』

「あ～、大丈夫だから落ち着け」

意味もなく手足をばたばたさせるマオの手をひっぱって、自分の隣に座らせると、来客を目で示しながら言う。

「確かにこの人は研究所の人間だが、研究所の人間には珍しくとても話のわかってくれる人だから大丈夫だ。昨日も助けてもらったし。なあ、おっちゃん？」

そういうと正面に座った来客は苦笑した。

「相変わらず辛辣ですね。それから、そちらのお嬢さん、マオさんでしたか？ 今のお名前は。心配しないでください。わたしは別に争いに来たわけではありません。ただ、昨日の娘の不作法な行いのお詫びと、それからこちらの今後の方針を話しに来ただけなので」

ゆっくりと相手の言葉を理解し、

『ええっ！？』

マオは大声をあげて来客を指さした。

『え、娘って娘って、あの子の父親っ！？ 赤いのの！？』

「お前、結構失礼だぞ」

隆二が横目でマオを睨んでたしなめる。

『え、でも、だって、似てないっ！ 顔とか髪の色とかもあるけど、なんていうか性格が！ 空気が似てないっ！』

「ああ、それは俺も思う。どうしたら、おっちゃんの娘があんな破天荒な性格になるのか、不思議でしょうがない」

隆二とマオでよってたかってさういうと、エミリの父親、和広は困ったように笑った。

「そういわれましても……。恵美理はどちらかという母親似ですし、外見はわたしの父似なんです。無鉄砲な性格は、わたしの母譲りですしね」

さういってから、顔を引き締める。

「それよりも、昨日はうちの娘が本当に失礼なことを致しました」

「いって、いって」

隆二は手をひらひらと顔の前で振った。

「結局、俺らの勝ちなわけだし、そんなにたいした被害もなかったから」

マオが何かを言いたさうな目で見えてくるのを無視する。

「ですが、けがもされたようすし」

「別にすぐ治るって。っていうか、おっちゃんに謝られてもねえ。おっちゃんは責任感強すぎ」

昔からさうなのだが、隆二には和広に責任を押しつけると言うことが出来なかった。

『隆二は責任感がなさすぎだわ』

マオが横でぼそりと呟く。

「お前が言うな」

マオの頭をはたく。

文句を言ってくるマオを無視して、和広に向き直る。

「昨日は悪かった。急に呼びだして」

「いえいえ。寧ろよかったです。恵美理はどうにも暴走するところがありますし」

「祖母にそっくりの、なー」

『呼び出したの？』

「あーほら。コンビニの人に電話借りただろ？ あの時」

菊の家から電話をかけたのが和広だった。研究所の人間で唯一信頼出来る人間。寧ろ、神山隆二が唯一信頼出来る人間といっても過言ではない。

「本当はマオさんがいる先が神山さんのところだとわかった段階で、恵美理は研究所に一度連絡をいれるべきだったんです。それをあの子は、逃げられたことに腹をたてて一人で暴走して」

「途中で増えたしなー」

「増援に呼ばれた彼らは新人だったので、適当に言いくるめられたのでしょう。まったく、男親は駄目ですね。特にあの子は妻の忘れ形見ですし、ついついわたしも甘やかしてしまっ……」

そこでマオが説明を求めるように隆二を見た。

おそらく、彼女が考えていることは当たっているだろう。隆二は一つ頷いて見せた。

和広の妻、つまりはエミリの母親は、エミリが小さい頃に他界したと聞いた。

もし生きていたなら、また話は違ったかもしれないのに、と時々思う。

「いずれにしてもけが一つ無く、恵美理を諫めてくださってありがとうございました」

頭を下げる。

「あんまり人にけがをさせるなって、言われているんでな」

なんとなく居心地が悪くて、ぶっきらぼうにそう答えた。

「……そうですか」

和広は一瞬何か言いたげに口を開いたが、すぐに当たり障りのない言葉を言った。

ふと、この人はどこまで知っているのだろうか？ と思った。直接は知らなくても祖母から、あの死神から、過去の話聞いたことでもあるのだろうか。

「そういえば、嬢ちゃんが増援で呼んだのがおっちゃんじゃなかったのはちょっと意外だったな」

そうしたらもっと早く話が解決しただろうに。

「今はこうやって事後処理をするのが仕事なんです。もう、走り回れるような体力は残っていませんし」

台詞の後半で和広は苦笑した。

その笑い方と台詞に、和広が老いた事を実感し、隆二はまた置いていかれたような気分になった。誰かが年をとったことに気づくといつもなる、あの気分。

それを悟られないように勤めて明るい声で言う。

「へえ、それはおっちゃんにぴったりだな。まさに天職？」

「……そうですね。わたしがこういうことを言うのも問題だとは思いますが、わたしたちの研究所には血の気の多い人が多すぎます。わたしはあまり争いごとは好きではありません。話し合いで解決できるのがやはり一番だと思います。そういう意味ではこういう仕事はぴったりですね」

「あの研究所にもおっちゃんみたいな人が増えてくれたらおれは非常にやりやすいんだが」
小さくため息。

「それで、事後処理は無事に終わった？」

隆二の言葉を聞き、マオも心持ち体をこわばらせて和広の顔を見つめる。

「ええ、そうですね。どちらかというところらが本題です」

和広はそういうと、居住まいを正し二人を見る。

「昨日のことを一通り報告しました。まあ、多少、神山さんに有利になるように情報を操作したことは否認ませんが」

「いやいや、ありがたい」

「結果、今後のこちらの方針と致しましては、神山さんというかつての……こういう言い方をしてしまうことをお許しく下さい。かつての実験体と現在研究している実験体のマオさんとが出会うと言うことは極めて稀であります。また、マオさんは……、こういう言い方をしてしまうことは非常に失礼なのですが、こちらから見ればかなり異質な存在です」

『異質？』

マオは不愉快そうな顔をする。

「らしいぞ」

その言葉に隆二が答える。

「お前ほど自我が確立していて、また感情が豊かなのは、嬢ちゃんに言わせれば失敗作らしい」

『……失敗作、かー』

自嘲気味にマオは言う。

「あの子はそんなことを言いましたか……」

和広は眉をひそめる。

「すみません。マオさん、そんなに気にしないでください。わたしたちに貴女を失敗作だという資格はありません。……そもそも、本当は神山さんにもマオさんにも謝らなければならないのですから」

和広は頭を下げる。

しばらく沈黙を流れたが、マオがそれを破った。

『でも、あたしは作ってもらえて嬉しいわ。それから、こういう事をいうと自分勝手に聞こえるかも知れないけれども、隆二が不死者でよかった。そうじゃなかったら、例えあたしが作られていてもここにこうしていられなかったんだもの。……そうよ、あたしがここに今いるのは凄い偶然の連続だと思わない！？』

急に思いついたのか、マオが大きな声で嬉しそうに仮定の話をはじめめる。

一つ事例を挙げるたびに、一つ指をたてながら。

『もし、あたしが作られなかったら、根本的にあたしは存在しなかった。もし、あたしに感情が無かったら逃げ出さなかった。もし、隆二が居なかったら、もし、隆二に幽霊が見えなかったら、もし、隆二に会わなかったら、あたしはとっくの昔に捕まって消されていた。もし、隆二がただの人間だったら、あたしを助けてなんてくれなかった。他にもきつといろんなことがあって、あたしは今ここにいるのよ！ ねえ、これってすごい偶然の重なりだと思わないっ！』

自分のその発見が嬉しいのか、頬に手をあてて、とても楽しそうにそういう。

和広は少し驚いたように目を見張って、隆二はあまりに“マオらしい”態度に微笑んだ。

「そうだな。確かに、マオの言う通りだ。もし、マオの存在が生み出されることがなければ、俺は未だに独りでだらだらと存在しつづけていただろうな。それを悪いとは言わないが、だが、今の方が楽しいことに違いはない」

「ですが」

何か言いかけた和広を遮り、

「ま、だからな、おっちゃんがそんなに気にすることはない。それに、俺が咎めたいのは俺らをつくったじいさん達であっておっちゃんではない。そして、じいさん達はもう逝っちゃったんだろ？」

軽く肩をすくめる。そして、まるで聞き分けの悪い子どもに言い聞かせるように続けた。

「つまりおっちゃんが気に病む必要はない。違うか？ もっと言うならば、気に病む必要性の無い人間に謝られることほど、不愉快なことは無い」

沈黙。

「……そうですか」

和広はゆっくりと顔をあげて、二人を見ると微笑んだ。

「お二人にそう言っていただけると、非常に気が楽です」

小さく息を吐く。

「それで、先ほどの続きですが、そういうお二人がこうして一緒にいると言うことは、今後……こちらとしても何か役に立つことがあるかもしれません。ですから、わたしたちはこれからはマオさんのことを追うことは致しません」

マオが目を見開いて和広を見る。隆二は表情を全く変えず、腕を組んだ。

「ですから、……安心してください」

言い終わると同時に、マオは顔をぎりぎりまで和広に突きつける。

和広はわずかに身を引き、隆二がそれを咎めた。

「おまえ、それ失礼だって」

けれどもマオは、そんな言葉は耳に入らないかのように、和広の顔をみて言った。

『それ、本当？ 本当に、本当に、あたしはここにいていいの？』

「え、ええ……。もしかしたら、何かご協力をお願いすることがあるかもしれません。そのときに、協力さえしていただけたならば……」

たじろぎながら和広が答えると、マオは顔中を笑みにして和広に抱きついた。触れていないが。

『ありがとうっ！ 本当に本当にありがとう！ 貴方、大好きだわっ！』

「え、えっと……」

救いを求めるように自分を見る和広と、それから自分の中に生まれたいらだちに背を押されて、隆二はマオの後ろ襟首を捕まえて自分の隣に再び座らせた。

「少し落ち着け」

けれどもマオはおちついたりせず、今度は隆二に抱きつく。

『だって、嬉しいじゃない！』

そのまま、猫のように体をすり寄せてくるマオに閉口する。

それをみて、和広は笑った。

「……なんだよ、おっちゃん。助けてやったのに」

笑われていることに気づき、情けないぐらい恨みがましい気持ちで言う。

「すみません」

まだ笑いながら和広は首を横に振る。そして、ただ……と続ける。

「神山さんは変わったと思ひまして」

「はあ？」

「恵美理に聞いてはいたのですが、神山さんがそうやって楽しそうに笑っているところをみるのは、もしかしたら初めてかもしれませんから」

慌てて口元に手をやると、確かに口は笑みの形になっていた。

なんだか悔しくて、無表情を装う。

けれどもそれは、自分にひつついたまま大はしゃぎするマオによって、簡単に崩された。

小さく舌打ちをして、苦笑と微笑が入り交じった笑みを浮かべる。

それを見ながら和広は続けた。

「やはり、マオさんと神山さんが一緒にいることはいいことだと思います」

「なんでだよ」

これのどこが？ 顔にそう浮かべて、隆二はマオを指さす。

「そうですね……、手負いの獣が治療を施してくれる者にあつたみたいですよ」

それだけいうと、口をつぐむ。

それは一体どちらがどちらなのだろうか？ それとも、二人とも両方にあてはまるということなのだろうか？

説明を求めて和広を見ても、和広はゆっくりと首を左右に振るだけだった。

自分で考えろと言うことだろうか？ それとも、言った和広自身もわかっていないのだろうか？

いずれにしても、やけに饒舌な和広に少しばかり閉口して肩をすくめる。

和広はそれに気づき、笑った。

「しゃべりすぎましたね。それから、お邪魔のようですし、今日はもう失礼いたします」

そう言って立ち上がる。

「え、ああ。別に邪魔じゃないが……」

その言葉の真意を測りかねて、隆二はしどろもどろに言った。それからテーブルの上がやけに寂しいという事実気づく。

「そういえば、お茶も出さないで悪かった」

「いいえ。わたしたちがかけた迷惑を思えば、お茶をだして頂くなんて厚かましいです」

和広はそういうと、やけにゆったりとした動作で出ていった。穏やかな、まるで自分の子どもを見るような笑みを残して。

和広を見送り、まだひっついたままのマオに視線を落とす。

「いい加減離れろ」

無理矢理引きはがすと、マオは不機嫌そうな顔をしたが、やがて微笑んだ。

『ねえ、隆二。お願いがあるの』

上目遣いで頬を染めて、伺うように、言うてくる。

「お願い？」

客人が帰ってから、というのも変な話だが、コーヒーが欲しくなり立ち上がりかける。

マオはそんな隆二の手を掴み、引き留めた。

『ちゃんと聞いて』

その手を振り払うだけの理由も思いつかず、隆二は黙って再び腰を下ろした。

それを見届けてからマオは続ける。

『あのね、あたし、まだ、存在して少ししか経っていないじゃない？』

「ああ」

『だからね、あたし、まだまだ知らないことたくさんあると思うの……』

「だろうなー、マオはバカだから」

『む……、否定出来ない』

揶揄するように言うと、マオは少しだけ不満そうに呟いた。

『だから、否定出来ないから。あたしはまだ、何も知らないから。だからね』

小首を傾げて、隆二の顔を見つめる。

『あたしに、世の中の事を教えて欲しいの。この偏った知識を、足りない部分を補って欲しいの』

隆二の顔を見つめてまっすぐにそう言い、

『……頼んでも、いいかしら？』

最後は少し臆病に、付け加える。

そういうところが、本当に猫のようで愛らしい。

「残念だが、教えられるほど生きてはいない」

隆二はそっけなくかえす。

マオが視線を落とした。あからさまに。

『そう、だよ、ね、図々しいよね、ごめ』

「だがな、」

マオの言葉を遮り、笑った。

「一緒に学んでやってもいい」

『え？』

ゆっくりと、微笑んでみせる。

「一緒に学んで行こう、色々。知らないこととか、わからないこととか。それなら、付き合うよ。ひとでなし同士、仲良くやって行こう」

マオはしばらくぽかんと間抜けに口をあけて隆二を見ていた。

それから隆二の言葉を理解したのか、じわじわと微笑んでいく。笑顔が顔を、徐々に浸食してく。

『そうね！』

マオが顔上げ嬉しそうに笑った。

そう思ったら、隆二は再び抱きつかれた。

『そうね、そうしましょう』

喉を鳴らしそうな勢いでそう言うと、神山家の居候猫は微笑んだ。

『そうね、あたしたちひとでなしね！ 人間じゃないもの同士、仲良くやっていこうね！ 隆二性格悪いからそういう意味でもひとでなしだよね！』

さりげなく罵倒された。よし、とりあえず礼儀というものを教えるところから始めよう。

敢えてこの場ではつつこまず、心の中でだけそう決意する。

『約束よ、絶対に約束よ』

そして、また楽しそうに笑う。

『ゆびきりげんまんよ！ うそついたらはりせんぼんのますんだからね！』

頬と頬をすりよせながら、マオが笑う。

「……ああ、約束な」

隆二も小さく、笑んだ。

風がカーテンをゆらした。



居

候

猫の彼女

ひとでなしの二人組

小高まなみ

第一幕 居候猫と新たなる居候

その日、マオはいつものように夕方の散歩を楽しんでいた。

人並みに紛れるようにしてふよふよと浮きながら、道行く人を眺める。楽しそうな人、悲しそうな人、急ぎ足の人、のんびりと歩いている人。皆それぞれ違って、見ていて飽きない。直接はかかわれないものの、そうやって周りの人々を眺めることが、マオは好きだった。

でも、そろそろ戻らなければ。好きな番組が始まってしまう。公園の時計を見てそう思うと、隆二の家に戻ろうとし、

「ちょっと、そこの幽霊のお嬢ちゃん」

丁度その時、右手からそんな声が飛んで来た。

穏当ではない声のかけられ方に勢いよく振り返ると、一人の青年がそこにいて、

「そうそう、お嬢ちゃん」

マオを指差しながら、にっこりと微笑むと続けた。

「神山隆二っていう名前の不死者、知らない？」

『いっ』

マオはその言葉を理解すると、咄嗟に叫んでいた。

『いやあああつ！！ 不審者ああああ！！』

神山隆二は、いつものようにコーヒーを飲みながら本を読んでいた。

元々彼にとって本を読むのは、暇つぶし程度の意味合いしか持たなかった。しかし、ここ最近、居候猫が居着いてからはどたばたして潰す暇が存在しない。そうなると、時間を作って意地でも本を読みたくなるから不思議である。居候猫の散歩の時間に、一人静かに本を読むのが、今の彼の密かな楽しみであった。

『りゅううじいいいい』

遠くから、居候猫の鳴き声が聞こえる。

時計に視線を動かすと、午後五時半になろうとしていた。居候猫は午後五時半から始まる、特撮ヒロイン物、疑心暗鬼ミチコの再放送をとっても楽しみにしている。

毎回毎回、よく丁度の時間に戻ってくるよなあ。そんなことを思いながら、片手を伸ばしリモコンを手取る。スイッチをいれる。再び本に視線を落とす。もうちょっとで読み終わりそうだから、邪魔しないで欲しいなあ。

『りゅーじいー！！ たあいへんー！！』

窓からぴよこっと居候猫の顔が生える。

「テレビならつけたぞ」

本に視線をやったままそう告げると、

『そんなこと！ どうでもいいよお！！』

マオが隆二の目の前で両手をばたばたさせながら叫んだ。

「は？」

思わず本から顔をあげる。

どうでもいい？ マオが疑心暗鬼ミチコのことをどうでもいいだと？ 彼女の中でひょっとしたら隆二よりも格上の、疑心暗鬼ミチコのことをどうでもいいだと？

「……どうした？」

知らず、低い声になる。一体何があったというのだ。

『大変なの！ あのね、あのね！ さっきね、そこでね！ 知らない人に声をかけられたのっ！！』

それで？ と流しそうになって、

「は？」

慌ててマオを見る。彼女の向こう側に、テレビが透けて見える。今日も今日とて、安定して、どっからどう見ても、完璧な幽霊だ。

「声をかけてきた？」

完璧な幽霊に声をかけてくるなんて、普通の人間じゃない。幽霊が見える人がいても、スルーするのが通常だし。

『うん！ でね、その人に言われたの！ 神山隆二っていう、不死者を知らないかって！』

「神山隆二っていう、不死者を知らないか？」

『うん！』

マオが頷く。

「神山隆二っていう不死者、か」

そこまで知っているっていうことは……、何だ？

『どうしよう！ 一応ね、まいてきたけどね！』

マオはあせったように両手を無意味に動かす。

ぴんぽーん、チャイムの音が部屋に響く。

『うひゃっ』

驚いたようにマオが声を上げ、隆二の背中に隠れるようにする。壁にめり込んでいるが。

「隆二、いるんだろー」

ドアをがんがん叩きながら、来訪者は声を張り上げる。

「お嬢ちゃんのあと、つけさせてもらったから、ここだろー」

「まけてないじゃないか」

思わず背後のマオにつっこむ。

「俺だよー、俺俺」

『やだっ、オレオレ詐欺だわっ』

いつのまにオレオレ詐欺は対面方式になったのか。

「エミリちゃんにさー、住所訊いたのに教えてくんねーの、個人情報とか言ってー」

外の声は返事がないことを気にした様子もなく、続ける。

『……エミリ』

隆二の背後でマオが小さく呟いた。ぎゅっと隆二の腕を握る。それに気づくと、隆二は振り返って、一度マオの頭を撫でた。

先日の一件後、改めてエミリが謝罪に来たものの、マオはエミリのことは苦手のような感じだ。まあ、仕方ないよな、殺されかけたわけだし。幽霊だけど。

などと思っている間にも、

「りゅーじーあーけーろー」

ドアをガンガンたたきながら、声がある。

「……すげー、無視してえ」

「開けないとないことないことご近所に吹聴すんぞー」

聞いていたようなタイミングで外の声が言う。というか、

「聞こえてるんだろなあ」

小さくため息をつく立ち上がる。

『隆二い、大丈夫なの……？』

怯えたような顔をするマオに笑いかける。

「知り合いだから」

言って仕方なしにドアをあけた。

黒髪の男が、楽しそうな顔をして立っていた。

「お前さ、もうちょっと普通に来いよ。チャイム鳴らしたなら出るまで待てよ」

「待ったってどうせ隆二出る気なかつただろう」

「当たり前だろうが」

「じゃあ、こうするしかないじゃないか」

男は悪びれずに笑う。

「うちの居候猫が怖がるじゃないか」

そうして一度言葉を切り、

「京介」

相手の名前を呼んだ。

男は神野京介と名乗った。

「まあ、あれだ、俺の同族だ」

『りゅーじの』

マオは京介を上から下まで眺めて、

『そっか、隆二の』

安心したように呟いた。

「うん、隆二の仲間一。さっきは怖がらせたみたいでごめんねー、マオちゃん」

京介が笑いながらいうから、マオは首を横にふった。

「っていうかさ」

隆二は京介を見て、

「くつろぎ過ぎじゃね？」

「まあまあ、気にしないで」

「するって」

ダイニングテーブルに座る隆二の視界にうつるのは、赤いソファにだらりと腰掛けた京介だった。お前の家かよ。

隆二の向かいに座ったマオは、ちらちらとテレビに視線を送っている。事態が落ち着いたらテレビが気になるようだ。

「……マオ、気になるならあっちでゆっくり座って見ろ」

テレビの方を指差すと、

『でも』

困ったように隆二とテレビと京介に視線を動かす。

「いいから。京介、お前こっち座れ」

「はい。マオちゃん、どうぞ」

京介は素直に立ち上がると、隆二の向かい側に座る。それを確認すると、マオはソファに移動した。

「で？」

頬杖をついて隆二は問う。

「何に来たわけ、お前」

仲間同士で今までまったく連絡をとらなかったわけじゃない。だが、なんとなく連絡を取り合わないようにしよう、という不文律が出来ていたはずだ。それがこうやって会いにくるなんて。

「色々あってさ！　しばらく置いてよ」

「帰れよ」

即答した。

「なんで俺がお前を家に置かなきゃいけないんだ」

「色々あったんだって」

「じゃあせめてその色々を話せ。いや、やっぱり話さなくていい。かかわりたくない」

「懸命だね」

京介が笑う。

「住む場所がないなら嬢ちゃんに声かければどうにかしてくれるだろ」

「エミリちゃんに借りを作りたくないのは、隆二だって一緒だろ？」

「まあ、それはそうだけどな」

代わりにどんな面倒なことを頼まれるか。

「家賃なら払うよ。なんなら全額。光熱費も払ってもいい。ついでに、俺持ちで食事を作ってもいい」

楽しそうに、そして少し嫌味っぽく京介は笑うと、

「寂しいんでしょ、懐」

言葉につまった。

確かに、マオに正体を隠すために食べる必要もない食事をとっていたことが予想外の出費とな
って、貯金額が目減りしている。京介の提案は、とても魅力的だった。

「俺、普通にバイトしてたから金あるよ？」

駄目押しの一言。

「.....わかった」

しゅしゅ頷くと、

「金の力に惑わされましたねっ！」

テレビに言われた。空気読み過ぎだろ。

「あ、富子」

テレビに視線を移した京介が呟く。

とみこ？

「.....ミチコじゃないのか？」

尋ねると、

『違うよー、ミチコはこの前終わったよー！』

テレビの前で拳を握ったままテレビを見ていたマオが、振り向かずに答える。

「美少女四字熟語シリーズっていうシリーズ物なんだよ」

「四字熟語.....」

「一作目が疑心暗鬼ミチコ。これは二作目の七転八倒富子」

「七転八倒.....」

ヒーローとしてはどうかと思うネーミングだ。

見れば、確かに画面上で戦う少女は肘宛てやヘルメットなどをしている。あ、転んだ。

『富子はねー、強いんだけどよく転んじゃうのー』

「毎回十五回は転ぶんだよ」

「転び過ぎだろ」

毎回七転八倒か。

『でも、強いんだよー』

それが一番重要だ、とでも言うようにマオが念押しする。強ければ転ぶのも許されるのか、ヒ
ーローも。

「ちなみにこれ、富子役の子が撮影中に骨折しちゃって、途中で主役が交替するんだ。当時の雑
誌には、七転八倒富子、本当に転倒！ って出ててさ」

「なんでお前、詳しいんだよ」

「ちょっと調べたことがあって」

「なんでそんなもん調べるんだよ」

「ミチコのお面をお祭りで見かけたんだよ。これ、なんのキャラなのかなーって思って」

「お祭り、ねえ」

そんなものにどうして京介が行ったのかの方が気になる。

『あなた！ 詳しいのねっ！』

マオが目を輝かせながらテーブルに飛びついて来た。

テレビはエンディング曲を流していた。なるほど、終わったからこっちに来たのか。

「そのうち富子の代わりに、七転びヤオ君子がやるはずだよ」

京介は笑いながらマオに告げる。

「七転び八起き……」

ようやく起き上がるようになったか。

「あとあれは特撮物だけど、アニメ版もあるんだ」

『へー』

「そっちには四苦八苦久美子っていうのもあるよ」

「四苦八苦……」

ようやく起き上がったのに。

『すごいね！ 隆二！！ 京介さん、詳しいのねっ！』

はしゃいだようにマオが両手を叩く。

「あー、まあなー」

詳しいには同意するが、それがすごいのかどうかはわからない。

京介はにこにここと笑っている。

『本当、すごいわ』

マオが楽しそうで、なんとなくそれが癪に障る。さっきまであんなに怯えていたくせに。そんなことを思ってしまう。怯えているよりは、楽しそうにしてくれている方がいいのだが。

「マオ、おまえ、ちょっとは落ち着け」

言いながら自分の隣を指差す。

『はい』

マオは素直に隣に座った。それに少し安堵する。

「事後承諾で悪いが、しばらくこいつも一緒に住むことになった」

「よろしくねマオちゃん」

言われてマオは少し困ったような顔をしたが、

『うん、わかった』

小さい声で頷いた。

『家主が言うなら仕方ないもんね』

「……いつの間に家主とか覚えたんだ？」

元々妙なことは知っていたが、なんだか感慨深いものがある。小さい子どもの成長を見守る親のような気分になった。小さい子どもを持つ親になったことなんてないけど。

『テレビでやってたよ。夕方のニュースのね、特集。激闘！ 家賃の取立合戦？ とかで。あれね、面白いの。万引きGメンと夜回りおばちゃんのシリーズが好き！ あ、あと警察に密着するやつ！』

「……そうか」

ただ、知識の仕入れどころが偏っているので、今ひとつ安心できないが。

二人のやりとりを楽しそうに見ていた京介は、話が終わったことを見届けると、

「ごめんね、よろしくね」

微笑みながら右手を差し出す。

マオはしばらく躊躇った後、その手を握った。

握れた。

『……触れるんだ』

握手した手を離してから、マオが小さく呟く。

「あー、同族だからな」

「同族だしね」

『……同族。不死者ってことだよな？』

「ああ」

『……研究所の？』

こちらの顔色を伺うようにして問うマオに、小さく頷いてみせる。

『京介さんは、隆二とは仲いいの？』

「よくはないな」

「いいよ」

二人で顔を見合わせる。

「いつ、俺とお前の仲がよくなったんだよ」

「酷いな隆二。俺はお前のこと、他の二人よりは仲いいと思ってるぞ」

「……まあ確かに、小言の五月蠅いコーヒー狂いと味覚音痴の甘党と比べりゃあ京介とは仲がいい部類だけだな」

「年も同じだしな。颯太となんかは五歳も違うし」

「こんだけ生きてりゃ誤差の範囲だろ」

ぽんぽんと隆二と京介二人が会話するのを、

『むー、ちょっとっ』

膨れっ面したマオが遮った。

『わかんないっ、何の話してるのかぜーんぜんわかんないっ』

こちらを睨んでくる。

「そうぞ隆二。ちゃんとマオちゃんにもわかるように話をしないと。仲間はずれにしたら可哀想じゃないか」

『そうよそうよ！』

「俺一人のせいだよ……」

一つ溜息。

「だって俺、お前がどこまでマオちゃんに話したか知らないし」

「あー。ま、そうだろうな」

少し躊躇った後、

「ほら、成功した実験体が俺をいれて四人だっていうのは、話したよな？」

隆二の言葉にマオは頷く。

『聞いた』

「その一人がこれなわけ」

『京介さんね？』

「で、残った二人のうち一人が、俺等の中で最年長で、小言が五月蠅くて、コーヒーにこだわりがあり過ぎてひくレベルのやつ。神崎颯太」

『かんざきそーた』

「颯太はね、インスタントコーヒー飲んでるやつを見つけると、片っ端から説教かますから、気をつけた方がいいよ」

京介が付け足す。

「あれ、なんなんだろうな。こだわりが強過ぎて本当ひくんだが」

インスタントしか飲まない隆二としては、二度と会いたくない人物の一人だ。殺されかねない

。

『隆二はこだわり無さ過ぎだと思うけどな』

マオが呟く。

「……そうか？」

『うん。無趣味っていうか』

「誰かさんのせいで退屈してないから趣味とかいららないんだ」

『ああ、あたしのおかげで毎日楽しいってことね』

頬に手を当ててマオが嬉しそうに笑う。よくまあ、瞬時に前向きに解釈出来るよなあ、この無駄ポジティブめ。そうは思うものの、マオが言っていることもあながち間違いじゃないので否定もできない。

「俺の趣味の話はどうでもよくて。最後の一人。俺等の中で最年少。味覚音痴の甘党、神坂英輔」

『かんざかえーすけ？』

「そう」

『甘党って？』

「甘いものがそれはそれは好きなんだ。あいつ」

隆二は少し眉間に皺を寄せる。

「俺はあいつが一番怖い。甘いもののためならあいつは何でもするんだろうな、って思うから。俺か甘いものか選べって言われたら、あいつは間違いなく甘いものをとる」

「全世界を敵にまわしても、甘いものを食べ続けるんだろうな」

京介も嫌そうに呟いた。

マオはふーんっと少し悩んでから、

『変な人ばかりねー』

しみじみと呟いた。

「そういう意味では、京介は割とまともだよな」

「え、何その上から目線。隆二、自分のことまともだと思ってるわけ？」

「あの二人に比べたらまともだろ」

「まあねー」

『……よっぽど変人なんだねー』

くすり、とマオが笑った。

『ちょっと会ってみたいなー』

「それは勘弁してくれ」

マオがその二人と会うならば、必然的に隆二も会うことになるのだろう。それはちょっと嫌だった。

「最後にあったのいつか、ってレベルだしな」

『あんまり会わないの？』

「用もないし」

それに、会うとどうしても過去のことを思い出して憂鬱になる。何年経っても何十年経っても変わらない自分達は時間軸から取り残されていることを、改めて認識することになる。だからなんとなく、お互いに積極的にあうのは避けるようになっていた。たまに、研究所絡みの依頼で会うことはあっても。

「俺、会って来たよ、二人に。ここに来る前」

「は？」

さらりと告げられた京介の言葉が、理解出来ない。

「は？ 何、お前、わざわざ颯太と英輔にも会って来たわけ？」

「うん」

「なんでだよ」

そして何故最後をここにして、居着こうとしているのか。

「ちょっとみんなの顔が見たい気分だったんだ」

微笑む。そんな京介に、隆二は得体の知れないものを見つめる目を向ける。

「……大丈夫か、つかれてるのか？」

「どっちの」

「憑依の」

「憑かれてねーよ」

だって、お互いに会わないという暗黙の了解を破って、わざわざ会いに行くなんて、正気の沙汰とは思えない。

「色々と自分を振り返りたいことって、あるだろ？」

「いい年して自分探してことか」

「うん、そんな感じ」

そんな感じなのか。

「……まあ、なんでもいいんだけどな」

お互い過度にかかわりたくないし。

「相変わらずだったか、あの二人」

「相変わらず、コーヒーと甘いものを愛してたよ」

「なら、いいんだ」

お互いがお互いの場所で、それなりにやっていてくれるのならば。たった四人の仲間だから、それなりに彼らの平穏を祈っている。

「っと、マオ悪い」

また話から爪弾きにしてしまった。少しむくれたマオに謝る。

『いいよー』

むくれたものの、隆二の方から謝ったからか、すぐに笑った。

「じゃあ、マオちゃん問題」

「お前はお前で急に何を言い出す」

「神山隆二、神野京介、神坂英輔、神崎颯太。この四人に共通することって何だと思う？」

『同族なんでしょ？』

「あー、ごめん名前で」

『……名前？』

マオが眉根を寄せながら、四人の名前を呟く。

ああ、その話ね。隆二は理解すると、

「音じゃ、わかんないだろ」

マオ、バカだし。

「あー、そっか。紙とペン」

京介は納得したように頷くと、右手を無造作に出してくる。なんで借りる側が偉そうなんだよ

。仕方なしに立ち上がると、部屋の片隅で放置されていたバイト情報誌とボールペンを手渡す。京介はその余白に四人の名前を書き込んだ。

『あ！ わかった、神様！』

マオが嬉しそうに声をあげる。

「正解」

京介が微笑むと、

『わーい、あたったー』

嬉しそうに両手を叩いてから、隆二に抱きついた。

「この問題、間違える方が凄いだろ」

思わず小さく呟いたが、幸いマオの耳には届かなかったようだった。

『んー、でもなんでみんな神様なの？』

隆二の右腕に張り付いたまま、マオが尋ねる。

「希望が欲しかったんだよ」

それに端的に答えた。

あの時、研究所から逃げ出した時、四人で過去に決別することを決心した。だから、人間だっ

た時の名前を、改めて捨てた。識別番号なんて、勿論捨てた。

「神って名字につけとけば、なんとなく報われる気がしたんだよな、あの時」
京介が言いながら苦笑する。

「若かったよなあ、あの時」

「ああ」

神がつく名字をそれぞれ考えて、

「下の名前は、それぞれ交換したんだよな。音だけ採用して、漢字は変えて」
京介が続けた。

「……ああ」

隆二は一つ頷くと、ひっついたままのマオを伺うように見る。

『へー』

マオはぽかんと口を開けて、そう相槌を打った。ほんの少し、予想外の反応だった。

『なに？』

そんな隆二の視線に気づいたのか、マオが首を傾げる。

「……いや」

訊かれるかと思ったのだ。隆二の本当の名前は、きょうすけ、えいすけ、そうた、のどれなのか、と。

けれどもマオは、そんなことには興味がないようだった。

『でも、結局今は神山隆二なんでしょ？ そうやって、呼べばいいのよね？』
ただそれだけを念押しするように確認してくる。

「ああ」

『うん、わかった』

そしてぱっと花が咲くように笑う。

『りゅーじ』

楽しそうに隆二の名前を呼ぶ。それから、隆二の右腕から離れる。

『あのね、あたし、お腹すいちゃったの』

「あー、そっか」

この前の食事から日があいている。

「手伝う？」

意識のない人間から精気を奪うことを食事とする幽霊に問いかけると、

『ううん、色々お話あるだろうし、、あとは二人でごゆっくり』
微笑みながら断られた。

『それじゃあ、行ってきます』

マオは笑って、壁の向こうへ消えて行く。

もしかしたら、マオはマオなりに、気を使ったのかもしれない。

「良い子だねー、マオちゃん」

その姿を見送ると、京介が呟いた。

「……それで、本当はお前、何しに来たんだよ？」

マオがいなくなったことで、幾分語気を強めて尋ねる。

「言ったじゃん、色々あったんだって。それで皆に会おうと思って」

京介は笑ったまま答える。

「あ、でも」

そして笑ったまま続けた。

「隆二のところを一番最後にしたのも、泊めてくれていったのも、隆二が心配だったからだよ」

「なんで」

なんでお前に心配されなきゃいけないんだ。

「エミリちゃんに聞いてさ。また女の子と住んでるって。また、傷つくんじゃないかって隆二が」

気づいたら、にこにこ笑ったままの京介の胸ぐらを掴んでいた。

「乱暴だなー」

あっけらかんと京介が呟く。

「余計なお世話だ。京介には関係ないだろ」

それだけ告げると、手を離す。少しよろけたものの、京介は小さく微笑んでいた。

「関係あるんだなあ、これが」

「何がだ」

「茜ちゃんのこと、隆二がどう思って」

「いい加減にしろっ！」

声が大きくなる。

ここにマオがいなくてよかった。激昂した頭のどこかで、冷静にそんなことを思った。

「次に茜のこと口にしたら追い出す」

「はいはい」

おどけたように京介は両手を軽く上にあげた。

「悪かったって。とりあえずさ、なんか飯食おうよ」

「別に俺は食べる習慣ない」

まだむしゃくしゃしたまま、斬り捨てる。

「でも、食べることに嫌いじゃないだろ？　しばらく料理人のまねごとしてたから、なかなか上手いよ、俺」

そうして京介は冷蔵庫を開ける。

「うん、思ったとおりなんにもないね」

「……悪かったな」

「なんか適当に作るよ。あ、ちゃんと俺が出すからさ、材料費。食えないものとか、ないよな」

いつもの調子で問われた言葉に、小さく頷く。

「うん、じゃあ、そういうことで」

言うと、さっさと京介は部屋から出て行った。当たり前のように。

ドアが閉まる音を聞きながら、椅子に腰を下ろす。

「……なんだっていうんだよ」

呟いた言葉は、誰もいない部屋に溶けていった。

『わあ……』

テーブルの上に並べられた料理を見て、マオが感嘆の声をあげた。

『すごーい、テレビみたいっ』

テレビっ子のマオにとって、それは最大級の褒め言葉だ。

「あはは、ありがとう」

料理人である京介がそれを受けて笑った。

「海鮮とほうれん草のジェノベーゼパスタに、ただのサラダだよ」

『でもすごーい、あたし、コンビニのおにぎり以外見たの初めて！』

「……子どもにちゃんとした食事与えてない家庭みたいになるからやめろ」

なんだか恥ずかしいじゃないか。事実だけど。

「まあ、この家、皿すらろくにねーんだもん、びびるよな」

「使わないし」

っていうか、皿も買って来たのか。道理で見たことない皿だと思った。

「隆二、知ってるか。最近の百均って」

「ひゃっきん？」

「おおう、そこからから」

露骨にバカにしたような言い方で、

「百円均一。店内の商品が全部百円なんだよ。あ、別途消費税かかるし、たまに百円じゃないものもあるんだけどな。あれ、罨だよなー」

『知ってる！ テレビでみた！ 色々な便利グッズが売っててね、それを何に使うか当ててるので見た！』

だからどれだけテレビっ子なんだ。

「このお皿も百均だ」

「……へー」

見た感じ、普通に家にある他の皿に見える。

「最近は、すごーいんだなあー」

呟くと、

『……隆二、そういうの、年寄りっぽいからやめた方がいいよ』

マオに真顔で諭された。ほっといてくれ、実際年寄りなんだから。

この場の平均年齢をぐぐっと下げている出来たてほやほやの幽霊少女は、うっとりした目でテーブルを眺めてから、

『ああっ、あたし、今までで一番幽霊なことを悔しいと思ったっ』

両手で顔を覆って、盛大に嘆いた。もっと他に悔しがる場面なかったのだろうか、平和でいいけど。

これで不味かったら大笑いだ。

席に着くと、なんとなくぎこちない動作でフォークを手にする。だって、久しぶりだし、コンビニおにぎり以外って。

『あ、いただきます言わなきゃ駄目よっ？』

隣の椅子に腰掛けるようにして浮きながら、こっちをじっと見つめるマオにつっこまれた。

「……はい、いただきます」

素直に両手を合わせて呟く。

向かいで京介が楽しそうに笑ったのが、これまたむかつく。また尻に敷かれている、とか思っているんじゃないよな？

ちょっとパスタを巻くのに苦労した後、口へ。咀嚼。

わくわくしたようなマオの視線と、勝ち誇ったような京介の視線を感じる。ああ、癢に触る。

「……うまいよ」

しぶしぶ答えた。

今までの隆二の食生活には、あまりなじみのない味だが、嫌いじゃなかった。美味しいと思った。麺の固さも丁度いいし。なんだか悔しいけど。

京介がにやりと笑った。

「だから言ったろ？ 料理人してたって」

「あー、はいはい」

なんか本当むかつく。別に料理作る能力なんて自分に必要だとは思わないけれども、それでも

。

隣でマオが尊敬の二文字を瞳に浮かべて京介を見ている。

『いいなあー』

食事を続ける二人を見て、頬を膨らませる。

『あたし、仲間外れー、お腹空いたー』

「それは嘘だな」

さっき食べてきたばかりだろう。

『むー』

ますます不満そうな顔になった。

「マオちゃんって人の精気食べるんだっけー？」

「それも嬢ちゃんから聞いたのか？」

「うん」

なんでもぺらぺら喋るな、あいつ。それでよくうちの住所を喋らなかったもんだ。

『そうだよー』

言ってからマオは、ほんの少し身を引き、隆二の方に寄る。

「どうした？」

『……怒る？』

うかがうように京介を見ながら尋ねる。

ああ、それ、まだ気にしていたのか。でも多分、京介なら、

「なんでー？」

あっけらかんと京介は答えた。予想どおりの言葉に、隆二は少し笑う。

フォークを置き、マオの頭を撫でた。

「俺たちの誰も、マオのこと責めたりしないから」

「うんうん、英輔とか颯太とかに会うことがあっても、それ聞かなくていいよ。怒るわけないから」

『……本当？』

上目遣いでおそろおそろ聞いてくる彼女に笑う。

「同じ穴の貉、なんだろ？」

いつだったかマオが言っていたことを言ってみると、小さく顎を引いた。

『んっ』

だってみんな、化物なんだから。

それは言わずに飲み込む。わざわざ改めてこんな場所で、ここにいる者の心を抉る必要はない。？

「んー、じゃあさ、マオちゃん」

京介は軽薄そうな笑みを浮かべて、

「次、お腹空いたら俺の精気あげようか？」

「何を言っているんだお前は」

即、つつこんだ。

「なんだよー、やきもち？」

「バカか。不死者に精気なんつーもんが、あると思うのか」

半分死んでいて半分生きていて、そしてそのどちらでもないのに。

「なにかあったらどうする」

「なんだ、マオちゃんが心配なんだ」

そしてまた、にっこりと笑う。

「だからっ」

それに思わず声をあらげて、

『え、違うの？』

マオのちょっと不満そうな声に、勢いを失う。

「……いや、心配してないわけじゃなくて」

なんで京介がそんないちいち勝ち誇った顔をするのかが気になるのだ。笑った顔の裏に、また心配しているんだ？ という文字が見えるのは、穿ち過ぎだろうか。

『心配？』

未だに隆二に近づいたままのマオが、顔を覗き込むようにして尋ねてくる。

「……ああ」

仕方なしに頷く。心配しているかしてないかと言えはしているし。

マオはそれを聞いて、心底嬉しそうに笑った。

『うん、だから、せっかくだけども駄目だねー、京介さん』

やたらと嬉しそうに告げる。

「そっかー、残念だー」

対して残念でもなさそうに京介が答えた。

『それに、隆二が止めなくても、京介さんが人間でも、いらなあい』

「なんで？」

『だって、男の人ってまずいもの』

当たり前のように告げる。そしてそのままの口調で、

『男の人は、隆二以外いらなあい』

爆弾を放った。

「マオっ」

咄嗟に大きな声が出る。びくっとマオが体を強張らせて失態に気づく。

『え……、ごめんなさ……』

「あ、違う、怒ったわけじゃなくてだな」

その発言自体はもう聞いたことがあるし、マオにとって自分が特別な存在であることは理解している。鳥の雛における、刷り込みに似たような感覚。社会でふれあった初めての存在で、親のようなものだということは。

『でも……』

「怒ってない。嫌なわけじゃない。だからそういう、泣きそうな顔するな」

瞳を潤ませたマオの頭を撫でながら、左頬に突き刺さる視線にうんざりする。

マオの発言それ自体は、なんの問題もない。如何せん、言った場所が悪かった。

見なくてもわかる。にやにや笑った京介の顔が。

「へえー」

案の定、からかうような京介の声がする。

「仲いいんだねえー」

それを素直に受け取れない。

『……あたし、隆二のこと好きだもん、隆二は特別だもん』

さすがのマオも、京介の言い方になにか思うところがあったのか、挑むようにして告げる。

うん、気持ちは嬉しいが、あんまり今そういうこと言うな。そいつに言うな。

「隆二も満更でもなさそうだもんねー」

「まあ」

曖昧に頷く。何言っても泥沼になりそうな気がする。

『隆二の、まあ、は割と好きなんだからっ』

マオが威嚇するように吠えた。

「……まで、それはどういう」

『え、違うの』

威嚇の表情を改めて、きょとんとした顔をする。

『だって、前、梅のおにぎり好き？ テレビより本の方が好き？ って聞いた時、まあ嫌いじゃないって言ったじゃん』

「……そうだっけ？」

よく覚えているなあ。こっちは、そんな会話をしたことすら覚えてないのに。

『でも、隆二、梅のおにぎりも、本も、好きでしょう？』

頷く。

『だから隆二の、まあ、は割と好きの意味だよ』

そうしてマオは屈託なく笑った。

「……そっか」

なんとなくその笑みに気圧されて頷いた。そんなこと、考えたこともなかった。

「好きじゃなきゃ一緒に暮らさないもんな」

黙って見ていた京介が口を挟む。

『そうでしょう？』

今度はマオが勝ち誇ったような顔をする。

『羨ましいでしょ』

何がだ。

京介は一度目を細め、小さくなにかを呟いた。それから、

「さて、それはともかく、食事を再開しよう」

『本当、はやく食べないともったいないもんね！』

京介の言葉にマオも従う。そっと隆二から距離をとり、隣の席に座った。

京介が食事の続きを始めて、

「おまえも喰えよ」

黙って見ていた隆二を促す。隆二も再びフォークを手にとった。

マオと京介が二言三言楽しそうに会話する。

さっき、京介が呟いた言葉。

「繰り返すなよ」

そう、聞こえた。それは気のせいだったのかもしれない。被害妄想かもしれない。

それでも、

「余計なお世話だ」

「くそっ」

彼が呟いた言葉は茜色の空へと吸い込まれた。土手に寝転がった状態で見ると、それはとても眩しい。

車に轢かれそうになった子どもを見たら、咄嗟に体が動いた。結果、代わりに轢かれたなんて、お粗末な展開もいいところだ。子どもには悲鳴をあげて逃げられるし。

怖いのでちゃんと確認していないが、額は縫う必要がありそうぐらい切れている気がする。肋骨も折れた気がするし、足の骨も心配だ。痛覚はとっくの昔に切ったから痛むということはないし、二、三日すれば歩けるぐらいには傷も回復するだろう。しかし、その二、三日ずっとこの川原で寝転んでいるわけにはいかない。下手すると警察なり医者なりを呼ばれかねない。だからと言って、根無し草の自分に行く当てなどあるわけもなく、

「やってられん」

ため息をついた。もう諦めて寝てしまおうとかと目を閉じかけると、

「だから車！ 轢かれてね！ 男の人がっ」

どこからか、子どもの声が出た。

常人離れした彼の耳には、まだ遠くのその声ははっきりと聞こえる。

ぱたぱたと、走るいくつかの足音と共に。

「隆二兄ちゃんっ、みたいに！」

「で、俺の時みたいに悲鳴をあげて逃げたわけだ」

「だって！ 怒られると思ってっ」

「わかってるなら気をつけろよ。そそっかしいんだよ、太郎は。いつか本当に轢かれるぞ」

走っているから呼吸が乱れている子どもの声とは対照的に、一緒に聞こえてくる男の声は平坦なままだ。乱れない。

「でもっ、大丈夫なのかしらっ」

こちらにも乱れた女性の声。

「隆二は、ともかくっ、心配」

「俺はどっちかっていうと茜の方が心配だ」

咎めるような声色。

「いいから歩いてゆっくりついてこい。走るな」

「でもっ」

「太郎、土手だよな」

「そうだよっ、隆二兄ちゃんと一緒」

「だって。走るな、歩け。まだ距離がある。お前まで倒れたらどうする」

「……はい」

足音が一つ、歩きになる。

「先に行ってる。俺一人の方が速いし。太郎、茜が走らないようにちゃんと見とけ」

「うんっ」

そして、男のものと思われる足音が、はやくなった。

その走り方とか、名前とか、声とかに、彼はなんとなく不穏なものを感じる。知り合いな気が、ひしひしとする。

面倒だなーと思う反面、もし本人ならば厄介ごとは軽減するよなあ、なんて思っていると、

「……京介？」

名前を呼ばれた。

「さすが、おはやお越しで」

常人離れした脚力でやってきた、知り合いに片手をあげて挨拶する。

「なんだ、お前か」

呆れたように笑って、男は彼の隣に腰を下ろした。手当をする気とかは、まったくないらしい。彼としても、手当されても気持ち悪いだけだからいいのだが。

「俺が助けた子どもが、隆二を呼んだわけ？」

尋ねるといよりも、確認するように呟く。

「聞いてたのか？」

「ああ」

「そっか、お前は特に耳がいいもんな」

彼は、仲間の中でも特に聴力に優れていた。

「女の声もしたけど」

「……ああ」

男は言葉を濁す。

「うわあ、隆二が女連れだあー！」

それに思わずからかうような声をあげると、

「黙れ」

脇腹を叩かれた。

「……怪我人相手にひでえ」

「痛覚切ってるくせによく言う」

凶星だったので小さく笑うに止めた。

二人でなんとなく空を見上げる。

「知り合いの医者」

男が空を見上げたまま、呟く。

「腕もいいし、口も堅いから、京介のことも手当してくれるはずだ」

「それはよかった」

「だから」

そこで男は言葉を切り、彼に視線を向けると、

「治ったらさっさとここから出て行けよ」

低い声で告げた。

「……わかってる」

彼も同じような声で答えた。

こんなところで、自分達は出会うべきではなかった。できるだけ会わないように暮らしていたのに。後から来た方は、さっさと出て行くべきだ。お互いの暮らしを守るために。

「……京介」

「なんだ」

「お前のところにも来たか？」

「……死神さんのことか？」

男が頷く。

「……来たよ」

答えると、男はそうか、と小さく呟いた。

「人間として暮らすなんて、やっぱり無理なのかな」

そうして男は小さく小さく、消え入りそうな声で呟いた。

彼の常人離れした聴力は、その言葉もきっちり聞き取ってしまった。ああ、聞こえなければよかったのに。男と一緒に、自分の傷まで抉られた。

人間として暮らすなんて、諦める以外、何ができるというのだ。期待したい気持ちは、わかるけれども。

「隆二っ」

女の声がして、彼は視線をそちらに向けた。

「だから走るなって」

小走りで現れた女を、男がたしなめた。

「でもっ」

「これ、知り合い」

つまらなさそうに男が彼を指差す。

「え？」

「仲間」

「……ああ」

女は得心が行ったとでも言いたげに頷いたあと、少しだけ痛そうな顔をした。

「……だからなんでお前がそういう顔するかねえ」

その顔を見て、男が呆れたように呟く。

男女の間に流れる、その特有の空気に彼は溜息をついた。これは深い仲にある男女の空気だ。居たたまれない。

まったくどうして、なるほど、男が人間になりたがるわけだ。

「あの……」

女の影に隠れるようにして、少年が顔を出す。

「太郎、大丈夫。こいつも俺と同じようにしぶといから、生きてる」

男のその言葉に、少年はほっとしたような顔をした。

そのまま彼の脇まできて、

「ありがとうございました。ごめんなさい」

頭を下げた。

「……いいよ」

その素直な言葉から、逃げるように彼は視線をそらした。

「先生のところ連れてく。二人は先、帰っててくれ」

男が言う。

「でも」

「大丈夫」

心配そうな女に、優しげに笑いかける。

ああ、こいつ、まだそんな風に笑えるんだ。そう思った。

「本当？」

「ああ」

「……じゃあ、わかった」

女はまだ少し、心配そうな顔をしたものの、引き下がった。

「太郎、茜送ってやってくれ」

「うん！」

「車には気をつけろよ」

「わかってるよ！」

「茜、待ってなくていいから。遅くなったら先に寝てろよ」

「……うん」

そんな会話のあと、少年と女が去って行く。それを見てから、

「よいしょっと」

男は彼を荷物のように肩に担いだ。

「怪我人に対する扱いかたじゃないよな？」

「じゃあ自分で歩けよ」

「いますぐは無理」

「だろ？」

男が笑う。

「先生っていうのが、その口の堅い医者？」

「そう。茜の主治医」

「……さっきの女の子？」

「ああ」

「一緒に住んでるわけ？」

「……ああ」

「そっか」

彼の視線の先で、地面が揺れる。それを見ながら彼はしばらくためらったあと、

「あのさ、言われたくないと思うけど」

「じゃあ言うなよ」

恐らく何を言われるのかわかったのであろう男が、棘のある口調で言う。けれども彼は、それを無視した。

「入れ込むなよ。そんなこと言っても、もう遅いかもしれないけど。無理だよ、人間となんて」

男は答えない。心持ち、早足になる。

「俺らじゃ無理だ。だって」

化物なのだから。その言葉は、口にはしなかった。言わなくても伝わるだろう。

「彼女はどんどん歳をとって、死んでしまうのに、俺らはそれについていけないんだ。傷つくだけだよ、お互いに。隆二」

夢なんて見るな。無理なものは無理なんだ。

「俺らは人間としては暮らせない」

少しの沈黙のあと、

「.....わかってるよ」

押し殺したような返事が聞こえた。彼がそれに言葉を返す前に、

「ついた」

男が言い、その小さな診療所の扉を開けた。

「先生一、急患でもないけど、急患」

「なんだそりゃ」

男の言葉に、老医者が出てくる。

そうしてうやむやのうちに、その話は終わりになった。

怪我が治った彼は、約束どおりさっさとその場所を後にした。

これ以上その場所において、あの二人の関係を間近で見ることに耐えられなかった。どうして、お互い傷つくことがわかっているのに、夢を見て、求めあうのだろう。

心配で心配で、だけれどもどこか羨ましくて、自分も夢が見たくなる。あの場所には、いるべきではない。

数年後、男が女の元を離れ、別の場所に言ったと人伝に聞いた。ほどなくして、女が亡くなったことも。

その後、再びあった男は何でもないような顔をしていた。それでも、あの時みたような笑みを見ることはなかった。

「お前の忠告を、ちゃんと聞いておけばよかった。もう、何かにかかわったりしない」

代わりに男は小さく呟いた。

その言葉に彼は物悲しい気分になった。

ああ、そんな風になんでもないような顔をしているけれども、お前はしっかり傷ついているじゃないか。

もっと真剣に、無理矢理にでも、止めておけばよかった。ほんの僅かに、彼は二人の關係に憧れていたのだ。彼らには奇跡が起きて、今後も人間として暮らしていけるんじゃないか、そう思ってしまったのだ。だから、止める手は鈍った。

彼はひっそりと後悔した。

第二幕 Who's she? The cat's mother?

ここは、どこだろう？

どこだかわからない。ただ暗い場所に隆二はいた。

視線の先、僅かな光が見える。そちらに向かって歩き出す。

「……？」

視界の先に、人影。目を凝らす。

肩より少し長い綺麗な黒髪、線の細いシルエット。見覚えのある柄の、着物。

心臓が跳ねる。

まさかまさかまさか。

「茜っ」

名前を呼ぶ。叫ぶ。

人影は振り返る。隆二のよく知っている笑顔を浮かべて。

「茜っ」

駆け出す。

会いたかった。ずっとずっと。会って謝りたかった。だから。

手を伸ばす。彼女の右手を掴み、

「あかねっ」

その瞬間、彼女は白い骨となり、闇の中へと崩れ落ちた。

「っ」

声にならない悲鳴をあげて、飛び起きた。

『うひゃっ』

跳ねるように上体を起こした隆二に、小さな悲鳴。

『あぶなっ』

すぐ間近に、居候猫の顔があった。

「マオ……？」

『もー、びっくりしたあ』

確認するように名前を呼ぶと、彼女は膨れた。

手に触れる、慣れた感触。赤いソファー。ああ、ここは、茜と別れたあと暮らしはじめた、自分の安いアパートだ。

あっさりとその現実を受け入れて、ため息をついた。

もう一度会えるなんて夢みたいなことあるわけなくて、どうせあれは夢だったのだ。夢ならもっと、いい夢を見させてくれればいいのに。

唇が皮肉っぽく歪む。

『ちょっとちょっと』

声に顔を上げる。

『なんだか一人シリアルになってるところ悪いんですけどね！』

目の前で膨れるマオ。

「……つか、お前、何してるの」

よく見たら、彼女は隆二に馬乗りになっていた。近過ぎる顔に、少し身をひく。

『隆二が！ うなされてたから！ 心配して見に来てあげたんでしょっ！』

デリバリーのない人ね！ とマオは眉尻を吊り上げて言う。

「デリカシーな、運んでどうする」

幾分冷静さを取り戻すと、突っ込んだ。それから多分、さっきのシリアルもシリアスとかそういうのだ。

「あと、そういうときは、横から覗き込もうな」

なんで馬乗りになって上から見るかね。

片手をはらってマオをどかすと、ソファーに座り直す。

「京介は？」

『夕飯の買い物』

「あー、そう」

時計を見ると、夕方の五時過ぎだった。

「あー、そろそろテレビ付けた方がいいか？ ミチコじゃなくて、なんだっけ。ほら、あれがはじまるだろ」

膨れたままのマオの機嫌をとろうと尋ねると、

『いい』

冷たく言われた。

「は？」

『富子はいいの』

ちょっとまで、マオが七転八倒富子を見なくていいだと？

なんとなくデジャヴュを覚えながらも、尋ねる。

「どうした？ そんなに怒ってるのか？ 心配してくれたのに悪かったな」

『違うっ』

マオがますます膨れた。

一体なんだっていうんだ。うんざりしながらマオの次の言葉を待っていると、

『……茜って、誰よ』

吐き出されたのは思いもしない言葉だった。

一瞬、どうやって反応したら良いのかわからなくなる。

「……なんで」

かろうじて呟いた言葉は、思ったよりもかすれていた。

『寝言。……誰？』

緑の瞳が睨んでくる。

一瞬言葉に詰まる。なんとなく、後ろめたい気持ちになる。が、すぐになんで自分が罪悪感を抱えなければならないのか、その理不尽さに気づいた。

「知り合い、昔の」

端的に答える。

『知り合い？』

「ああ」

『カノジョ？』

拗ねたような瞳に辟易する。なんでたかが居候猫に、そこまで答えなきゃいけないんだ。

「何だっていいだろ」

突き放すように答えると、有無を言わせず立ち上がり、テレビの電源を入れた。

『隆二っ』

咎めるように名前を呼ばれる。

「マオには関係ないだろ」

『……関係ない？』

「ああ。俺の過去の知り合いのことなんて、居候には関係ないだろ」

知らず声が大きくなる。

『……そっか』

マオが小さく呟いた。

その言い方にしまった、と思う。やばい、泣かれる。

「マオ」

慌てて名前を呼ぶと、マオは俯いていた顔を上げた。

泣いてなかった。怒ってもなかった。

『詮索してごめんなさい』

ただ小さく唇を噛んで、彼女は告げた。

『……散歩行ってくる』

そしてそのまま、窓を抜けて外へ出て行った。

隆二は声をかけられず、それを見送った。

テレビから、場違いに明るい音楽が流れてくる。

一つため息をつく、と、ずるずるとソファに座り込んだ。

あんな言い方はなかった。それは認める。反省する。

確かにマオには関係ないことだが、だからといってそのまま関係ないなんて告げる必要はなかった。適当にお茶を濁しておけばよかったんだ。マオの好奇心については、前々からわかっていたのだから。マオにとって自分は辞書のような存在なのだから。

ただ、なんとなくマオに問いつめられて後ろめたい気持ちになったのは事実だ。マオに対して疾しいことなんて何もないのに。

あるとしたら、茜に対してだけなのに。

言いたくない。言えない。

自分の心を傷つけない。

だから、マオを、傷つけた。

そして結局、言えない理由なんて、全部隆二自身の問題なのだ。

スーパーの袋片手に、のんびり道を歩いていた京介は、

『京介さん』

頭上からかけられた弱々しい声に足を止めた。

「マオちゃん、お散歩？」

微笑みかけても、彼女は笑わない。いつも楽しそうな彼女らしくもない。

「どうしたの？ そろそろ、富子始まるんじゃない？」

『……今、いいですか？』

なんとなく事情を察して、京介は頷いた。

「いいよ」

近くの公園のベンチに京介は腰を下ろした。隣を指差されて、マオに素直に隣に座る。

隆二と違って、京介はマオが外で話しかけても拒絶したりしない。最初に声をかけてきたときからそうだった。だから、居辛くて家を飛び出した後、京介の姿を見かけて迷わず声をかけた。

ただ、その後どうやって話を続けたらいいかわからない。

視界の端で京介が煙草に火をつけるのがわかった。

『……ここ、禁煙だよ』

小さく呟くと、京介が笑ったのがわかった。

「やっぱり、マオちゃんはマオちゃんだねえ」

なんだか納得したように呟くと、名残惜しそうに煙草を携帯灰皿に押し込んだ。

『……あたしはあたし？』

「真面目で素直でいい子ってこと」

『……いい子じゃないよ』

全然、いい子なんかじゃない。

「隆二と喧嘩したの？」

のんびりと聞かれる。

喧嘩？

『ううん』

首を横に振った。

『喧嘩じゃ、ない』

隆二はマオと喧嘩したりしない。マオがどんなにむちゃくちゃを言っても、ちょっと呆れるだけだ。マオはバカだなーって、いつものちょっと呆れた顔で笑って、それで終わりだ。

彼が本気で怒ったのなんて、あの時、マオがエミリのところへ戻ると言い出したときぐらいだ

さっきだって、怒っていたわけじゃなかった。少し苛立っていたけれども、怒っていたわけじゃなかった。それよりももっと、冷たいものだった。

どうでもいい、そんな感情だった。突き放された。そう、思った。

『喧嘩じゃないよ』

もう一度呟く。

わかっていたことだ。自分が隆二にとって、ただの居候でしかないことなんて。

『隆二はあたしと、喧嘩なんかしない』

居候が身分もわきまえずに家主にたてついたから。改めて、距離感を正されただけのことだ。

京介は少し目を細めて、

「何があったの？」

優しく尋ねて来た。

『京介さんは、茜って人、知ってる？』

足元を睨みながら尋ねると、

「茜ちゃん？」

意外そうに言葉を返される。

『……知ってるんだ』

知らないのは自分ばかり。

「なんで、マオちゃんが茜ちゃんのことを？ あいつが、自分から言うはずはないと思うけど」

『……寝言』

「ああ」

京介は苦笑し、

「女々しいねえ」

ぽつん、と呟いた。揶揄するわけでもなく、ただぽつんと言葉が宙に投げ出される。

「仕方ないか。そうなってるだろうとは、思ってたし」

『そうなってる？』

「引きずってるってこと」

『……茜っていう人は隆二の』

「恋人だよ」

京介はさらりとそう答えてから、

「あー、いや、そういえば、本人からそう聞いたわけじゃないけど。見た感じ」

『会ったことあるの？』

「少しだけね」

『……いつ』

「もう、かなり前だよ」

『……その人は今』

「亡くなったよ」

顔を上げて京介を見る。彼は淡々と呟いた。

「もう、随分前だ」

『……そうなんだ』

「元々体弱かったらしいからね。なんでもなかったら、まだ生きていたかもしれないけど」
仕方ないことさ、と京介は続けた。

『……隆二にとっては』

「うん？」

『仕方なくないことだよね』

「そうだねえ」

『……そうだよね』

ワンピースの裾をぎゅっと握る。大切な思い出に、土足で入り込もうとしたから拒まれた。

『……帰らなきゃ。謝らなきゃ』

立ち上がる。

『隆二にちゃんと謝る。居候のあたしが何にも知らないのに無神経に訊いてごめんなさいって』
何も知らないから迷惑ばかりかけている。

「誰だって、最初はなあんにも知らないもんだよ」

のんびりと、だけど真剣に京介が呟いた。それに思わず振り返ると、彼はいつもと違う、真面目な顔をしていた。

「教えられていないことは知らなくてもいいんだよ。知らないことを最初から知っているなんてことできないんだから。勘違いしちゃいけない。マオちゃんが知らないことを知りたがるのはなんの問題もないんだよ。知らないことを知りたいと思うのは、当たり前なことなんだから」

『だけど……』

「知りたいことはちゃんと尋ねれば良い。尋ねていいんだよ。まあ、隆二にだって訊かれたくないことも、教えたくないこともあるだろうけど」

教えたくないことは色々な意味で色々あるだろうしなあ、となんだか含みをもった笑い方を
する。

「だけど、訊いたことそれ自体をマオちゃんが気に病む必要はない」

京介は優しげに微笑んだ。

「遠慮しなくていいんだよ。マオちゃんにとって隆二は特別なんだろう？ 特別な、社会との窓口
なんだから」

マオは京介の顔をじっと見つめ、

『……よくわかんない』

悔しそうに唇を噛んで、首を横に振った。

『バカだから』

「マオちゃんはバカじゃないよー。まあ、天然だとは思うけどね。俺の言ったこと、今はわからなくていいよ。だけど、覚えていて」

京介が優しく言うから、マオは小さく頷いた。

『……うん』

京介は満足そうに笑う。

『……でも、やっぱり、謝らなきゃ。拗ねてでてきちゃったし、隆二困っただろうし』

「確かに。自分で酷いこと言たくせに、いざマオちゃんが出て行っちゃうと、家でうろうろと落ち着かなさそうにしてる隆二が目には浮かぶね」

京介のおどけた言い方にくすりと笑う。そのとおりだ。

『それに勝手に京介さんに色々きいちゃったから』

「ああ、それについては俺も怒られるから。口止めっばいこと言われてたんだっ」

喋った方も同罪でしょう？ と笑い、マオの頭を軽く撫でた。

『やっぱり、京介さんと隆二は全然違うよね』

「え？」

『……ううん』

撫でられた頭を右手でそっと触れる。

隆二の同族で、マオに触れる二人目の人。隆二以外にマオに触れられる人が居るということに、本当は少しがっかりしていた。隆二だけが特別だと思っていたから。

でもやっぱり違う。隆二は特別だ。京介は京介で隆二じゃない。頭の撫で方も外での対応も、なにもかも違う。

だから、帰ってちゃんと謝ろう。これからも一緒に居たいのは京介じゃなくて隆二だから。

赤いソファーに座り、本を読む。それは隆二のいつもの行動だった。ただ、違うのは、

「……遅いな」

視線が本と時計の間を行ったり来たりすること。寧ろ、ほぼ時計固定になっている。

マオが出て行って、あんな言い方をする必要はなかったと反省したものの、そこからどうこうする気は起きなかった。マオに問いつめられたことが不快だったことは事実だし、また意味も無く後ろめたい気持ちになった自分も嫌だった。

どうせすぐ帰ってくるだろう。いつもみたいに。そう結論付けて本を読みだしたものの、内容は頭に入ってこない。

付けっぱなしにしていたテレビは、今はニュースになっている。結局、富子放送中には戻って来なかった。あんなにいつも、楽しみにしているのに。

やっぱり探しに行った方がいいだろうか。

もう何度目かのその回答を導き出し、でもそれもどうだろう、もう戻ってくるかもしれないし、もう何度目かの躊躇いをみせる。

そうこうしているうちに、

「ただいまー」

能天気な声と共に京介が戻って来た。

お前に用はない。

「玄関、鍵あけっぱなし危ないよー」

「鍵もってないだろ」

冷たく言葉を返す。

合鍵なんてもっていないため、どちらかが必ず家にいることにしていた。

「そんなことより京介、マオ見なかったか？」

ソファから立ち上がり尋ねると、

「見たよ」

あっさり言われた。

「どこでっ」

「ん」

京介が自分の後ろを指差す。京介の影で、マオがドアからほんの少し顔を生やしていた。

「マオっ」

『ひっ』

思わず名前を呼ぶと、マオが顔を引っ込める。

「逃げるなっ、怒ってないから」

のんびりと買った物を袋から出している京介の背後を抜けて、玄関へ向かう。

『……本当？』

顔だけをドアから生やしてマオが尋ねてくる。

「悪かった。無神経な言い方して」

『……あたしも、ごめんなさい』

マオもいつもよりも素直に頭を下げる。

「とりあえず、中入れ」

右手を差し出す。

こんな玄関で、ドアから首を生やした幽霊とでは、まともな会話は望めない。

『ん』

マオは頷くと、隆二の手に素直に自分の手を重ねた。

その手をひっぱり、いつもの位置、赤いソファまで戻ると、マオを座らせた。自分もその向かい、畳の上に腰を下ろす。

京介は鼻歌なんか口ずさみながらキッチンに立っていた。あれのことはひとまず無視しよう。

『あの、本当にごめんなさい』

「いって。俺も、いらついで悪かった」

『それもそうだけどそうじゃなくて』

マオが隆二の言葉を遮ると、ちらりと一度京介に視線をやる。嫌な予感がした。

『話したくないこと、無理に聞こうとしたこともごめんなさいなんだけど。あたし、京介さんに、聞いちゃったの……。勝手に。茜っていう人のこと。だから、ごめんなさい』

「京介っ」

マオの言葉を最後まで聞く前に怒鳴っていた。茜のこと言うなって言っただろうがっ。

『あ、あの、あたしが無理に聞いたから京介さんは悪くないよ？』

マオが庇うような発言をするから、それにもまた少し腹が立つ。

「そういう問題じゃないっ」

「も一、隆二は五月蠅いなあ。カルシウム足りてないんじゃない？」

京介はのんびりとそう言うと、皿を片手にこちらにやってきた。

「はい」

「……なんだこれ」

「煮干し」

「それは見ればわかるんだよっ」

「カルシウム、摂った方がいいよ」

隆二に煮干しを手渡すと、京介はまたキッチンに戻る。そもそもこの煮干し、よく見たらダシとったあとのやつじゃないか。喰えっていいのか、これを。

『あ、あのね』

くたった煮干しを睨む隆二に、おそろおそろマオが声をかける。

『京介さんも、あの、さっきは、一緒に謝るからって。ん？ 謝るだけ？ 怒られる？ 忘れちゃった。でも、ええっと、あの、勝手に喋ったのも同罪だからって言ってたから、その。悪気があるわけじゃないっていうか』

「今、直接、謝らなきゃ意味ないだろうが」

溜息混じりにそう言うと、煮干しをとりあえず畳の上に置いた。

まあ、おかげでマオとのことに関しては冷静になれた、かもしれない。

「マオは悪くない。マオだけが悪いんじゃない。俺も悪かったし、京介はもっと悪かった。だからもう、謝らなくて良い。こっちも悪かった」

気を取り直してそう告げると、マオは少し安堵したようだ。肩から力が抜ける。

『あのね』

そのまま、いつものような口調でマオが言った。

『あたし、隆二に隠し事されたのが嫌だったの。あたしは隆二に、もう隠し事ないのに』

「それは」

マオの言葉に咄嗟に何か弁解しようと口を開くと、マオが片手でそれを遮った。

『でもね。考えてみたら、あたしには隠すようなことないだけだったの。だって、発生してすぐにここにきて、ずっと隆二と一緒にいるんだもん。あたしよりももっとももっともおっと長生きしてる隆二には、内緒にしたいこともあるよね』

あたしにはよくわかんないけど、と小さくつけたした。

『だから、無理強いしてごめんなさい』

ぺこり、ともう一度だけマオは頭を下げた。

『あたしは、今の隆二と一緒にいられればいいや』

そして笑う。屈託なく、無邪気に。

眩しくて、見てもらえない。

「……だって言ったら、軽蔑するだろ」

その笑みから逃れるように視線を逸らし、言い訳のように呟く。

『え？』

「話したら、マオは俺のこと、軽蔑するだろうから」

どうしてもマオに茜の話ができなかった本当の理由が、今のでわかった。

茜のことを改めて話して、自分で自分の傷口を抉るのが嫌だっただけじゃない。

マオに約束を破る卑怯者だと思われたくないのだ。約束を破って、愛する人を捨てた卑怯者だと。この無邪気な居候猫に思われたくなかった。

マオは眉間に皺を寄せて難しそうな顔をし、何かを悩むようにしばらく沈黙した。

テレビの音と、キッチンから何かを刻む音だけがする。

『よくわかんないけど、隆二が嫌なら本当に話さなくていいよ』

しかめっ面のまま、ようやくまとまったかのように慎重にマオは告げた。

『だけど、あたしが隆二のことけべつしたり、嫌いになったりすることはないよ、絶対』

隆二の目を見てしっかりと告げる。

「……嘘つきの卑怯者でも？」

呟いた声は思ったよりも弱々しくて、自分でも驚いた。情けない。

『だって隆二は元々出会った時からひとでなしじゃない。あたしもだけど。あたしのこと最初無視したりするし、でもずっと家においてくれてるし、冷たいけど優しいし。どっちも本当なの知ってるから、今更嘘つきでも卑怯者でも驚かないよ？』

そして小さく微笑んだ。

『あたしにとって隆二が特別な、それは絶対変わらないもの』

そんなマオを隆二はしばらく見つめ、

「……ありがとう」

小さく呟いた。

本当は誰かに、話したかったのかもしれない。絶対に自分のことを否定しない誰かに。

「京介、あのさ」

「おおっといけない。買い忘れたものがあった！」

キッチンに向かって声をかけると同時に、芝居がかった声がした。

「ちょっと再び買い物に行ってくる。少し遠くまで！ 夕飯は遅れるが笑って許せよ！」

そう早口で告げると、京介は家を出て行った。

なんだかんだで、根はいいやつなのだ。あいつも。

『……あんなに買ったのに、何忘れたんだろう』

マオがぼつりと呟く。

ああもう、だから純粹だというんだ。この居候猫は。

「マオ」

名前を呼ぶと、不思議そうに玄関を見つめていたマオがこちらを向いた。

「あのさ、聞いてくれるか？」

『……うん』

マオは少し表情を引き締めて頷いたものの、

『あの、でも、本当にいいの？ 無理してない？ 嫌だったらいいんだよ？』

心配そうな顔をして隆二を見る。

「いいんだ」

それを見て少し微笑んだ。

マオならきっと、ちゃんと聞いてくれる。

「あんまり楽しい話じゃないけど、誰かに聞いて欲しかったんだ」

本当はずっと。

そうして隆二は、思い出の箱を開いた。

第三幕 彼女が拾った猫との生活

「くそったれ」

隆二が呟いた言葉は、茜色の空へと吸い込まれた。

「くそ、あのガキ。せっかく助けてやったのに、人の顔を見た途端逃げやがって」

車に轢かれそうな子どもを見たら、咄嗟に体が動いていた。代わりに自分が盛大に車に轢かれた。さらには子どもに逃げられた。そりゃあ、こんなけがで話しかけたら、怖いだろうけれども。それでも礼の一つぐらい言っても罰はあたらないんじゃないだろうか？ あんな悲鳴をあげて逃げなくても。

「俺は化け物か、っていうんだ。いや、化け物だけど」

自分で言った言葉に自分で傷ついて、ため息をつく。

怖いのでちゃんとは確認していないが、額は縫う必要がありそうぐらい切れている気がする。肋骨も数本折れた気がするし、足の骨も心配だ。二、三日もすれば治りそうだが、この状況での二、三日は長い。

「やってらんねえ」

ため息をついた。

これからどうしよう。頭の片隅で悩みながらも、色々面倒になって、今はもう寝てしまおうかと瞳を閉じかけたところ、

「大丈夫ですか？」

頭上でかけられた声に再び目を開ける。

そこには心配そうな顔をした少女が一人。

「あの、大丈夫ですか？」

「……あんたは、これが大丈夫そうに見えるわけ？」

腕を持ち上げて額から流れる血を拭いながら逆に聞くと、彼女は途端に大きく顔をゆがめた。まるで彼女の方がけがをしたみたいな顔だった。

「そ、そうですよね。……でもよかった、話せるならば見た目よりもひどくないみたいですね」

多分見た目よりもひどいと思う。俺じゃなかったら多分死んでいる。

結局、見つかってしまった。

これからの自分の運命を思うと、ため息しか出ない。化け物として見せ物小屋に売られるか、警察に連れていかけるか、それとも、また研究所に戻されるのか。最後だけは絶対に、嫌だなあ。

隆二が自分の身の上を悲観的に、だけれどもどこかのんびりと思っている間に、彼女は隆二の傍にしゃがみこんだ。そのまま隆二に異を唱える隙を与えず、自分のハンカチで隆二の額を抑える。

「うわっ、あんた何やってるんだ!？」

いきなりのことで驚いた隆二に、彼女は

「え、一応止血を……」

逆に何を聞いているのだろうかこの人は？ という口調で言い返した。

「別に、そんなのいって……」

振り払おうと動かした手を、彼女は片手でつかむとゆっくりと下に下ろさせる。

「おとなしくしててください。大丈夫、悪いようにはしませんから。それより、動くと傷口が開いてしまいます」

「……あー」

薄倅そうな彼女の意外と力強い口ぶりに驚いて、そしてそれが正論であることは認めなければいけない事実で、結局何も言えずに再び空を見る。

「……この近所に」

彼女がぽつりと言った言葉に、顔をそちらに向ける。

「私の主治医の先生がいらっしゃいます。今からそこに行くつもりだったので、一緒に行きましょう。……あ、でも、そのけがじゃ動かないほうがいいですし、動けませんよね。先生を呼んでできますので、待っていてください。いいですか、絶対に動かないでくださいね」

そうやって彼女は立ち上がる。

「おい、あんた」

「大丈夫、私も先生も口は堅いですから」

「……そこじゃない。名前」

「え？」

「あんた、名前は」

彼女は、驚いたような顔をしてから、すぐに微笑んだ。

「茜。一条茜です」

そうやって、先ほどから隆二が眺めている空の色を名前に持った彼女は、微笑んだ。

それが、一条茜との出会いだった。

「茜」

土手から移された小さな診療所。そこで、初老の医師が渋い顔をして呟いた。

「拾うのは頼むから猫だけにしておいてくれ」

「俺は猫以下かよ」

診療台の上でぐるぐると巻かれた包帯を気にしながら、隆二はつまらなさそうに呟いた。

「そんなこと言われても……。放っておけないじゃないですか」

「いや、確かに人助けは英断で尊いことだが、しかし」

「人助け、ね」

思わず鼻で笑いながらそう言うと、

「何が面白いんだ、お前は」

先生とやらの睨まれた。

「いや、別に。すごいな、あんた」

「おい、」

先生が苛立ったように隆二の胸倉を掴む。歳の割に力強いなあ、なんて思いながらそれを目を細めて見つめた。

「先生！」

茜の悲鳴を無視して、先生は吐き出すように低く呟いた。

「お前は、一体、何なんだ？」

「俺が一番知りたいね」

誰か教えてくれないだろうか。それは隆二としてみれば真摯な答えだったのだが、おちよくられたと感じたのだろう。先生は顔をゆがめると、隆二を診察台にたたきつけるようにして手を離す。

「先生！ 怪我人に対してそれは……」

茜が先生と隆二の間に割って入る。

ああ、純粹で腹が立つ。

「ぴーぴー騒いでんじゃねえよ」

隆二の言葉に振り返った彼女は、裏切られたとでもいうような顔をしていた。せっかく助けてあげたのに？

「放っておけばこんな怪我治る」

「治るわけないでしょう！」

「耳元で騒ぐな、ガキが」

虫を払うように右手を振ると、

「一度しか言わないからちゃんと聞けよ？ 俺は人間じゃない。よって死なない。怪我しても放っておけば治る」

早口で言い放った。茜があまりに間抜けな顔をしているので、皮肉っぽく唇をゆがむ。育ちのよさそうなお嬢様には、わからなかっただろうか。

「もう少し端的に言うならば、化け物ということだ」

先生が舌打ちするのが聞こえた。

「とんだ拾いものだな、茜」

茜が未だにぼかんと口を開けたままなので、仕方なしに溜息をつきながら、隆二は右手に巻かれていた包帯をはずした。赤く染まったガーゼがひらりと床に落ちる。その下にあるはずの、さっきまで血を流していた傷口は、綺麗さっぱりなくなっている。

「わかったろう？」

隆二は体を起こし、茜の目を覗き込むと、聞き分けのない子どもに聞かせるような口調で呟いた。

「放っておけば、治るんだ」

「普通の」

先生が口を開き、茜がそちらに視線を向けた。

「普通の人間だったら、死んでいてもおかしくない傷で、出血量だった」

先生がぼそりと呟く。

「そりゃあ、驚くよな、先生。前に見つかった医者は、悲鳴をあげて卒倒したぜ？」

思い出して、けらけらと笑う。空しくなるとすぐにやめたけど。

「驚いたろ、嬢ちゃん。悪いな。先生も」

言いながら、足の包帯を外す。その包帯も、既に用をなしてなかった。

「先生が怖がらずに、適切に処置してくれたおかげで治りが早い。感謝する。二、三日は動けないと思っていたが、これならば明日にはなんとかなるだろう」

きちんと正座し、頭を下げる。

「一晩でいい、泊めてほしい」

そして、ゆっくりと顔を上げると、肩をすくめて唇をゆがめた。

「勿論、こんな化け物にいつまでもいられては困るというならば、追い出してくれて構わないが」

先生が一步踏み出した。茜の頭を撫でるようにして、少し後ろにおす。

「この子に聞いてくれ。あんたを助けたのはこの子だ」

そういいながらも先生はもう一步、茜と隆二の間に体をさしこんだ。庇うように。

「そうだな、嬢ちゃんに聞いてみないとな」

そうって唇の片端だけをあげる。どうせ嫌がられるだろうけれども。そう思っていると、

「……茜」

少しの躊躇いのあと、彼女はそう言った。

「私の名前は、嬢ちゃんではなく、茜、です。あなたのお名前は？」

茜は少し震えながらも、一步前に出て来た。先生が一步横にずれた。

「……神山隆二」

少し躊躇ったあと、答えた。

「神山さん、ですね」

茜がにっこりと笑う。どこか強張った顔で、それでもは出来るだけ笑おうとしているのが伝わってくる。剛胆なのか、繊細なのか。

「此処をでて、何処か行くところがあるんですか？」

「居場所なんてどこにだって……」

「もし、ないのでしたら」

言葉は遮られ、早口で被せられた。

「しばらくうちで暮らしませんか？ 部屋なら余っていますから」

「……はい？」

今度はこちらがぼかんと間抜けな顔をする羽目になった。この娘は何を言っているのか。

先生が小さく、

「茜」

と呟いた。しかし、それは嗜めるというよりも、諦めに似た感じだった。諦めるなよ。

なんだっていうんだ、どいつもこいつも。

「あんた、俺が怖くないのか？」

眉間に皺を寄せて問いかけても、茜はただ笑うだけだった。

沈黙。

茜は小さく微笑んでいた。その斜め後ろで先生が隆二を睨んでいる。隆二は眉根を寄せたまま、それを見ていた。

ふうっと誰かが息を吐く音が、やけに大きく響く。

「……あんた、馬鹿か？」

それを合図に、半ば吐き棄てるように言った。

「俺の話聞いていたか？ 俺は人間じゃなくて、化け物だ。こんな大怪我を負ってもいきている。そんな人間を傍に置いておくことが、どんなことかわかっているのか？」

「貴方がもしも悪い人なのでしたら、私も先生も殺しているんじゃないですか？」

「あんた、顔に似合わず、えぐいな」

先ほどとは違う意味合いで、渋い顔をする。

「確かに、正体がばれたら困るんだよ。迫害されるならまだしも、見世物小屋を呼ばれた日にはどうしたらいいものかと」

面倒なことになりかけたことを思い出す。逃げ出せてよかったが。

「だけど、まあ、あんたたちはそんなことしないだろうし。別に、されてもいいけど」

肩をすくめる。

「正体がばれたからって、ほいほい殺してたらまずいんだよ。変死体が見つかったり、行方不明者がでたりしたら、そっちの方があいつらに見つかるかもしれない」

「あいつら？」

苦々しく吐き出された言葉に、小さく問い返される。

余計なことを口走った。舌打ちすると、

「関係ない」

それだけ吐き棄てた。

「そんなこと言って、怪我が治るまで油断させてるだけじゃないか？」

茜の後ろで先生が呟いた。茜が振り返って先生を睨む。

「そう思うなら、俺を放り出せばいいだろう？ わざわざ戻ってきてまで殺すような、酔狂な人間じゃないさ」

そこまで言っておかしな表現をしたことに気づく。

「ああ、人間じゃないけど」

付け足して笑った。

「神山さんは、」

隆二の表情に一瞬眉をあげたものの、茜が微笑みながら尋ねてくる。

「どうして、怪我をなされたのですか？」

言われた瞬間、動きが止まった。目を見開いて茜を凝視する。この小娘、何を訊いてきた？ 嫌なこと言いやがって。

「痛いところをつかれた、って顔だな。人でも殺したか？」

「先生。私に任せてくださったのではないのですか？」

茜が咎めるようにそう言った。先生は驚をつかれたような顔をして、それから渋々と、
「まあ、そうだが」

それだけ言う。

隆二は、それをほんの少し意外に思いながら見ていた。意外とこの小娘は、強いのかも知れない、芯が。

「どうなさったんですか？」

芯の強い小娘は、隆二に向き直ると微笑んだ。その話はもう忘れてくれてよかったのに。
それでも黙っている訳にはいかなくて、我ながらひどく不愉快そうな顔をして、

「笑うなよ」

と、一言前置きをした。

茜が小首を傾げる。

「車に轢かれそうになったがきを助けるつもりが、失敗した」

「……はい？」

全く、想定していなかった答えだ、と言わんばかりに、茜は傾げていた首を、更に傾けた。
先生も茜と同じような顔をしている。

「貴方は」

しばらくの間のこと、ようやく事態を理解したらしい茜が、傾げていた首を元に戻し、笑んだ。

「優しい方ですね」

「格好悪いだろう」

「何がです？ 人助けは立派な……」

「人の何十倍もの身体能力を持っているくせに、車なんぞに轢かれて」

くすり、と茜が笑った。

「笑うなと言っただろうが」

舌打ちした。だから言いたくなかったんだ。

「ふ、」

何か、空気が漏れるような音がして、

「あはははは」

一拍置いて、先生が豪快に笑い出した。

「……てめえもかよ」

耐えられなくなって二人から視線を逸らす。

「おま、それ、」

「先生、何が言いたいのか解りかねます」

先生は言葉にするのを諦めたらしく、思う存分大笑いしてから、はあっと深呼吸も含めた呼吸をする。

「気に入った」

息を整え、開口一番にそういう。ぽん、っとひざをはたいた。

「実はな、さっき小僧が来たんだよ。車に轢かれそうになった、ってな」

ちょっと待て、何を言っている？ 慌てて隆二は視線を先生に戻す。

「怪我はないのか？ と尋ねたら、僕はないという。だが、知らない男の人が大怪我していた、と」

なるほど、そういうことか。片膝を立て、そこに頬杖をついた。とんだ狸だ。

「頭から血をだらだら流しながら、涼しい顔で大丈夫か？ なんて聞いてきたとかいうから、半信半疑でな。丁度、その子の親が通りかかったらその子を返して、でもとりあえず、どうにかしなくてはな、と思ったときに、茜がやってきた」

「ちょっと待って、それじゃあ、先生、最初から知っていらっしゃったのですか？」

「この小僧が」

「いや、爺さんよりは長生きしてるぜ、俺」

「その割には人間が出来ていない、青二才じゃないか」

青二才呼ばわりしやがって。小さく舌打ちする。

「この、神山隆二と名乗るやつが、もしかしたら助けてくれた男なのかもしれない、とは思ってたな」

「でしたら、なんであんな侮辱するようなことを！」

「だがな、治療しようとして、生き物として何かがおかしいことはわかった。何を考えているかわからない。助けたのとは別の男かもしれない。助けたのにはなにか策略があったのかもしれない。疑いだしたらきりが無い。とりあえず、かまをかけてみた」

そうやって豪快に笑う。

「呆れた……」

茜が悔しそうに少しだけ唇を尖らせた。

「とんだ狸爺だな、あんた」

先生は何も言わずに、一度にかっと笑った。

「まあ、面白そうだし、茜に害を加えないのならば」

「だから、加えないって」

「今日だけといわず、暫くいていいぞ。面白そうだから」

「一言余計だな」

ため息をつく。なんでこう、変人なんだ、こいつら。化け物だからってひかないところが、受け入れるなんて。期待、してしまうじゃないか。

「まあ、あれだな。俺が助けたがきが少しでも俺のことを気にしてくれたのは、少しばかり有難いな。助けたのに礼儀のなっていないがきだと思ったから」

なんとなく、救われた気分になる。

さっきからなにを考えているんだろう。救いなんて、きつともうないんだ。人間じゃないんだから。

思いを断ち切るために、思考を強引に別の方向へ持って行く。

「こんな小さな村に車が走っていることが、俺には不思議だがな」

見かけることは多くなったものの、もっと都会で見かけるものな気がしていた。

「あの」

おそろおそろといった風に向けられた声に首を傾げる。

「その、車は、真っ黒なものでしたか？」

「ん？ ああ、洒落た服着た爺さんが運転してた」

「神山さん、それ、私の身内です。ご迷惑をおかけして、申し訳ありません」

茜が深々と頭を下げる。予想外の態度に少しだけたじろいだ。

「いや、別にいいんだが……。ひょっとして、あんたいいとこのお嬢様ってやつか？」

育ちは良さそうな気がしていたが、もっと上流階級か。でも上流階級のお嬢様が、なんだってあんなところを一人で散歩してたんだ？

「お嬢様じゃありません、茜ですっ」

少し荒げられた声に、ちょっと驚いた。

「……私はただのこの村に住む娘です。それだけ、です」

茜は落ち着いた声で言い直す。

「ふーん」

納得しかねるな、と思わず呟いた。

「お互い様でしょうに。貴方も」

「隆二」

にやり、と笑う。そちらがそのつもりならば、こちらだってそれに習おう。

「人には名前を訂正させておいて、自分は貴方呼ばわりか？ 茜」

「……隆二も、全てを話したわけではないでしょう？」

意外にも彼女の方も呼び捨てにしてきた。なるほど、ただのお嬢様ではないようだ。

「手の内を明かすのならば、お先にどうぞ？」

茜が上品に小首を傾げる。はん、と隆二は鼻で笑った。先生が唇を歪める。

なんだ、化け物を受け入れるそちら側もわけありか。ただの傷の舐めあい。お互いがお互いの秘密を暴き合おうとして、牽制し合っているなんて。これだけ歪んだ関係なら、安心してここにいることが出来る。少しは、落ち着いて暮らせそうだ。

「これからよろしく、茜」

挑むようにして見つめながら笑うと、

「ええ、こちらこそ、隆二」

同じような顔をして茜も笑った。

「……おまえらちょっとおかしいだろ」

先生が小さくぼやいた。

人間としての生活なんて、期待していなかった。この時は。

一条茜は、小さな民家に一人で住んでいた。小さなと言っても、一人で住むには広過ぎる。な

るほど、部屋が余っているわけだ。

こんなところで若い娘が一人暮らしだなんて、ますますわけありのようだ。

「ここ、どうぞ」

何も無い一室に案内させる。

「どーも」

「お食事は普通に摂られますか？」

「食べなくても死なないから気にしなくていい」

「……食べることは出来るわけですよね？」

「それはまあ」

「そう」

茜は一瞬視線をさまよわせてから、隆二に戻すと小さく微笑んだ。

「じゃあ、作るんで一緒に食べましょう。たいしたものは、出来ないけれども」

「……なんでその結論になるかねえ」

「一人の食事は寂しいから」

当たり前のように言い切ると、待っていてと告げて茜はその場を立ち去った。

「……寂しい、ねえ」

なんとなく呟くと、小さなその部屋に倒れ込む。意地でここまで歩いてきたが、やはりまだしんどい。

目を閉じる。せいぜいのんびりさせてもらうさ。

そこから始まった茜との同居生活は、規則正しいものだった。

毎朝決まった時間に起こされ、食事を取り、掃除を手伝わされ、散歩に連れて行かれ、野良猫に餌をやり、週に何度か先生のところに顔を出す。これの繰り返し。

茜は臆すること無く、隆二を自分の規則正しい生活の輪の中に組み込んでいった。化け物相手なのに。

そんな規則正しい生活も久しぶりだったので最初は楽しかったが、あまりにも単調な生活に一週間で飽きた。一人で不規則な生活をしていたときも特に何か毎日楽しかったわけではないのだが、規則正しい生活はより単調さを際立たせる。

「毎日毎日同じことの繰り返しで飽きない？」

ある日、連れ出された散歩の途中、隆二が行き倒れていたあの土手で茜に尋ねた。茜は心底不思議そうな顔をしながら隆二を見上げ、

「どうして？ 同じ日なんて一度もないじゃない」

心底不思議そうに答えた。

「……あー、そう」

その答えがなんだかむずがゆくて、隆二は適当に返事をすると頭を掻いた。

訳ありのようだが、心根は素直な娘だと思った。衣食住を提供してくれる変な小娘に、本格的に興味をわきだしたのはきっとこの頃。

でもそのときは、ここまでにしておこうと、そう思っていた。深入りしない方がいい、と冷静に思っていた。もう少ししたらここから出て行こう。同じところにずっといるべきではない。愛着を持つべきではない。

でも、もう少し。もう少し暖くなるまではここで過ごしてもいいかなあ。あの時助けた少年をはじめとする子ども達に、明日遊ぶって約束してしまったし、少なくとも明日まではここにしよう。そんな甘えでずるずると、規則正しい生活を送っていた。

よくも悪くも、この生活を変えたのは、二人の死神の存在だった。

いつもどおりの散歩道、件の土手に現れたのが一人目の死神だった。視線の先にその姿を見つけて、隆二は思わず足を止めた。

「どうしたの？」

数歩先で、茜が不思議そうな顔をして振り返る。

赤い着物、長い黒い髪を束ねることなく、風になびかせている。見たことがある。逃げ出そうとしたあの時、最後まで阻止しようと尽力を尽くしていた少女だ。ああ、もう、少女ではないのかもしれない。そんなことはどうでもいい。逃げなくちゃ逃げなくちゃ逃げなくちゃ。

ぐちゃぐちゃになった思考回路から、慌てて今すべきことを引っ張り出す。

「隆二？ ねえ、本当にどうしたの？ 真っ青だけど」

茜が心配そうに眉をひそめて近づいてくる。それに合わせるように、二、三步後ずさる。

「……隆二？」

茜が少し傷ついたような顔をした。

「違う、そうじゃなくて」

思わず言い訳がこぼれ落ちる。茜を避けようとしたわけじゃなくて。言い訳なんてしてどうする。もうここには居られない。逃げなくちゃ。

「だけどごめん」

世話になったのに。いきなりこんな風に消えようとして。早口で言い切ると、きびすを返す。

「隆二っ」

茜の慌てたような声が背中にかかり、

「U O 7 8」

遠くから、だけどはっきりと聞こえた声に足が止まった。

「逃げてても無駄ですよ」

冷たい声。足が縛り付けられる。動けない。

「……ゆうぜろななはち？」

茜が小さく呟く。

ああ、茜はそれを口にしないでくれ。せめてただの、ただの化け物だと思っていてくれ。

「U O 7 8？」

たしなめるような声色で呼ばれて、ゆっくりと振り返る。

心配そうな顔をした茜の後ろに、死神がたっていた。

「ごきげんよう。ご無沙汰ですね。随分と楽しそうな暮らしをしていらっしゃるようで」

死神は淡々と、顔色一つ変えず続ける。嫌味のような言葉だが、恐らくただ事実を評価しただけだろう。この死神が、嫌味なんてそんな人間味のあることを言うわけがない。

死神と隆二の顔を見比べ、茜は少し隆二に近づいた。そしてそっと隆二の右手をとる。慈しむように手を握られる。思わず、それに縋り付くように力をいれた。

死神はその光景を見ても顔色を変えることはなく、

「勘違いしないでください。貴方を連れ戻しにきたわけじゃありません」

「え？」

少し、高い声が出る。もしかして、もう許してくれるのか。もう諦めてくれるのか。もう飼われることはないのか。

一瞬浮かんだそんな希望は、あっさりと斬り捨てられた。

「私たちはもう貴方達を兵器としては必要とはしていません。そこで選んでいただきたい。ここで、証拠隠滅のためにおとなしく消え去るか、または必要に応じて我々の力になるかを」

死神が告げる。

「……必要と、していない」

小さく呟くと、死神が頷いた。

ああそうか、もう兵器としてもお払い箱なのか。それでも、化け物としては利用価値があるから、利用出来るならば残しておこう？

「……消滅か、隷属か」

かすれた声が漏れる。

また、隷属？ 逃げて来たのに？ また？

「……もう、疲れた」

思わず口からこぼれ落ちた言葉に、自分自身で驚いた。ああ、そうか。もう疲れたのか、自分は。化け物として今後も生きていくことに。それならば、もう、ここで終わらせてもらった方が楽なのかもしれない。だって自分は化け物だから。このまま一生、永遠という一生を人間との間に線をひかれて、それを踏み越えることを許されずに、失った人間としての日々を指をくわえて見ていくぐらいならば、

「俺は、もう……」

「隆二っ」

強い声で名前を呼ばれ、右手を引かれた。

はっと我にかえる。

茜がこちらを睨むようにして見ていた。

「ゆうぜろななはち？ そんなもの知らない。貴方は、神山隆二よ」

力強く茜が断言する。聡い彼女は、全てはわからなくても隆二が選ぼうとしている道を察し、咎めた。

「……俺は、化け物だ」

「だからなに？ もうそんなこと、今更気にしない。あなたが優しい人だってこと、知っている

」

意思の強い瞳。だけど、隆二を掴んだ手は小刻みに震えている。

それを大切だなんて、思わなければよかったのに。

でも、思ってしまった。認識してしまった。この震える手を持つ少女を、神山隆二は大切だと思っている。ここでの生活を続けたいと思っている。彼女を悲しませたくない、そう思っている。

「……わかった」

吐息と共に言葉を吐き出すと、死神に向き直る。

「あんたらの言うことを聞く。だから、ここに居させてくれ」

そう答えた。

「そうですか」

死神は頷いた。

「では、なにかあったらまた来ます。逃げても無駄ですから」

淡々とそれだけいい、すぐにその姿を消した。最後まで、表情をかえることなく。

「……いつ」

死神の姿が消えて、茜が小さく悲鳴のように言葉を漏らすと、へなへなとその場に座り込んだ。慌ててそれを支えた。

「いまのは？」

「……死神だよ」

答えながらも隆二の足からも力が抜ける。

仕方なくそのまま、二人して土手の草むらに腰を下ろした。

「死神？」

「俺にとっては」

「……そう」

怖い人ね、と小さく茜は呟いた。

右手は茜の手を握ったままだった。離すのが躊躇われ、そのままにしておく。茜から手をふり払う気配もなかった。

「……俺さ」

「うん」

川の流れを見ながら、口を開いた。

「元々は人間だったんだ」

「……え？」

「元々化け物として生まれたわけじゃなくて。もう、どれぐらい前かな……。覚えてないけど、人間として生まれて、家に金なくて、俺体弱かったし、売られた。それとも、俺、自分で行って言ったんだっけな。親と俺、どっちが先に言い出したんだっけ。もう覚えてないや」

とりとめもなくこぼれ落ちる言葉を、茜は黙って聞いてくれた。

「売られたのが、さっきの死神がいる変な研究施設で。戦のための兵器を作るとか言って、色々

な子ども集めてて。すぐにはなにもされなかったけど。だけど、そのうち実験はじめて。なにがどうなったのかわからないけど、俺は成功したんだ。成功したから、化け物になった。人より優れた身体能力と、死なない体を持った化け物になった」

隣が怖くて顔が動かせない。茜は今、どんな顔をしているのだろう。だけど、一度溢れた言葉はとめられない。

「U078は、俺の実験体としての番号で。ずっと、そうやって呼ばれてた。あそこでは。殆どの実験が失敗して、成功したのは俺を入れて四人。四人で相談して、逃げた。研究所から。怖かったから。このまま兵器として扱われることが」

「……兵器は生き物ではないから？」

隣から小さい声。

「え？」

思わず隣を見ると、茜が少し心配そうに眉をひそめて、首を傾げてこちらを見ていた。

「化け物は生き物だけど、兵器は生き物ではないから？ 兵器だったことが嫌で、ずっと隠していた？」

「……ああ、そうかもしれない」

確かに、化け物だと暴露することは簡単にできたが、兵器だったことはできれば言いたくなかった。

「尊厳もなにもなく、ただ物として扱われるのが怖かったんだな。自分が消えてしまうようで」

「さっきの人、隆二を道具としてしか見てなかった」

ぐっと手に力がこめられる。

「そんな人には、隆二は渡さない」

思いがけない言葉に、間抜けにも口をあけて茜を見つめる。今、なんと言った？

「逃げて、ここまで来たの？」

そんな隆二に気づくことなく、茜が問いかけてくる。

「あ、ああ」

「そう。……ならずとここにいればいい」

まっすぐに茜が目を見てくる。

「隆二がなんだって関係ない。人間でも化け物でも兵器でも、隆二は隆二だから」

意思の強い瞳に見つめられて、

「……うん、ありがとう」

素直に小さく隆二は頷いた。

人間として生活していくことが出来なくても、化け物としてでもここで生活できるのかもしれない。

「帰りましょう」

茜が微笑んで立ち上がる。握ったままの手を軽く引かれる。その手に掴まるようにして隆二も立ち上がった。

特に会話もないまま、帰路につく。けれども繋いだ手はそのままだった。

会話がないうその空気も、悪いものではないと、寧ろ心地よいと隆二は思った。思っていた。

そして、

「茜様」

名前を呼ばれたのは、家が見えたころだった。茜が慌てたように隆二の手を離す。その手をほんの少し、名残惜しいと思った。

「どこにお出かけですか？」

黒い服を着た、老人が立っていた。どこかで見たことがある姿に隆二は眉をひそめ、

「あ、車の……」

思い当たった顔に小さく呟く。

茜に出会った時。あの時轢かれた車の運転手がこの老人だった。そういえば、茜の身内だと言っていたか。

「そちらは？」

老人が隆二を見て尋ねてくる。

「一条には、関係ありません」

震える声で茜が答える。

「茜様。仮にも一条の人間がこんなどこの馬の骨ともわからぬ人間と一緒にいるとはどういうことですか」

ゴミを見るような視線を向けられ、隆二は小さく笑う。

「何がおかしいのです？」

「何もおかしくない」

咎めるような老人の言葉に、笑ったまま答えた。

「俺がどこの馬の骨ともわからないのも、ゴミみたいなのも事実だから。それをわざわざ指摘することに、おかしなところは何もない」

ただ露骨な敵意を向けられることが、おかしかっただけだ。先ほどの死神に比べれば、何も怖くないし不愉快になることもない。寧ろ、かわいいとさえ、思う。

「隆二っ」

だけれども茜は違うようだった。蒼白の顔で悲鳴のように隆二の名前を呼ぶ。

「……すまん」

必死の顔に、思わず謝る。遊んで悪かった。

「一条に、迷惑がかかることをしたつもりは、ありません。第一、葵がいるならば、私は要らないはずです」

真っ白な手を握りしめて茜が答える。老人は軽く眉をあげ、

「立場はわかっていると、そうおっしゃるのですね？」

「……はい」

小さな声で茜が頷く。

「結構」

老人は満足そうに頷いた。

「くれぐれも、一条家の名を汚さぬように」

駄目押しのようにそう告げると、老人は立ち去った。

「……なんだ、あれ」

隆二が小さく呟く。

茜が崩れ落ちるように座り込んだ。

「茜っ」

慌てて近寄ると、

「隆二っ」

すがりつくように両手を掴まれる。

「あれが、あれが私の死神なの。……私が黙っていたこと、聞いてくれる？」

先ほどよりも白い顔で、震える声で、濡れた瞳で問われた言葉に、

「……ああ」

ゆっくり頷いた。お互いがお互いの死神にここで出くわすとは、思わなかった。

「私には、姉が居るの」

家に入り、腰を下ろすと茜がゆっくりと切り出した。

「同い年の」

「血のつながらない？ ……いや、双子か？」

「そう、双子。葵って、言うの」

小さく頷く。

「一条は、昔から続く名家で、家柄をととても大事にしている。だから、双子が生まれたなんてこと、外間を大事にする一条にはあってはならないことだった」

「……ああ、双子は悪魔の子、とか言われる風習が？」

まったく同じ顔の人間が二人いること、一つの腹から一度に二人生まれること、そう言ったことから双子が忌まわしいものとされることがあると聞く。

「そう。……さすがに、知っているんだね」

弱々しい笑い方をする茜に、何故だか少し苛立ちを感じる。

「だから私は、生まれなかったことにされるはずだったの。……殺されるはずだった」

茜は仕方ないよね、と笑う。唇だけで。

「だけど、一条は代々体の弱い者が生まれることが多くて。私や葵も例外じゃなくて。だから私は、今日までここで、一条から離されたところで生かされている」

泣きそうな目をしているくせに、小さく微笑む。何故だろう。苛々する。

「葵に何かがあったときに、すぐに代われるように。……さっきの人は、一条の補佐を代々している人で、だからだいが失礼なことを」

「笑うな」

耐えられなくなって、言葉を遮った。驚いたような顔を一瞬したものの、直ぐに茜は小さく笑う。

「どうしたの？」

「笑うな」

その手をひく。よろけて体勢を崩した茜の頭を両腕で抱え込んだ。

「隆二っ」

慌てたような声をする。

「なんで、泣きそうな顔をしてる癖に笑うんだよ。なんだかとても、腹が立つ」

頭を抱えたまま、低い声で言う。ばたばた慌てたように手を動かしていた茜は、その言葉にぴたりと動きを止めた。

「向こうの都合で勝手に振り回されてるんだろ。怒ってもいいし、泣いてもいいし、それが普通だろ。わかったような顔をして、笑わなくてもいいだろうが」

気づいたら話している自分の声が震えていた。ああ、今自分は、彼女に自分を重ねあわせている。昔の自分にかけたい言葉をかけている。

だからこそ、

「笑わなくて、いいから」

だからこそ、彼女がとても愛おしい。

黙っていた茜が額を隆二に押し付けるようにし、腕をそっと背中にまわした。

「……ありがとう」

小さく聞こえてきた声は、水分を含むものだった。

「ん」

急に照れくさくなって小さく頷いた。照れくさくなったけれども、この手を離すつもりはなかった。

二人の関係が変わったのだとしたら、この日がきっかけだったのだろう。この日を境に、隆二の中でこの家から出て行くという選択肢が消えた。ふれあうことに躊躇いがなくなり、かける言葉に暖かみが増した。

今思い出しても、この時が一番幸せだった時間だ。二人でのんびりと暮らす。ただ、それだけがとても幸せだった時間。

だけど、それが永遠に続くわけではなかったし、そんなこと心のどこかではわかっていた。気づかされたきっかけは、なんでもない一日に紛れていた。

その日も、いつもの規則正しい生活を送っていた。認識してしまうと恥ずかしいことだが、隆二も今やその何気ない規則正しい毎日を楽しんでいると思っていた。同じように見えて違う。はっきり言ってしまえば、毎日茜の言うことややることは違っていても、それを見ているのがとても楽しかった。

だからその日も、いつもとは違う部分があった。同じではなかった。

「りゅーじに一ちゃん、あーそーぼー」

土手を散歩中、子ども達に声をかけられた。

「ああ、太郎たちか」

最初隆二が助けたその少年は、今ではすっかり懐いていた。とはいえ隆二の返答は、

「やだよ」

「ええっ、ケチー」

「ちょっとぐらい、いいじゃない」

呆れたように茜がなだめる。ここまでがいつもお決まりの会話だった。

「仕方ないなー、ちょっとだけだぞ」

とか言いながら、缶蹴りに参加する隆二が、気づいたら大人げなく熱中しているのも、いつものことだった。茜はいつもそれを少し離れたところに座り、微笑んで眺めていた。

ここまではいつものこと。

違うのは、遊んでいる最中に聞こえた小さな小さなうめき声と、何かの倒れるような音。

嫌な予感がして振り返る。

「っ、茜！」

胸の辺りをおさえて、茜が身を丸めていた。

慌てて駆け寄り、体を支える。苦しそうに歪められた顔。子ども達もそれに気づくと集まって来た。

「発作だ」

と言ったのは、どの子どもだったか。

「発作？」

「茜ねーちゃん、心臓弱って先生が」

「薬は？ 持ってないの？」

茜の右手には小さな箱が握られていた。

「飲んだ、から、へいき」

小さなかすれるような声。どこが平気だと言うのか。

一条家は体が弱くて、葵も茜も。だから、先生のところに定期的に通っているのは、ただの世間話ではなかったのか。そもそも最初から主治医と言っていたじゃないか。今更ながらにそんなことに気づいた。自分の迂闊さを呪う。

真っ白い顔。

「少し、我慢しろ」

その頬を軽く撫で、そっと抱え上げた。

「隆二兄ちゃん、どうするの？」

「先生んところ」

端的に答えると、持ち前の人並みはずれた身体能力で、あっという間に土手からその姿を消した。

「……はえー」

残された子どもが、小さく呟いた。

こんなに目立つことをして、化け物だということがバレて、村から居られなくなるんじゃないか。いつもなら思うことも、そのときは思わなかった。それどころじゃなかった。茜が茜を

茜の。茜のことが心配だった。どうにかして助けて欲しかった。

一人、残されたくなかった。

「もう大丈夫」

だから、茜の主治医である先生がそう告げた時、みっともなくも膝から崩れ落ちた。

「おおい、不死者の手当はしないぞー」

のんびりと言われる。その口調に、本当にもう大丈夫なのだと思えた。

眠っている茜は、顔色は戻っていないものの、その表情は穏やかだった。

「ありがとう、ございます」

頭を下げると、先生は少し嫌そうな顔をした。

「お前にそういう態度とられると気持ち悪くてかなわんな」

軽口を叩かれても顔をなかなかあげられない。それほどまでに、感謝している。

「……隆二」

優しく名前を呼ばれて、ゆっくりと顔をあげると、

「そう、情けない顔をするな」

呆れたように言われた。

「あんなに血相を変えて現れて。お前さんの方が倒れるんじゃないかと思った、今もな」

「だって」

抗議の声も、弱くなる。

「俺じゃどうにもできないから」

先生に頼るしかない、と思った。

「それはこっちも一緒さ」

どこか余所を見ながら先生が呟く。

「根本的な治療はできない。ただの、対処療法だ」

「……うん」

その言葉が意味することを受け取り、隆二は小さく頷いた。完治は出来ない。またいつ、発作が起きるかわからない。

「最近落ち着いていたんだがな」

それはつまり、いつ、彼女が、

「……どれぐらい？」

「わからんなあ。でも、正直、ここまで保っているのは奇蹟なんじゃないかと、思うことがある」

「……そうなんだ」

それはつまり、いつ、彼女がいなくなってもおかしくないということ。今すぐにでも、彼女がいなくなってしまうかもしれない。

「そうなんだ」

震える指先に気づき、反対の手で隠すようにした。

「出来る限りのことはする。隆二」

先生がこちらを向いて微笑んだ。

「今のは聞かなかったことにして、普通に接してやって欲しい」

そんな無茶なことを！ そう叫ぶ心押し殺して、小さく頷いた。隠し通す自信はなかったが、だからといって茜になんて言えば良いのかもわからなかった。

だから、

「……隆二？」

目を覚ました茜にかけた言葉は、

「ああ、おはよう」

できるだけいつもどおりを意識した、淡々とした挨拶だった。本当は、大丈夫か、心配した、と縋り付きたい気持ちだったけれども。

「……うん」

茜は一瞬の間を置いて、頷いた。

「先生のところ。今日はもう遅いから泊まっていけて」

いつものようにぶっきらぼうに言う。いつものように。だけど、

「隆二が連れて来てくれたのよね？ ありがとう」

優しく微笑まれる。

「びっくりしたよね。ごめんね」

彼女があまりにもいつもどおりに笑うから、

「茜」

耐えられなくなった。やっぱり耐えられなかった。いつもどおりなんて、できなかった。

茜の横に跪き、その手を握る。握ったその手を祈るように額につける。

「隆二？」

「おいていかないでくれ」

子どものように、必死にその手に縋りつく。

「頼むから。もうこれ以上、一人にしないでくれ」

先生との約束を破ったことになってしまうことはわかっていた。茜が困ることもわかっていた。けれども、言わずにはいられなかった。さっきまで感じていた、茜を失うかもしれないという恐怖から脱却なんてできなかった。そいつはまだ、隆二の足を引っ張っている。引きずり込もうとしている。地獄へと。

「茜がいないと、無理だ」

声が震える。一度望んでしまったから、一度手に入れてしまったから、もう失うことを考えなくなかった。怖かった。今、茜がいなくなって、そしたらその先に待っているのは、地獄だ。

「……うん、心配させて、ごめんね」

握ったのと反対側の手で、茜がそっと隆二の頭を撫でた。

「ごめんね隆二、ありがとう」

そっと頭を撫でられる感触。子どもの時のような。

「違う、――」

「え？」

「俺の名前、人間のときの。――っていうんだ」

もう二度と、口にするつもりのない名前だった。捨てたつもりの名前だった。それでも、
「茜にだけは、覚えていて欲しい」

その名前と呼ばれる時、自分は人間だったから。

「ん。――」

久しぶりに聞いた、自分の名前はなんだかととても懐かしくて、泣きそうになった。

「一緒にいてくれ」

「一緒にいるよ」

ここにいるよ、と囁かれた。この手を絶対に離してはならないと、自分に課した。

その後は表面上、何事も無く過ごした。ただ少し、前よりも隆二が茜の体調を心配して、口うるさくなっただけで。周りの隆二を見る目が一瞬、奇異なものを見る目になったくらいで。

だけど、時は止まらない。茜の時は止まらない。隆二ひとりを残したまま、世界の時間は進む。

耐えられなくなった。

それは、本当に、ある日突然来た。

自分がここにきて、どれぐらいの月日が経っただろう？ あの小さな子どもだった太郎も、今ではもう缶蹴りで遊んだりしない。

いつのころからか、茜は月日がわかるものを全て家の中から撤去した。そんなものない、とでも言いたげに。それは彼女の優しさだったのだろう。けれども、不明だということが、余計隆二の焦燥感を煽った。

今はいつで、ここにきてからどれぐらい経って、茜は今いくつで。あと、どれだけ時間が残されているのだろうか？

永遠なんてないのは知っている。いずれ茜はいなくなる。それまであと、どれだけ残されているのだろうか。

おいていかれる恐怖に耐えられなくなった。このままここにいたら、自分はどうになってしまうのだろうか。

だから、逃げた。逃げたのだ。

少し行きたいところがある。外の世界を見て来たい。大丈夫、少し旅行するだけだから。

そんな風に告げた自分の言葉の裏の意味を、茜がわかっていなかったとは思えない。もう二度と、戻ってくるつもりがないことを彼女は察していたのだろう。もしかしたら、聡い彼女のことだ。もっと以前に覚悟を決めていたのかもしれない。

「人は簡単に『もの』になってしまう。だから貴方は、誰も殺さないと、自分も殺されないと約束をして」

茜はその時、幾つかのことを隆二に約束させた。

「決して生きた屍にならないで。貴方は生きていて。どんなにめちゃくちゃでもかっこわるくても構わないから、生きていて」

今生の別れのような約束。茜からのお願い。

「それから、」

茜はそこで、微笑んだ。

「私は此処で待っています。ずっとずっと。だから」

茜はよそを向いていた隆二の頬を両手で挟むと、無理矢理自分の方を向かせる。体勢を崩し、片手を畳の上についた。

「だから、絶対に帰ってきなさい。いつになっても構わないから」

告げられた言葉に返す言葉がない。何を言っているのかわからない。

「……約束ぐらい、しなさいよ」

かすれたような声で言われて、申し訳ない気持ちになる。勝手に振り回されたのだ、怒ってもいいし、泣いてもいい。そんな風に言った自分が、今彼女を振り回している。感情を制御させてしまっている。

「……ああ」

小さく呟くと、茜はそっと隆二の頬に唇でふれた。

「約束、だからね」

そのまま、頭をそっと抱え込まれた。抵抗はしなかった。出来なかった。

「……ああ」

「帰って、きなさいよ。待っているから」

「……ああ」

「本当に、わかっているの？」

「……わかっては、いる」

約束はできないけれども、わかってはいる。その言葉に、茜は特に何も言わなかった。意味がわからなかったわけ、ないだろうに。

「……ずっとずっと、待っているからね。ねえ、――」

そうして、彼女だけには教えた隆二の本当の名前を呼んだ。茜がその名で呼ぶのは、あの時以来だった。最初の時以来だった。

ああ、そうか。これは本当に最後の挨拶なんだ。

「待っているから……」

茜の家を出て、そこから一目散に走って逃げた。はやくどこか遠いところに行きたかった。ずっとずっと走って逃げて、かなり離れたところに行き、そこでしばらく一人で暮らした。一人きりの空虚な生活だった。

一度、心が落ちついた時があった。帰ろうと、思ったことがあった。少し情けない顔をして帰ったら、茜は仕方ないわねと笑って受け入れてくれる、そんな気がした。

離れてわかった。自分が如何に酷いことをしたのかを。茜の心を傷つけたのかを。自分にはや

はり茜が必要だと。彼女を看取ることは、きっと心臓を抉られるような思いがすることだろうけれども、自分の知らないところで彼女がいなくなるよりずっといい。そんなことになったら自分はきっと、悔やんでも悔やみきれないくらい後悔する。少し離れたことで、そう、思えるようになった。

だから、帰ろう。

そうしてまた、あの村に戻った隆二を待っていたのは、

「……隆二兄ちゃん？」

少し遠くで、呟かれた言葉だった。振り返る。遠くにこちらを伺う精悍な顔つきの男が一人。右手で小さな女の子の手をひいている。その隣には、赤子を連れた女性もいた。

「太郎さん、お知り合い？」

「おとーさん？」

「ん、いや、似てるけど。もう何年も経ってるのに変わってないから別人だよ。それに」

本来なら聞こえないような会話も、超人より優れた五官を持つ隆二には届いてしまった。

「茜姉ちゃんを見捨てたあの人が、戻ってくるわけない」

そうして太郎は、小さな声で呟いた。

「一人ぼっちで死んじゃって。可哀想に」

それを聞いた瞬間、きびすを返して村から逃げた。

遅かった。遅かったのだ。

待っています。

彼女の言葉が、耳元で聞こえた気がする。

「……ごめん、茜、ごめん」

嘘をついて、帰らなくて、約束を守れなくて、一人にして。身勝手に。卑怯で。

「ごめんなさいっ」

第四幕 逃走猫の帰巢本能

「だから、俺は逃げて、茜から。嘘ついて、卑怯だろ？」

俯いたままぼつぼつと言葉を紡いでいた隆二はそこで初めてマオの顔を見た。そして、
「ちょっ」

慌てる。ぼろぼろと、こぼれ落ちている涙を見て。

「待て待て、何故マオが泣く？」

『だってえ』

マオは掌で目をごしごし擦りながら、

『隆二、辛かったよね』

「別に俺は卑怯者だから辛いとか」

『そうやって、自分のことまだ許せないでいる。そういうの、辛いよね』

赤くなった目でまっすぐ見られる。

「……俺を許していないのは、茜だよ」

それに耐えられなくて視線を逸らす。

『茜さんは、隆二が逃げたからって隆二を恨むような人なの？』

まっすぐに投げられた言葉に、視線をまたそちらに向ける。

『もし、茜さんがそれで隆二を恨むような人なら、隆二はそれを気にする必要はない、と思う。だっておかしいもん。あたしは、隆二が嘘つきでも卑怯でも今更そんなの気にしない。茜さんは隆二のこと好きなんでしょう？ だったら、そんなこと気にしないと思うの。だって隆二が死ななくて、茜さんが人間なこと、茜さんだってわかっていたんでしょう？』

好きなら許せるから、とマオは躊躇わずに言い放つ。

「……そんなに簡単に、決められたらいいな」

愛しているから、恨む。そういう感情を、この幼い居候猫はきっとまだわかっていない。愛していたからこそ、恨まれる。

「でも、ありがとう」

それでも、マオのその言葉が、気遣ってくれているのがわかって、珍しく素直に礼を言った。

『あたしね、隆二のこと、軽蔑、したりしないよ。だって、隆二にとっての茜さんは、あたしにとっての隆二と同じなんでしょう？ どうしたらいいかわからない時に、優しくしてくれた人。世界みたいな人。大好きで、大事な人』

小さく首を傾げるマオに、少し躊躇ってから一つ頷く。そうなのか。マオにとっての自分が特別な存在であることは認識していたが、そこまでも、特別で大きな存在なのか。自分にとっての茜ほどに。

『あたし、今もし隆二がいなくなっちゃうとか言われたら、そんなの耐えられないもん。怖くて、どうしたらいいかわからなくなって、逃げちゃうかも。それ、わかるもん』

だから軽蔑したりしないよ、とマオは小さく笑った。

「……うん、ありがとう」

受け止めてくれて。

『でも、どっちにしても隆二が後悔してることに代わりはないんだよね』

もう一度ごしごしと目を擦り、マオは隆二の顔を正面から捕らえた。

『だから、隆二。だったら、茜さんに会いに行こう？』

「……会いに？」

『お墓参り。お墓参りは死者のためじゃなくて、生きている人間が自分を慰めるためにもあるって、テレビでみたよ。隆二、それもまだ行ってないんでしょう？』

そしたらきっと、隆二は自分のこと許せるよ、と屈託なくマオは笑う。

それを見て、ずっと腑に落ちた。ああ、誰かにこの話をしたかった本当の理由は、誰かにこうやって言って欲しかったのかもしれない。謝りに行くきっかけを作って欲しかったのかもしれない。

「……一緒に、きてくれるか？」

尋ねた声が小さくてかすれていて怯えていて、自分でもびっくりする。ずっと謝りに行きたかった。ずっとずっと。だけど、一人じゃ怖いから。勇気が出ないから。だから、誰か背中を押して、そして一緒に。

『うん！』

マオは当たり前のように頷いた。

「やあ、話は終わったかい！」

絶妙のタイミングでドアを開けて入って来たのは、京介だった。こいつ、タイミングを測っていたな。どうせ全部聞いていたのだろう。

『京介さん、お買い物は？』

手ブラの京介にマオが不思議そうに尋ねる。

「買い忘れたのは気のせいだった」

『あらら、うっかりはちべーねー』

「本当だよねー」

だからどうしてそんな見え透いた嘘を信じ込んでしまうのか。

「茜ちゃんのところ行くんだろ？ せっかくだし俺も」

「お前は来るな」

全て言い切る前に言葉を被せた。なんで連れて行ってもらえると思うのか。

「隆二、お前、一人で行けるのか？」

少し唇の端をあげた京介が、揶揄するように言う。

「う……」

返す言葉が見つからない。

確かに、過去あの場所に行った時は一人で歩いて行った。だから、そこそこの時間がかかったはずだ。今回はマオも連れているし、それは避けたい。疲れはしないだろうけど、ぶーぶー五月蠅そうだし。

しかし、極度の機械音痴であり、社会にかかわらないで生きている隆二には、交通手段の目安

がつかない。新幹線？ 新幹線の切符って何処で買うんだ？ そもそも、どれに乗ればいいんだ？

「……まあ、電車とか手配してくれるなら一緒に来ても良いけど」

しづしづそう言うと、

「おう、まかせろ」

良い笑顔で京介は請け負った。

善は急げとでも言うように、翌日には出発していた。

「……なにもそこまで張り切らなくても」

朝一の電車に乗るために道を歩きながら隆二はぼやいた。

『思い立ったが吉日でしょう！』

隣を浮いていたマオが胸をはって言った。それはそうなのだが。

「せっかく新幹線のチケットとれたしさ」

昨日、俺ちょっとチケットとってくるよ！ などと言って京介はあの後すぐに家を出て行って

いた。

「でも、もっと遅い時間でも」

「今から出ると十時には着くし。最悪日帰りも出来る時間っしょ。もうちょい後でもいいけど、始発の方がマオちゃん楽でしょ？ 人少ないから、隆二も気兼ねしないでマオちゃんに話しかけられるし。これがラッシュ時になると、隆二話さないでしょ？」

『えー、そんなのあたしつまないっ！』

「でしょ？」

「……意外と考えてるなあ」

「意外とってなんだよ。それに、はやくしないと、隆二の決心がまた鈍るだろ？」

行くと決めた以上、はやく謝りたい気持ちもある。それでもやっぱり、どこか気が重い。怖い。凶星を指されて押し黙る。

『一人じゃないから、平気だよねー？』

マオが無邪気に笑う。

「……ああ」

それに少し心が和んだ。大丈夫。今なら帰る場所もあるし、一緒に行ってくれる居候猫もいる。あと、また別の居候も。

そんなことを言い合っている間に、駅に着く。

『あたし、電車って始めてー！』

楽しそうに笑うマオを見て、遠足かなにかと勘違いしてるんじゃないか？ という気もしてきたが。

ホームに電車が滑り込む。人はまばらにしか居ない。

椅子に座り、その隣にマオも腰を下ろした。進行方向とは逆方向の隣。それを見て京介が、

「あ、マオちゃん。隆二に掴まってた方が」

『え？』

ドアが閉まる。電車がホームから離れる。ゆっくり動き出す。駅が少しずつ遠のき、
「……そうか、幽霊か」

マオの姿も少しずつ、遠ざかって行く。

『えっ、えええっ！！』

幽霊は電車に乗れない。なぜならば、車両に接していないから。車両は幽霊の体をすり抜けて行く。

慌てたマオが、こちらへ向かおうと必死に手足を動かすが、加速を続ける車両には敵わない。

「あー、だから掴まってた方がいいって」

「わかってたなら先に言ってやれよ、お前」

「隆二が気づいてあげなよ、そこは。せめて、進行方向に座ってれば良かったんだけど」

必死に頑張っているがちっとも姿が近づかない、寧ろ遠のいているマオに向かって、

「次の駅で待ってる」

軽く片手をあげると、

『ひーとーでーなーしー！！』

叫び声が返ってきた。だからそうなんだってば。

『もう、本当、信じられないっ！　なんで先に行っちゃうの？』

次の駅で下車し、待っていた隆二達の元に全速力で飛んで来たらしいマオは、着くなり矢継ぎ早に文句を言い出した。

「ちゃんと待ってただろうが、ここで」

『どうにかしてよ！　その前に！』

「無理だろ、あの状況じゃ。常識的に考えて」

『もー、本当あり得ない！　ひとでなしっ！』

言いながらもマオは、しっかりと隆二の背中にしがみついている。

やってきた電車に乗り込む。しっかりと隆二にしがみついたマオは、電車と一緒に動くことに成功した。

『は一、よかったあー』

「最後まで気、抜けないな、お前」

手を離したら、あっという間に置いて行かれる。

「まあ、隆二の膝の上にでもずっと座ってれば大丈夫でしょう」

それは果たして本当に大丈夫なのか、色々な意味で。

「でも、この路線、一駅間短くて良かったよね。すぐに追いつけて」

『その、新幹線と違ってというのは、駅と駅が遠いの？』

恐る恐る尋ねたマオに、

「遠いよ」

真面目な顔をして京介が頷いた。

『……気をつけなきゃ』

気を引き締めたらしいマオが、ぐっと手に力をこめた。やめろ、首が絞まる。

そんな、普段なら呆れ返るようなドタバタ道中だったが、今回ばかりはそれに救われた。暗い思考にならなくていい。

新幹線の中、隆二の膝に座り、隆二の首筋に手を回し絞める勢いで力を入れ、隆二にちゃんと自分の腰を支えるように口うるさく注意しながらも、窓の外を瞳を輝かせて眺める居候猫に感謝する。一緒に来てくれて、ありがとう。

久方ぶりに降り立った駅前は、当時の面影を残しているような、全然違うような、不思議な印象を与えた。露骨な高い建物等はないが、前よりは少し活気づいている気がする。

駅前にある花屋で、小さな花束を買った。それを見ていた京介が、

「じゃあ、俺はこの辺りで適当に時間潰してるよ」

『あれ、京介さん、一緒に行かないの？』

「うん、遠慮しとく。終わったら適当に探して」

気をつけてね、と笑って京介は片手を振った。

「……ありがとう」

ああ、なんだ。変な野次馬根性とか、おせっかいとかじゃなくて、本当に心配して一緒に来てくれたのか。それに気づき、小さく頭を下げた。

「暇だしね」

京介はのんびりとそう言うと、どこかに向かって歩き出した。

「……じゃあ、行こうか」

その背中から目を離し、宣言する。気合いを入れる。

『うん』

まだ背中にくっついたままだったマオが頷いた。

記憶を頼りに歩いてく。周りにあるものが変わっても、長い時間が経とうとも、ここでの生活は脳内にしっかり焼き付かれている。道はすぐにわかった。

「そういえば、墓の場所、わかんないな」

記憶の中に寺はあるが、そこかはわからない。もし仮に一条家の方で弔ったのだとしたら、この辺りではないのかもしれない。

『ありゃ、困ったねー。誰かに聞くとか？』

なんて言って聞けば良いんだよ。不審過ぎるだろ。

「まあ、とりあえず家の辺りまで行って、そこから考えてもいいか」

大事なものは茜に謝るということ。この土地で、茜に謝るということだから。どこか二人に関係する場所で謝ればそれでも。

そんなことを思っていると、土手にさしかかる。あの日、初めて茜に出会った場所。

いくらか整備されて綺麗になっているそこに、目を細める。

『あー、これが噂の土手？』

「ああ」

マオの言葉に頷き、

「……あ」

川縁で佇む人影に、視線が固定される。思わず足が止まり、

『りゅーじ？』

不思議そうなマオが名前を呼ぶ。

『どーしたの？』

隆二の背中から離れ、マオが顔を覗き込んでくる。

だけど、人影から視線がそらせない。

肩より少し長い綺麗な黒髪、線の細いシルエット。見覚えのある柄の、着物。

『んー？』

マオも隆二の視線を追うように振り返った。

あれは。あの人影は。まさか、まさか、まさか。

『……幽霊？』

マオが怪訝そうに呟く。

人影がこちらに気づいたのか、ゆっくりと振り返る。

「あか、ね？」

小さく小さく呟く。

振り返った人影は、一瞬少し驚いたような顔をして、それから柔らかく微笑んだ。そして、

『お帰りなさい、隆二』

ぱさり、

手から力が抜け、花束が地面に落ちてバラける。

気づいたときには駆け出して、駆け寄って、茜の腕をつかんで、抱きしめていた。

「ごめん」

腕の中にとじこめた、彼女に向かって謝罪する。

「遅くなって、本当に、ごめん。茜、ごめん」

髪を撫で、腕に力を加えてもなんの感触もしないことに失望する。こんなになるまで待たせてしまった。

『違うでしょ、隆二』

たしめるように言われる。昔と変わらない声色なのに、耳以外の感覚器官で届く声に泣きそうになる。肉声じゃ、ない。

『ごめん、じゃないでしょう？』

「……待っていてくれて、ありがとう」

幽霊になってまで、長い間待っていてくれて。

『約束したじゃない』

茜は少し背伸びして、隆二の耳元で囁いた。

『おかえり』

「ただいま」

遅くなって、本当に、ごめん。

その様子を黙って見ていたマオは、くるりと踵を返すと逃げ出した。それは確かに逃げ出したのだ、と自分でわかった。

彼の想い人は幽霊になってまで彼を待っていた。幽霊になった彼女は、きっとずっと彼の傍にすることが出来る。寿命の問題は解消される。永遠に、一緒にいることが出来る。そして彼女は、自分みたいに厄介な居候じゃない。きっとあの人は、我が侘を言って隆二を困らせることも、人の精気を必要として危険を生じさせることもない。

隆二のあんな顔、始めてみた。あんな泣きそうで、嬉しそうで、愛おしそうで、とにかくあんな表情は絶対にマオに向けられることはない。あの表情を与えられるのはこの世界でただ一人、彼女だけだ。

『馬鹿隆二』

足が止まる。ゆっくりと地面に降りるとその場にしゃがみこんだ。

『あたしはもう居られないね』

あの人がいるならば、自分はその家には帰れない。自分はもう、居候猫にもなれない。

隆二はゆっくりと体を離す。正面から茜の顔を見る。記憶の中にあるのと同じ笑顔で茜は笑った。

「遅くなってごめん、ありがとう」

額と額をくっつけて、押し殺すように呟くと、彼女はただ首を横に振った。

『私こそ、ごめんなさい』

そういいながら彼女は隆二の頭を撫でる。

『先に死んじゃって。隆二が戻ってくるまで、絶対に待ってようって決めたのに。百でも二百でも生きていてやるって』

「茜……」

なんで彼女はこうなんだろう。恨み言の一つや二つ言ったって、決して罰は当たらないのに。

「一人にして、ごめん」

『先生と一緒にいてくれたから』

「……そっか」

好々爺という言葉がぴったりの茜の主治医を思い出す。

「先生は、やっぱり……」

『年だったから』

「そう、だよな」

生きている、はずがない。

「俺、先生にお礼も言わずに飛び出して来たからな」

なんて不義理なんだろう。なんて自分のことしか考えていなかったんだろう。

「茜にも先生にも、迷惑をかけるだけかけて……」

『気にしてないよ、先生も私も』

とんとん、と子どもをあやすように背中を叩かれる。

『来てくれて、本当に嬉しい』

「うん」

『ありがとう』

「こちらこそ。本当に、ありがとう」

まさか本当に待っていてくれるなんて。

顔を離し、代わりにその手をぎゅっと握る。茜もそっと握り返して来た。

『今は、誰かと一緒？』

微笑みながら尋ねられて、一瞬言葉に詰まる。

『誰かに言われないと隆二、あなたここに来る気にはならなかったでしょう？』

くすくすと笑われる。お見通しなのか、全部。

「……ごめん」

『いいの。帰って来てくれたんですもの。きっかけはなんだって』

「そうじゃなくて」

一緒に過ごしている人がいて。人じゃないけど。

『ああ。そっち？ それは、いいのよ。だって、隆二、一人はさみしいでしょう？ 私も貴方も、それはよく知っているじゃない』

だからいいのよ、となだめるように茜は笑う。

『永遠は長いでしょう？ 一人では』

「……そうだけど」

茜を一人にして、一人で待たせて、自分は他の人といたなんて……。

『本当に気にしないで。私ね、』

茜は少し躊躇うそぶりを見せた後、

『覚悟していたから』

隆二を見据えて宣言した。

『いつからだろう？ 貴方のこと、好きになってからかな。隆二がいつか、私以外の別の人のこと、好きになること。長い長いときをかけて、覚悟を決めてきたから、大丈夫。だって、それは仕方のないことでしょう？ 貴方の世界は長いから、一人孤独に生きるよりは誰かと居てくれた方がずっといい。ずっと、安心だわ』

「……ありがとう」

なんだか泣きそうになる。ああ、こんなにも、思われていたのか。

「でも、一つだけ訂正」

『なあに？』

「俺が好きなのは、愛しているのは、今でも茜だけだよ。これからも、ずっと」

茜は驚いたように大きく目を見開き、頬を赤くした。

『やだ、しばらく会わない間にそんなこと言うようになったのねっ』

早口で言われる。ああ、そうか、そういえば、好きってちゃんと言ったこと、なかったかもしれない。

『でも隆二、それじゃあ、今一緒に居る人はなんなの？』

「あれは居候猫」

躊躇わず答える。

「人じゃない、幽霊だよ。それも、研究所仲間」

出来るだけ軽い調子で言うと、茜は少し痛ましげに眉をひそめた。

「そういう顔するな」

『平気なの？』

「ああ。もう、死神もいないしな」

『そう。……その人、女の人？』

「人じゃない」

茜以外の人間と一緒に暮らすなんてあり得ない。

「女だけど」

『……可愛い？』

「まあ、可愛いは可愛いな。それに見てて飽きない」

『……そう』

答えてから茜が頬を少し膨らませたことに気づき、思わず笑う。ああ、可愛い。本当に可愛い。同じ可愛いでも、種類が違う。愛おしい。

「茜の方が可愛い」

手をそっと引っぱり、顔を近づけて耳元で囁くと、

『！』

茜は弾かれたように顔をあげ、

『もうっ、本当にっ、どこでそういうの覚えてきたのっ！』

はしたないっ、と叫ばれる。それがさらにおかしくて笑う。ああ、このやりとりがたまらなく愛おしい。

『笑わないっ』

「はいはい」

『もうっ』

茜は一度頬を膨らませ、

『隆二』

真顔に戻って、隆二を見つめた。

『約束、忘れて』

「忘れてって」

『私、たくさん約束させちゃったでしょう。帰って来て、以外にも』

頷く。全部ちゃんと覚えている。殺してないし、殺されていない。生きている。生きる屍にならないという点は、今はともかくちょっと前まで微妙に守れてなかったが。

『その約束、一旦忘れて。もう十分守ってくれたから。約束にとらわれないで、今度はその人を、今一緒に居る人を守ってあげて』

「でも」

茜との約束を忘れるなんてこと、したくない。

『色々あるのでしょうか？ 研究所絡みなら』

眉をひそめながら言われた言葉に、

「……ああ。そうだな。わかった」

小さく頷いた。もし今後、研究所がまたマオを求めることがあったら、この前のように誰も殺さずには済まないかもしれない。

『……でも、一つだけ、我が侘、言っても良い？』

「勿論」

間を置かず首肯する。茜の我が侘なんて今まで聞いたことがあっただろうか？ そしてそれを、自分が断ることがあるだろうか。

『あのね』

茜は少し恥ずかしそうにもじもじしたあと、耳元でそっと告げた。

『名前、教えないで。あなたの、本当の名前。もう二度と、誰にも』

「……名前？」

『そう。――』

そうして茜は、彼女にだけ教えた彼の本当の名前を呼ぶ。とても、とても久しぶりにその名前を聞いた。

『あのね、私だけ特別って、思いたいの』

照れたように言われた言葉に、迷わず頷いた。

「約束する」

今度こそ。それを守る。絶対に。自分が人間として接した、最後の人間は茜だ。今後も、ずっと。だから名前は、誰にも教えない。

『ありがとう』

茜も頷く。

『……私、そろそろいくね』

そして呟かれた言葉に、心臓が跳ねる。もう？ もういつてしまうのか。そんな思いが胸を過る。けれども、死した人間がいつまでもこの世に留まることは、本来あってはならないことだ。彼女は長い間、ここに留まっていた。約束を果たせた今、はやくいかせてあげないと。

「……わかった」

『ああ、もう、隆二』

茜が困ったような顔をして、両手で隆二の頬を包む。

『そんな泣きそうな顔をしないで。私、会えて嬉しかったから。本当に本当に、嬉しかったから』

「うん。待っていてくれて、ありがとう」

『帰って来てくれてありがとう。ねえ、隆二。私、貴方が居てくれて本当によかった。一条葵の予備としてではなく、一条茜として楽しいときを過ごせたのは、貴方のおかげよ。本当に感謝している』

「俺だって」

俺だって感謝している。茜に会わなければ、あの死神が現れた段階で消えることを選択していたかもしれない。茜と過ごしたあの日々は、本当に楽しくてかけがえのないものだった。永遠に。これからも。大事な思い出だ。

「感謝している」

『うん。ありがとう。大好き』

両手が頬から外され、背中にまわされる。隆二もそっと、その背中を支えた。

『楽しかった。本当に楽しかった。一緒に居られてよかった。大好き』

彼女の声が少し震えている。腕に力を入れる。

「俺も」

自分の声も震えていた。ああ、これで。今度こそ。本当に。最後だ。

「……茜」

『なあに？』

「もう一度呼んで」

それだけで伝わった。茜は隆二の腕の中、顔をあげ、

『一一、愛している』

そっと告げた。

「……うん」

『泣かないで、一一』

そう言った彼女の目だって、潤んでいる。

『本当に、もう、いくね。このままずっと、ここにいたくなってしまう前に』

「うん。……茜」

片手を離し、代わりに頬に添える。そっと身を屈めると、彼女も目を閉じた。唇が触れ合う。感触はないけれども、脳が覚えている。

目をあけると、茜が恥ずかしそうに笑った。

『本当にありがとう。大好き』

もう一度そう言うと、彼女は隆二から手を離す。

「こちらこそ。ありがとう。本当にありがとう。愛してる、ずっと」

隆二も素直に手を離した。

茜は一步、隆二から距離をとると、綺麗に、柔らかく、微笑んだ。今まで見た中で、一番綺麗な顔だ。

『さよなら、一一』

「さよなら、茜」

そうして、一条茜の魂はこの世から姿を消した。

茜を見送り、こっそりと目元を拭う。

やっと、約束を果たせた。そのことに安堵する。

「マオ、悪い、待たせた」

そうやって出来る限り微笑んで見せながら振り返る。

「……マオ？」

そこに居候猫の姿はなかった。

第五幕 猫叱るより猫を囲え

京介は、駅の近くにあった公園で時間をつぶすことにした。ベンチに座り、一人のんびりとコンビニで買った団子を食べる。これがなかなか美味しい。

ちらほらと、乳幼児を連れた母親が公園にやってくる。それを目を細めながら眺める。

『京介さんっ』

頭上からかけられた声に、少しのデジャヴを覚えながら京介は上を向いた。

「マオちゃんどうし……、どうしたのっ？」

軽くかけた声が、思わず大きくなる。視線の先に居たのは、くしゃくしゃに泣いたマオだった

。

急に大声をだした京介に視線があつまる。さすがにそれが気になって、慌てて声を小さくし、

「どうしたの？」

手招きすると、マオは隣に座った。ぼろぼろに泣いた彼女の頭を撫でる。

「隆二は？」

『茜さんのところ』

「ああ、お墓見つけたんだ」

『違うっ』

しゃくりあげながらマオが叫ぶ。

『違う違う違うっ、待ってたっ。あの人、本当に待ってたっ』

「待ってた？ 茜ちゃんが？」

『幽霊になってまで、待ってたっ』

「……そっか」

二人の絆は、まだ切れていなかったのか。茜はそこまで隆二のことを思っていたのか。あの二人は人間と化け物の壁を越えたのだろうか。それなら、自分は。

『あたしっ、居られなくなっちゃうっ』

「……え？」

マオの叫びに、京介は思考を中断させる。

『あの人が幽霊なら、ずっと隆二と一緒に居られる。そしたら、あたしっ、あの家に居られない。もう居場所がないっ』

そうしてマオは膝をかかえ、そこに顔を押し付けた。

「マオちゃん……。いくら隆二でも、マオちゃんを見捨てたりしないよ」

いや、違う。

「隆二だからこそ、マオちゃんのこと追い出したりしないよ」

同族の中で、一番情が深いのが彼なのだから。

『だけどっ』

マオが顔をあげ、吠える。

『隆二が追い出さなくても、あたしっ、あんな顔する隆二と、あの人のところになんか居られ

ないっ』

「……そっか」

それもそうかもしれない。

『もうやだ。謝りに行こうなんて言わなきゃよかった』

「……マオちゃん」

『……嘘だよ。謝りに来たのは、よかったと思ってるよお』

マオは、抱えた膝に顎をのせた。

『隆二、悲しそうだったから。辛そうだったから。自分のこと責めて。だから、謝りに行こうって言ったのは、後悔してないよ。だって隆二のこと、心配だったから。だけど。こうなるなんて、思ってなかったから』

「優しいね」

マオの頭をそっと撫でる。

「隆二のこと、考えてここに来たんだもんね」

『優しくないよ。知ってるもん。本当に優しい人は、こういう時に、こうやって喚かないもん。本当に隆二のこと考えてたら、大事な人と一緒に居られるようになってよかったね、って言うんだよ。知ってるもん』

だけどっ、と続けた声が、また一段と涙声になる。

『だけどっ、あたし、よかったねなんて言えない。あたしは、あたしが、隆二と一緒に居たい……』

そのまま顔を膝に埋める。

『……こんな風に我が侘だから、駄目なんだよね、あたし。いつも隆二を困らせて、迷惑かけて。だから一緒に居られなくなっちゃう』

くぐもった声。

京介はしばらくそんなマオを黙って見ていたが、

「マオちゃん」

その腕をそっと引く。マオの体が少し京介の方に傾く。マオが顔をあげる。

『……京介さん？』

涙に濡れたその緑色の瞳を正面から捉えて、京介はいつになく真面目な顔で問いかけた。

「なら、俺と一緒に居る？」

居候猫がいなくなった。

最初は気を使ってどこか少し離れたところで待っているのかと思った。しかし土手周辺を探しても見つからず、隆二は慌てて来た道に戻った。こんな不慣れな土地で、一体どこに行ったというのか。

最初はただの早足だったのが、気づいたら駆け出していた。不安が胸をかすめる。迷子になっていやしないだろうか。なにかあったんじゃないだろうか。

駅近くまで戻ってくる。公園の横を抜けようとした時、公園を覆うように生えた木々の間から

、ベンチに座る見知った後ろ姿を発見した。

「京介！」

名前を呼ぶと、京介は不機嫌そうな顔で振り返る。

「マオ、知らないか？」

「……いるよ、ここに」

不機嫌そうに吐き捨てられた。

「そっか……」

それに安堵する。とりあえずいるならば、いい。

京介は何故か眉を吊り上げ、

「はやくこっち来い」

冷たく言うと、隆二にまた背を向けた。

「何怒ってるんだ？」

小さくぼやきながらも、入り口にまわりベンチに駆け寄る。

「マオ！」

ベンチの上、体を丸めるようにして横たわっているマオの姿に、少し焦る。なにか、あったのか。

「どうした？」

「大丈夫、眠っているだけだよ」

近づくと、確かに眠っているようだった。マオの頭を撫でる。

「……泣いたのか？」

頬に残る涙の後を見て、そう問いかけると、

「そんなに心配ならもっと大切にしていればどうなんだ？」

冷たく吐き捨てるように言われた。

「……お前、さっきから何怒ってるんだ？」

「そんなことも言われなきゃわかんないのかよ」

睨みつけられる。

「茜ちゃん、会ったんだってな」

「ああ」

「お前のことだ、久しぶりに茜ちゃんに会って、会えて、マオちゃんのことなんかころっと忘れてた」

「……否定は、しない」

だけど、お前だって俺の立場だったらそうしただろが。言い訳は、なんとか飲み込んだ。

「考えなかったわけ？ 茜ちゃんが待ってるのみて、マオちゃんがどう思うかって」

まあ無理だよな、とバカにするように笑われる。なんだっていうんだ、さっきから。

「居られなくなる」

「は？」

「茜ちゃんが幽霊になっているなら、隆二とずっと一緒にいられる。そうしたら、自分はもう隆

二の家に居られなくなる。そう言って泣いてたよ、マオちゃん」

「……そんなこと、あるわけないだろうが」

そんなバカなことで悩んでいたのか、この居候猫は。今更追い出すわけ、ないだろうが。

もう一度、バカな居候猫の頭を撫でた。

「大体、幽霊だからって茜とずっと一緒にいられるわけないだろ」

成仏した方がいいに決まっているのだから。

「マオちゃんにそんなこと、わかるわけないだろ」

「……そうかもしれないが」

「マオちゃん、泣いてたけど、こうも言っていた。それでも、謝りに行こうって言ったことは後悔してないって。隆二が辛そうだったから、ここに来たことは後悔してないって」

何か言おうと口を開き、結局何も言えなかった。眠るマオを見る。

そんなこと、思っていてくれたのか。でも、考えてみればいつもそうだったかもしれない。自分勝手に、自由気ままで、気分屋で。振り回されているけれども、彼女の思考はいつも神山隆二に向いていた。茜の話をするときだって、辛いなら話さなくていいと、言ってくれた。

「……ありがとう」

小さく呟き、その頭をもう一度撫でた。

未だに不機嫌そうな顔で京介が言葉を続ける。

「マオちゃんがあんまり泣くから、俺思わず言ったよね。なら俺と一緒に居ればいいって」

「お前なっ」

簡単に言う京介に、かっとなった。

「なんで怒るんだよ」

「無責任にそういうこと言うなよっ」

「どっちが無責任だよ、俺は本気で言った！」

「茜からは手を引けてあんなに言ってたお前がかっ？　ずっと、永遠に、マオの面倒見るつもりがあるっていうのかよっ」

「茜ちゃんとマオちゃんはまた別だろうがっ」

「何がっ」

「茜ちゃんは人間で、マオちゃんは幽霊だろ。前提条件が違うっ。俺は、マオちゃんならずっと一緒にいてもいいと思ってる」

「ふざけんな」

「ふざけてるのはお前の方だっ」

一際大きな声で叫ばれ、指をつきつけられる。周りの視線が集まるが、もうお互い気にしていない。いられない。

「盗られたら困るなら、最初から盗られないようにしろよっ！」

「盗る盗らないってなんだよっ。そういう話してないだろっ」

「してるだろ。大体、マオちゃんに断られたつーの！」

吐き捨てるように怒鳴られた。それに次の言葉を出そうとしていた口が止まる。京介はゆっく

り息を吐き、落ち着きをいくらか取り戻してから、

「隆二じゃなきゃ、意味がないってさ」

俺ってば超惨め、と続ける。

隆二は再びマオに目をやる。今の騒ぎでも起きる気配はない。よほど、疲れているのか。

「隆二」

名前を呼ばれて、京介に視線を移す。すっかり落ち着いた彼が、珍しく真剣な顔で言った。

「マオちゃんを茜ちゃんの代わりにするのはやめろ」

「代わりになんてしていない」

心外だな、と続ける。心の底から。こいつがなにを考えているかわからない。マオが茜の代わり？ バカを言うな。

「マオが茜の代わりになんかなれるわけないだろ」

「……そっちかよ」

うんざりしたように京介がため息をつく。

「ナチュラルにひどいんだよ、お前は」

「大体なんで代わりなんていう発想がでてくるんだ？ マオは幽霊なんだから茜とは違うだろ」

「だからそっちかよ本当お前はだめだなこの唐変木」

先ほどとは違い声を荒げることはないが、妙に早口で苛立っているのが感じられる。

「何怒ってるんだよ。大体、マオが幽霊で茜とは違うって言ったのはそっちが先だろ」

「確かに言ったけどさ、そうじゃなくて。なんで言わないとわかんないんだよ。茜ちゃんもマオちゃんもこんなのどこがいいんだよ」

あからさまなため息をついて、京介は両手で顔を覆った。そのままの姿でしばらく固まる。どうしたものかと隆二も黙ってそれを見ていた。

「いや、もういいや」

小さく呟いて、京介が顔をあげる。

「うん、とにかく俺が言いたいのは、もうちょっとマオちゃんのこと考えてあげろよ、ってこと。それぐらい、お前にだって出来るだろ」

「なんかバカにしてないか」

「なんでバカにされないと思うんだ」

本気でこいつ大丈夫か、とでも言いたげな顔で見られる。

「まあ、いいや。今日のところは」

言いながら京介は立ち上がり、

「とにかく！俺は先に帰るからな。ちゃんと仲直りしてから帰って来るんだぞ」

そうして後ろを向く京介を、

「ちょっと待て」

隆二は引き止めた。なにもいわず京介が振り返る。顔になんだよお前、と書いてある。

「金がない、貸して」

その、なんだよお前という顔に右手を突きつけた。

「花買ったからあと千円しかない」

それでは帰れないことぐらい、さすがの隆二でもわかる。

「はぁ？　なんで遠出するってわかってるのにそれぐらいしかもってないんだよお前はッ！　貸してって言うのは返すあてがあるときだけにしろっ！」

「じゃあ頂戴」

「子供かッ！」

言いながらも京介は、財布からお札を抜き出し、隆二に手渡した。

「新幹線の切符買えるか？　無理だよな。わかんなかったら駅員に聞け。それならできるよな？」

じゃあな、と京介は振り返り、

「京介」

「まだなんかあるのかよ」

うんざりと振り向く。

「鍵。もってないだろ」

そこにポケットから出した鍵を投げた。

「家、入れないだろ」

当たり前的事实を指摘しながら告げると、

「お前がいつまでたっても合鍵作らないからだろ！」

苛立ったように一度足を踏み鳴らし、京介が怒鳴る。

「帰りが遅くなっても、起きて待ってるなんてしないからな！　外に居ろ！　寧ろ野たれ死ね！　この唐変木っ！」

とんでもない罵倒だった。あいつ何をあんなにかりかり怒ってるんだ？　カルシウム足りないんじゃないか？

ずんずんとやけに早足で遠ざかって行く背中を見ながら思う。まあ、心配してくれているんだろうな、と好意的に解釈し、隆二はベンチに腰を下ろした。

丸まっているマオの頭を撫で、少し考えてからそっと自分の膝の上にその頭を載せた。まあ、これぐらいのことは、しても罰が当たらないだろう。

真っ昼間から男二人が怒鳴り合っていたからか、公園の人影はめっきり減っている。遊んでいた子どもには悪いことをしたな、とちょっとだけ反省した。

「なら、俺と一緒に居る？」

真面目な顔で京介に言われて、マオは面食らった。

『へ？』

「隆二と一緒に居られないなら。俺と一緒に居る？」

言われた言葉をゆっくりと吟味する。

確かに京介はマオのことが見えて、マオに触れる。隆二と同じだ。それに、隆二より優しいし、隆二と違って外で話しかけても怒らないし、疑心暗鬼ミチコのこともしゃべりながら話していて楽

しい。

だけど、

『……でも、隆二じゃなきゃ嫌だ』

いつも冷たくて話しかけてもあんまり構ってくれないし、ましてや外で話しかけると無視するし、すぐにバカにしてくるけど、

『隆二の方がいい』

違う。

『隆二じゃなきゃ、意味がない』

「……だよな」

京介は困ったように笑い、マオの頭を軽く撫でた。

「そうかなとは思ったけど」

『ごめんなさい』

せっかく、優しくしてくれたのに。

「ううん。マオちゃんが隆二のこと好きなのは、知ってるから」

『うん』

そうだ。マオにとって隆二は特別なのだ。特別に大切な人で、ずっと一緒に居たい。隆二じゃなきゃ駄目だから、一緒に居られないかもしれないことが、こんなにも悲しい。

『……帰りたいな』

居候猫でいいから、またあの家に置いていて欲しい。

目を閉じる。感情がぐるぐると回っていて気持ち悪い。さっきみたいな顔をマオに向けてくれなくてもいい。構ってくれなくてもいい。本当はもうちょっと構って欲しいけど。でも、構ってくれなくてもいい。困らせないように頑張る。だから、また、一緒に暮らしたい。

ぐるぐる回った感情と一緒に、気づいたら眠ってしまっていたらしい。目を開けると、空が見えた。それから、

「おはよ」

つまらなさそうに呟く隆二の顔。

よく見たら、膝枕されていた。

『ふえっ』

奇声をあげて飛び起きた。

勢い良く飛び起き、距離をとる居候猫を見て、少し胸が痛んだ。そんな怯えんでも。

『りゅ、りゅ、隆二？』

声が裏返っている。

『な、なんで。あれ、京介さんは？』

事態が理解できないとでも言いたげに、きよろきよろ視線をさまよわす。

「帰った」

『え、あ、そうなの？』

「とりあえず、落ち着け」

言って隣を指さすと、マオは恐る恐る隣に腰掛けた。いつもより、隆二との距離があいている

。

『隆二。……あの人は？』

「いったよ」

できるだけ何事もないように答える。

『え？』

「成仏ってやつ」

『え、だって、一緒に居無くていいの？』

「幽霊は成仏した方が良さだろう」

言って、マオを見て少しだけ笑う。

「お前は違うけど。マオは、俺と同じだろ？」

『……そう、同じ穴の貉なの』

少しの沈黙のあと、マオがそう呟いた。

「心配しなくても、マオのこと放り出したりしないよ」

軽く手の甲で頭を叩くと、

『なっ、なんか、京介さんから、聞いたのっ！』

真っ赤になって慌て出した。ああ、秘密にしておいて欲しいことだったのか。

「いや、別に。心配してんのかなーと思って」

『してないっ！ 別に平気だし！』

体の横で握りこぶしを作って叫ぶ。叫んでから、

『……ちょっと寂しかっただけだし』

小声で付け足した。それに少し笑みがこぼれる。

『なんで笑うのっ』

見咎められた。

「別に」

言いながら頭を撫でる。マオは小さくなんか言っていたものの、手をふり払ったりしなかった

。

「マオ」

『ん？』

「今日は、ついて来てくれてありがとな」

『……ん』

マオが小さく頷く。

「おかげですっきりした」

『……それはよかった』

マオの返答は、まだちょっとひねくれたような言い方だったが、顔は少し笑っていたからきっ

ともう平気だろう。拗ねたフリをしているけれども、隠し事の出来ない彼女のことだ。少し笑っているその顔が、今の心境の正解だ。

「……なあ、マオ、一つだけ、聞いてもいいか？」

撫でていた手を離して尋ねる。

『な、なに。あたし別に泣きわめいたりしてないからねっ』

聞いてないのにあっさり自白する。ほら、嘘がつけない。

「泣きわめいた？」

ちょっとからかってみると、

『例えばの話ですっ！』

怒鳴られた。

茜に言った、可愛いし見ていて飽きないというのは本当だ。茜も対外感情が顔に出るタイプだったが、その比ではない。感情が顔に駄々漏れで、隆二には予測不可能なことばかりする。マオが来てから、毎日が本当に刺激的で楽しい。

でも今は、からかって遊んでいる場合じゃない。

「まあ、マオが泣きわめいたかどうかはともかく」

『泣いてないからっ！』

「マオは、俺の過去の名前、気にならないのか？」

いつか、京介が来た日にした会話を思い出しながら問いかける。

泣いてないって怒鳴った顔のまま、次の抗議のため身構えていたマオは、投げかけられた質問が理解出来なかったのか、きょとんとした顔をした。

『へ？』

「だから、名前。京介が来た時に話しただろう。神山隆二になったきっかけ」

マオは少し考えるような沈黙の後、

『ならないよお？』

当然のような顔をして笑った。

『だって隆二は隆二だもん。あたしにとって隆二は出会った時から隆二で、今でも隆二だもん』

それからちょっと眉をひそめて、

『……隆二にとっても、あたしはマオだよな？』

伺うように尋ねてくる。その意味をしばらく考えて、

「ああ。マオはマオだよ」

一つ頷いた。G016なんていう番号は知らない。マオはマオだ。きっと、そういうことだろう。

マオは満足そうに一つ頷き、

『ん！ だから隆二も隆二！』

そう、断言する。

「……うん、ありがとう」

酷い質問だと、思わなくもない。ここに京介がいたら、罵倒されたことだろう。だけど、これ

からもマオといるためには必要な質問だと思った。マオと一緒にいても、茜との約束を破らないと、今度こそ破らないという確信が欲しかった。

『あたしは隆二と居られればそれでいいの』

機嫌を直したのか、自分の中でなにか折り合いをつけたのか、マオはいつもより少し広くとっていた距離をつめ、隆二に抱きついた。

それを素直に受け止め、隆二はマオに笑いかけた。

「帰ろう、うちに」

茜への罪の意識が完全になくなったとは言えない。でも軽くなった今なら、以前よりも素直に帰ろうと言える。今なら、マオとちゃんと向き合える。マオと二人の暮らしを、ちゃんと考えていける。

「そうしてまた、あの赤いソファに座って、二人でだらだらとテレビでも見よう」

あの赤いソファは、やっぱり一人には大き過ぎるから。

マオはぱあっと満面の笑みを浮かべると、

『うんっ』

大きく頷いた。

第一幕 居候猫と新たなる居候の現状

てれっててーと軽快なメロディが部屋に流れる。テレビ画面に流れるスタッフロール。

『は一、今日も君子かっこよかったあ』

興奮のあまり浮かし気味になっていた腰をすとん、っとおろしながらマオが呟いた。

ダイニングテーブルに頬杖をつきながら、隆二はそれを見ていた。

三十分間のマオのお楽しみタイム、七転びヤオ君子が終わり、

『高嶋くんが、君子の正体に気づきそうになったときは、ドキドキしたわ』

「正体バレるとガチョウになっちゃうもんね」

『そうそう。本当、よかったー。ってというか、高嶋くんのことですべて君子を脅すなんて本当サイテー！

！ 人の一番痛いところ、弱みに付け込むなんて！』

「悪いよねー」

『でも、高嶋くんと君子の関係はいつ進むのかなあ』

「んーどうだろうね」

『君子は地球を守ることで忙しいから、恋愛どころじゃないんでしょうね。……でも、どうして君子がいる地域しか襲われないのかな』

「不思議だねー」

『君子がいない場所を狙えば一発なのに。なんてというか、あかさかよね』

「あさはかだね」

『んー、それにしても、君子ってあと何話分ぐらいあるだろう。富子短かったし』

「富子は半分の二十五話しかないからね。でも君子はその分長いから、七十話分ぐらいあるんじゃない？」

『じゃあ、まだまだあるのね！』

「基本、月曜から木曜の週四での再放送だからあと……、ごめん、計算できないけど、まだまだ終わらないよ」

『よかった！ 君子まで終わったら寂しいもの』

マオと京介が今日の君子の感想を言い合う。主にマオの発言に、京介が微笑みながら相槌をうつ。隆二は黙ってそれを見ていた。会話の節々につっこみたい部分が多々あったが、さすがに野暮なのときりがないので自重する。

「っと、こんな時間か。夕飯の買い出し行ってくるねー」

『今日のご飯はー？』

時計を見て立ち上がった京介に、自分は食べないくせにマオが問う。

「今日は、サクサク衣のジャガイモ揚げ、トマトを添えて、だよ」

大げさに言っているが、それ、コロケとかだろ。そう思いながら、隆二は出て行く京介を見送る。

『隆二？』

テレビも終わり、京介もいなくなり、暇になったマオが隆二の方へ向かってくる。そうして、

隆二の顔を覗き込みながら、

『難しい顔してどうしたの？』

こーんな顔だよ、とぐぐっと眉間に皺を寄せた。

『あ、もしかして、ヤマトいやなの？』

ひらめいた、とでも言いたげな顔をするマオに、

「トマトな」

冷静につっこんだ。それ、食べ物じゃないだろ。

京介が神山家に居着いて、数ヶ月が経過していた。七転八倒富子が終わり、七転びヤオ君子がはじまってもまだ、京介はこの家に居た。再放送のあと、マオと楽しそうに今日の君子談義をするのも、いつものことになっていた。別にそれ事態が不満なわけではない。ただ、

「あいつ、何しに来たんだか……」

気味が悪いのだ。自分で全部お金を払いながら、家政夫のようなことをする。一体、京介になんのメリットがあるというのだ。

『隆二に会いにきたんでしょ？』

「会いに来てこっだけ長い間、ここに居る意味ってあるか？　そもそも、なんで会いに来たのかもよくわからんし」

『訊けばいいじゃん』

「訊いてあいつがちゃんと答えると思うか？」

『ううん』

さすがのマオもそこまで楽天的ではなかったようだ。首を横に振る。

『んー』

マオはしばらく悩んでから、ぽんっと両手を打ち合わせ、

『あたし、探っ来てあげる！　スパイ大作戦！　テレビで見た！』

嬉しそうに言うと、隆二の返事もまたずに、すいっと壁を抜けて行った。

「……大丈夫だろうな？」

マオが消えた壁を見ながら、隆二は小さく呟いた。

心配しか残らない。

『きょーすけさーん』

背中に声をかけられた声に、京介は振り返ると小さく笑った。

「マオちゃん、どうしたの」

『お買い物、一緒にいい？』

「いいよ」

マオは京介の隣をふよふよと浮きながら、その横顔をちらちらと見る。その視線に、

「どうかしたの？」

問いかけると、マオは慌てたように視線を逸らし、

『べ、別に！』

と、あからさまになにかありそうな返答をした。

しばらくその状態が続いていたが、マオは、

『あのね！』

意を決したように尋ねた。

『京介さん、何しに隆二の家来たの？』

放たれたのは、まぎれもないストレートだった。

京介は少しきょとんとマオを見つめてから小さく唇の端をあげる。

「隆二に聞いて来いって言われたの？」

『ええっ、ち、違うよっ』

マオは慌てて両手をばたばたさせながら、

『あたし！ あたしが気になったからっ』

早口で告げる。

嘘のつけない彼女の挙動に、京介は一度笑うと、

「俺はね」

表情を引き締めて、告げた。

「約束を破るために来たんだ」

『ん？ よくわかんないけど、約束は守らなくちゃだめよ？』

「まあそうだね」

真顔で諭された言葉に苦笑する。そんなことは、わかっている。

『それで、約束ってなあに？』

「それはいくらマオちゃんにでも教えられないな」

『えー』

マオが頬を膨らませる。

「そうだなあ、それだけで帰すのも悪いかな。マオちゃん、隆二に怒られちゃうもんね」

『そうだよ！ この役立たずって隆二に』

そこまで言ってマオは、はっと何かに気づいたかのように口を両手で押さえ、

『隆二は関係ないんだけどねっ！』

強い口調で言い切った。

「うん、そうだね。ごめんごめん」

あんまりいじめるのも可哀想になってそうフォローすると、マオが途端に安心したような顔をした。

『そうそう、隆二は関係ないの』

「隆二が関係ないのはいいんだけど」

少しぐらいなら、何かを教えてあげてもいいだろう。隆二が京介の行動を訝しんでいるのは重々承知しているのだから、ヒントぐらいは出してあげよう。

「そうだな、これは言うておこうかな。俺はね、隆二が心配なわけ」

『心配？』

「そう、あとの二人のことは心配してないんだ」

『あとの二人？』

「仲間の。あの二人は不死者であることを受け入れているから。英輔は死なないってことは甘いもの食べ放題じゃん！ とか言ってたし、颯太はなんか宇宙の研究を長いスパンで出来るとか張り切ってたし」

マオは、甘いもの、宇宙、と言われた言葉を覚えるように小さな声で唱えている。だから、少し油断していた。

「……俺と、隆二だけなんだよ、受け入れられていないの」

そんな言葉が思わず溢れ落ちた。

『俺と、隆二だけ……。ん？』

京介の油断を嘲笑うかのように、マオはその言葉を聞き取り、なおかつその意味もしっかり理解した。

『……京介さんも受け入れられないの？』

言いながら顔を覗き込むようなマオを、

「それよりマオちゃん、隆二ひとりだと寂しいから帰った方がいいんじゃないかな」

笑いながら言うことで牽制した。

『え？ 別に、隆二が寂しいなんて可愛いこと思うわけ……』

言いかけたところで、はたと気づいたように、

『寂しいね、寂しいよね！ 寂しいのはよくないよね！ あたし、帰るね！』

うんうんと何度も頷く。その顔には、はやく伝えなくちゃ、と書いてある。

『京介さん、お買い物付き合えなくてごめんね！』

「ううん、隆二によろしくね」

『うん、ちゃんと伝える。……じゃなくて、隆二は関係ないけどね！』

などと言いながら急いで戻って行く背中を見送って、小さく微笑む。

ああ、彼女は、なんて素直なんだろう。

幽霊であるマオは他人には見えない。一人で空気と会話しているような京介に、周囲が微妙な視線を向けてくる。

そんなもの、今更気にしない。今更そんなもの、どうでもいい。

「約束を破りに来たんだ」

自分の言葉を反芻する。

口にしてみれば、改めて胸に刺さった。ああ、そうだ、約束を破りに来たんだ。

「……ごめん」

ズボンの後ろのポケットに手を伸ばし、そこに収まっているものを確認すると、小さく呟いた。

「約束を破るねえ」

マオから報告を聞いた隆二は小さく呟いた。約束を、破る？

『一応ね、約束は破っちゃだめよって教えてあげたけど』

要らん世話だろ、それ。

『隆二、京介さんと何か約束したの？』

「いや、俺、基本的に約束とかしないから。めんどうだから」

契約ならたまにエミリ達と交わすが。それ以外に約束だなんて、せいぜい茜とした約束ぐらいではないだろうか。

そんなことを思いながらマオを見ると、

「……待て、お前なにそんなににやけてる？」

だらしなく相好を崩したマオがそこには居た。やや気味が悪い。

『え、だって、隆二あたしとは約束してくれたじゃない？ それって、特別ってことでしょうか？』

当たり前のように、弾んだ声でマオが答える。ふふ、っと嬉しそうに笑う。

ああそうか、一緒に学んでいこうというあれは、考えてみれば約束だった。

「……そうだな」

隆二は小さく微笑むと頷いた。

考えてみないとわかんないのかよ、とつっこむような人間はここには居ない。

『あ、あとね』

思い出した、とマオは両手を叩き、

『京介さんは隆二が心配なんだって』

「は？」

心配？

『えっとね、京介さんと隆二だけが、不死者になったことを受け入れられていないから、だっけな』

「いや、別に今更、受け入れられていないわけじゃ……っていうか、あいつも？」

『うん、京介さんも、って言ってた。あ！ なんかはぐらかされた！ 聞いたのに』

膨れるマオ。

それにしても、ここまで聞き出して来るとは思わなかった。適当に京介にあしらわれて終わりだろうと思っていた。

ということは、京介はこのことを隆二に伝えてもいいと思っているということか。マオに、相手が話す気がないのに聞き出してくる能力があるとも思えないし。

「それで？」

『ん、えっとね。えーすけさん？ は、死なないってことば甘いもの食べ放題！ って言ってて、そーたさん？ は宇宙の研究が出来るとか言ってたって』

「……何をしているんだ、あの二人は」

うんざりして溜息。ああ、でも目に浮かぶ。

甘いものを愛し過ぎている甘党の英輔は、甘い物さえあれば満足なのだろう。それはそれで、幸せなことだと思う。

最年長で一番賢い颯太が、この永遠の時間を使って何かの研究をするということも、考えられないこともない。

それに比べて自分はどうか。毎日毎日だらだらとテレビをつけて、本を読んで、コーヒーを飲んで、居候猫をからかって遊んで。非生産的な生き方だ。

確かに、その二人に比べたら、心配されても仕方がない。

「……なるほどねえ」

小さく呟く。

なんとなく、あの二人のあとに自分のところに来た理由は納得できた。心配の種は最後にじつくりと、ということだろう。

特に、仲間内で唯一、茜に会ったことがあるのが京介だ。茜が亡くなってから、京介がそのことを気にかけてくれていたのはわかっている。この前の墓参りの一件だって、あいつの差し金の部分が多い。さぞかし心配かけていたことだろう。

でも、茜の一件が解決してもなお、京介がここに居座る理由はなんだ？

「わけわからんな」

結局、謎は何も解決していない。そのとこに溜息をつく。溜息をつきながらも、

「まあでも、マオ、ありがとな」

思ったよりも上手く諜報の役割をしてきた居候猫の頭を撫でた。

マオは心底嬉しそうに微笑んだ。

「私と恋仲になって、そして心中して」

初対面で、彼女は、こともあろうかそう言った。

正直、バカなんだと思った。

ただ、その時の彼は、疲れ切っていた。住む場所も、仕事も、人間として暮らしていく肩書きも、全て失い、疲れ切っていた。

だから、とりあえず彼女の話に乗ることにした。彼女の家で、衣食住の提供を受ける代わりに、家政夫のようなことをして過ごした。

深入りするつもりはなかった。

深入りしてはいけないと思っていた。

それで失敗した友人を見ていたから。

そもそも、今までも、まったく人とかかわらずにきたわけではなかった。それなりに人間社会に溶け込むようにして過ごして来た。恋人的なポジションで、付き合ってきた女性だっていなかったわけではない。

ただ、本気になるのはどこかでおさえただけで。

そして、大体の場合は相手の方から別れを切り出して来た。本音が見えないとか、何か隠しているんじゃないのとか、そんな理由で。

言えるわけがない。化け物だなんて。そんなことわかっていたから、彼だって割り切ってそこで別れてきた。最初から、割り切った付き合いだった。少なくとも彼にとっては。

でも、今回は違った。殆ど自分の身の上は話していないのに、彼女はそのことを追及してこなかった。その場所に居る彼だけをありのままに受け入れた。

子どもの戯れのように、

「キョースケは優しいね」

と微笑み、

「だから大好き」

とはしゃいだ声をあげる。もっとも、そのすぐあとに、

「だから心中して」

なんて続けていたけれども。

最初は、死にたがる彼女が放っておけないだけだった。だからずっと見ていた。

そして、その過程で知ってしまった。ありのままの自分を肯定されることが、過去を追及されないことが、心地よいことなのを。

深入りするつもりはなかった。

深入りしてはいけないと思っていた。

それで失敗した友人を見ていたから。

なのに、何故だろうか。

気づいた時には抜けられなくなっていた。深みにはまっていた。

人間を愛してしまった。

人間になりたい、とってしまった。

そんなこと、できるわけないのに。ずっと一緒にいるなんてそんなこと、できるわけないのに

。

このまま一緒に居てはお互い駄目になる。そう思って、その場所から去ることを決意した。

彼があの家から出る時、彼女は言った。

「絶対に帰って来てね」

帰るつもりはなかった。帰れなかった。そんなこと、できるわけなかった。

だから、旧友を尋ねることにした。彼ならどうにかしてくれるだろう。

リュウジ、の名前を持つ彼ならば。

同じ約束を受けた彼ならば。

第二幕 猫にはまだ鈴をつけていない

『ころんでもおー、またちあがるうー、そうよおーわたしはあああ、ななころび、ヤオ！ きみこおお』

「……なんだその歌は」

気持ち良さそうに歌うマオに、隆二は思わずつつこんだ。

ソファに座り本を読む隆二の膝の上に、寝転んだマオが両手で頬杖をついている。マオが来て最初のころは膝にのると邪魔だのなんだの言っていたが、言って聞かせても無駄なので最近は無言で黙認している。

仲がいいよねえとかからかってくる京介も、今はどこかに出かけているし。

『ん？ 君子の主題歌だよ』

顔をあげたマオが、知らないのお？ 不思議そうな顔をする。

「いや、それは薄々わかってたんだが」

七転びヤオ君子とか言ってたしな。訊きたいのはそういうことではなくてだな。

『隆二も一緒に歌う？ 教えてあげるよ？』

「いや、遠慮しておく」

『そう？ 楽しいのに』

などと言いながらも、マオはまた歌に戻る。

今日も今日とて、神山家の日常はどこまでも怠惰で非生産的であった。

京介がここに来た目的も、未だにわからないままだが、面倒なのであれから追及はしていない。今だって、「ちょっと出かける」と行き先も告げずにいなくなって、数時間経っているが、どこで何をしているかさっぱりわからない。だからといって、訊くつもりもない。どうせ答えないだろうし、面倒だし。

神山隆二の性根は、とことん怠惰であった。

マオのリサイクルはしばらく続き、隆二もしばらくそれをBGMに本を読んでいたが、

「コーヒー飲みたい」

ぼそりと呟いた。思いついたら、今すぐにでもあの茶色の液体を摂取したい気分になった。彼はどこまでも思いつきだけで生きている。

そうと決まれば、

「マオ、どけ」

膝の上の、立ち上がるのに邪魔な居候猫をどかさなければ。

『えー』

歌を邪魔されたマオが不満そうな顔をする。

「いいから」

『はーい』

それでも素直に、ごろごろと寝返りをうつ要領でソファから離れる。ソファから三步程離れた宙で、仰向けに浮かんでいる。

「どーも」

一応礼を言ってから、台所に向かう。薬缶に水を入れ、火にかけ、インスタントコーヒーの瓶をあけ、

「……あ」

そこに何もなかったことを確認し、固まった。

『どうしたの？』

「コーヒー切れてた」

『ありゃりゃ、残念』

「買いに行ってくる」

テーブルの上に放り出していた財布を掴む。

『京介さん、帰って来てないけどいいの？ 隆二お出かけしちゃったら、京介さん入れないじゃん』

未だに合鍵を作っておらず、隆二が出かけてしまえば鍵を持たない京介は部屋に入れない。そして、盗られて困るようなものはないとはいえ、京介のために留守宅の鍵を開けっ放しにしておくつもりなんて隆二には無かった。

「どこに行ってるんだか知らないが、あいつが遅いのが悪い。コンビニだし」

『じゃあ、あたしも行く！』

上半身を起こしたマオに、

「お前は留守番」

冷たく返した。

『えー』

「京介が帰って来たら待つように言っといて」

『コンビニでしょう？ 近いでしょう？ 大丈夫だよお、京介さんだって鍵開いてなかったら待ってるよおー』

「何も言わないで出かけたら、いくらなんでも、あいつうるさいだろ」

この数ヶ月でどれだけの小言を聞いたことか。うんざりとため息をつく。

それからふくれっつらしたマオに、宥めるように微笑みかけた。

「すぐ帰ってくるから。それで、京介戻って来たら、京介に留守番させて散歩でも行こう。お前、そろそろ食事摂った方がいいだろ？」

マオはしばらく膨れっ面したまま隆二の顔を見ていたが、やがてしぶしぶ頷いた。

『約束ね？』

「ああ、約束する」

隆二の言葉に、少しだけ口元を緩めてマオは頷き、

『じゃあ、待ってる。はやく帰って来てね』

「ああ」

マオのためにテレビをつけてやると、隆二はコンビニに向かう。

『約束ね』

マオはがちゃりと閉まるドアに向かって小さく呟いた。

その口から、ふふっと笑みが溢れる。

『約束ね、約束』

基本的に約束をしないという隆二との約束。小さな約束だけれども、これはやっぱり特別だということだろう。

すっかり機嫌を良くして、鼻歌なんて歌いながらマオはテレビに向き直った。

思ったよりも遅くなってしまった。

京介は足早に、隆二の家に向かう。

あまり遅くなると、何を言われるかわからない。怪しまれるかもしれない。

「この前、マオちゃんに探りいれられちゃったしなあ」

ぼやく。

約束を破るためにここに来た。それは嘘じゃない。けれども、それを実行に移す決心がなかなかつかず、長いことかかってしまった。本当は、こんなに長いこと、ここにいるつもりはなかったのに。

流されやすくて情にもろくて、日和見主義なのは昔からだ。平和な生活は心地よくて、ずるずるとこのままでいいかと思ってしまう。それで失敗したというのに。

でもそれも、今日で終わりだ。

ソレを入れたトートバッグを、ぐっと握る。

ここまできたら引き返せない。実行に移すならすぐに。はやくしないと止められてしまうかもしれない。

覚悟なんてあの場所で決めてきた。もう迷わない。

それでも隆二の家まで戻り、そのドアを開けようとしたときには手が震えた。

一つ深呼吸。

落ち着こう。動揺しているところを見せちゃいけない。

「よしっ」

平常心を取り戻し、いつものような笑顔を浮かべて、ドアノブをひっぱり、

「あれ？」

ドアは開かなかった。

合鍵なんてものを持っていないから、隆二か京介、どちらかが必ず家において、家にいるときは鍵を開けっ放しにしていることが多いのに。

仕方なしにチャイムに指を伸ばす。そこから、腹立ち紛れに連打した。

せっかく覚悟を決めたのに、なんというか、出鼻をくじかれた気分だ。なんでこう、いちいち人の神経を逆撫でするようなことするかね、あいつは。

返事はない。テレビの音はするから、いるとは思うんだが、居留守か。

『京介さん』

そう思っていると、ひょいっとマオがドアから顔を生やした。

「マオちゃん」

『ごめんね、隆二、今お出かけしてるの』

本当にすまなさそうな顔をマオはする。

『コンビニだからすぐ帰ってくると思うんだけど』

「あーそう。そっか」

コンビニ行くのに律儀に鍵かけていくなよ。どうせ盗まれるようなもの持ってないくせに。

仕方ない、帰って来るまで待つか、とドアに背を預ける。

『ごめんねー』

「マオちゃんが悪いんじゃないよ」

そう言って微笑みかけ、

「あ、そっか」

気づいてしまった。

何もここで隆二を待つ必要はないじゃないか。隆二が居ない、それは好都合じゃないか。

『京介さん？』

不思議そうなマオの声。

握った鞆。

今ここで、実行に移そう。それが一番、賢いやり方だ。

「マオちゃん」

上半身だけドアから生やした、マオの手を掴む。

『……京介さん？』

訝しげなマオの声。

怯えさせてしまうことは本意ではない。それでも、どこか顔が強張ってしまう。

「ちょっと付き合っただけ。外行こう？」

『えっと。でも、あたし、お留守番してないと。隆二と約束したから』

マオが困ったような顔をする。本能的に何かを感じとったのか。軽く身を引き、京介から距離をとろうとするのを、

「なんで俺がここに来たのか、説明するよ」

ずるい言葉で引き止めた。

「俺がここに来た理由、隆二知りたがってるんじゃない？」

これじゃあまるで、君子に出てくる悪人だ。マオにとって一番魅力的に聞こえる言葉で誘惑する。

「教えたら、隆二が褒めてくれるかもよ？」

マオは少し躊躇ったあと、

『ちょっとなら、いいよ』

頷いた。

コンビニの袋片手に、足早に隆二は家を目指していた。

まさか家から一番近いコンビニが改装工事中だとは思わなかった。そして、足を伸ばして遠いコンビニまで行ったら、久しぶりにあのオカルトマニアの店員に会うし。

話なげえよ。あんたが新しく買った吸血鬼小説が面白かった話なんかどうでもいいんだよ。っていうか、オカルトマニアだとしてもなんか、どっかずれてるんだよ。なんで本物の吸血鬼、と思っている人間相手に吸血鬼小説の話をつらつらとできるんだよ。もっと他に話すことあるだろ。

などと、脳内で怒濤のツッコミを繰り広げていると、
「神山さん！」

背後から声をかけられて振り返る。予想どおりの赤い色にうんざりする。道ばたで話しかけるな、赤くて恥ずかしいから。

「よかった、今からお宅に伺うところで」

「何？ 嬢ちゃんってば、またなんか逃がしたの？」

からかうように言っても、意外なことにエミリは抗議の言葉を述べなかった。お決まりの名前の訂正もない。

「神野さん、まだ、いらっしゃいます？」

慌てたように放たれた言葉に、少し面喰らう。

「あー、帰ってるかな？ でかけてたけど。何、京介に用？」

エミリは一度息を整え、その青い瞳でじっと隆二の顔を見つめる。

「落ち着いて聞いてください」

「なに？」

何を言い出すのか。少し身構えると、エミリは慎重に言葉を発した。

「エクスカリバーが盗まれました。恐らく、神野さんの仕業です」

その言葉の意味を認識するまで、少しの時間を要した。

エクスカリバーが盗まれた？

理解すると同時に、振り向き、家に向かって駆け出した。

「神山さんっ」

エミリが叫び、後をついてくる気配がする。

エクスカリバーは実験体の抹消に使われていた武器の通称だ。

実験体、つまり、隆二や京介や、マオを。

「昼間に！ 研究所にいらっしゃって！」

背後からエミリの声がする。少しだけ速度を緩めて、その言葉に耳を貸した。

「京介がか？」

「はいっ。それで、様子が変わる。うまく、言えないんですけど。帰られたあと、保管室の人間が倒れているのを発見して、それで」

「中を見たらなかったってことか」

「はい」

息を切らしながらエミリが頷く。

「……なにに使うつもりだと思う？」

「わかりません。わかりませんが、でも」

エミリがそこで言葉を切った。

「そうだよな」

今ここらにいる実験体に該当するのは、隆二とマオだ。

「……マオにも、勿論？」

「効果があります。あるはず、です」

「先に行く」

それだけ聞けば十分だった。それ以上は聞けなかった。

エミリを残し、全速力で駆け抜ける。本気で走ったら周りの人間から不審がられる。そんなこと、今はどうだっていい。

ぎしぎしとうるさいアパートの階段を三段飛ばしで駆け上がり、乱暴に鍵をあけ、

「マオっ！」

叫びながら部屋に入る。

「マオっ」

靴を脱ぐのがもどかしくて、そのままあがった。

つけっぱなしのテレビから、能天気な音楽が流れる。

「マオ！」

狭い家の中に、居候猫の姿は見えない。

焦燥感が募る。

隆二が遅いから勝手に出かけたのかもしれない。でも、帰って来たら出かける約束をしていた。マオがそれを待たずに出かけるわけがない。

マオは自分と違う。約束はきちんと守るタイプだ。

「っち」

舌打ちすると、持っていたままだったコンビニ袋を腹立ち紛れに投げつける。

外を探さないと。

振り返り、ドアに向かったところで、

「神山さんっ」

息を切らしながらエミリが現れた。邪魔だったのか、赤いベレー帽は片手に握られている。

「マオさんはっ」

「いない。京介も」

「……探すの、手伝いますっ」

「頼む」

背に腹はかえられない。素直に頷くと、部屋から出る。ドアを後ろ手で閉める。

「神山さん」

そこでエミリに袖をひっぱられた。

「なに？」

「これ」

エミリが指差す先、ドアの新聞受けに、一枚の紙が挟まっていた。見覚えのないそれを、慌てて引き抜く。

少し神経質そうな文字が踊っていた。

「隆二へ。ごめん、マオちゃんを預かりました。返して欲しかったら、夜九時、公園まで来てください。ごめん。追伸、ごめん、エクスカリバーもっています」

そこに書かれていたのは、謝罪にまみれた誘拐犯からの手紙。

「あんの、馬鹿野郎っ」

くしゃり、とメモを握りつぶした。

彼は自分の同類だと思っていた。

恋人に帰って来ることを要求され、その約束を果たせない。果たさない。

自分達は同類だと思っていた。

ここから先の永遠の時間、お互いに、その約束にとらわれ、縛り付けられ、生きていくのだと思った。思っていた。

でも、違った。あの人は待っていた。約束どおり、待っていた。

あの二人の絆は、決して切れていなかった。

彼が化け物でも、逃げ出しても、帰ってこなくても、自身の命が消えても、あの人はそんなことじゃ揺らがなかった。それすらも受け止めて、待っていた。

揺らいだのは自分の心だった。価値観だった。人と化け物との間に生まれた絆もちゃんとあるのだと、知ってしまった。

そして彼には、新しい同居人。それなりに、うまくやっているようだった。新しい同居人は、あの人よりも強いから、彼がまた道を誤ることはないのだろう。彼が一人になることは、きっともうないのだろう。そう思えた。

同類だと思っていた。自分と同じだと思っていた。

でも違った。

過去に縛られているのは、今や自分だけ。彼は、先に進んでいる。進もうとしている。

そんな彼を見ていると思ってしまう。自分もうまく出来るんじゃないかと。自分だってあの場所に帰ったら、もう一度上手く、生活出来るんじゃないかと。期待してしまう。夢を見ってしまう。

。

でも、泣いていた彼女の顔がちらつく。

戻れない。

約束してしまった。帰って来たら一緒に死ぬと。でも、彼女には生きていて欲しい。

それに自分は、彼とは違う。化け物であることを、打ち明けられない。今までも、これからも

。

だから、約束は守れない。

だから、帰れない。

だから。

だから、頼む。リュウジ。

第三幕 There's more ways than one to kill a cat.

「マオちゃん、ごめんね」

『んーん』

マオの散歩コースにもある公園に二人は居た。二人ともブランコに腰掛けている。マオはゆらゆらと、足を揺らしながら、

『京介さんの事情はわかったから』

ぼつん、と呟いた。

「うん、だから」

京介も、マオの方を見ないまま答えた。

「だから、ごめんね」

あたりはすっかり暗くなっている。そろそろ、隆二との約束の時間だ。

「そろそろ隆二来るはずだから。ごめんね？」

『うん。それは、いいんだけど』

マオは隣のブランコに座る京介を見る。

『一回だけ確認するね。京介さんは、本当にそれでいいの？』

「うん」

マオの言葉に、素直に頷いた。

「他の選択肢は、もう考えられない」

『そっか』

それじゃあしょうがないね、とマオは呟いた。

「呆れてる？」

『なんで？』

「こんな選択しか出来ないこと」

『全然』

だって、とマオは微笑んだ。

『京介さんには、あたしがいないから仕方ないと思うの』

「.....マオちゃんが？」

『時間の流れが一緒の存在が』

「.....ああ」

京介は小さく苦笑した。

『あたし、発生してから今日まで色々あって楽しくって、発生したときのことなんかとおい昔のような気がする。けど、永遠は、まだまだ長いのでしょうか？ それを一人で生きろというのは、酷だと思うの』

「そうだね」

とん、と京介は軽く地面を蹴った。ブランコが揺れる。

「うん、そうだね。なんだかんだで俺が隆二に頼もうと決心出来たのは、隆二にはマオちゃんがついているってわかったからだしね」

答えは決まっていた。でも、結果は一つでも、それを成し遂げる方法はいくつかあって、その中で今回のことが最善だと結論付けた。それは、マオの存在が大きい。

「あいつはもう一人じゃないから。それなら、多少、面倒ごとを押し付けても平気かなって思ったんだ」

一人きりだったら、潰れてしまうことも、二人ならば平気だろうから。

『うん、一人じゃないから』

マオが頷く。力強く。

「うん、任せた」

微笑みながら京介も頷き返した。

そして、とんとと地面に足をつける。揺れていたブランコがとまる。

『京介さん？』

「来たよ」

不思議そうな顔をするマオに、告げた。足音がする。

「時間きっかりだね。吃驚だ」

弾みをつけてブランコから立ち上がる。

「てっきり、早い時間に奇襲でもしかけてくるかと思ったのに。一応、外見上は誘拐犯なわけだし、俺」

『なんだかんだで、京介さんのことを信じていたからじゃない？』

「違うね。マオちゃんのことを本当に心配だったんだよ」

だから時間より前にこの場所に来ることができなかった。平気だろうと高をくくって、万が一のことがあったら怖いから。

『そうかなあー？』

マオが不思議そうに首をひねった。

「そうだよ。ねえ、マオちゃん」

名前を呼ぶと、マオが不思議そうな顔のまま京介の方を向いた。

「最後に一つだけ」

『うん？』

小さく首を傾げる。

「あいつは、イマイチ素直じゃないし、なんか冷たいし、ひとでなしだけど、マオちゃんのことを心配してる。気にしている、いつだって。それは本当のことだから。ただ、あいつはあれでバカだから、無くさない大事なものに気づけないんだ。大事にしているものを無くしそうになって初めて、それが大事だとわかるタイプ人間なんだ。さらに言うと、無くしそうになってその時は焦るけど、無事だとわかると、焦ってた気持ちなんて忘れるんだ。大事だと一度理解したのならば、そのままずっと、しっかり持っていればいいのに、それが出来ない。本当、呆れるほどバカだろ？」

だから、と真面目な顔で京介は続けた。

「自信を持って。あいつの冷たさに挫けたりしないで。どんなに冷たくても、あいつはマオちゃんのことを見捨てたりしないから。愛されているのだと自信を持って。マオちゃんが自信を持つぐらいできっと、丁度いい」

マオは京介の顔をじっと見つめた。言葉をゆっくりと飲み込むような沈黙のあと、

『……うん』

しっかりと頷いた。

『大丈夫。隆二がひとでなしなことは、知っているから』

そうして、にっこりと、笑った。

京介は、ならいいんだ、と笑い返した。

「京介」

その背中に声がかかる。

京介が振り返ると、そこには敵意剥き出しの隆二が立っていた。

ブランコの柵の、三步向こう側で、不機嫌そうな顔をしている。

「やあ、時間ぴったりだね」

おどけて京介が言葉を返す。

「マオを返せ」

それを隆二は斬り捨てた。

「はいはい。マオちゃん、ごめん、隆二と二人で話をするね」

『うん』

京介の言葉にマオは頷くと立ち上がった。

そのまま、すいっと京介の横を抜け、隆二の隣に立つ。

「大丈夫か？」

無事を確かめるかのように、隆二の右手がマオの頭を撫でる。

『平気。心配かけてごめんね』

「そうか」

ずっと、隆二の肩から少し力が抜ける。安心したように。

『待ってるね、外で』

そんな隆二にマオは公園の外を指差した。

「ああ」

隆二は小さく頷く。マオは頷き返すと、

『京介さん』

振り返り、京介の方を見る。

「ごめんね、マオちゃん」

『ううん。隆二のことは、心配しなくて平気だよ。あたしがいるから』

「任せた」

『任された』

そうしてマオは、少しだけ寂しげに微笑むと、

『.....じゃあ、ばいばい』

右手を小さく振る。

「うん、じゃあね」

京介も軽く手をふりかえした。

『じゃあ、隆二、あとでね』

二人のやりとりを怪訝そうに見ている隆二に少し微笑むと、マオはすいっと公園の外に向かった。

「.....なんなんだよ、一体」

その背中を見送り、隆二は京介の方を見ながら、うんざりとした口調で言う。

「誘拐犯っぽい文面を残したわりには、和気藹々としていたみたいじゃないか」

「心配した？ マオちゃんのこと」

「おちよくるな」

「素直じゃないなあ」

「京介！ お前な、冗談ですむこととすまないことがあるだろうがっ。エクスカリバーまで持ち出してっ」

隆二が声を荒げると、京介は小さく肩を竦めた。

「聞いただろ？ マオちゃんから。俺は約束を破りにきたんだ」

「だからなんだよそれ」

「.....少し長くなるけど、聞けよ」

「命令か」

隆二の嫌そうな言い方に、京介は少し笑う。

「俺はね、隆二。約束を破りに来たんだ」

「だからなんの約束を」

「帰ってきてね」

ループしはじめた会話に苛々した様子の隆二だったが、京介の言葉にぴたり、と口を閉じた。

「帰ってきてね。それが、俺が破ろうとする約束だよ」

「.....おちよくってるんじゃ、ないよな？」

「本当だよ」

隆二は何か、行き場のない感情を逃すように大きく息を吐き、

「.....わかった。続けろ」

かろうじてそれだけ言った。

「約束の相手はね、人間の女だ。惚れた相手だ。.....笑っちゃうだろ？」

惚れた人間の女に、帰ってきてねと約束させられる。どこかで聞いた話だ。

「笑えねえよ」

隆二の身に起きたことと、同じじゃないか。

「だよね」

「笑えるかよ。なんだよ、ソレ」

苛立ったように片手で髪をかきあげる。

「何だよソレ、本当。ふざけんなよ、お前。なんで、そんな。……なんだそれ」

額に軽く手をあてて、大きく隆二が息を吐く。気持ちを落ち着かせるかのように。

「まあ、そういう態度になるよね」

「当たり前だろうがっ」

のんびりとした京介に、キレ気味に言葉を返す。

「なんで、なんでお前がそうなるんだよっ」

「そんなの俺が聞きたいよ」

呆れちゃうよな、と肩をすくめる。

「お前にはあんなに、やめとけ無理だとか言ってたのにな」

「まったくだ」

「だから、謝らないとな、と思って。それについては。ごめん。当事者になってようやくわかった」

京介は小さく、悲しそうに微笑んだ。

「そんなこと言われたって、無理だよな」

「……ああ、無理だよ」

理性でわかっているけど、感情がついていかない。それで解決したら世話はない。

離れようと思って離れられたら苦労しない。

「気をつけようと、思っていたんだ。お前と茜ちゃんのこと、知ってたから。深入りしないように、ってずっと思ってた。思ってたのに、おかしいよなあ」

力なく笑うと、京介は再びブランコに腰掛けた。

「あいつさ、意味わかんないんだよ。出会い頭に、なんて言ったと思う？」

「知るか」

そんな他人の馴れ初めなんて。

「私と恋仲になって。そして心中して」

真顔で言い切られた言葉に、隆二はしばし沈黙し、

「……まあ、なんだ。お前もなかなか面倒な恋愛してるな」

かろうじてそれだけ言葉をひっぱりだしてきた。

「お前にだけは言われたくないよ」

京介は呆れたように笑う。

「でも本当、意味わかんないだろ？ 俺最初、こいつバカなんだろうな、って思ったし」

「そんな怪しいやつとかかわるなよ」

「だってあの時は疲れてたんだもん」

「もんじゃねーよ。唇とがらせるなよ、可愛くないから」

心底嫌そうな隆二の顔に、京介は小さく笑う。

「ごめんごめん。でも、疲れていたんだ、あのとき」

膝の上に頬杖をつく。

「隆二、お前はさ、必要最小限に人間とかかわって生きていってるだろ？ 新幹線の乗り方もわかんないぐらい」

「流れでバカにするな」

「バカにしてないよ。ある意味尊敬してるんだよ。俺には出来ないから」

京介は視線を隆二から外し、地面を見つめた。

「俺には出来ない。そういう生き方。一人は寂しいから」

いつも飄々としている仲間の、こぼれ落ちた本音に隆二は何も言えない。

寂しい。そんなことを、こいつが言うなんて。

「過度にかかわるつもりは勿論ないよ。だって、俺たちはもう人間じゃないから。だけど、まったくかかわらないっていうのも俺には出来なかった。だから、エミリちゃんにお願いして、適当な身分証作ってもらって、適当に人間社会で仕事したりしてたんだ」

「……料理人の真似事とかか」

隆二の言葉に、京介は一度顔を上げて、

「意外。お前が覚えてるなんて」

少し皮肉っぽく唇を歪めた。

だから流れでバカにするな。

「その料理人の真似事が曲者だったんだよ」

京介はまた視線を下に落とす。

「あれは結構楽しかったんだ。料理作るの、嫌いじゃないしな。正体がバレるとまずいから、そんなに一つのところに長居はできないけど、そこにはぎりぎりまで居たいと思ってたんだ」

だけどさ、と淡々と京介は続ける。

「なんか料理長の奥さんが俺に惚れたとか惚れないとかで、それで料理長の反感買っちゃって、なんかよくわかんないまま辞めさせられることになっちゃってさ」

「なんだそれ。言いがかりだな」

「な？ 俺もそう思うよ。これが他の仕事場だったら、もしかしたらごねて続けさせてもらってたかもしれない。理不尽だしな。だけど、さっきも言ったけど、そこは本当にすごく気に入っている職場で、仕事で、そこでそんな理不尽な理由が罷り通ることにとどつと疲れてしまったんだ。好きな場所だったからこそ、水を差されたことが不快で、辛かったんだ。だから、あっさり身を引いた」

小さく溜息。

「今思うと、元々無理していた部分があったとは思うんだ。人間社会に入り込もうとすることに。それが、あれで一気に決壊したっていうか。疲れたんだ」

疲れたのだ、と何度も告げる仲間を隆二は見下ろした。

仲間内では一番、彼がまともだと思っている。あとの二人は偏食が過ぎるあまり、人間性にやや難があるし。だから、人間社会でやっていくのならば、彼が一番上手くやっていけるのだろうと。

でもきっと、まともだからこそ、辛い部分があったのだろう。賢く立ち回って人間社会に溶け込める分、そんなこととくくの昔に諦めた自分とは違う苦労があったのだろう。溶け込めてしまう分、期待してしまうものも、きっとあったのだろう。

「住み込みの仕事だったし、住むところもなくなっちゃって。でもなんか、新しい仕事を探す気にもなれなくて。まあ、しばらくいいかなって地下道に住み着いたりしてさ」

京介はそこで一度言葉を切り、少し声のトーンを和らげる。

「……そこにあいつ、現れたんだ」

「心中さんがか？」

揶揄するように尋ねると、

「そういう呼び方するなよ」

睨まれた。

「すまん」

からかったことは事実なので、素直に謝る。

「でもまあ、それでさっきの台詞言われたわけだけど」

「恋仲になって心中して？」

「そう。で、それを守ってくれるなら衣食住提供してくれるって。なんかさー、俺、そのとき本当疲れてて。とりあえずしばらく、ココの家に置いてもらって、頃合い見計らって逃げ出せばいいかなって思ったわけ」

当たり前のように言われた、ココという言葉。おそらく、その相手の女性の名前だろう。

「そう、思ってたんだけどなあ」

溜息とともに吐き出すように、ぼやく。

「心中したいとかいうのがさ、結構本気っぽくて。最初はそれが心配で、ずっと見てて。なんでだろうな。逃げ出せなくなってた、気づいたら」

京介は顔をあげると苦笑する。

「お前なら、わかってくれるだろう？」

「ああ。残念ながら」

肩をすくめると、同じように苦笑した。

「一回気にするともう駄目だよな。本気になったら駄目だって自分に言い聞かせて、感情に蓋をしていたつもりだった。言わなきゃいいだろうって。だけど」

京介はそこで言葉を切った。痛みに耐えるかのように瞳を閉じる。隆二は黙って次の言葉を待った。

少しの間のあと、

「言わなかったから、あいつを追いつめた」

目を開くと、吐きすてるように言った。

「ココは基本的に怖がりなんだ。幸せが怖い。幸せのあとに訪れる不幸が怖い。だから、一番幸せな時に死にたいとかって言う。だから、心中したいとか言う。それはわかっていたんだ。だから、安心させてやればよかったんだ。なのに、俺は助けを求めて差し出された手を、掴み損なった。怖くて」

ぐっと爪を立てて手を握る。

「だって俺は、絶対に、あいつの願いを叶えてあげることが出来ない。一緒に死ぬなんてことが、出来ない。化け物だから」

かすかに痛みに耐えるような顔をしている隆二の顔を見ると、京介は自嘲気味に笑う。

「なあ、隆二。俺はお前が羨ましいよ。なんで、言えたんだよ。茜ちゃんに、自分が化け物だって」

わずかにだが棘のある言い方に隆二は口を開きかけた。反論しようと思って。

俺だって、言えたのは最初の段階だったからだ。関係性を築き上げる前だったからだ。関係性が出来上がってしまっていたら、好きになってからだったら、きつと言えなかった。

でも、結局言葉を飲み込んだ。そんな反論をしたところで意味がない。京介だってそれぐらい、わかっているだろう。タイミングの問題だということぐらい。

「俺は言えないよ。言えなかった。ココに好きだと告げることは、同時に心中の願いを叶えてあげられないことを、明確にする必要があった。だから言えなかった。怖かったんだ。ココに化け物だと知られることが」

かすかに京介の手が震える。

「あの時はたまたま、ココが仕事とか他の人間関係とかで悪いことが重なって落ち込んでいる時で、あいつはただ俺に、俺が居るってこと言って欲しかっただけなのに。安心させて欲しかっただけなのに。俺は上手く出来なかった。俺が人間だったら、もっと簡単だったのに。あのとき、俺は好きだよ、って言えばよかったのに。人間じゃなかったから言えなかった」

そこで京介は一度大きく息を吐いた。滞った感情を外に出すように。

「俺が手を掴み損なったから、あいつ、手首切るし」

「ちょっ」

黙って聞いていた隆二は、さらりと言われた言葉に軽く声をあげる。

「いや、大丈夫だったんだけど。そんなに深くもなかったし」

「そうか」

「けどさ、そういう問題じゃ、ないじゃん？ 自分の血は見慣れてるし、いくら流れても平気だけど、他人の血は無理だよ。だって、下手したら死んじゃうんだぞ」

「……人間だからな」

「そうなんだよ、ココは人間なんだよ。……なんか、それ見てたら俺、もう無理だなんて思ったんだ」

泣きそうな顔をする京介なんて見たくなかった。だから本当は視線を逸らしたかった。でもきっと、ここは逃げちゃいけない場面だ。同じ化け物として。そう思ったから、隆二は京介から目を逸らさなかった。

「これ以上、俺がここにいても、いいことなんてないって。そう思ったんだ。だってさ、俺ってば、ココが手切ってるの見たらテンパって好きだとか言っちゃうしさ」

「だから、離れることを決意した？」

「そう。ココは恐がりだから、俺がココのことを嫌いになる時がきたらどうしようって、そんなこと心配するんだよ。それで、結局心中したいってことになるわけで。俺が、ココの傍にいる限り、ココはずっと心中したいと願うんだろな、そう思ったら、もう一緒に居られないと思った」

だって、と少し上擦った声で続ける。

「俺はココに生きていて欲しいんだよ。だって、ココの人生なんて、たった八十年とかそこらだろ？ それぐらい、ちゃんとまっとうして欲しいんだよ。だってこれからまだまだ、幸せなことだってきっとあるはずなのに。死んだらもうなんにもないんだ。耐えられないと思ったんだ。ココにまで、置いていかれることっ」

「……ああ」

京介の言葉に、隆二はゆっくり頷いた。

耐えられないと、かつて自分も思った。愛した女性が自分を置いて居なくなる。亡くなること。耐えられないと思ったから、あの時自分は逃げ出した。

「俺、ココと約束したんだ。帰ってきたら心中しようって。世話になった人に会いに行ってくるけど、必ず帰って来るから。そしたら一緒に死のうって。そう、約束したんだ」

「……それがお前の約束か」

自分の時よりもよっぽどややっこしいじゃないか。

隆二は嘆息した。

「それで、その話が今回のこととどう関係があるんだよ」

約束の内容はわかったが、それがマオを誘拐する理由には繋がらない。

「だから言っただろ。俺は約束を破りに来たんだ。俺はココのところには戻らない」

そうして京介は立ち上がると、ブランコの脇に無造作置かれていたトートバッグをとりあげた。それをそのまま、隆二に向かって投げた。

受け取る。

「なんだよ」

顎で促されて、ぼやきながらその中身を見て、隆二は言葉を失った。それには見覚えがあった。嫌という程。見た目は小型の剣。でも、それがただの剣じゃないことを知っている。

「……京介」

かろうじて名前を絞りだすと、

「そ、俺がパクってきたエクスカリバー」

なんでもないように答えられた。

「おまえっ、なんでっ」

なんでこれを今、このタイミングでこっちに向かって渡すのだ。

「察しが悪いな、隆二」

京介は呆れたように笑い、

「それを使ってくれ、って言ってるの。俺に向けて」

なんでもないことのように言った。

言われたことを理解するには、少しの時間を要した。

「ふざけんなっ」

言われた意味を理解した隆二は、反射的に怒鳴った。

「おまえっ、何を考えてっ」

「実験体が勝手に消滅しないように、自己使用が出来ないようセーフティかかっているのは知ってるだろう？ それは誰かに使ってもらわなきゃならない」

「そんなことは知ってる！ そんな話をしているんじゃないっ！」

「俺はココのところには戻らない。戻れない。あいつを死なせるわけにはいかない」

「だからってっ」

「このままだら、いつか俺はまた、ココに会いたくなってしまう。だけど、俺はココを死なせたくない。ココに会い

にいったら、約束叶えなきゃいけないだろ」

「そんなもん、適当にお前自身でどうにかしろよっ。それこそ、そこで約束破ればいいだろうがっ」

「どうにか出来る自信がないから頼んでるんだろが。俺はもう、俺がココを傷つけるのは耐えられない。これ以上約束を破ったら、ココにどう思われるか」

「ふざけんなよっ」

どんなに怒鳴っても揺らがない瞳に腹がたつ。

相手を死なせたくないから、自分が消えるというのか？ それを、隆二に手を下せと？

「じゃあ、最初からそのつもりでここに来たのか？」

「そうだよ」

当たり前のように京介は答えた。なに今更そんなこと訊いてくるんだ、とでも言いたげな口調だった。

「なんだよ、それっ。……じゃあ、あのときはなんだったんだよ！」

「……あのとき？」

怪訝そうな顔をする。

「マオと一緒にいようとか誘ったって言う、アレはっ」

そうだ。もう隆二のところには居られないと泣くマオに対して、自分と一緒に居ればよかったじゃないか。あれはどういうつもりだったんだ。最初から消えるつもりだったのに、マオと一緒にいるなんて、出来ないことを約束するつもりだったのか。

「ええっ、それまだ気にしてたの？」

予想外の事を言われたとでも言いたげに、京介が目を見開く。

「ああ、っていうか、そんだけマオちゃんのことを心配なのか。じゃあ、言ってあげなよ。喜ぶよ、マオちゃん」

「おちよくるなっ」

「も一、本当、相変わらずカルシウム足りないね、お前は。あれは、あのときは本気だったよ。本気でお前から盗ってやろうと思った。そのためなら延命だって厭わなかったね」

そこで京介は、笑顔を歪めた。

「だって、ずるいんだよお前だけ。マオちゃんといい、茜ちゃんといい。人間として生きることを放棄したお前に、なんで皆集まるんだよ」

「……京介？」

「俺はずっと、お前が羨ましかったよ。本当に」

歪んだ笑顔に見つめられて、隆二は言葉が返せなくなる。

しばらく隆二の顔を見つめた後、京介はふっと空気が抜けるように笑った。

「そんな顔すんなよ。俺が怖がらせてるみたいじゃん」

「……間違っていないだろ、あながち」

おどけたような言い方に、隆二もそっと息を吐く。強張った空気を逃がす。

「羨ましいのは本当だよ。本当はわかってるんだ。誰よりも不死者であることを受け入れられていないのは、俺だ。お前じゃなくて」

女々しいんだよ、俺、と笑う。

「受け入れられていないから、人間のフリして生きている。それが結局、俺を偽物の人間として世の中に縛り付けている。結果として俺は自分が化け物だということを誰にも言えず、理解者を得ることができない。お前にとっての、茜ちゃんやマオちゃんのような」

だから盗ってやろうと思ったのさ、となんでもないような口調で続ける。

「お前からマオちゃんを。まあ、マオちゃんに拒否られたけどね。心底羨ましかったんだ。同じ時間軸を生きられる、理解者がいるお前が」

そこで一度言葉を切り、

「くだらない仮定の話だ。笑うなよ？」

念をおしてから続ける。

「もしも、もしもだ。マオちゃんと先に出会ったのが俺だったら、お前の場所にいるのが俺だったら、そしたら俺はマ

オちゃんの為に残りの永遠を使ったのにな」

それから小さく肩を竦めて続ける。

「俺の方がお前よりも、よっぽどマメで、優しくて、話も合うし、マオちゃんのパートナーとしては申し分ないと思うんだけどなあ」

おどけたように言われた言葉は、それでも真実だと隆二は思った。外でもちゃんと話相手になってあげて、テレビの話にもつきあってあげて、京介の方がよっぽどマオにとっていい生活を与えるだろう。

それには納得した。

「……おい、黙るなよ。冗談だろうが」

隆二の沈黙をどう解釈したのか、京介が呟く。

「そのとおりだなあって思ってただけだ」

「そのとおりだなあってお前な！ お前はいつもそうやって」

「だけど」

こんなときでも始まりそうな京介の小言を遮る。

「だけど、マオと一緒にいるのは俺で、マオが選んだのは俺だ」

ぶっきらぼうで、気が向いたときにしか構わないし、外では絶対会話しないし、からかって遊んでばかりいる。それでも、マオは優しい京介ではなく、そんな自分を選んだ。何がいいのか知らないが。

ならば、まあ、せめて、それに応えるぐらいはしないと。

隆二がまっすぐ京介を見ながら答えると、京介は少しうろたえたような顔をした。

「お、おおう。なんだ、わかってるじゃないか」

隆二があまりにまっすぐ答えたことが意外だったようだ。

「じゃあ、それ、マオちゃんに言ってやれよ」

「それとこれとは話が別だ。絶対に言わない」

心配しているとか言えば、どうせ調子に乗るに決まっているのだ。それはそれでうざい。

「あっそ。でもまあ、そうか。わかってるならいいんだ」

京介はどこか寂しげに微笑みながら、

「俺がお前に頼もうと、決心できたのはマオちゃんが存在があったからなんだ。マオちゃんがいるから、お前はもう一人じゃないって思ったから」

本筋に戻った話に、少し身構える。そうだ、こいつは今、むちゃくちゃなお願いをしている最中だった。

「マオちゃんなら大丈夫だろうなって思ったんだ。あの子は、何があってもお前から離れないから。なあ、マオちゃんと茜ちゃんは違うって意味、わかるか？」

種族の違いというのは、ベストアンサーではないのだろう。だから隆二は黙っていた。

答えない隆二に呆れたように京介は笑い、

「マオちゃんは絶対にお前を一人にしないってことだよ。もしも、お前がマオちゃんから離れることを決意しても、マオちゃんは絶対にそれを許さないだろう。お前が前みたいに、一時の感情の迷いで離れそうになっても、マオちゃんは決してお前を一人にしないだろうから。茜ちゃんみたいに、物わかりよく、離れたりしないから」

「……ああ」

溜息のように言葉が漏れる。

ああ、そういうことか。その答えには納得出来た。

マオは絶対に隆二から離れないだろう。隆二の方が逃げて、彼女はきっと追ってくる。拾った猫の世話は最後まで見なさいよ！ とかなんとかいいながら。

「幽霊だからっていうんじゃない。マオちゃんだから。マオちゃんが茜ちゃんの性格だったら、俺はやっぱり、あの時と同じように心配したと思うよ。だけど、あの子はいつだって、お前のことを考えてる。憎らしいぐらい」

「そうだな」

「それにさ、この際だから言うておくけど。なあ、お前だって本当はわかってるんだろう？ マオちゃんが幽霊だからって、一概には安心出来ないんだよ。居なくならないって。本当の意味での永遠なんてないんだよ。なあ」

そして隆二が手に握ったままのエクスカリバーを指差し、

「それが俺の永遠も、お前の永遠も、マオちゃんの永遠も終わらせること、わかってるだろう？ 理解してろよ、意識してろよ。目を逸らすなよ。ちゃんと考えてないとお前、後悔するぞ」

京介の言葉に返事は出来なかった。考えなかったわけではない。ここに来るまでに最悪のことを。マオが居なくなることを。永遠なんてないのだということを、再確認したことを、思い出したくなかった。

「しっかりしろよ。マオちゃんにはお前しかいないんだから」

そして、畳み掛けて来るような京介の言葉からも逃げたかった。なんだってそんな、次から次へと色々言うのだろう。これじゃあ、まるで、遺言みたいじゃないか。

「わかってるよ」

自分の考えに不安になって、京介の言葉を強引に終わらせた。

京介はどうだか、とでも言いたげに肩をすくめたが、それ以上は何も言わなかった。代わりに、

「なあ、頼むよ」

お願いを続けた。

「嫌だ」

それを、首を横に振ることで拒否した。

「なんで俺が」

「お前だからだよ」

そこで京介は、なんだかやわらかく微笑んだ。

「お前だからだ」

「だからなんで」

「お前が一番、俺の気持ちわかってくれるだろうなって思ったからだよ」

言われた言葉に返事が出来ない。ああ、それはきっとそうだろう。英輔よりも、颯太よりも、隆二が一番京介の気持ちがわかる。理解出来る。かつて同じ約束を受けたから。

だけど、だから。

「だから、無理だ」

約束をした相手が、ずっと待っていることを知っているから。

「ココは茜ちゃんとは違うよ。待っていない」

「そりゃあ茜ほどの時間を待つことはないだろうけれども」

言いながら胸の奥が痛む。幽霊になってまで待っていてくれた彼女。

「けど、それでも待つことにはかわりないだろう？」

「……うん、そうだね」

「約束を守れなかった時の気持ちを知っているから、お前の願いはきいてやれない」

「……死んだら約束を破ったことを後悔することもないだろうけど」

「そんな逃げは許さない」

言い切ると京介は困ったなあ、とぼやいた。

「ここまでお前がごねるとは思わなかったな」

「例えば、例えばだ。他の頼み事なら別だった。それこそこれから先、家に置いてくれとかな。だけど、京介」

言いながら自分の声が震えることに気づいた。ああ、怖いと思っている、今、自分は。

「それだけは、わかった、とは言えないよ。なんだよ、お前」

永遠だと思っていた。ずっとずっと、これから先、永遠に一緒だと。直接顔をあわせることはなくても、この世界のどこかに、同じ永遠を分け合って存在しているのだと、信じていた。それが崩れることなんて、考えてもいなかった。

「お前まで、俺を置いて行くのかよ」

京介も顔を歪めた。なんだか泣きそうに。

「それは、悪かったと思ってるよ」

「だったら」

「でももう疲れたんだよ」

彼はまた、疲れたと口にした。

「俺はお前みたいに、人間から離れて生きられない。今更生き方は変えられない。仮に、ココのところに戻って、心中の願いもどうにかうやむやにして、そしてココともう一度生活をしたとする。だけどさ、それも、いつか絶対に終わっちゃうじゃないか」

語尾が上擦る。

「もう疲れたんだ。そういうのに怯えるのも。俺は英輔や颯太みたいに割り切れない。永遠を有効活用しようとは思えない。お前みたいにマオちゃんもいない。無理だよ。俺にはもう。疲れたんだ」

疲れた疲れたと言う京介の顔が、光の加減かとてもやつれて見えた。それにぞっとする。取り憑かれている、永遠という名の死神に。

「気持ちは変わらない。俺にはもう無理だ。この永遠を手放したい」

「だけど」

何かを言おうと隆二は口を開き、何を言っているのかわからなかった。ここまで疲れたという彼を、ここに引き止めようとするのはエゴじゃないだろうか。

永遠を憎み、終わりが来ることを願ったのは自分だって一緒だ。マオに会うまでは、ただ、だらだらと生活しながらはやく終わりが来ないかと、何かの間違いで永遠が途切れないかと、それをどこかで願っていた。消極的か積極的か、それだけの違いだ。

「お前が引き受けてくれないなら、それも仕方ないな、と思う。嫌だよな、同族殺しみたいなの」

京介の口から同族殺しという言葉が、ずんっと肩にのしかかる。そうだ、そんなの、大事な仲間を自分の手で、なんてこと。

「エミリちゃんとか、研究所の人間に頼めばまあ、どうにかしてくれるだろうな、とも思うし。その前にこき使われたり実験台にされたりしそうだけど、まあ、それもいいよ」

だけどさ、と京介は隆二の瞳を捉える。

「それでもやっぱりお前に頼みたいんだよ。縁、っていう意味で。お前だってそう思うだろ？」

一瞬の躊躇いのあと、

「なあ、――」

呼ばれた本当の名前に、撃たれたような気分になる。

縁、っていう意味で。

ああ、そういう意味なら、そうかもしれない。

「……ああ、そうだな」

そうして隆二も、彼の本当の名前を呼んだ。

「柳司」

それを聞いて神野京介は、かつてリュウジの名を持っていた彼は、優しく微笑んだ。

「お前の言うとおりでだよ、柳司。俺がお前と同じ立場で、その、終わりを望んだとき、誰に頼むかっていったら、きっと真っ先にあいつに頼む」

かつての自分の名前をもつ彼に。それが、縁、だ。

あの時、たった四人だけ残った実験体同士で名前を交換し合った。漢字は替えたけど。かつての自分の名前をもつ者に、なんとも言えない気持ちを覚えたことを覚えている。かつての自分の名前でも他人を呼ぶことに、違和感を持ったこと。

今ではすっかり自分に馴染んだ名前だけれども、今ぐらいは返さなければならない。

「……うん、そうだな。それなら、仕方ないのかもしれない。柳司」

殊更に名前を呼ぶ。自分に言い聞かせるように。

「うん。悪いな、本当に。――」

向こうもこっちを本当の名前で呼んで来る。それは縁、で。それと同時に、

「柳司。死ぬなら出来れば人間でって、ことか」

自分が人間だったことを思い出させるまじないのようなものだ。

「そんな感じかな」

「そっか」

その思いもわかる。わかってしまった。わからなければ断れたのに。

「ずるいよな、柳司」

「知ってる」

くすり、と柳司は笑った。

「そうなると、断れないな」

「――ならそう言ってくれると思ったよ」

「ずるい」

もう一度言うと、さらに彼は笑った。

柳司がひらりと、軽い動作でブランコの柵を飛び越える。

二人を隔てていたものが無くなる。

「ずるいな、本当に、ずるい」

「うん、悪かった。本当にそう思ってる」

「人の弱みにつけこみやがって」

「それもわかってる」

人間ではないことを、心のどこかで割り切れていないのはお互い様だ。人間であったころのことを持ち出されては、断れない。それがどんなにお互いにとって大事なことだかわかっているから。

「俺がこれで病んで病んで病みまくったら、柳司、お前責任どうとるんだよ」

「――はそこまで無責任じゃないでしょ。自分のメンタルの責任ぐらい自分で持てる」

原因を作ろうとする人間が、いけしゃあしゃあと答えた。

「それに、――にはマオちゃんがいるだろ？」

なんでもないように言われて、ため息をつく。それを言われると反論できない。

「俺にはマオがいて、俺が茜と約束して、俺が今神山隆二で、だからお前はここに来たんだな」

もう一度、確認するように問う。

「そうだよ、――」

「じゃあ、仕方ないな」

困ったように笑った。選ばれてしまったのは、もう仕方ないと思えた。

終わりを迎えたい気持ちもわかるのだ。

右手に持ったエクスカリバーを、そっと握り直す。

「あ、――」

慌てたように、彼がズボンのポケットから何かを手渡して来た。

「エクスカリバーってさ、対象が身につけてたものも全部消しちゃうだろ？ だけど、それだけは、その、一緒には消したくないんだ」

渡されたのは財布と、ジッポだった。

「お前に持ってろなんて言わない。捨ててくれていい。だけど、無かったことにはしたくない」

「……わかった」

頷く。

「財布の中身はあげるよ。全財産。迷惑料代わりに」

「ありがたくもらっとくよ」

あえておどけて返した。彼もふふっと笑う。

そうして、沈黙。

「……ごめんな」

少しの沈黙のあと、そう告げた。

「それはこっちの台詞。本当、ごめん。――」

「うん」

「あと、エミリちゃんにも謝っておいて。ここ、人が立ち入れないようにしてくれたでしょ？」

「……ああ、なんだ気づいてたのか」

「さすがにね、この時間にこんなにも人が来ないのはおかしいと思うよ。ごめんね、って言うておいて」

「……うん、わかった。伝えておく」

頷いた。

右手を握る。

「――」

名前を呼ばれた。

彼は微笑んでいた。

「ありがとう」

「ああ。こちらこそ。世話になった」

右手を握る。力を入れて。

一歩踏み出したのは、彼の方だった。右手に向かって一歩踏み出してくる。それに慌てて右手を引きそうになって、ぐっと堪えた。

代わりに、それを前に突き出す。

嫌な手応えがあって、そちらを見そうになるのを、

「――」

名前を呼ばれ、遮られた。小さく首を横に振られる。気にするな、と。

「じゃあ、ね」

「柳司っ」

何かを言いたくて名前を呼んで、言葉を探す。でも、遅かった。エクスカリバーに刺された箇所から彼の存在が消えていく。

彼は最後まで笑っていて、隆二は何も言えなかった。

目の前から、何事も無かったかのように彼が消える。

右手から力が抜ける。

支える力が何もなくなったエクスカリバーが、からんと音を立てて地面に落ちた。

そこには本当に何もなかった。

大きく息を吐き出す。

エクスカリバーは元々、実験体の抹消に使われていたものだ。実験体の抹消に、遺体やら遺品やらは不要なのだ。実験体なのだから。

その事実を改めて思い知らされる。

空を見上げ、ぐっと目を閉じる。

しばらくそうしてから、

「いるんだろ」

空を見たまま尋ねた。

「はい」

がさり、と草木が揺れる音がしたあと、静かにエミリが近づいて来た。

「……すみません」

そして彼女が頭を下げる。

彼女が何を謝っているのかわからなかった。彼女の何が悪いのかわからなかった。けれども、彼女を詰りたかった。実験体を作り出した側の彼女を。

それを精一杯の理性で押しとどめた。それは、八つ当たりだ。自分達を作ったのは彼女ではない。組織全体としてはともかく、彼女個人には落ち度はない。

「あと、頼む」

それでも優しい言葉をかけられるわけもなく、淡々とそれだけ告げた。

「はい」

エミリが頷く。

それを見てその場を立ち去ろうとし、ふっと左手に持ったままの財布とジッポに目が行く。ああ、そうだ、これ、どう

しよう。

よく見ると、渡されたジッポには、シールが貼ってあった。京介と知らない女性がうつった写真のシール。二人の間には何故だか大仏が描かれている。

「……バカが」

小さく呟く。写真の中の京介は、慣れないことに強張った笑顔をしていたけれども、それでもどこか幸せそうだった。

そんな幸せな時間を見つけたのに、お前は本当にこうすることしか出来なかったのか？ 自分がやったことは正しかったのか？

俺たちは二人とも、バカだったんじゃないだろうか。

今更嘆いても、遅いけど。

財布の方も一度あけてみる。金銭の他に、ジッポに貼られていたのと同じような写真シールが入っていた。それをひっぱりだしてみる。何種類かの写真。そのうちの一種類には女の子の子した丸い字で、キョースケ、ココナと書かれていた。

ココナ、というのか。彼女は。

京介を帰してあげられなくて、すまない。

「嬢ちゃん」

「はい？」

エミリは名前を訂正することはしなかった。

「これ」

その写真シールを差し出す。エミリは写真を見ると、

「ああ……」

一言呟いた。

それから、それを受け取ると、

「お預かりします」

「うん、頼む」

それを確認すると、隆二は残りの財布とジッポをポケットに滑り込ませた。

「形見わけ」

言い訳するように呟くと、エミリは一度頷いた。

そのまま、足早にその場を立ち去った。

エミリは去って行く隆二の背中を見送ると、足元に落ちているエクスカリバーを拾い上げた。その隣に落ちているトートバッグも拾うと、その中に滑り込ませる。

少し躊躇ったあと、ケータイを取り出した。研究所の番号を呼び出すと、耳に当てる。

「お疲れさまです」

淡々と事務的に、電話の相手に告げる。

「はい。そうです。すみません、U〇六八は……、はい。申し訳ありません。とめることが出来なかったのは、わたしの責任です。……はい。わかりました。詳しくは戻ってから」

失礼します、と電話を切る。

研究所に嘘をついたのは初めてだった。

「……とめるつもりはありませんでした」

京介の話を聞いていたら、とめられなかった。貴重な実験体が消えることがないようにしろと言われていたにもかかわらず。途中で飛び出していくことも出来たにもかかわらず。

「……神野さん」

しゃがみ込み、京介が立っていた辺りの地面を撫でる。

「本当に、申し訳ありません」

貴方をここまで追いつめたのは、わたし達研究所の責任です。

「ごめんなさいっ」

公園の入り口にある花壇に、マオは腰掛けていた。足をぶらぶらと揺らしている見慣れた姿。それをみると、隆二は軽く息を吐いた。強張っていた気持ちも、一緒に少し逃がす。

『隆二』

それで気づいたのか。マオが振り返ると、微笑んだ。

『お話、終わったの？』

いつもと同じように、なんでもないように尋ねてくる。

「……ああ」

『そう、じゃあ帰りましょう』

そうしてマオは片手を伸ばしてきた。立ち上がらせて、とでも言うように。

何も考えずにその手を握ろうとして、

「っ」

赤い。血で。自分の手が赤く染まっている、血で汚れている、そんな気がした。そんな風に見えた。

京介から血が流れたりしていないのに。

その手でマオの白い手に触ることが怖くて、慌ててひきかけた手を、

『隆二』

マオの方から掴んで来た。

咄嗟に振り払おうとするのを、思ったよりも力強い手が許さない。

『同じだよ』

かわりにぐっと手を引っ張られた。思わぬ事態に体勢を崩す。片膝をつく。反対側の手をマオが座る花壇についてバランスをとる。

緑の瞳が、近い場所から隆二を見つめた。

『あたしも同罪だよ。あたし、京介さんが何をするつもりなのか知ってた。知ってて、隆二には言わなかったし、京介さんをとめなかった。あたしも同罪だよ』

「だけど」

手をくださったのは、自分だ。マオじゃない。

『ずっと言ってるじゃない。同じ穴の貉でしょう？』

と、いつもと同じように笑う。なんでもないことのように。

それを見ていたら、耐えられなくなった。泣く、と思った。

ぐいっとその腕をひっぱり、頭を腕の中に抱え込む。抱きしめる。

「なんでだよ……」

吐き出した声が震えていた。

背中にそっとマオの腕が回される。

「なんだよ、あいつ。なんなんだよ」

思いが明確に言語化されない。なんで、どうして、それだけが口をついてでる。

なんでこんなことになったんだ。どうしてこんなことになったんだ。なんで俺はあんなことをしたんだ。どうして京介はこんなことを選択したんだ。なんで他の選択肢を選ばなかったんだ。

どうして俺を、あいつは、置いていったんだ。

「ずっと。ずっと一緒だと思ってたんだ。滅多に会ったりしないけど、会わないようにしてたけど。それでも、ずっと一緒に居られると思っていたんだっ」

なんで、あいつにまで置いて行かれなきゃいけないんだ。

「寂しいとか、疲れたとか、抱え込む前に言えよ、バカっ」

言われて自分に何が出来たかはわからない。言いたくなかった京介の気持ちだってわかる。だけれども、もっと他の選択肢があったはずじゃないか。

「消えたら後悔だって出来ないのにつ」

声が完全に上擦った。ああもう、泣いていることがマオにばれただろう。

とんとんと、優しく背中を叩かれた。宥めるように。

『京介さんね』

そのままマオが喋りだす。いつもよりも柔らかい声色。

『よかったって、あたしに言ってたの。もう一度心から人を愛せて。まだ、人を愛せると知ることが出来て。それから』

そこでマオは一瞬躊躇うような間をおいて、

『気にかかっていたこと、間違っていなかったってわかって。あの時、隆二をとめなかったことは、間違っていなかったってわかったからよかった、って』

「……あのとき？」

『茜さんのこと』

マオの口からでた、茜の名前に思わず体が強張った。それに気づいたのか、マオの手がさっきよりも強く、一度、隆二の背中を叩いた。しっかりしてよね、とでも言いたげに。

『ずっと気にしてたんだって。隆二が茜さんと一緒に居るのをみたとき、もっとちゃんと諦めろってとめるべきじゃなかったのかって』

「ああ……」

気にかけてくれていたことは知っている。

『真剣にとめられなかったのはね、隆二があまりにも優しく笑ったからなんだって。京介さんはもう、ずっと、そんな風に笑ったことなかったのに、隆二が優しく笑うから、期待したんだって。隆二と茜さんには奇跡が起きて、今後も人間として暮らしていけるんじゃないか、って』

俺はお前が羨ましいよ。京介の声が蘇る。

『そんなことを期待してしまって、とめる手が鈍ってしまったと後悔していたんだって、ずっと。そのあと会った隆二が、あまりにも悲しそうな顔をしていたから。俺がちゃんととめてればって思ったって。だけど、とめなかったことも、間違っていなかったって気づけたって。別れの時に傷つくことを差し引いても、人を愛することは幸せなことだと、思い出せたからって』

写真にうつっていた、強張った笑顔をした京介。だけれども、どこか幸せそうに見えた。

『それからね、茜さんが待っていたこと。それも救いになったって。隆二と茜さんとの間の絆が切れていなかったこと、ある種の奇跡のようだと思ったって。気にかかっていること、間違っていなかったと気づけてよかったって』

よかったんだって、とマオはもう一度続けた。

「そうか……。あいつが、納得しているのなら、いいんだが」

だけど京介。できればそれは、お前自身の口から聞きたかった。こんな風に、完全にお前がいなくなって、他人から聞きたい言葉ではなかった。

「そうか……」

喉元に涙の塊が押し寄せてきて、堪える代わりにぐっとマオの頭を抱え込んだ。マオは何も言わずに、されるがままになってくれた。

「幸せだったら、いいんだ」

吐き出した言葉は、殆ど負け惜しみのようなものだった。だけれども、唯一見つけた救いに縋り付きたかったのだ。

『うん』

マオの手がそっと背中をさすってくれる。

『隆二』

優しい声で名前を呼ばれる。

『あたしは、絶対に貴方を一人になんてしない。置いて行ったりしない。絶対に』

優しい声で、それでも力強くマオが言った。

『京介さんとも、約束したから』

「……ああ」

腕の力を少し緩めて、マオの耳元に顔を近づける。大きな声じゃ恥ずかしくて言えないから。小さな声でも届くように。

「頼むよ。……絶対にいなくならないでくれ」

例え俺が逃げようとしても、追いかけてきて欲しい。我が俣だと、わかっているけれども。

『……うん』

急に耳元で囁かれた声に、言葉に、戸惑ったような間を置いて、マオは頷いた。

『隆二にはあたしがいるから大丈夫だよ』

いつもの底抜けの明るさに、少しの優しさを加えてマオが言った。そのままぎゅっと隆二の背中に回した腕に力をこめる。

「……ありがとう」

耳元で礼を言ったあと、そのままマオの肩に額をのせた。

「……ごめん、もうちょっとだけ」

掠れた声で告げたお願いに、マオは返事をしなかった。代わりに片手で隆二の頭を撫でる。

相変わらずゴム手袋を何枚も重ねたような、遠い感触しかしない。それでも、今日はその手がとてもあたたかく感じられた。そう思った瞬間、また泣きそうになる。

ぐっと唇を噛んで、耐えた。

どれぐらいそうして居ただろうか。

『隆二』

マオが小さく名前を呼ぶ。

「ああ」

それをきっかけに隆二も顔をあげた。マオの方を向く前に、ぐっと腕で目元を拭った。

「……悪かったな。色々、付き合わせて」

そういうとマオは小さく首を横にふった。

マオから離れて立ち上がる。

マオは花壇に座ったまま、先ほどと同じように片手を伸ばしてきた。

『帰りましょう？ 帰ってソファーに座って、二人でテレビでも見ましょう』

そう言って、いつもと同じ顔で笑う。

「ああ」

隆二は軽く頷くと、今度は迷うこと無くその手をつかんだ。

第四幕 放浪猫の後始末

「マスター、こんにちはー」

茶色い巻き髪をふわふわと揺らしながら、一人の女性が喫茶店に入って来た。

「ここなさん、こんにちは」

喫茶店のマスターがそれに応じる。

ここなと呼ばれた女性はカウンターに腰掛けた。

「ランチセットをお願いします」

「はい。……そういえば、京介くんからは連絡ありましたか？」

マスターが尋ねると、

「ないのー」

と女性がふくれた。

窓際のテーブル席で、エミリはそれを聞いていた。ぎゅっとスカートの裾を握る。

そっと鞆から取り出したプリクラ。そこで神野京介の隣で笑う女性。今、カウンターに座っている彼女。

カップに僅かに残ったコーヒーを飲み干すと、プリクラを再び鞆に押し込んだ。席を立ち上がり、言葉少なに勘定を済ませると、足早に、逃げるようにその場を後にした。

「見慣れない子ー」

エミリが出て行ってから、ここなが呟いた。

「そうですね」

「外国の子かな」

「綺麗な金髪でしたね」

「ねー。……なんであんなに格好が赤いのかはわからないけど」

ここなの言葉にマスターは軽く微笑みながら、テーブルを片付けるためにカウンターの外に出る。

「……おや」

エミリが座っていたテーブル。その下に、見慣れない紙袋がある。

「ん？ 忘れ物？」

それを見ていたここなも、席を立ち上がり、そちらに近づく。

「そのようですね」

言いながらマスターは紙袋を開き、言葉を失った。

「どうしましたー？」

軽い口調でいいながら、ここなもそれを横から覗き込み、

「え」

小さく呟いて言葉を失った。

なんでもない紙袋の中に入っていたのは、大量の札束だった。身代金の受け渡しでもできそうな。

「ちょっ、えっと。とりあえず、さっきの子探して来るっ！」

慌てたようすでここなは言い放ち、ヒールを鳴らしながら店を出て行く。

「ここなさんっ」

マスターが名前を呼んだ時には、もう扉は閉められていた。

「……警察に届けないといけませんね」

マスターは困ったように呟く。一応金庫にしまっておこう。そう思ったとき、紙袋の中に入っている一枚の紙に気づいた。

そっとそれを持ち上げる。連絡先でも書いていないかと思って。

けれども、そこに書いてあったのは、ごめんなさい、の一言だった。小さな丸い字で一言だけ。書いてあったのは一言だけだった。

「……ああ」

喉の奥から、声が漏れる。

ごめんなさいの横に貼られていたのは、常連の彼女と、その恋人のプリクラだった。

「京介くん」

少しだけこの店でアルバイトしていた青年。久しぶりに見るその姿に、小さく名前を呼ぶ。これは一体、どういうことですか。

「マスター、駄目だったー。見つからないー」

ドアが開き、ここなの声がする。慌ててマスターは、その紙をエプロンのポケットに滑り込ませた。

「あんなに目立つのにー」

「そうですか」

「とりあえず、それ、交番？」

「そうですね」

走り疲れたように椅子に座り込むここなに、マスターはいつもと同じ微笑みを向けた。

「持ち主が現れなかったから、ここなさん、もらったらいかがですか？」

「それならマスター、半分にしようよ。山分け」

言ってここながくすくすと笑う。

「ランチセット、もうちょっと待っててくださいね。先に交番に電話します」

「はい」

ここなは明るく返事をし、鞆からケータイを取り出した。

マスターは店の電話にむかひながら、ポケットにそっと触れた。

これは彼女には見せられない。見せない。だから、京介くん。ちゃんここに、帰って来てくださいね。

ここなはケータイをひっくりかえし、電池蓋を見る。そこに写るのは自分と、京介。二人の間

に押された大仏のスタンプを指で軽くたたくと、
「連絡ぐらい寄越しなさいよ、ばーか」
小声でぼやいた。



第一幕 猫の飼い主に小判

ピーンポーン。

昼下がり、珍しく神山家のチャイムがなった。

「マオ。誰が来たか見てくれないか？」

隆二は本から目をそらさずにそう言う。

ここに尋ねてくるなんて研究所絡みか、なんかの勧誘か。どっちにしろあんまりかかわりたくない。居留守使うかどうか、マオに見て来てもらってから判断しよう。

「マオ？」

返事はない。

顔を上げると、居候猫はテレビの前で丸まって眠っていた。これじゃあ本当に猫だなあと少し苦笑しながら、諦めて玄関へ向かった。

「はい？」

「あ、こんにちは」

ドアをあけた先にあったのは、赤だった。

「ああ、嬢ちゃん」

「エミリです」

勧誘ではなく、研究所絡みの方だった。だが、まあ、マシな方だろう。エミリか、エミリの父親以外の研究所の人間が訪れたら、それはもう、地獄への入り口だ。もっとも、そいつらがチャイムを鳴らすなんていう大人しい真似するとは思えないが。

「あの、マオさんは？」

中をうかがうようにしてエミリが問いかけてくる。

「寝てるけど？」

「えっ。えっと、それはなぜですか？」

「なぜって」

睡眠とるのになんでもへったくれもないだろ。

「眠いからじゃないか？ なんだっけ、今ほら、あれやってるだろ。二十四時間だか二十七時間だったか、続けて生放送やるっていう、番組」

「ああ。……そんな季節ですか」

「嬢ちゃんでもそういうのに季節感じたりするんだな」

「エミリです。それが？」

「ああ。で、あいつはそれを通して見たいからって、ずっと起きてたんだよ」

結局寝ているけど。起きたらきつと、うるさいんだろうなあ。なんで起こしてくれないの！とか。そんなもん、寝てしまうような番組構成をしたテレビ局に言えよ。

「そうですか」

エミリは何故か安心したように息を吐いた。

「なに？」

「いえ、とってもマオさんらしい理由だなと思ひまして」

それは否定しないけど。

「そうじゃなくて、何の用？」

「.....少し、いいですか？」

言ひて手招きされる。

「中で話せばいいじゃん」

「.....マオさん聞かされたくないんです」

だから寝てるってば、とは思ひながらもしぶしぶドアの外にでる。後ろ手でドアを閉める。

「で？」

「一週間ほど前から、G009、G010、G012、と立て続けに消滅しています」

Gから始まる実験体ナンバーには聞き覚えがある。

「.....マオは、G016だったな？」

「はい」

なるほど、それはマオに聞かせられない。

溜息のような吐息を吐くと、腕を組んでドアに寄りかかる。本当、碌な話を持ってきたくない

。

「016よりも若い番号っていうことは、マオの前か」

「そうです。ちなみに、成功した、と言えるのは008からです。が、008は別の理由ですでありません」

G008がない理由がどうせろくでもないことだろうと思ひて、深く追及しなかった。抹消、か

。

「G011は無事だと？」

「今のところは」

「原因は？」

「調査中です」

「.....そうか」

役に立たないなあ。

「兆候としては、過睡眠があげられます」

だから、心配したのか。

「.....わかった、気をつけてみる」

「はい。なにかわかりしだい、お伝えます」

そこでエミリは、彼女にしては珍しく一瞬口ごもり、心持ち小さな声で続けた。

「.....あと、これは、言うか迷ったのですが。先日の、あの一件のあと」

「.....ああ」

少しエミリから視線を逸らす。神野京介の、一件か。

「彼女のところ、行ってきました」

「.....そうか」

ココナという名前の、京介の恋人。写真でしか知らないその顔を思い浮かべる。

「特になにも、できませんでした」

「ああ。……しないほうがいい」

かかわっちゃいけない。普通の人的人生に、自分たちは、かかわらないほうがいい。巻き込んではいけない。それが今守るべき最低限の礼儀で、せめてもの罪滅ぼしだ。

「はい。……とりあえず、お元気そうでした」

「そうか。……うん、わかった」

エミリに視線を戻す。

「ありがとう」

本来ならば、自分がやるべきことだったとも思う。

「いえ」

エミリは小さく首を横にふった。

「あ、あと、これもお渡ししておきます」

言って何か小さな機械を渡される。

「この前のこととか、今回のこととか、色々考えた結果、対面でしか連絡手段がないというのも、と思ひまして」

渡されたそれは、携帯電話、というやつだった。思わず渋い顔になる。

「あ、通信料などはこちらでもちますから、ご安心を」

隆二の顔をどう判断したのか、エミリがフォローしてくる。

「心配しているのはそこじゃない」

エミリを見る。

「嬢ちゃん」

「エミリです」

「俺がこれを使えると思うのか？」

神山隆二は、機械類にめっぽう弱かった。

「説明書もついてますよ、これどうぞ。神山さん、頭は悪くないんですから、それぐらい覚えてください」

さっきまでの大人しい態度はどこへやら。呆れたように、バカにしたように、エミリが答えた。

「理解と実践は違うんだよ。年寄りに無理させんなよ」

「年寄り年寄りって言いながら、若者言葉もしばしば使っていらっしゃるじゃないですか。もしかすると、わたし以上に」

「それはそれ、これはこれ」

「やってみなければわかりません」

そんな不毛なやりとりを繰り返していると、

『隆二？』

ぴょこんとドアにマオの首が生える。

「お、起きたか」

『うん。寝ちゃったの悔しいっ！ あ、エミリさん……』

エミリに気づくと、少し隆二の後ろにかくれた。

「こんにちは」

『こんにちは……』

どうにも距離感は縮まらない。まあ、仕方有るまい。だって殺されかけたわけだし。幽霊に対してその表現が正しいかは別として。

そんなことを思っていると、

『あれ！ それ、ケータイ！』

隆二の手の中にあるものを見たのか、マオのテンションがあがる。

『え、どうしたの？ 買ったの？ ついに？』

「嬢ちゃんにもらった」

「エミリです」

『えーいいなー！ よかったね！ ……でも、隆二に使えるの？』

「丁度それを議論してたところだよ」

どいつもこいつもバカにしゃがって。そのとおりでけど。

「嬢ちゃん」

「エミリです」

「時間あるなら、レクチャーしてってくれよ」

言ってドアをあける。

「レクチャーっていう単語は使えるんですね」

エミリが真顔で言った。

『ププ、よくみたらこれ、おじーちゃん用のやつだよな？ やだー、エミリさんったらナイスチヨイス！』

台所で湯を沸かしていると、マオのはずんだ声が聞こえる。

『エミリさんののは？』

「これ、ですが」

『わっ、スマートフォンじゃん！ いいなー、アプリとかなにいれてるの？ ツイッターやってる？ フェイスブックは？ ラインは？』

「なんでお前そんなに詳しいんだよ」

持ってないくせに。

コーヒーをいれて戻って来ると、マオは机の上に座り、置かれたケータイをじろじろと眺めていた。

エミリが若干ひきながらそれを見ている。

「つーかお前、距離感急につめすぎだろ。嬢ちゃんひいてるじゃないか」

「エミリです」

「あとほら、テーブルに座るな。行儀が悪い」

言って椅子をひいてやる。

『はい』

マオは大人しく隣に座った。

エミリの前にもコーヒを差し出しすと、問題の機械を見る。

「とりあえず充電してありますから、使えるはずですよ。電源入れてください」

エミリがさらりと言う。

「……電源」

ケータイを凝視したまま固まった隆二を見て、

「……その電話のマークのところを長押ししてください」

エミリがどこか呆れたように言う。

わからないんだから仕方ないじゃないか。

「これ？」

「こっちです」

「ああ、これね。……つかないけど」

「長押しです。数秒押したままにしてください」

言われたとおりに、ボタンを押しっぱなしにすると、ぱっと画面がついた。

「おおっ」

思わず声が漏れる。なんだかちょっと嬉しい。

そんな隆二とは対照的に、

「まさか、電源をいれるのにも一苦労だとは思いませんでした」

『前途多難、ってやつね』

若者二人はつまらなさそうに言う。

ほっとけ。

「はい、じゃあとりあえず電話とメールぐらいはマスターしましょう。どうせネットとか使わないでしょうし」

『使えない、だね。正しくは』

「とりあえず、わたしの連絡先を赤外線で……。どうせ神山さんが番号交換する相手なんていないでしょうから、覚えなくていいですね。わたしがいれますね。貸してください」

「どうせどうせって失礼だな」

そのとおりでだけど。

なに言っているんだかわからないまま、エミリにケータイを奪い取られる。エミリが隆二のと、自分のとをなにやら操作して、

「はい」

すぐに返された。受け取るとそこには、進藤エミリの文字と、電話番号と思われる数字と、なにやらアルファベットの羅列が並んでいる。

「わたしの番号とメールアドレスです」

『エミリさんって、進藤っていうんだねー、知らなかったー』

それを横から覗き込んでいたマオが驚いたような声をあげる。

「ああ、そういえば名乗ったことありませんね」

『うん』

「進藤エミリです。どうぞよろしく、マオさん」

エミリがマオに微笑みかける。

『マオです！』

マオも戯けて挨拶をする。

それを見ながら少し意外な気がする。エミリがこんな風に巫山戯るところ、初めてみたかもしれない。

ぼんやりそれを見ていた隆二に、エミリが鋭い視線を向ける。

「ぼおっとしてないで、次は電話かけますよ」

そのまま鋭い口調で言われる。あ、やっぱりいつもどおりかも。

その後、電話の取り方やかけ方を呆れられながらも教えられ、現在、

「とりあえず、メール打ってください。こんにちは、お元気ですか、ぐらいいいので文面」と放置されているところだ。

メールアドレスは面倒だから、とエミリに勝手に決められた。それにしても、神山だから、god_mountainって、酷いセンスじゃないか、これ？

慣れない操作に四苦八苦している隆二を尻目に、エミリとマオはなんだか楽しそうに話をしている。

『へー、じゃああの研究所って、国が作った秘密の研究所ってこと？ それだけ聞くとカッコいいねー、なんか！ ミチコの敵とかいそう！ それか、事件が起きて刑事さんが調べに来そう！』

マオが目を輝かせて言うのを、

「あくまでも敵役、なんですね」

エミリが苦笑いでうける。

『エミリさんは子どもの時から研究所にいるの？』

「ええ。住居はずっとあの敷地内なので。祖母の代から。だからここからですと、ちょっと遠いですね」

『隆二ともずうっと知り合い？』

「そうですね、父がもともと神山さん達の担当だったので」

『ああ、あの似てない……』

「よく言われます。ですので、実務につく前から何度か面識は。ちゃんと仕事はじめたのは、中学のときですね」

『へー、すごいね』

それにしても、話題がなんだか物騒だろう。楽しそうだからいいけどさ。

などと思うものの、つつこむ余裕は隆二にはない。

『でも中学生働かせるなんて、人いないの？』

「……いないですよ」

マオの屈託のない質問に、エミリの顔がひきつる。

「研究班は、そこそこいるんですけども。あの人達は研究にしか興味がないので、後始末をするわたしみたいな人は、数が少ないんです」

『ふーん、そのままいなくなっちゃえばいいのに』

ストレートな物言いに、さすがにぎょっとして隆二は顔をあげた。思わなくないが、それをよくまあエミリに言えたものだ。

エミリは苦笑いしながら、

「まあ、マオさんからしたらそうなりますよね」

と呟いた。それから、自分を見ている隆二に気がつくと、

「神山さん、余所見しないでください」

冷たく一言。隆二は慌ててケータイに向き直った。ええっと、次はどうしたら。

「あっ」

「……はい？」

「全部消えた」

ここまで打った文面が、何を間違えたのか消えてしまった。あとちょっとだったのに！

「……やりなおしてください」

エミリが溜息まじりに言葉を吐いた。

『隆二は本当機械駄目ねえー』

マオもおちよくるように言う。

うるさいな、お前だってできないくせに。まあきっと、触れたらあっという間に使いこなしてしまうんだろけれども。

そう思いながらも、再び仕方なしにケータイに向き直った。

第二幕 少女の心は猫の眼

結局、隆二にメールを一通送らせるまでに二時間程かかってしまった。最後の方はこちらも意地になって付き合ってしまったが、時間の無駄なような気もしてくる。

溜息をつきながら、エミリは研究所の廊下を歩いていた。戻って来たらすっかり日も暮れてしまった。

外観は製薬所の研究施設のフリをしている。その廊下には、白衣の人間が沢山歩いている。白衣を着ているのは研究班だ。その中で、エミリの姿は浮いている。もっとも、彼女の場合、どこを歩いても浮くことになる外見なのだが。

「進藤」

すれ違う白衣二人組に声をかけられる。下品な笑い方をしたそいつは言った。

「もう失敗しないようにな」

バカにしたように言われた。それだけの言葉だったが、何をさしているのかはすぐにわかった。わかったから、エミリは軽く一度頭を下げると、何も言わずに足早に彼らから距離をとる。

失敗したことは、わかっている。あれは失敗だった。神野京介の件。だけど、何を失敗ととらえているか、エミリと彼らでは違う。

「現存している貴重なリナンバーをみすみす消滅させるなんて！ なんのための派遣執行官なんだっ！」

「役立たず！」

「これだから小娘に任せるのは不安だったんだ。親の七光りだな」

彼らはあのとき、そうエミリを罵った。

それでなくても研究班は、研究の成果を理解できないからと派遣執行官をバカにしている。

その中でも最年少のエミリのは、こんな小娘に何がわかる、たまたま祖母や親が研究所の人間ただただじゃないか、と底辺として扱っている。そんなエミリの失策で、古い実験体を失うことになった、と苛立つ彼らの気持ちは理解している。

だけど、エミリは決して、貴重な実験体を失うことになったことが失敗だと思っていない。

失敗したと思っているのは、神野京介にあの選択肢を選ばせてしまったことだ。自分に何が出来たのかはわからない。けれども、間違っていたことだけはわかる。

あれは誰も幸せにしない選択だった。

ココナに会ってきたけれども、なにもできなかった。そう、先ほど神山隆二に告げた。

それはある意味正しくて、ある意味嘘だ。

金銭を渡した。忘れ物のフリをして。研究所の規定に従って。

そんなこと、神山隆二には言えなかった。

「それはそれは、素敵な弁償方式だな」

なんて皮肉って笑う彼の顔が目には浮かぶ。

金銭で解決できないことだって、あるのだ、ということも最近理解した。

今日の報告書を仕上げると、足早に研究所を後にする。とはいえ、自宅も研究所の敷地内、

寮だ。

父の二人暮らしの部屋に戻る。

「ただいま」

言いながらドアを開ける。玄関には既に父の靴があった。

「お帰り」

「ただいま、ダディ」

リビングで新聞を読んでいた父親に微笑みかける。父親はいつもと変わらない和服姿だった。

そのまま自室に入る。机の上の写真に微笑みかけた。

「ただいま、マミィ」

殆ど記憶のない母親が、写真の中で微笑んでいる。

荷物をベッドに放り投げると、その上に自分も倒れ込む。

先ほどの、マオとの会話を思い出す。

ケータイがきっかけになったのか、今日のマオは普通に話してくれた。そのことが、ほんの少し嬉しい、気がする。ただ、会話の流れがなぜ研究所のことだったのか。もっと他に話題がなかったのか。思い返して、自分にうんざりする。

ないのだ。

自分には、マオを喜ばせるような話題が思いつかない。彼女はなんだか興味深げに聞いてくれていたが、本当はマオにするような話じゃなかった。

「なくなっちゃえばいいのに、か」

それはきっと、神山隆二も思っていることだろう。研究所の話なんて、わざわざ彼らにすることじゃない。

だけれども、エミリには他に話題がない。今日改めて思い知らされた。自分の世界は、この研究所の中で完結している。狭い世界で。産まれてからずっと、ここの常識が世界の常識だった。

それを、おかしいと思ったことは今までない。寧ろ、誇りに思っている。

確かに、マオや隆二には迷惑をかけている。それでも、この研究所は社会に役立つ研究もたくさんしている。最近解禁になったある難病の特効薬だって、この研究所の研究成果だ。

決して表舞台に立つことはないけれども、世界を裏から支えている。何万人も救えることになるのだから、多少の犠牲は仕方がない。

それは本心だし、プライドだし、ずっとそう思っていた。

でも、本当に？

何万人も救えるのならば、数人を犠牲にしてもいいの？ 本当に？

最近なぜだろうか、このことを考えると心のどこかで疑問が沸き上がる。こんなこと、初めてだ。疑うことなんて、今までなかった。

だって、研究所は正義だから。

それがわたしの世界だから。

ぐるぐるまわる思考回路に引きずり込まれそうになったとき、体に振動を感じる。下敷きにした鞆の中、ケータイが震えていた。

とりだすと、隆二からのメールだった。おお、意外。使おうと努力している。

開いてみる。

タイトルが入ってないのはご愛嬌。本文、「ずつとききたかった。なんで赤い服きてんの。あと今度、ちいさいつのだしかたおしえて」

平仮名が多いが、まあ彼にしてはなかなかだろう。このメールをうつのに何時間かかったか知らないが。

返信をしようと思って気づく。まだ、続きがある。

少しスクロールすると、何度かの改行のあと書かれていた。

「あときようすけのことは、気にしなくていいから。ほんとうに」

どこかで、ひゅっと音がした。

しばらくしてから、それは自分が息を吸った音だと気づいた。

なんで、そんなことを。慣れないメールで、無駄な改行をいれるなんていう手間をしてまで、なんでそんなことを。わざわざ言ってくれるのだろうか。

気にするに決まっているじゃないか。

なんだかよくわからない感情が胸中を支配する。

しばらくその文面を眺めていたが、一つ大きく息を吐くと、そのメールを保護した。戒めだ、これは。忘れないように。

机の引き出しをあける。小さな箱の中に入れた、彼のプリクラ。捨てられないで大事にとってある。捨てられるわけがない。

忘れないように。

今はまだ結論が出ていないけれども、この前から胸を過るこの気持ちを大事にできるように。この前の、G016が脱走した事件から胸を過るこの気持ち。

わたしは、正しいのだろうか？

ふっと小さく笑った。自嘲気味に。

悩んでばかりいて、最近のわたしはどうにも変だ。

とりあえず今は、このメールに返事を打とう。そう決めると、ケータイに向き直った。

ぴろろん、と音を立ててケータイが鳴った。

『隆二！ ケータイ！』

新しい玩具を与えてもらった子どものように、ケータイをじっと眺めていたマオが焦ったような声をあげた。

「ん」

なんでもないように頷いて、それを手に取る。手が震えそうになる。

『メールね！』

横から覗き込んだマオが言う。新着メール一件と出ている。

「えっと」

『その真ん中のボタン押せばいいんだよ』

「わかってるよ」

本当にわかっていたってば。今押そうと思っていたってば。

そう思いながら、真ん中のボタンを押す。

エミリからの返事だった。開くとそこには長文がずらりと並んでいる。

え、さっきメールしたばかりなのに、もうこの量の返信を打ってきたの？ そのことに愕然とする。

若者、怖い。

メールの内容は、小さいつの出し方を懇切丁寧に教えてくれていた。ただ、ところどころバカにしたような言い回しも確認できたけれども。

そして、最後に書かれている。

「お尋ねの件ですが、赤いと三倍速いんですよ？」

三倍速い？

『赤い彗星だったのか……』

横からそれを見ていたマオが、驚いたように呟く。

え、なんで伝わってんの？

全く意味のわからない隆二をほったらかして、マオはなるほどね、なんて呟いている。だから何が？ なにこれ、ジェネレーションギャップ？

困惑している隆二の顔をどう判断したのか、

『お返事しといた方がいいよ』

マオがくすり、と笑って言う。

『わかった、だけでも。小さいつ、使うしね』

戯けたように付け足す。まったく、余計なお世話だ。

そう思いながらも、なんとか苦勞して、わかっただけのメールを打つ。

ああ、なんだろうこの達成感に疲労感。頼むから、嬢ちゃん、これ以上今日はメールしてこないでくれ。対応しきれない。

『おつかれさま』

マオが笑ったまま、隆二の頭を撫でる。なんだかバカにされている気しかしないが、今回は本当、バカにされても仕方がない気がするので何も言わない。代わりに、目の前のマオをじっと見つめる。

『なに？』

見られていることに気づいたのか、マオが小首を傾げる。

『今日もマオは可愛いよって？ 知ってるー』

「言ってない、一言も」

両手を頬にあてて、巫山戯て笑うマオは、いつもどおりのマオだ。

Gナンバーの消失。それはマオとはきっと関係ないのだろう。きっとそうだ。

だって、マオはすでに規格外なのだ。こんなに自由気ままに動くのはGナンバーとしてはイレギュラーなのだ、最初の時にエミリが言っていたじゃない。

だから消えるなんてこと、あり得ない。

そう自分に言い聞かせる。

それでも、

「……なあ、体調とかどうだ？ 妙に眠いとか、そういうこと、ないか？」

一応聞いてみる。

マオは、急に変な質問をされた、とでも言いたげな不思議そうな顔をしながら、

『女の子はそういうときがあるってテレビでみたよ』

とんちんかんな回答をかえしてくる。

……また、そういうことばかり覚えて。

うんざりため息をつく。

テレビに教育を投げっぱなしな俺がいけないんだよな、きっと。ちょっとだけ反省。

『眠くはないけど、ねー、隆二。お腹空いたあー』

甘えたように喉を鳴らして、マオが隆二の右腕を軽く揺する。

「この前食べてなかったか？」

『でも空いたのお！ だから、行ってくるね？』

軽く唇を尖らせてそう言うと、隆二から離れようとするマオを、

「あー、ちょっと待て」

引き止める。

なにもないとは思うけれども、万が一なにかがあったら困るから。心配だから。という理由は隠して、

「俺も行く。コンビニ行く、ついでに」

言い訳を付け足しながら立ち上がると、

『本当っ！？ 一緒に来てくれるの？ やったあ！』

マオの顔がぱあぁと華やいだ。

第三幕 愛猫フォトコンテスト

エミリが報告にきてから二週間が経ったが、マオに特別変化は見られない。というか、マオの変化がよくわからない。

過睡眠が兆候としてあげられる、と言われても、もともとよく寝ていたしなあ、だらだらと。そうまるで、猫みたいに。

それは自分もだが。

マオがテレビを見て、隆二が本を読んで、マオが飽きて隆二にちょっかいをだして、それを隆二が適当にあしらって。膨れっ面をしたマオがいつの間にか寝ていたり、気づいたら隆二も寝落ちしてたり、起きて気が向いてコーヒー飲んだり、マオが散歩に行ったり、コーヒーが切れて仕方なくコンビニに行ったり。それがいつもの、神山家の日常だった。

神山家の日常は、いつだって怠惰で非生産的で、心地よい。

いつだって眠り過ぎといえば眠り過ぎなのだ。だから違いなんて、わからない。わからないということは、きっと無い、ということだ。兆候なんて、無い。消えたりしない。

最近の隆二は、ことあるごとにそう自分に言い聞かせて安心させている。安心、ということはずまり自分は心配しているのだ。不安に思っているのだ。そしてその度に、その事実にぶちあたる。

脳裏をよぎるのは、あの言葉。

「理解してろよ、意識してろよ。目を逸らすなよ。ちゃんと考えてないとお前、後悔するぞ」呪いのように自分にまとわりつく、京介の言葉。

いつだって見ないフリをしてきた。茜のことだって、京介のことだって、きちんと見ていたらもっと別の選択肢があったはずだ。

だけれども、突きつけられる現実が怖くて、いつだって目を逸らしてきた。目先の快樂を選んで、未来の不幸を呼び寄せてきた。そんなこと、自分でよくわかっている。

だからって、

「……じゃあどうすればいいんだよ」

見ているだけじゃ駄目なのに、どうしたらいいのかわからない。

口からこぼれ落ちた弱音に、自分で思わず嘲るような笑みを浮かべてしまう。

『んー？ なんかいったー？』

こちらを振り返ることなく、マオが尋ねて来る。視線はテレビに固定されている。

マオの大好きな四字熟語シリーズとやらは、七転びヤオ君子まで無事放送が終了した。ただ、特撮版が終わったことにより、今度はアニメ版の再放送が、少し放送時間を変えて行われている。今だってマオは、アニメ版疑心暗鬼ミチコに釘付けだ。

「独り言。気にすんな」

『そー。ああっ、危ないっ』

隆二の返答よりも、画面の中で背後から襲われたミチコの心配をする。思わず中腰になっている。

その平和な姿に、思わず口元が緩む。大丈夫。ちゃんと見ている。ちゃんと見ている結果、判断している。マオは大丈夫だ。

きゃあっ！ と悲鳴なんだか歓声なんだかわからない声をあげるマオは、ちゃんとここにいる。

たっぷり三十分、わいわい騒ぎながら視聴を終えると、ふわりとスカートの裾を翻して隆二のところにやってきた。

終わった途端、すぐこれだ。暇になった途端、構ってもらいにくる。気まぐれだ。

『ねー隆二ー』

甘えるように、ソファーに座った隆二の膝に顎をのせて、上目遣いで告げる。

『お腹空いたー』

「また？ テレビ見ていただけなのに、燃費悪いなお前」

呆れて笑う。テレビを見ていただけなのに、すぐに空腹を訴えてくる。まあ、毎回毎回あんなに高いテンションでテレビを見ていたら、そりゃあエネルギーも消費しやすくなるだろう。

『だあって、空いたんだもん』

「はいはい」

マオはぷうっとふくれたまま、隆二の膝から動かない。いつもならさらっと、行ってくるね！

なんて言うのに、何か言いたげじっと隆二の顔を見ている。

「……なに」

その視線の意味をおおよそ理解しながら尋ねると、

『……一緒に行こう？』

小声で誘われる。そうだと思ったよ。

「……仕方ないな」

しゅしゅそう言うと、マオの顔が一気に華やいだ。

なんとなく、心配なことは心配だし。

『やった！ お散歩！』

浮かれたように宙を舞うマオの、すらっとした体つきを眺める。

しかしまあ、よく寝て良く食べているのに、なんで育たないかなあ。胸が。

心底どうでもいいことを思った。

最近の隆二の懸案事項はもう一つある。それがこの、手のひらの中にある小さな機械、携帯電話だ。

『慣れたー？』

ソファーに座り、渋い顔でそれを睨む隆二の横で、マオがのんびりとした声で尋ねて来た。それに、無言を持って返事とする。くすり、とマオが笑った気がした。

『大丈夫だよー。メールもだいぶ、まあそれなりに、隆二にしてはちゃんとしてきたじゃん。打つのにすっごく時間かかってるけど』

「世間的には全然及第点じゃないってことだよな、それ」

『きゅーだいてん？』

「不合格だよな、ってこと」

『それはそうだね』

しれっと答えられて、さらに渋い顔つきになる。

隆二にしては珍しく、努力というものをしているのに、この有様だ。大体そもそも、この怠惰な性根を有する不死者は、頑張るとか努力とかそういうことが大の苦手だった。出来れば一生だらだだけしていたい。

『たまの努力もスパイだよー』

他人事だと思ってか、マオが楽しそうに笑う。

「スパイスな」

なんで諜報員になるんだよ。

『ああ、それぞれ』

「にしたって、効き過ぎだろ……」

辛くて喰えたもんじゃない。

『ねー、それよりさ』

初日からずっと、ケータイに興味津々のマオが横から覗き込みながら、

『そろそろ電話とメール以外のこともしてみようよ！』

「できるわけないだろ」

そもそも、電話とメール以外になにができるのかもわからないのに。

『写真！ 写真とろう！』

マオがはしゃいだ声をあげる。まったく、どれだけケータイに興味津々なんだ。

「写真ー？」

そもそもこれでとれるのか。あ、確かに良く見たらカメラのレンズみたいなものついているけど

「やり方わかんないし」

『あたしがわかるから大丈夫！』

「なんでわかるんだよ」

『テレビとか見てたら大体わかるよ』

どんだけテレビっ子なんだよだから。

「壊れたらどうするんだよ」

『大丈夫だよ、最近の電化製品はそう簡単には壊れないから』

「……昔の電化製品を知っているというのか」

産まれたばかりのひよっこのくせして。

『えっと、あのね、その真ん中を押してメニューだして』

「無視か」

言いながらも素直に言われたとおりにする。

『ほら、そこのカメラってやつ選択してー』

マオがすらすらと述べていくとおりに操作していく。

「あ、本当だ」

本当にカメラが起動した。

『真ん中押すとシャッターだから。ほらほら、とって』

言いながら笑顔でピースサインするマオの方にレンズを向ける。案の定、ケータイの画面にはマオの姿は写らない。が、そのままシャッターを押してみる。かしゃっという音の後、保存しました、の文字。

『そこでもどって、ほらそれ、そのデータフォルダーってやつにはいつているから』

さっきとった画像をひらく。写っていたのは、見慣れた赤いソファ、だけだ。

『……むう、写ってない』

マオが不満そうに呟く。

「幽霊だからなー」

『心霊写真はあー？ ねー、心霊写真にはならないのー？』

「知るかよ、そこまで。マオ以外に幽霊の知り合いなんていないんだから」

『むう』

心霊写真でなかったことがそんなに不満なのか。マオが頬をふくらませる。

『心霊写真とって、テレビに投稿したかったのに』

「……どんだけテレビっ子だよ、本当」

生活の基軸がテレビなことに呆れて少し笑う。

『だってー、全国ネットおー。テレビにでたかったー！』

「仮に心霊写真がとれていても、送り方わかんないし」

『エミリさんにやってもらうもん』

「……そんなことで嬢ちゃん頼るなよ」

見返りが怖いじゃないか。

「それに、あんなピースで笑顔の心霊写真なんて怖くないだろ」

『だって可愛く写りたいもん！』

「なにがしたいの、お前」

唇を尖らせるマオに、呆れたように言葉を返すと、

『……もういいっ！ ちょっとやってみただけだもん、隆二の意地悪っ！』

何かが癪に障ったのか、ぷうっとマオはむくれた。そのまま、ふいっと壁を抜けて、隣の部屋へ消えてしまう。

「……なんなんだかねえ」

小さく呟く。よくわからないが、どうやら何か会話の仕方を失敗したようだ。今ひとつマオの考えていることや機嫌のスイッチがわからないのは性別の差か、年齢の差か。勝手に機嫌直しておいてくれるといいけどなー、機嫌とるの面倒だし、とひとでなしな事を思いながら、ソファに座り直す。

こういうやりとり、拗ねたマオのご機嫌をとる行為はとてつもなく面倒だが、でも僅かにどこ

か楽しい。それがまあつまり、一人じゃない、ということなんだろうな、と思う。

ふっと小さく笑みが溢れる。

認めたくないが、マオがきてから、種類や程度に差はあれど、笑うことが多くなった、と我ながら思う。一人じゃないから。

ぼんやりとつけっぱなしのテレビを眺めていると、手の中でケータイが震える。ここに連絡してくる人なんて一人しかいなくて、案の定、表示は進藤エミリになっていた。

ほんの少し、まだ緊張する指先で電話にでる。

「嬢ちゃん？」

「エミリです。今、良いですか？ マオさんは？」

言われて視線を動かすが、見えるところにはいない。隣の部屋で拗ねているんだろう。

「大丈夫」

「そうですか。ご報告があります」

「ああ」

「G011、それからG013が消えました」

「……そうか」

ある程度予想していた用件に、溜息が溢れる。事態はどこかで動いている。

「G014もこの前から眠ったままで。おそらくは……」

G014の次は、G015。では、その次は？

「……そうか」

「マオさんは、大丈夫ですか？」

「ああ」

「なら、いいんですけど。一応、ここまでのデータがでているらしいのに、なかなかここに寄越さないからせつついています」

忌々しげにエミリが告げる。研究班と仲が悪いとか言っていたな。その影響か。

「すみません。なにかわかりましたら、すぐに連絡しますので」

「ああ」

今ひとつ頼りににならないが、頼るべきところはそこしかない。

「なにかあったら、いつでもいいので、連絡してくださいね」

そのためのケータイですからね、携帯しててくださいね、と少し戯けて告げられる。それに少し微笑む。

「そういう冗談めいたことも、言うようになったんだな」

ちょっと前には考えられないことだ。冗談を言うなんて。

思ったままを告げたら、電話の向こうは急に沈黙した。

「嬢ちゃん？」

奇妙に思って名前を呼ぶと、

「……エミリです」

少し長い間のあと、そう返事がかえってきた。それからなんだか、忌々しげにエミリは続ける

。

「わたしだって、多少は変わるんです」

「……別に悪いとは言ってないだろ」

何をそんなに嫌そうに言うんだろうか。エミリはそれに答えず、ただ苛立のような溜息が一瞬間こえた。

「ともかく、そういうわけですので」

強い口調で言われる。

「ああ、わかった」

まったくこっちの少女も、なにが地雷なのかわかったもんじゃない。軽く肩を竦めながら返事をする。

「それじゃあ失礼します」

「ああ……、ってもう切れてるし」

早口で言ったエミリはそうそうに通話を終えたようだ。まったくどいつもこいつも自分勝手なんだから、と全力で自分を棚上げしたことを思いながら、隆二はケータイをソファに置くと、軽く息を吐く。

事態は動いているが、まったくもって何もわからん。

『エミリさんー？』

唐突に左手からかけられた声に、驚いて視線をそちらに向ける。いつの間にか、マオがテレビの前に座っていた。まったく、いつの間に機嫌を直したのやら。

『ん、違うの？』

「……いや、そうだけど」

自分で機嫌を直してくれたのはいいが、急過ぎるだろう。こっちの部屋にはいないものだと思って、安心し過ぎていた。

マオにGナンバー消失のことを言うつもりはなかった。余計な心配をさせたくないから。言ったところで何かが変わると思えないし。

なにかバレるようなこと言っただろうか。さっきの会話を思い返していると、

『隆二って、殆ど、ああとかうんとかしかいわないんだねー』

おかしようにマオが笑った。

それを聞いて安心する。余計なことはマオの耳には入っていないようだ。

「ほっとけ」

いつものように嫌そうに呟くと、マオがますます楽しそうに笑った。

第四幕 The cat is hungry when a crust contents her.

『今さっきね！ テレビで見たんだけどね！』

いつものようにソファで本を読みながら、気がついたら寝ていた隆二が、目覚めて最初に言われた言葉はそれだった。

言ったのは当然、居候猫。

「……うん、またテレビの話な」

っていうか、人の腹の上に乗るなよ。

キラキラした瞳の近過ぎる顔をさりげなく片手で遠ざけながら、適当な相槌を打つ。

『心霊写真って、怨念とか思いの強さでできるらしいよ！』

まだ諦めてなかったのかよ、心霊写真。

喉まででかかった言葉を、なんとか飲み込む。先日、この話でマオの機嫌を損ねたばかりだ。地雷がそこに埋まっていることを知っているのに、わざわざ踏みに行くほど悪趣味ではない。

にしても、幽霊が幽霊のことをテレビで学ぶなよ……。

『強い思いを抱くから、写真とって！』

期待に満ちた顔でマオが告げる。

とりあえず降りろ、と跨がったままのマオをどかすと、ソファに座り直す。

「えっと、悪いけど一旦整理するな」

起き抜けの頭をフル稼働させ、

「心霊写真を撮りたいと」

『そう！』

隆二の正面にまわりこんで、マオが何度も頷く。

「で、テレビに出すんだっけ？」

『そう！ 深夜の番組でね、募集しているの！』

「あー、そう。……採用されなくても文句言わないな？」

どうにか上手いこと心霊写真がとれたところで、放送に使われなかったら使われなかったで、ぶーたれるマオの様子が手にとるようにわかる。自分の想像にげんなりしながら問いかけると、
『へ？』

採用されない、ということはちっとも考えていなかったらしい。マオが間抜けな顔をする。それでも、隆二の呆れたような視線に気がついたのか、

『言わない！ 約束する！』

慌てたように告げてくる。

「約束なー。約束は守らなくちゃいけないからなー」

『大丈夫、守る！』

念を押すと、力強く頷いた。ここまで言うておけば、いざそのときになっても、「約束」と一言呟くだけで静かになってくれるだろう。

「……わかったよ」

しゅしゅ、テーブルの上においてあったケータイを持ってくる。まあ、どうせ暇なのだ、付き合っても罰はあたらないだろう。

『いいの！？ やった！』

マオが本当に嬉しそうに笑うから、悪い気はしないし。

ええっと、それでどうしたら。

あれ以来カメラの起動なんてさせていないから固まっていると、

『ふう、あのねー、そこを押してー』

マオがわざとらしくため息をついてから説明してくれる。悪かったな、覚えてなくて。

なんとかカメラの画面を出すと、マオに向ける。

『待ってね、今集中するから』

眉間に人差し指をあてて、むむむむっと難しい顔をしながらマオが唸る。

「……何やってんの？」

『強い思い！』

強い口調で言われた。心霊写真に写るような強い思いって、そういうことだったっけな？ もっと現世への執着心とか、そういうことなんじゃないだろうか。別に詳しく知っているわけでもないけど。

ケータイ片手にそんなマオを見ていると、きっとマオが顔をあげた。

『今っ！』

叫ばれて、慌ててシャッターボタンを押す。あ、ちょっとぶれたかも。

『どう？ どう？』

叫ぶと同時にしていたピースサインを降ろすと、マオが駆け寄ってくる。なんとかさっきとった画像を出すと、

「あ」

『おおっ！』

かすかに手ぶれが感じられる赤いソファの写真。その真ん中に、うっすらと、浮かれた顔でピースサインしているマオの姿があった。うっすらとしていて、透けていて、体を通して奥の景色が見える。しかもよく見たら、上半身しかなかった。下半身がぷつりと切れている。マオのその、心底楽しそうな笑顔をのぞけば、怖い心霊写真といっても差し支えない、気がする。いや、考えようによってはこの満面の笑みは怖いか。

『やったね！ 大成功っ！ ありがと隆二っ！』

歌うように言いながら、浮かれたマオがぎゅっと隆二の首筋に抱きつく。

「あー、まあ、よかったな。成功して」

『うんっ！』

顔を離して、満面の笑みでマオが頷く。

それから隆二からは慣れると、

『やっぱり強い思いを抱いているといいのねー！』

くるくると楽しそうに宙を回転しながら言う。まあ、喜んでいるならなんでもいいんだが、ピ

ースサインの心霊写真って、なんだよ。幽霊のスナップ写真か。

「強い思いって、なに考えてたんだ？」

うっかり消してマオに怒られたりしないように、それ以上その画像をいじらないように気をつけながら、ふっと気になって尋ねてみる。

『賞金一万円っ！』

マオが弾んだ声を出す。

「……賞金？」

『そー。採用されると一円でねー。隆二にはいろいろよくしてもらってるし、あたしただの居候だし、バイトも出来ないからなにかないかなーってずっと思ってた。手に入ったら、隆二の生活にちょっとぐらい足しになるんじゃ』

そこで、弾んだ声がびたりと止んだ。くるくるまわっていた動きも止まる。後ろ姿のマオがゆっくりと振り返る。

『……聞いてた？』

恐る恐ると言った感じで尋ねて来る。

「聞いてた」

素直に一つ頷く。

正直、驚いた。居候だからなにかしなくちゃ、とか、そんなこと考えていたのか。別に気にしなくてよかったのに。

ちょっと意外で、どういう顔をしていいのかわからなくて真顔になってしまう。

それをどう受け取ったのか、瞬時にマオの顔が真っ赤になった。

『違うのっ！ テレビにでたかったの！ それだけなのっ！ 賞金とかついでなのっ！ 別に隆二のためとかじゃないのっ！』

あわあわと両手を彷徨わせながら、早口でマオが言う。

「え、あ、うん」

こっちも事態の処理が追いつかなくて、適当な相槌になってしまう。それがますます、マオを慌てさせたようだ。

『本当っ！ 違うんだからねっ！』

恥ずかしいのかなんなのか。むきになって否定すると、

『お腹空いたからご飯食べてくるっ！ エミリさんに写真の送り方聞いといてよねっ！』

吐きすてるようにそう言って、ふいっと壁を抜けて消えていった。

お腹空いたって昨日食べたばかりじゃないか。まったく、嘘が下手なんだから。

思いながらも、気づいたら、知らずに口元が緩んでいた。それに自分でも驚きながら、片手で隠す。

ああ、なんだ、可愛いじゃないか。

「ふーん、賞金ね」

そんな風に役に立とうとか無理に考えなくてもよかったのに、と思う。だけれども、なにかしようと考えていてくれたことが、何故だろ、なんだか嬉しい。

「バカだなあ、あいつ」

ふふっと、らしくない笑いが溢れる。顔がにやけているのが自分でもわかって、我ながら気味が悪い。こんな緩んだ顔は絶対に見せられない。だから、気持ちが落ち着くまで帰って来るなよ、と居候猫に対して念を送った。

マオが帰ってきたのは、たっぷり一時間後。Gナンバーのこともあるし、さすがに隆二が探しに行こうかと思った頃だった。

「遅かったな」

心配していたことなんてちっとも見せずにそういうと、『なんかお腹いっぱいにならなくてー』

のんびり言われた。その設定、まだ守っているのか。

『あ、エミリさんに聞いてくれたー？』

「ああ」

頷く。ちゃんとメールしてみたのだ。忘れているとマオうるさそうだし。

「次来たら、やってくれるってよ」

メールで説明するのが面倒なので、と書いてあったことは忘れることにする。

『本当？ やった、ありがと！』

軽く手を叩き、マオが笑う。

「なあ」

その嬉しそうな顔に問いかける。

『ん？』

「もう平気なのか、嬢ちゃんのこと」

ついこの前まであんなに怖がっていたのに。あの嬢ちゃんは研究所の中では、比較的、どちらかといえばまともな部類ではあるが、だからといって急に距離感を縮めすぎだろう、エミリさんエミリさんって。ちょっと前まで名前を聞くのも嫌がっていたのに。

『んー』

マオはほんの少し表情を曇らせる。

『たまにやっぱりちょっと怖いけど。今、エミリさんがあたしに何もしないのは、そういうお仕事がないからであって、もしそうしろって命令されたら、エミリさんまた何かしてくるのかもしれないな、って思うことはあるけど』

「……ああ」

それは否定できない。そして、命令に背けということ、エミリに願ってはいけない。それは踏み込んではいけない領域だと、弁えている。それが彼女の生き方なのだから。まあ、口八丁で説得もどきぐらいはするけど。

それもマオは、恐らくなんとなくわかっているのだろう。決して賢い部類ではないが、勘が鈍いわけでもないのだ。

『だけど、でも、エミリさん、良い人だから。あたしと普通に話してくれるし、ケータイくれ

るし』

ああ、やっぱりケータイのくだりは、影響力大きいんだな。幽霊にも使えるケータイあげるよ、とか言われたら、あっさり誘拐されるんじゃないだろうか、こいつ。

『あたし、研究所のことは大嫌いだしなくなっちゃえってずっと思ってるけど。エミリさんのことは嫌いじゃないよ』

ほんの少しだけ、マオは微笑んだ。少し強張った笑みだけれども。

『隆二とね、テレビとね、このソファーと』

一つずつ、指折り数えながら列挙していく。

『あと、それから京介さんの次ぐらいに、エミリさんのこと好き』

「……そうか」

屈託なく言われた京介の名前に、一瞬どきりとした。現在進行形で京介のことを好きだと言う、マオの屈託のなさになんだか心が揺さぶられる。そうか、別に無理に過去の話にしなくてもいいのか。そんなことを思う。

あと、テレビとソファーの順位高過ぎだろ。知っていたけれども。

『研究所は嫌いだけど、それとエミリさんは関係ないから、今は平気』

マオは微笑んだまま締めくくる。

「そっか」

変なこと訊いて悪かったな、と言いながらその頭を撫でる。くすぐったそうにマオが笑い、それでも素直に撫でられるままになっていたのが、

『ああっ！』

突然くわっと顔をあげて大声をだした。

「うわっ」

それに驚いて手を離す。

『大変っ！ ミチコはじまっちゃうっ！ 隆二、テレビ！ チャンネル！』

大慌ててテレビの前に座るマオに呆れながら、チャンネルを合わせる。

なあ、さっきの好きランキング、やっぱり俺の上にミチコがいるだろ？ そう問いかけたい衝動にかられる。ばかばかしいし恥ずかしいし、口にはしないが。自分の上には何もいないのが当たり前だ、と言っているみたいで、なんだか自意識過剰にもとれる。

オープニングテーマを一緒に熱唱しているマオを呆れて見ながら、ソファーに腰をおろす。しばらくマオを眺めていると、ソファーに置いていたケータイが震えた。着信、進藤エミリの文字。電話ということは、さっきの無駄な質問とは関係ない、重要な用件ということだろう。

「嬢ちゃん？」

「エミリです。今いいですか？」

「ああ」

さりげなさを装って、マオから離れ、キッチンの方に向かう。

「研究班から資料を奪い取ったのでお伝えします」

奪い取ったのかよ。

「ああ」

冷蔵庫と棚の隙間に身を隠すように背中を預ける。こんなことしなくても、テレビを見ているときのマオが、隆二の会話に気をとめるとは思えないが。

「Gナンバーが消滅している原因ですが、原動力の回路に異常が発生したことです」

エミリは淡々と言葉を重ねて行く。その冷静さが、今はなんだか安心できる。頭が冷える。

「Gナンバーの原動力はご存知のとおり、人の精气です。摂取したそれを存在維持に使う回が経年劣化といいますか。うまく処理できなくなってきたんです。人間でいうと、そうですね、消化器官に病気が見つかったようなものだと思っていただければ」

「ああ」

「もともと無理矢理作り出しているものですから、多少の齟齬がでてしまうのはしょうがないこと、だと研究班が言い訳していました」

「……しょうがないですますなよ、バカが」

「まったくです」

本当に仲が悪いのだろう。身内のことでありながら、エミリが冷たく吐きすてた。

「原動力が上手く処理されない。エネルギーが上手く消費できなくなるんです。燃費が悪くなる、といいますか。だから眠って行動を抑制することになるんです。エネルギーの消費が最小限で済むように、と。あとは、食事の量が増えたり」

「……待て、今なんて言った？」

聞き捨てならないことを言われた。

「食事の量が増える、と。……心当たりが？」

「……大ありだ」

衝動に任せて舌打ちする。

最近、こころなしか増えた気がする食事の回数。燃費悪いな、と揶揄したことを思い出す。さっきなかなかお腹いっぱいにならなくて、とか言っていたのも、家を出て行く言い訳じゃなくて本当のことだったのかもしれない。

「はやく言えよ」

もう一度舌打ち。

「すみません」

「止めていたのは研究班だろう？」

あっさり謝るエミリに、それはそれで拍子抜けしながら続ける。

それに、気づかなかったのは自分の落ち度だ。ヒントに気づいていたのに、それを結びつけて考えることが出来なかった。

「ちょっとマオの様子見てくる」

急に持ち上がった不安に、背中を離し、テレビの方を向く。

「……マオ？」

そこに居候猫の姿はなかった。

「マオっ」

鋭く名前を呼び、そちらに足を踏み出したところで、

『なあに一。今テレビ見ているんだけれどー』

マオの面倒そうな声がして、次の瞬間には、さっきと変わらない場所に座っているマオの後ろ姿が視界に入ってきた。

突然現れた姿に、足が止まる。

「神山さん？」

電話の向こうでエミリの怪訝そうな声。

そこにいるはずのマオが、今、見えなかった。

視認、できなかった。一瞬消えた。

視界から。

ぞっと肌が粟立った。

存在が、揺らいでいる？

視認出来なくなるほどまでに、存在が揺らいでいる。消えかかっている？

「マオ！」

そのことに行き当たると、慌てて駆け寄り、その手を掴む。

マオが驚いたような顔をしてこちらを振り向いた。

『え、どうしたの？』

「大丈夫か？」

『なにが？』

不思議そうな顔をするマオに、どこか強張った笑みでなんでもないと告げると、少しだけ距離をとる。そして放置していたケータイを耳に当てる。

「どうかしましたか？」

エミリの声がどこか焦ったように聞こえる。

「頼む、すぐに来てくれ」

思ったよりもあっさりと、頼る言葉が口から出た。そのことに自分で驚く。ああ、自分が誰かをこんな風に頼るなんて。それも研究所の人間を頼るなんて。

「もうこの際だ、研究班も連れてこい」

背に腹は代えられない。例え代償にどんな無理難題をふっかけられても、ここでマオを失うことに比べたら安いものだ。それだけはあってはいけない。

「何がありましたか？」

「一瞬、視認できなかった」

一拍の間のあと、

「すぐに行きます」

エミリがそう返事して、すぐに通話が切れた。

エミリがきて、研究班もきて、それをどうマオに説明したらいいものか。ふっとそんなことが頭をよぎる。

これ以上、起こっていることを隠し通すのは無理だろうか。

腹立ち紛れに片手で髪をかきむしると、マオの方をふりかえった。

「……マオ？」

こぼれ落ちた声が掠れる。

さっきと同じ場所に彼女は居た。ただ、さっきまでと違うのは。

「マオっ」

慌ててかけよる。

いつの間にか、少し目を話した隙に、マオは丸まって眠っていた。

「マオ、マオ」

揺さぶる。なんで起こすの！ と怒鳴られてもいい。とにかく一度、目を覚まして欲しかった。

テレビでは、疑心暗鬼ミチコがやっている。丁度、変身して戦闘の真っ最中だ。

だって、ありえない。マオが疑心暗鬼ミチコの途中で眠るなんて、こんな一番盛り上がる場面で眠るなんて、そんなこと。あってはならない。

「マオっ！」

第五幕 猫眠、暁を覚えず

ぷかり、ぷかり、と水槽の中に浮かぶマオを、食い入るように隆二は見つめていた。斜め後ろでエミリも心配そうな顔をしている。

突然部屋に現れた、この人が一人入れるほどの大型の水槽。研究班が持ち込んだものだ。Gナンバーの研究に使っていたもので、研究所ではGナンバーはこの水槽、厳密には水槽を満たしている少し粘着性のある水の中で管理していたらしい。普通に外にでているよりも、身体にかかる負担は軽減される、と彼らは言っていた。嘘か本当か、調べる手段が隆二にはない。だから、素直にそれを受け入れた。藁にもすがる思いで。

彼らだって、貴重な、この風変わりな実験体が無くなることは阻止したいはずなのだ。それだけは信じられる。それしか信じられない。

白衣を着た研究班の人間は、三人来ている。しかし彼らは全員、ダイニングの方でなんだか不満そうな顔をしている。

わざわざ呼び出されたから来たのに、着くなり、

「悪いが、研究班は信じられん。そっから先に入って来るな」

などと言われれば当然のことかもしれない。

だけれども、隆二としてもこれが精一杯の譲歩なのだ。本当は、研究班の人間なんて家にあげたくない。それでも、マオを助けるためには、家に呼ばざるを得ない。

まったく忌々しい。背中に感じる研究班の視線に一つ舌打ちする。これで役に立たなかつたら、覚えとけよ。

ゆらゆらと、マオの髪の毛が水に浮かんで揺れる。

今はただ、見守ることしかできない。

人よりすぐれた身体能力があっても、傷つかない体があっても、無くならない命があっても、そんなもの、なんの役にも立たない。

苛立ちは自分に向かう。やり切れない気持ちを、爪を立てて拳を握ることでどうにか堪える。ぷちり、と皮膚が裂ける音がして、

「神山さん」

その腕をそっとエミリに押さえられた。

少し後ろでエミリが首を軽く横にふる。

「……悪い」

苛立つな、落ち着け。自分を責めるのは後にしろ。じゃないと大切なものを見落としてしまう。また無くしてしまう。自分にそう言い聞かせると、一つ深呼吸する。

血がにじんている右手を、左手でそっと押さえる。手を離れた時には、傷痕は綺麗さっぱりなくなっていた。

水槽の中のマオに視線を移す。閉じられた目蓋。

じっと見つめていると、やがて、ぴくりとそれが動いた。

「マオっ」

硝子に手をあて、名前を呼ぶ。

ゆっくりと瞳が開く。

『りゅーじ？』

舌足らずに名前を呼ばれる。それに少しだけ安堵する。

「マオっ、大丈夫かっ」

マオは自分の置かれた状況を確認するかのようには視線を軽く動かし、

『いやあああっ！』

自分の置かれた状況を理解すると同時に悲鳴をあげた。

『いやっ、やっ！ この中は、いやあっ！』

ばしゃばしゃと両手を動かし、体を捻り、もがく。

「マオ！」

慌てて上から手を差し込むと、腕を掴んでひっぱりあげた。

「あ、こらっ、勝手にっ！」

「動かないでくださいっ」

なんだか文句を言いそうになった白衣を、エミリが睨んで止める。

『いやああっ』

白衣を見つけて、さらにマオが悲鳴をあげる。

「マオっ」

落ち着かせるように抱きしめる。白衣から庇うように、自分の体をマオと白衣の間に滑り込ませる。

『やだっ、やだっ』

「大丈夫、大丈夫だからっ」

怯えたように呟くマオの頭を撫でながら、何度も囁く。

しばらくそうしていると、ようやくマオは落ち着いたようだ。そっと体を離し、視線を合わせる。涙に濡れた頬を片手で拭くと、

「落ち着いたか？」

出来るだけ優しい声で問いかける。

『ん』

マオは小さく頷き、それでも隆二の腕を掴んだまま離そうとしない。

『……なんでえ？』

一瞬水槽に目を落として尋ねてくる。上半身は外に出ているが、下半身は浸かったままだ。

『これ、嫌い……。思い出すから』

研究所にいたころを、ということだろう。目覚めたマオが研究所のにいたころを再現させられたら、どういう気持ちになるか。考えなかった自分の迂闊さを呪う。だからといって、完全に外にできることを是とするわけにもいかない。

「説明するから。だから嫌かもしれないけど、ここからでないように。できるか？」

泣きそうなマオの頭を撫でる。

「全部が無理なら今みたいな形でいいから」

それでも多少はなにか違うはずだ。

『……手』

「うん、繋いでいるから」

頷くと、頭を撫でた手はそのままに、もう片方の手でマオの手を握る。そうすると、マオは小さく頷いた。

「ん、ごめんな。嬢ちゃん、頼む」

「はい」

自分がするよりも幾分マシな説明をしてくれるだろう。エミリに説明を託す。

エミリはGナンバーの消滅が続いていたことと、その原因、マオに起こっていることを、極めて平易な言葉で説明した。完全な解答とは言えないかもしれないが、マオに理解させるという意味では申し分ない説明の仕方だった。

マオはきちんと理解したらしい。

『……あたし、消えちゃうのお？』

泣きそうな声で言われた言葉に、

「消えない」

強い口調で言葉を返す。

そんなことにさせないために、招きたくもない白衣を呼んだのだ。

「消えさせない」

ぎゅっと握った手に力をいれると、思いは伝わったのか。マオが小さく頭を動かし、手を握り返してきた。

エミリが振り返り、白衣に告げる。

「出番ですよ」

「……おまえら、人使いが荒いぞ」

苦々しげに白衣が呟きながらも、それでも仕事はきちんとするらしい。

「今、エネルギーの状態は？」

こちらにくるなという言いつけを守り、ダイニングから言葉を投げかけてくる。

「マオさん、今、お腹空いていますか？」

それをエミリが優しく翻訳して問いかけてくる。

『……うん、空いてる。さっき食べたのに』

「そうですか」

わかりました、とエミリは安心させるように微笑んで答え、

「足りないそうです」

白衣の方を振り返ると、冷たく言った。そのエミリの態度にも何かいいたように白衣は口をひらいたが、結局時間の無駄だと思ったらしい。言葉を飲み込む。

代わりに、

「なら、これを」

ピルケースを投げて来る。エミリがそれを片手で受け取ると、説明を促すように白衣を見る。

「人の精気をつめたカプセルだ。研究所ではいつも使っているGナンバーの食事だ」

エミリがそれを開けると、赤と白の二色になったカプセルがいくつか入っていた。

『……知ってる、それ』

マオが小さく呟く。

『あのころ、ご飯はそれだった』

「そうですか。……なら、偽物というわけではないのですね」

「進藤、お前はこちら側の人間なんだから信頼しろよな」

嫌そうに白衣が呟くのを、隆二達は全員スルーする。

「これを食べていたんですね？」

『うん。それだと一個で足りていた』

「なるほど、わかりました」

エミリがちらりと隆二に視線をやる。指示を仰ぐように。

「あげてやってくれ」

そう頼むと、

「わたしがですか？」

意外そうに尋ねられた。

「……不満か？」

「いえ、ご自分でやらなくていいのですか？」

「両手塞がってんだよ」

怯えたマオにしがみつくように握られている腕を見る。

「嬢ちゃんは信頼している」

彼女はマオをG0 16ではなく、マオとして見てくれている。少なくとも、この件にかんしては、彼女は信頼できる。

エミリは驚いたように一度目を見開いてから、

「……ありがとうございます」

小さな声で呟いた。それからカプセルを取り出すと、

「はい、マオさんどうぞ」

差し出す。マオが小さく口をあけたところに、それを放り込んだ。

どういう仕組みなのか、エミリの手を離れ、マオの口に入ったところでカプセルは見えなくなる。

こくり、とマオの喉が動く。

「いっぱいになるまで与えろ」

白衣の声がとんでくる。

「マオさん、どうですか？」

問われてマオが小さく首をふる。不安そうな顔をして。

『いつもなら、これでよかったのに……』

「大丈夫、まだあるから」

それに隆二は優しく言葉をかける。それにマオが躊躇いがちに頷いた。

大丈夫、と言いながらも隆二自身、不安が拭えない。ケースの中にはまだ沢山のカプセルが詰まっている。これでひとまず安定すればいい。

けれどももし、これを全部食べても足りなかったら？

自分で考えた想像に、背筋が凍る。

ありえない。そんなことあってはいけない。

「どうぞ」

エミリが差し出すカプセルを飲み込むマオを見ながら、万が一が起きないように祈る。

最初のころは、まだ余裕があった。大丈夫だろう、という気がしていた。

だけれども、カプセルの量が半分になっても、未だ何も起きないとなると、事情はかわってくる。

マオはもう完全に泣き顔だし、エミリも眉をひそめたままだ。

『……ごめんなさい』

マオが泣き声で呟くと、慌てたようにエミリが笑顔を作った。

「マオさんのせいじゃないですから、謝らなくていいですよ」

『だけど、お腹いっぱいにならないから……』

「大丈夫です。はい、どうぞ」

マオの頭を撫でてやりながら、隆二は黙ってそのやりとりを見ていた。ここまで、大丈夫、という言葉が白々しく聞こえることもない。

「……なあ、一応、念のために聞くんだが、これって、これしかないのか？」

振り返って白衣に尋ねると、悪びれもせず頷かれた。

「この役立たずが」

舌打ちする。

それが不満だったのか、白衣が何か言おうとするのを睨んで黙らせた。さすが研究班、隆二の身体構造がどうなっているのかも、きちんと書面で理解しているらしい。立ちほだかろうなんていうバカな気は起こさない。

隆二に立ち向かおうとする意思のある唯一の少女は、残り少ないカプセルを、ゆっくりとマオに差し出している。指先がかすかに震えている。

食べても食べても、足りない。

最後のカプセルを飲み込んだあと、

『おなか、すいた』

マオが小さく呟いた。

食べても食べても、満腹にならない。満足しない。

食べた端から消費されている。ぎりぎり存在を保つのに使われているのだろう。ということは、今体内に残ったエネルギーがなくなったら、その時は？

「……あいつら全員捧げたらどうにかなんないかな」

背後の白衣達を思いながら小さく呟く。

「足りないかと」

意外にもエミリはそれを咎めはせず、ただ事実を突きつけて来た。

「例え、わたしをいれたとしても、足りません」

「嬢ちゃんを巻き込む気はないけどな」

小さく呟くと、エミリは意外そうに片眉をあげた。

『りゅーじ?』

マオの目が、とろんっとしてくる。

『……ねむい』

「待てっ」

大声を出してそれを遮る。遮ってから、ああでも寝かせた方がエネルギーの消費が少なくなっているのか、と思い直す。

けれども、今マオを寝かせてしまうことは、一言で言ってしまえば、怖い。もうそのまま目覚めてこない気がする。

マオが片手で目を擦る。眠気に耐えるように。

「ごめんな」

その頭を撫でようとして、動かした手が、つと宙を切った。

「っ！」

隣でエミリが悲鳴を飲み込む。

今、確かにマオの頭の辺りを触ったはずなのに、手は何も触れなかった。

マオは気づいていないのか、ぼーっとしている。

存在がまた揺らいでいる。

一つ深呼吸をして意を決すると、もう一度手を動かした。

今度はちゃんと触れた。

頭を軽く撫でてから、その手を頭に置いたままにする。離すのが怖い。もう触れなくなってしまふんじゃないかと思うと、怖い。

マオがもう殆ど何も言わないのは、限界に近いからなのだろう。

エネルギーが足りない。ここにいる人間四人を使ってもまだ足りない。このままだと消えてしまふ。

居候猫が。

それならば……。

「……わかった」

自分にできることは一つしか思い浮かばない。

「じゃあ俺のをやるよ」

マオがほんの少し首を傾げるが、言葉が届いているのかはわからない。

「神山さんそれはっ」

「黙れ」

エミリの悲鳴のような言葉を低い声で遮る。

不死者は死んでもいないが生きてもいないから、マオの食事に値するような精気はない。それでも、死んではないのだから、なにか、それに該当するものはあるはずだ。

「どれだけ搦っても死なないんだ。さすがにこれだけあれば、足りるだろう」

「でも……」

そんなことをして無事で済むのかどうかはわからなかった。マオは救えないかもしれないし、本当にそれで隆二が死なない保証も実のところない。不死者の定義において、そんなこと想定していないから。それでも、なにもしないでただみているだけなんて出来なかった。

だって、

「いやなんだよ、もう誰かが消えるとかそういうのは！」

自分で思ったよりも大きな声がでた。

だってもう、考えただけで耐えられない。

隣でエミリが息を呑んだ音が聞こえる。

「マオ、お前、言っただろ！」

うつろな目をしたマオの両肩を掴む。顔を正面から覗き込み、強い口調で告げる。

「隆二にはあたしがいるから大丈夫だって！ いなくなられたら、駄目なんだよ！ 約束しただろうが。約束は守らなきゃ駄目なんだろ」

全部、お前が言ったことだ。

『……やくそく』

マオの瞳が少しだけ動く。小さな声で言葉が漏れる。

「ああ、約束しただろう」

それに力強く頷く。

「ちょ、ちょっと待てっ」

ようやく事態を理解したのか、白衣達が動き出す。

「お前等何を勝手に決めているんだ！ そんなこと許可する訳にはっ」

さすがに放っておくことができないと思ったらしく、こちらの部屋に入って来ようとする白衣を、

「来ないでください！」

隆二の隣にいたエミリが叫ぶことで遮る。そして、鞆から取り出した銃を、白衣に向けた。

「来たら、撃ちます」

「なにをっ！」

「本気ですっ！」

「進藤、お前自分が何をしているのかわかっているのかっ」

「こんなことしてどうなるか」

「前回の失態もあるのに」

「うるさい黙れっ」

大声をあげる白衣を、それよりも大きな声でエミリが遮った。らしくない言葉遣いと剣幕に、

白衣達が固まる。

「確かに、わたしはこの間失敗しました。あのときは救えなかった。……違う、救い方がわからなかった。でも、今回は違います。マオさんが消えるのを、このまま手をこまねいて見ている。それが間違っていることはわかる。ならば、わたしは、それに抗います」

いつもと同じ、淡々とした、それでいて強い意志を感じさせる声でエミリは続けた。

「もう何も、神山さんから奪わせたりさせません」

はっきりと言われた言葉に、息を呑む。ああそうだ、もう何も盗らせない。こいつらには渡さない。

「嬢ちゃん」

何か言おうと彼女を見ると、

「はやくしてください」

冷たく一言言われた。

そのいつもどおりな態度に救われる。ほんの少しだけ、心にゆとりが戻ってくる。

彼女の言うとおりで。どうなるかわからない。それでも、今、マオがいなくなることよりも怖いことなんてなにもなかった。

「ちょっとまって、落ち着いて考えろっ」

「最悪、共倒れだぞ！」

白衣の声。

共倒れ？ ああ、それもいいじゃないか。

マオを守れなくて、それより先、生きることにはがみついている意味なんて、あるか？

事態を理解するだけの頭が回っていないのか、ぼんやりとこちらを見てくるマオの頬に手を添える。

「大丈夫」

小さく微笑むと、マオの唇に唇を重ねた。

第六幕 猫の毛並みを確認すると。

ここは、どこだろう？

どこだかわからない。ただ暗い場所に隆二はいた。

視線の先、僅かな光が見える。そちらに向かって歩き出す。

「……？」

視界の先に、人影。目を凝らす。

肩より少し長い綺麗な黒髪、線の細いシルエット。見覚えのある柄の、着物。

「茜っ」

名前を呼ぶ。叫ぶ。

人影は振り返る。隆二のよく知っている笑顔を浮かべて。

「茜っ」

駆け出す。

手を伸ばす。彼女の右手を掴み、

「あかねっ」

その瞬間、彼女は白い骨となり、闇の中へと崩れ落ちた。

喉の奥で悲鳴があがる。

『りゅーじ』

背後から舌足らずな声で呼ばれて振り返る。

「マオっ」

ふわりふわりと、居候猫が浮いていた。

よかった、マオはまだ居た。

「マオ……」

手を伸ばし、マオの右手を掴もうとすると、

『大丈夫だって言ったのに、嘘つき』

淡々とマオが呟き、その姿が掻き消えた。

掴み損ねた右手。

「っ、マオっ」

「帰って来るって言ったのに、嘘つき」

『大丈夫だって言ったのに、嘘つき』

「嘘つき」

『嘘つき』

声が責め立ててくる。

姿は見えないのに声だけが。

「だからちゃんと見とけて言ったのに」

別の声がどこかで囁く。

「京介っ」

声をあげても誰の姿も見えない。

「嘘つき」

『嘘つき』

「嘘つき」

やめろ、やめてくれ。頼む……。

『隆二の、嘘つき』

「やめろっ！」

叫んだ自分の声で、目が覚めた。

跳ね起きる。

体がなんだか重い。

ああ、くそ。嫌な夢を見た。

っていうか、ここはどこだ。

辺りを見回すと、そこは知らない部屋だった。ベッドに寝かされていたらしい。

意識を失うまでのことを思い返し、

「マオっ！」

自分が何をしたのかを思い出し、慌ててベッドから出ようとする。

そうだ、彼女は、無事なのだろうか。

嘘つき、と夢の中で責め立てていた声が蘇る。

違う違う違う。あれは夢で。

いつになく重たい体を動かし、慌てて足を床につけたところで、

「りゅーじ！」

名前を呼ばれる。顔をあげる。何かガドアを蹴破るような勢いであけると、部屋に飛び込んで来た。

「隆二！」

そのままぴょんっと跳ねるようにして、隆二に抱きついてくる。

慌ててそれを支えた。

「隆二！ 隆二！」

何度も名前を呼びながら、隆二の膝の上に向かいあうようにして座り、頬をすり寄せて来る。

「隆二！ 隆二！ ありがとう！」

顔を離して微笑んだのは、まぎれも無くマオだった。

「マオっ、大丈夫か？」

その肩をつかみ、問う。

「うん！ ありがとう！」

嬉しそうにマオは頷いて、隆二の首筋に両手を回すと、頬と頬をくっつける。

「そっか、よかった」

安堵の吐息。

無事によかった。

本当に。

彼女の髪をくしゃりと撫でる。指先に絡み付く、柔らかい髪の毛の感触。

頬に触れる柔らかい感触。

……感触？

「マオ？」

「んー？」

名前を呼ぶと、どうしたの？ とマオが頬を離し、首を傾げてくる。

その頬を両手で掴み、引っ張る。

「い、いたい……」

柔らかい。

……柔らかい？

マオの体をじっと見る。いつもの白いワンピースだけが見える。その後ろにあるはずの、自分の足とか、床とかが見えない。

……見えない？

そういえば、こいつ、ドアをあけて入ってこなかったか？

もう一度マオの顔に視線を移すと、ふふふ、っとマオは何かを企むかのように笑った。

「お気づきですか？」

その声は、鼓膜を通して聞こえてくる。

「……もしかして、実体化してる？」

恐る恐る問うと、マオは大きく頷いた。それから耐え切れなくなったかのように、もう一度首筋に抱きついてくる。

「もうね、超嬉しい！ 隆二大好き！」

「いや、さてこれは」

説明を求めるがマオは聞く耳をもたず、

「……神山さんが精気を与えたからですよ」

代わりに声がした。いつの間に来ていたのか、ドアの横に赤いシルエット。

「嬢ちゃん……」

「エミリです。不死者の神山さんが与えた、人間で言うところの精気にあたる何かが、なんらかの形でマオさんに作用して、そうなったようです。詳しいことは、まだ調べていますが」

エミリが一つ、溜息をついた。

「まったく、とことん規格外ですね、あなた方は」

溜息と一緒に吐き出された言葉。以前マオのことをイレギュラーだと評された時は不愉快に感じた。しかし今は、規格外の言葉を不快には思わなかった。その規格外の指し示す意味は、実験体レベルで規格外ではなく、存在として規格外だと受け取れた。だから不快には思わなかった。

「……返す言葉がない」

だって、我ながら思う。予想外にも程がある、この展開は。

くすくすとマオが笑う声が、耳をくすぐる。ちゃんと聴覚器官を使って。聞き慣れた声のはずなのに、なんだか違うものを感じる。

「ここは、研究所か？」

「はい、そうです。あのあと、神山さんも気を失われたので運んできました」

「ああ、すまん」

「いえ、運んだのはわたしではありませんので。せっかく来たのですから、力仕事ぐらいはしてもらわないと、本当の役立たずですからね」

そこで一瞬、エミリの唇が皮肉っぽく歪んだ。ああ、運んだのはあの白衣達か。

「……研究バカにそんな力あったのか？」

「大の大人が三人もいるんですよ。それぐらいやってもらわないと。ひーひー言っていましたけどね」

エミリが軽く肩をすくめるから、それに少し笑う。それは少し見たかったかもしれない。

「さて、色々と今後についてなどお話ししたいことがあるのですが」

そこまで言って、珍しくエミリは口ごもった。

隆二にぴったり抱きついて、頬をすり寄せているマオを見る。

「……あるのですが、あとにします」

僅かに頬を赤くして、彼女は言った。

「……なんか、すまん」

幽霊だったときはなんでもなかったのだが、いざ実体化されるとこうべだべたするのが恐ろしく恥ずかしい。人前でいちゃつく若者みたいだ。俺は何をやっているんだ。

「いえ。マオさんの気持ちが落ち着いたところにまた伺いますね。とりあえず、お二人でお話もあることでしょうし」

エミリは小さく首を横に振ると、隆二をまっすぐ見つめて一言告げた。

「ご無事でなによりです」

それから隆二の返事もまたずに、部屋をあとにした。

赤が視界から消える。

ぱたり、とドアがしまった。部屋には二人だけが残される。

「マオ、離れろ、とりあえず」

エミリと話している間もひつついたままだったマオに声をかける。

「えー」

なんだか不満げな声が返って来た。

「話がしたい。隣座れ」

そう言うと、しゅしゅとマオは隆二から離れた。が、隣には座らず、なぜかベッドに倒れ込む。それからなんだか楽しそうに枕をベシベシ叩き出した。なんなの、こいつ。

例え実体化していたところで、行動は変わらず意味不明なままだ。

そんな隆二を気にすることなく、マオは、

「ねーねー、あたし、戻っちゃうのかなー。どう思う？」

枕を叩きながら問いかけてくる。

「……さあ？」

実体化していることすらも想定外なのだ。その後のことなんてわかるわけがない。

「戻っちゃうなら、それはそれでしょうがないかなーとは思うけど。でも、その前にコーヒー飲みたいな！ 隆二いれてくれる？」

「ああ」

「やった、楽しみ！」

マオの浮かれた声。枕を抱きかかえ、ころんっとベッドの上を転がる。

「マオ、本当に大丈夫なのか？」

「うん！ なんか変な感じだけど、平気！ もうお腹も空いてないし、眠くもないよ！」

よいしょっと、と体を起こしながらマオが笑った。

「そうか」

それに安堵の吐息を漏らす。色タイレギュラーな事態だが、とりあえず彼女が今もここにいてくれることに安心する。

「消えちゃうことはないって、言われた！」

「……研究班にか？」

「ん」

そこでとまどったようにマオは頷く。

「大丈夫だったか？ 調べたとか、言ってたけど」

さっきの白衣の姿を見ただけで、取り乱したマオの姿を思い出す。自分の意識がしっかりしていれば、ついていてやれたのに。悔しく思っていると、

「ん、怖かったけど。でも、エミリさんがずっとついててくれたから」

マオが意外なことを言い出した。

「嬢ちゃんが？」

「そう！」

そこでふふっと嬉しそうに微笑む。

「エミリさんがね、言ってくれたの。わたしが一緒じゃない限り、マオさんには指一本触れさせません！ って。あのね」

そこで内緒話をするように声を潜める。

「嬉しかった。守ってくれたみたいで」

「そうか」

さっきも庇ってもらったしな。今度改めてお礼を言おう。覚えていたら。

あの少女は破天荒で、ファッションセンスは壊滅的だが、悪い子ではないのだ。

「りゅーじ！」

言いながらマオが背後から抱きついてくる。

いつものことといえばいつものことなのだが、実体化されると気まずいな、これ。ちゃんと感

触や体温、というものがあって。

そのまま髪の毛をくしゃくしゃとなで回される。

「マオ」

咎めるといふよりも呆れて名前を呼ぶと、

「髪の毛！」

なんだか楽しそうに言われる。それは知っている。

そのまま手を下ろし、今度は隆二の頬に触れる。指先でつつかれる。

「……お前、何がしたいの」

「触ったらどんななのかな！ ってずっと思ってたの！」

テンションの高い声で返される。

それですとんと、腑に落ちた。ああ、そうか、彼女にとって触覚というのは、初めての感覚器官なのか。

そう思ったらそれ以上強くは止められず、掴まれた指先をそのままにする。指と指を絡めるように手を繋がれる。嬉しそうに笑う。

「隆二の家の赤いソファー、あれは触ったらどんななのかな、楽しみ！」

そんなに楽しみにするようなものじゃない。もう古いものだし、傷んでいる。それでも彼女はあれに触れてみたいのだろう。

「じゃあ、帰ったら、コーヒーいれてやるから」

「うん！」

「ソファーに座って」

「テレビ見ようね！」

お決まりの台詞は満面の笑顔のマオが引き取った。

「ああ」

頷くと、その頭をくしゃりと撫でた。柔らかい髪の毛が指先に絡んだ。

第一幕 居候猫の現状

「マオー、はやくしろー」

隆二は、玄関で靴を履くと、部屋の中に呼びかけた。

「待ってー」

ぱたぱたと軽い足音をたてて出てきたマオは、ピンクと白のジャケット二着を持っていた。

「ねー、どっちだと思う？」

どっちでもかわんねーよ。

喉まででかかった言葉を飲み込む。そんなこと言ったら、よりいっそう面倒なことになるのを、経験で知っている。既に何回かなったし。

「ピンク」

「あ、やっぱり？」

今回は当たりを選んだらしい。マオは満足そうに頷くと、白いジャケットはダイニングの椅子にかけて、ピンクのジャケットに袖を通した。

これが外れを選ぶと、「えーそうかなー、あたしはこっちがいいと思うんだけどなー」とか言われて無駄な時間を使うのだ。自分の中で決まっているなら、俺に聞くなよ。

「帰ってきたらちゃんと片付けろよ」

放置された選ばれなかった上着を指差すと、

「わかってるよおー」

と頬をふくらませてマオが返事した。

わかってないだろ。放りっぱなしだろ、お前いつも。

マオは茶色いパンプスを履くと、同じ色のスカートのひだを軽く直した。上には白いフリルのブラウスを着ている。肩からかけた小さな鞆の中には、何が入っていることやら。

隆二に命じて玄関に設置させた姿見で、自分の姿をじっと確認すると、

「うん！ おまたせ！」

満足したのか、隆二に顔を向けると笑った。

「じゃあ、行くか」

玄関をしめると隆二は、マオの右手を掴んで歩き出した。

マオが実体化してから数ヶ月が過ぎた。

実体化の原因については、研究班が調べたがなんだかよくわからなかった。色々説明はされたが、専門用語過ぎて隆二がついていけなかったのもある。

「つまり、想定外の行動をしたから、想定外のことが起きたんですよ、きっと」

と、エミリがあっさりまとめて、隆二もそれに乗っかることにした。大事なのは原因ではないのだ。

これから、どうなるか、だ。

あれ以来、二人の生活はがらり、と変わった。

まず、マオが人の精気を必要としなくなった。厳密にいうと、摂取できなくなった。あの時、隆二の精気、のようななにかを摂取して以来、体の構造が精気のような何かに対応できるように変化してしまっただけ。現在、マオの食事は隆二の精気だ。それしかとれない。

それが、隆二の限定なのか、不死者であるのなら他の誰かでもいいのか、は不明だが。

そうして、人の精気よりもエネルギー量があるらしく、月一回の食事で、原則として存在が保持できるようになった。少ない回数ですんでいるので、隆二としては助かっている。

いや、精気を与えること自体に別段不服はないのだが、唇をあわせるという方法に不服がある。それは食事だとわかっているけども、釈然としない。

そしてこれが一番、大きな違いだ。

食事の後、二週間、マオは実体化する。

これは数ヶ月の経験と、研究所の調べによって確定した。月の後半の二週間、マオは実体化する。つまり、月の前半は今までどおりの幽霊状態だ。

半月ごとに、二人の生活は変化する。月の前半、霊体のときには今までどおりで何の問題もない。

問題は月の後半だ。実体化したところで、マオはマオだ。中身はあのまま、隆二を振り回す。

衣服や生活用品については、研究所から研究に協力した謝礼として現金をうけとり、それを使っている。謝礼として現金をうけとることに、抵抗があったが、マオのための衣服等が必要なことには間違いがなく、隆二にさして貯金がないこともまた、事実なのだった。

「受け取っておけばいいんです。利用できるものは利用してください」

謝礼金を支払うように動いてくれたというエミリが、笑いながらそう言った。それに背中を押された。

今回の一件では、なにからなにまで彼女に頼っている。

その謝礼金を使って、マオがいくつか服を買い込んできた。テレビっこの彼女は、幽霊であるところからそれなりに勉強してきたらしい。最初はちぐはぐだったが、今ではヘアスタイルもメイクも、きちんと決まっている。

テレビがない方の部屋を、今までは本を置く部屋として使っていた。一応貰い物のベッドはあるが使っていなかった。そのベッド周りは、今ではマオの私物であふれかえっている。片付けろって言っているのに、片付けやしない。

実体化している間は、普通の人としての食事を必要とするため、コンビニで食事を買ったり、簡単なものなら隆二が作ったりしている。

朝起きて、どの服を着るか毎朝悩んで、出かける時には化粧をして、髪型を整えて、二人で食卓を囲んで。

なんというか、そう、普通の同居生活をしている。困ったことに。

それでも、マオはこの生活を楽んでいるようだから、隆二は何も言わない。そう、決めている。

水族館の大水槽のような大きな硝子。その硝子の向こうで、マオが不安そうな顔をしながら白衣の説明を聞いている。ちらりとマオがこちらを見てくるから、軽く片手をあげてみせると、ほっと安堵したような顔をした。

ここは研究所。今は、あれ以来恒例となった定期検査の最中だ。目の届かないところには行かせない、という隆二の主張のもと、硝子で隔てられた部屋でそれは行われている。強化硝子らしいが、こんなもの、隆二にとってはあってないようなものだ。いざとなれば。

カルテのようなものを持った白衣の言葉に、マオが首を傾げながら何かを答えている。

机に頬杖をついてそれを見ていると、

「どうぞ」

紙コップに入ったコーヒーが机に置かれた。

視界の右端に赤い色。

「ども」

素直に受け取り、一口啜りながら、右隣に腰を下ろしたエミリを見る。

エミリは自分の分のコーヒーを飲みながら、硝子の向こうのマオを見る。それから小さく溜息をついた。

「そろそろこの定期検査なくなればいいんですけどね。……やはりいい気分しないでしょうし」

その言葉に、やっぱりまだ不安そうな顔をしているマオに視線を移す。

まあ確かに、マオはここに来ることがあまり好きではないようだ。自分が生み出されたこの研究所。いい思い出がないのはわかっている。

それでも、

「この前みたいに、急になにかなるよりは、まあこっちのほうが、俺は安心だな」

保険として、この定期検査に安心している隆二がいる。

「まあ、マオと違って、俺にとっての研究所ってここじゃないしな」

隆二にとって嫌な思い出がある研究所は、別の場所にあった時代のものだ。

「あの頃はもっとう、怪しい研究所感満載だったのに、こんな製薬所なんて」

外見上、普通すぎて怪しさの欠片もない。

無条件で怖がるマオの気持ちを、十分に慮ることは出来ていないかもしれない。

「薬も作っていますよ」

しれっとエミリが答えた。

「あ、そうだ」

そんなエミリと白衣を見ていたら、急に思い出したことがある。覚えていたら、言おうと思っていたこと。

「今更だけど、ありがとう」

「……何がです？」

唐突な隆二の言葉に、エミリが怪訝そうな顔をする。

「この前、庇ってくれたらろう」

それだけ言うと、エミリはなんのことだか考えるかのように視線を宙にさまよわせる。

この前、マオが消えかかった時に、白衣に銃を突きつけてまで庇ってくれた。隆二が使いものにならなくて、一人不安がるマオにずっとついていてくれた。そのことは、覚えていたら礼を言おうと思っていたのだ。

「……え、今？」

ようやく答えに思い至ったらしい。エミリが珍しく間抜けな顔をして、呟いた。

「忘れてた」

「……らしいですね」

悪びれない隆二の言葉に、呆れたようにひとつ笑う。

「ちょっと意外だった」

あんな風に感情をあらわにしたエミリを見るのはじめてだったし、冷静な彼女が白衣に銃口を向けるなんていう行動をとるなんて思いもしなかった。そんなことしたら、自分の研究所内での立場が危うくなるのに。

「わたしも色々考えているんです。これでも」

小さく肩をすくめて、エミリが答える。

「ふーん」

なんか前も似たようなことを聞いたよな、と思いながらも深くつつこむことはしない。面倒だから。

「まあ、正直、助かったし、嬉しかったよ」

もう何も、神山さんから奪わせたりさせません。あの言葉は、色々な意味で心に突き刺さった。自分の元から消えていった様々なものを思い出す痛みもあったが、それよりも嬉しかった。あのときは、この感情の名前がわからなかったが、落ち着いた今ならわかる。あのとき自分は、嬉しかった。

基本的には、一人でなんでも出来る。やろうと思えば、この研究所を壊滅させることだって出来る。それでも、誰かに心配してもらうとか、助けてもらうとか、誰かに自分のことを意識してもらうことが嬉しいことなのだと、改めて思った。

それも、エミリという思いがけない方向からきた手助けに、一瞬、心が鷲掴みにされたのだ。

そんなことを思っていると、右頬に突き刺さる戸惑いの視線。

「……何？」

辛いものだと思って口にいたら、甘かった。そんな顔をしているエミリを見ると、

「……いえ、ちょっと驚きました」

言葉を選ぶようにして、エミリが答えた。

「何が」

「神山さんが、そんなこと言うなんて。なんていうか、だいぶ、丸くなりましたね」

しみじみと呟かれた言葉に、今度はこちらが顔をしかめる番だ。

「……俺だって、色々考えてるんだよ」

苦々しく、似たような言葉を返した。

硝子の向こうの居候猫を見る。

ずっと一人でいたのに、突然現れたアレに終始振り回されているのだ。それなりに性格だって変わる。

それに、マオが来てから色々あった。

ようやく茜に会いに行くことができたし、同族の一人を見送った。

一人じゃない生活は自由がないけれども、やっぱり楽しい。あのソファーは一人には広過ぎる。

「マオさんのおかげですね」

エミリの言葉に苦笑する。

そのまとめ方は、心情的には不満なのだが、結局そのとおりだ。彼女のあの無駄な前向きさに、ひきずりあげられている自分がいる。

だからこそ、最近、たまに思う。

「……俺でよかったのかねえ」

小さく呟く。

隆二がここにいるのは偶然だ。

先にマオに会っていたのが自分以外の誰かだったならば、今の隆二の位置にいるのは、そいつだったことだろう。

もしかしたら、そいつの方がマオのことを可愛がって、優しくして、楽しい生活を与えて、今みたいなことも起きていなかったかもしれない。

「何がですか？」

マオには絶対に言うなよ、と念押ししてから、

「例えば、颯太だったらもっと上手く動いていたんじゃないか、って思うんだよな」

マオが見えて、同じような境遇という点では、隆二も颯太も同じだ。自分達、不死者の仲間うちで一番頭のいい彼ならば、もっといい方法を見出していたんじゃないだろうか。前回みたいなことには、ならなかったんじゃないだろうか。

エミリは、弱音を吐く隆二を、意外そうに一瞥してから、

「わたしは神山さんでよかったと思っていますよ」

小さく微笑んだ。

「確かに神崎さんは頭がいいですし、他の方法を選んだかもしれませんが、神崎さんの場合、そもそもマオさんを拾う、という選択をしなかったんじゃないかと思います」

エミリの言葉をうけて少し考えると、

「あー、確かに」

それもそうかもしれない。興味のないことにはとことん興味をしめさない。

隆二のときみたいに、マオが落ちてきたって何の反応も示さなかった可能性の方が高い。

「気まぐれで拾ったところで、ちゃんと最後まで面倒をみたかどうか……。神坂さんに関しては言うまでもありませんしね」

「英輔、なー。それは同意する」

力強く頷く。甘いもののためには世界を敵に回すことも厭わない隆二の同族は、知識の偏った

純粋な幽霊の世話係に適さないことこの上ない。英輔のコピーが出来上がるかもしれない。恐ろしくて預けられない。

「それに」

そこでエミリは何かに気づいたかのように口をつぐんだ。

「京介だとどうなわけ？」

代わりにこちらから水を向けてみせる。

気にしないでいい、と言っても、京介が消えたことについて責任を感じていることはわかっている。

エミリはしばらく、躊躇うそぶりをみせてから、

「……神野さんは、スポイルし過ぎそうです」

それから隆二の顔を見て、

「甘やかしそうってことです」

言い直した。ご丁寧に、どうもありがとう。

「……確かに、あいつ、マオに甘いもんなー」

ちゃんと外で会話していたし、テレビの話にも付き合っていたし。

「わたしは、マオさんのあの天真爛漫なところとといいますか、割と自由なところは好きですが」

これはまた、意外なこと言う。

ちらりと隆二はエミリを見る。

エミリは気づいていないようだ。あれだけ実験体を物としてしか扱っていなかった自分が、実験体を好きと評価したことに。

確かに、彼女は変わったのかもしれない。

「さすがに、神野さんが世話をして、野放しにされたマオさんは好きになれたかどうか……」

「我が俣放題？」

「ええ」

「それは、……うざいな」

そうでしょう？ と言いたげにエミリが頷く。

「ですから、結局、神山さんが一番いいんですよ。ちゃんと面倒は見ているし、たまにものすごく甘やかしているように見えるときもありますが、トータル過度に甘やかしたりせず、適宜ほったらかしたり気分をかまったりするぐらいで」

「……微妙に棘がなかったか？ 今」

「気のせいですよ」

エミリは、呆れたように笑いながら隆二を見ると、

「しっかりしてください。マオさんには、神山さんが全てなんですから」

力強く言った。

「……そうだな」

自分がここでへたれたり弱気になったりしたら、マオに悪影響だ。それぐらいは、わかっている。

「ありがとう」

素直に礼を言うと、エミリはまたちょっと驚いたような顔をした。

だから礼を言ったぐらいで、いちいち驚くなっつーの、失礼だな。

硝子の向こうでは、なにやら機械で数値の測定が始まっている。

検査の結果は、一応毎回もらっている。

それにしても、と手元の資料を捲った。前回までの検査結果がファイリングされている。

「どうしたもんかねー」

少し苦々しく呟くと、

「……すみません」

隣のエミリが呟いた。

「嬢ちゃんが謝ることじゃない」

すぐに謝るのは殊によると彼女の悪い癖かもしれない。そう思いながら、苦笑を返した。

資料に書かれている、実体化したマオについての調査結果。

マオは気づいていないようだから、気づかせないようにしている。

実体化した、ということは肉体という器に縛られることになるのだ。つまり、死というものが近くなる。肉体の死、が生じる。

実体化したマオは、ほぼ普通の人間と一緒にだ。怪我をすることもあるし、場合によっては死ぬことだってある。

それを、マオは気づいていない。

隆二だって、最初はそこまで頭が働いていなかった。

最初に実体化したあの時、幽霊の時と同じようにぽんぽん身軽に動き回って、バカみたいにテーブルにぶつけて出来たアザが、霊体になっても残っているのを見るまでは。

それに気づいたとき、ぞっとした。

見えてしまった。また一人になる未来が。絶対に隆二を一人にしない、と言ったマオがいなくなる未来が見えてしまった。

彼女のその言葉をなんの抵抗もなく受け入れて、信じていたのは彼女が幽霊だからだ。幽霊は死なない。ずっと一緒にいられる。そう思っていたからだ。

その前提が消えた。

そのことに気づいた時の気持ちは、あのときと一緒にだった。はじめて、茜の発作を見たときと一緒に。

また、足首を掴まれた。恐怖に。

以降、隆二は実体化したマオの生活に制限をかけた。

一人では出かけないこと。火や包丁などは使わないこと。むやみやたらに跳ね回らないこと。

「だってお前、バカだから」

いつもみたいにからかう口調で言ったら、マオはむくれた。真意から目をそらすことが出来た。それに安堵した。

彼女が気づいていないのならば、無理に言いたくなかった。せっかく実体化できて、食事をと

って、衣服を着替えて。そう言ったことを楽しんでいるマオの気持ちに、水をさしたくなかったのだ。

幸いなことがあるとすれば、老化というものがないこと、だ。

最初は、それも不安に思っていた。

実体化している半月の間、老化がはじまるのではないかと。そうだとすれば、常人と同じペースではないものの、いつか老いて隆二の前から消えてしまうのではないかと、不安に思っていた。

けれども、研究所の説明によれば、確かに実体化している二週間は、成長も老化もある。けれどもそれは、霊体に戻った時にリセットされる。だから、老化による身体への影響は考える必要はない。

それは、不幸中の幸いだった。

もっとも、霊体に戻った時にリセットされるのは、自然の流れでの成長、老化だけであり、怪我などは残ることになってしまうが。

実際、最初のときについたアザは、霊体に戻っている間消えなかった。ただ、次に実体化したときには、人体の治癒力が働き、消えたが。

気をつけるべきことは、実体化している時の怪我や病気だ。それは自然の治癒能力の範囲で治していくしかない。やっかいな部分があるとすれば、霊体に戻っている間はその治癒能力が働かないことだ。大きな怪我をしたまま治らずに霊体に戻ったとき、どういう影響がでるのか。それについては、実際になってみないとわからない。なら、わかりたくなかった。

それでも、やはり、これは不幸中の幸いだ。

どうしたもんかね、とは思うけど、最悪よりはだいぶいい。受け入れられる。

あの時、あのGナンバーの事件の時、あのままなす術もなく、マオが消えてしまうことに比べたら、百倍マシだ。

ちゃんと考えた。最善ではなくても最悪でもない。

それに今回は、責任の一端は自分にあるのだ。恨んだりはしない。

それでももし、最悪の事態になったら、また一人になってしまったら、そのときはあいつのところにいこう。

そう決めている。

あいつなら二つ返事で引き受けてくれる。自分が京介にやったよりも容易く。それには少し感謝している。

大丈夫、今すぐではない。

マオが消えてしまうのは、今すぐではない。

今すぐにはさせない。

覚悟は長い時間をかけてしていくものだと、彼女が言っていた。今すぐでないのならば、ちゃんと覚悟を決めていこう。

その時に向けて。

硝子の向こうでは、全ての検査が終わったらしい。マオが浮かれた顔でこちらに向かってくる

。

「ちゃんと考えているよ」

それを見ながら、小さく、あいつへ言い訳した。

「りゅーじ！」

扉をあけて、こちらにきたマオに片手をあげる。

「エミリさん、こんにちは！」

「こんにちは。おつかれさまです」

先ほどまでの話の気配は微塵も見せず、エミリも微笑む。

「おつかれ」

あげた片手で、マオの頭を軽く撫でると、嬉しそうに微笑んだ。

こういうところは、霊体の時と変わらない。

「帰り、お買い物行こう？」

「……一昨日も行ったよな？」

弾んだマオの声に、呆れて笑いながらも、帰るために立ち上がった。

第二幕 愛猫フォトコンテスト結果発表

『きゃーっ！』

ソファーでうたた寝していた隆二は、居候猫の悲鳴で目をさました。

「マオっ！？」

慌てて体を起こし、声の方を見る。

マオが口元を両手でおさえ、

『ひゃーっ！』

また声をあげた。視線はテレビに釘付けだ。

なんとなく状況が理解できて、立ち上がりかけた体を、またソファーにおろす。

これはあれだ、悲鳴じゃなかった、黄色い歓声ってやつだ。

幸いだったのは、今のマオが幽霊なことだ。これが実体化している時だったら、近所迷惑だったことだろう。

『採用されたっ！』

テレビ画面に写っているのは、半分透けた状態で浮かれてピースサインしている、この幽霊の姿だった。

見覚えのある写真。隆二がケータイを手にしたころ、マオに言われてとった写真。

そういえば、例の心霊写真は、あの後エミリに頼んでテレビ番組に送ったのだった。それがどうやら、採用されたらしい。

『なんで、うちにはビデオないのっ！ ケータイケータイっ！』

マオは画面を見たまま、片手を伸ばし、テレビ脇の棚に置いてある自分のケータイに手を伸ばし、

『ああっ、あたし、今、幽霊の方だったっ！』

空を切った手を恨めしく見る。

『隆二！ とって！』

「諦めろ」

もうカメラの起動の仕方なんて覚えていない。

『えー、もうっ！』

言っている間に、マオの写真は消えて、別の話になった。

『あーあ、記念に写真とってきたかったのになあー』

ぷうっと膨れる。

写真がテレビに映っているのを写真にとりたい、とは一体どういうことなのか。隆二にはその感覚がよくわからない。

むすっと膨れたまま、ごろんっと畳の上に倒れ込む。よっぽど残念だったらしい。

「……でもまあ、よかったな。採用されて」

仕方なく、フォローの言葉をかけてみる。

『うーん』

返事は煮え切らない。

「採用されると一万円だったか？ 今ならそれ、自分でも使えるじゃないか。服でもなんでも、好きなものを買えばいい」

『……違うの』

マオが顔だけこちらに向ける。むすっと、への字の唇。

「違う？」

『あのね、採用はされたんだけど、あたしが採用されたのは、お巫山戯心霊写真コーナーで、ちょっと違うの。格が』

「……格が？」

『ちょっと変わった、怖くない心霊写真が集まっているコーナーなの』

まあ、幽霊がピースサインしていたら、そうなるわな。

『それだとね、記念品のボールペンだけで、賞金でないの』

むすっと膨れている。

「あー、なるほど」

採用されたことは嬉しい。テレビに映っていた自分を見ることは嬉しい。だけれども、目的の一つである賞金は手に入らない。それは悔しい。

そういうことだろう。

『あーあ、なんか微妙っ！』

呟いて、ごろりと寝返りをうつ。うつぶせになってしまったから、顔が見えない。

さてはてどうしたものか。まあ、しばらく放っておけば、勝手に機嫌直すだろうけれども。

ちょっと考えてから、

「マオ」

名前を呼んでみる。

僅かに顔を動かして、片目だけでこちらを見てくる。

「じゃあ、今度、写真撮ろう。実体化しているときに、一緒に」

なにが、じゃあ、なんだか自分でもわからないが、悪くない提案だと思った。せっかくちゃんと写真にうつるようになったのだ。写真の一枚や二枚ぐらい、残しておいてもいいだろう。

『本当っ！？』

がばっとマオが体を起こし、ぱあっと明るい笑顔になる。

「ああ」

単純な彼女に呆れて笑いながら頷くと、

『やったあ！』

マオが両手を叩いて喜んだ。

『嬉しい、ありがと！』

そのまま、ひょいっと跳ねるようにして、ソファーに座る隆二の隣にくる。

「ん」

軽く頷いて、その頭を軽く撫でた。

『えへへ、早く、ご飯の日来ないかなー！』

そうだなーなんて相槌をうちながら、またマオの一挙一足に肝を冷やす期間がくるのかと思うと、手放しでは喜べなかった。

覚悟はまだまだ決まらない。

突然、部屋にコミカルなメロディーが流れる。

『あ、ケータイ』

テレビの前に置いた、マオのケータイが鳴っていた。奏でているのは、疑心暗鬼ミチコのテーマソングだ。ケータイを手に入れてそうそうに、マオが設定したのがこれだ。だからどんだけ好きなんだよ。

このケータイも、隆二のと同じく研究所からの支給品だった。違うのは、

『りゅーじ、確認して』

「やだよ。お前の壊しそうで怖いから」

指をさすマオに、苦い顔を返す。

隆二とマオとの決定的な差。それは、ご老人向け機種と、スマートフォンの差だった。

『えー』

「無理無理。なんでそれ、ボタンがないのに動くのか、本当わからん」

自他ともに認める機械音痴の隆二には、そんな未知の物体を触る勇気がない。

『えー、じゃあ、ご飯の日まで確認できないのお？』

不満そうに唇を尖らせる。

「マオにメール送ってくるなんて、どうせ嬢ちゃんだろう。聞けばいいじゃないか」

言いながら、ダイニングテーブルの上に放っておいたケータイをとってくる。まあ、聞けばいいじゃないか、ってその聞くのが大変なわけだが。

未だになれない手つきで、メール作成画面を起動しようとしていると、

「うわっ」

手の中でケータイが震えた。急に震えるなよ、驚くじゃないか。

驚いて放り投げそうになったそれを、再びキャッチして、画面を確認する。

「あ、嬢ちゃんからだ」

『なにー？』

マオが画面を覗き込んでくる。

『えっと、マオさんにメールしましたが、今は確認できませんね。すみません。えっと……』

「転送」

『てんそーするので、マオさんによろしくお伝えください』

そこまで読んで、マオが隆二の顔を見て、嬉しそうに笑う。

『やさしーね、エミリさん。隆二に送ってくれて』

それからまた、画面を見る。

『オカルトクエスト内の心霊写真探偵のコーナー、見ました』

「……嬢ちゃんも、そういう番組見るんだな」

ってというか、そういうタイトルだったのか、あの番組。

『マオさんのあの写真、でていましたね。びっくりしました。メインの部分ではなかったのが少し残念ですが。送るのをお手伝いした身としては、嬉しかったです。咄嗟に画面を写真にとったので……』

「添付」

『てんぷ、しておきますね』

更にスクロールすると、確かになにか添付ファイルがついているようだった。

「……どうするの、これ」

『そこクリックしてー、そう』

「あ、開いた」

どうにか画面に呼び出した写真には、テレビに映る、居候猫の間抜けな心霊写真があった。

『きゃーっ！！』

「……耳元で叫ぶなよ、うるさいな」

またあがった黄色い歓声に、右耳を押さえる。別に鼓膜を通して聞こえているわけではないのだが、気分として。

『もー、エミリさん、さっすがー！ すてき！ 大好き！ 隆二とは違うなあ！』

嬉しそうに笑いながら、手を叩く。

「……よかったな」

あまりのはしゃぎように呆れながら声をかけると、大きく頷かれた。

『りゅーじ、お礼のメール！』

「……俺がやるのか？」

『だって、あたし今メール打てないもん！』

「……だよなあ」

しゅしゅ、返信メッセージを作成する。

「……マオがとっても喜んでいて、ありがとう。今度ちゃんと本人から返事させる。で、いいか？」

『……もっとこの感動を伝えて欲しいんだけど、隆二だから仕方ないね』

一瞬、顔をしかめたものの、素直にマオが頷いた。マオの感動とやらを伝えるためのメールなんて、一日あっても完成するとは思えない。

なんとかメールを打ち終えて、送信。

やはり慣れない。疲れる。

溜息をつきながら、ケータイをソファに置いた。

『ありがと！』

幾分、落ち着いたマオが、ぺこりと頭をさげる。

「どーいたしまして」

苦笑しながら返事を返した。

『あ、写真もらったけど、二人の写真も撮ろうね！』

「はいはい」

投げやりに返事をする。

まあ、写真をとること自体に、反対すべき点がないし。

と思っていたら、なんだかじっと見つめられる。

「……何」

なんだか射抜かれそうな視線に、居心地の悪さを感じる。

『……隆二さ』

「うん？」

『何か最近、優しい』

「……は？」

優しい？

『気味悪いんだけど。今だって、前だったら、写真手に入ったからもういいだろめんどくさい、とか言うところじゃない？ っていうか、そもそも、一緒に写真撮ろうなんていう、ナイスな心遣いなんて出来なかった！』

「……一度、お前の中の神山隆二像を改める必要があるな」

どれだけひとでなしだと思っているのか。

「別に、優しいならいいだろ」

呆れて笑いながら言うと、

『何か、隠し事してない？』

言葉で射抜かれた。

一瞬、拳動がおかしくなりそうなのを、必死に耐える。

「はあ？」

普段どおりを意識して、呆れたように言葉を返す。

「何を根拠に」

『女の勘！』

また、面倒なものを根拠にしたな。

しかし、確かに以前よりもマオの要望を叶えようとしているのは事実だ。あのとき、どうして無視したのだろう、と後悔したくなくって。

それは、確かに、不自然だったかもしれない。

『何か、疾しいことがあるんでしょうっ！』

腰に手をあてて、挑むように言われる。浮気がバレたらこんな感じなんだろうか。

「例えば？」

動揺を押し隠して、平静を装う。

『わかんないけど！』

さっきと同じテンションで言われる。イマイチ迫力が足りない。

「なんだそれ」

呆れたように笑ってみせる。

「そりゃあ、多少変わるだろ。マオが実体化するようになったら、生活様式が変わるんだからさ」

『けどなんか怪しい！』

「あーそう、そんなに言うならわかった」

わざとらしく、足を組み直して、告げる。

「もう、お前の言うことは何一つきかない」

言った瞬間、マオの顔が泣きそうにくしゃりと歪んだ。

そういう顔をされると、多少は胸が痛むのでやめて欲しい。

「写真もとらない」

『や！』

短く叫んで、飛んでくると、隆二の顔をのぞき込むように床に座った。

『写真撮りたい！』

「優しいから気味が悪いんだろ」

『気味が悪くてもいいから、写真撮りたい！』

気味が悪いは否定する気ないのかよ。

「隠し事してるから嫌なんじゃないか？」

『うう、してるような気がするけど、してないっていうことでいいから！』

そこも妥協し切らないのかよ。

「ふーん？」

ちらりと視線を向けたマオが、思ったよりも真剣な顔で、少し笑いそうになる。そんなに大事なことなのか、写真が。本当、何事にだって真っすぐに向き合っているな。

『ごめんなさいー。優しいのはいいことでした！』

「……まあ、わかったよ」

ぽんぽんっと、その頭を軽く叩く。

すると、途端にマオの顔が華やいだ。

『写真、とってくれる？』

「ああ」

『ありがと！』

えへへ、っと笑う。

その額を軽く指で弾いた。

「なんにも隠し事とかしてないから、気にするな」

『はい』

隠し事の件はもういいのか、マオが楽しそうに片手をあげて返事をした。

よかった、うまくごまかせた。

結局のところ、覚悟がまだ決まっていないから、マオに覚悟の内容を話すことができない。

きっと、実体化にともなう弊害を聞いたら、マオはショックを受ける。それを一緒に受け止めてやるだけの覚悟が、まだ自分にはできていない。

今はまだ、はしゃいでいるマオを見ていたい。
だから、今後は多少、優しさに気をつけよう。

毎月十五日。それが、マオの食事の日だ。

実際は、多少食事の日がずれても、問題はないらしい。だが、一日でも遅れて、またマオが消えるようなことになっては困る。

だから、毎月十五日をその日と決めていた。

『それでは』

ソファに座った隆二の前に立ったマオが両手をあわせる。

『いただきます』

律儀にそう言うと、隆二の頬に手を伸ばした。

だからこの食事方法、なんとかならないわけ？

幾分、うんざりしながら瞳を閉じる。いや、閉じるのもどうかと思うけれども、あけておくのはもっとどうかと思うし。

と、月に一回の謎の葛藤。

触れていた唇と、頬に置かれた手に熱を感じる。

同時に、それらが離れた。

「ごちそうさま、です」

マオの言葉に目をあける。

ちょっと困ったように笑いながら、実体化したマオが立っていた。

「おそまつさまで」

言って、だらっとソファに座り直す。

「んー、さすがに寒い」

霊体の時と同じ、白いキャミワンピを着ているマオが肩をさする。

「着替えて来い」

「そーする」

いいながら、隣の部屋に消えた。

霊体の時のマオが身につけている、あのワンピースの構造も対外謎だ。実体化したときは、ワンピースも実体化する。脱ぎ着することができる。

そして、不思議なことに、霊体に戻るとき、どんな服を着ていても、あのワンピース姿に戻るのだ。ダンスに仕舞っていたはずのワンピースは消えている。

マオの霊体を構成する一部。それが、研究班の認識だった。

「ねー」

隣の部屋から声がとんでくる。

「んー」

「写真、とりにいこう！」

弾んだ声。

「……写真？」

「もー、忘れたの？ 約束したじゃない！」

「……ああ」

そういえば、そうかもしれない。

しかし、

「とりにいこう？」

隆二としては、次に研究所に行った時にでも、エミリにとってもらうつもりだったのだが。

「そう」

着替え終わっただけのマオが、ひょこっと顔をのぞかせると、

「あたしね、憧れてたの」

「なにに？」

「プリクラ！」

にぱっと笑った。

ゲームセンターというのものに、はじめて足を踏み入れた。

霊体のころに何度も来ていたというマオに、ぐいぐい腕を引っ張られながら、奥に進んでいく。

ところで、聞くタイミングを逃したのだが、プリクラとは一体なんなのか。

それなりに、現代文化に溶け込もうと思っている不死者だが、頑張る気がないのでどうしても遅れがちだ。

「これ！」

指されたなぞの機体。そこに描かれた写真。文字やハートマークなんかが描かれた写真。

制服を着た女子高生二人が、小さい写真がたくさんついているシートを二つに切っていた。

どこかで見たことある。

考えて思い出す。タンスの奥にそっとしまい込んだ、京介のジッポ。あれに貼られていた写真シールがこれだ。

なるほど。

唇が皮肉っぽく歪む。

というか、これを俺にやれというのか、こいつは。

うんざりしながら、数体並ぶ機体を、どれにしようかな、で選んでいるマオを見る。

何かの罰ゲームか。さすがにここまでのことは想定していなかった。

「りゅーじ」

どれにするか決めたらしいマオに手招きされる。

しゅしゅ近づくと、カーテンの中にひっぱりこまれた。

「なあ、マオ」

「んー」

財布の中から、小銭を探しているマオに声をかける。

「お前、これ、やりかたわかってんのか？」

「雑誌で読んで勉強したから大丈夫」

「……ああ、そう」

そういうとこだけは、本当、しっかりしているよな。

小銭を投入し、機械音声の指示に従ってなにやら操作しているマオをぼんやりと眺める。

なんか、もうなんでもいいから、はやく終わらないかな。

「それじゃあ、撮影するヨ！」

機械音声。マオが隆二の腕をとって、ピースサインした。

かしゃっと、一枚とられる。

「ちょっと」

マオが隆二の横顔を睨みつけながら、

「なにその、直立不動の無表情」

唇を尖らせる。

「ポーズとれとは言わないから、にっこり笑ったりできないのっ」

「……無茶言うなよ」

うんざりしてマオを見る。

見てから、思ったより近い顔に、距離をそととった。

実体化して、普通に立って並んではじめて気づいたが、マオの方が隆二よりわずかだが背が高い。普通に立って並ぶと、顔がとても近い。

「あのね！」

マオがさらに膨れたところで、

「それじゃあ、とるヨ！」

機械音声。三、二、一のかけ声で、かしゃっという音。

「えっ」

慌ててマオが画面を見た時には、呆れたようにマオを見る隆二と、頬をふくらませたマオの姿があった。

「もー！ 隆二のせいでとんでもないことになったじゃない！」

ますます膨れる。

「……俺が悪いの？」

などとやっている間にさらにシャッター音。

結局、マオが無事に前を向いてうつっていたのは最初一枚だけで、あとは隆二に向かって怒っていたり、シャッター音に慌てたりしている顔だった。

「もー！」

落書きコーナーなる場所に移動しながら、マオが膨れる。

「こんなはずじゃなかったのに」

いいながら、何か書き込んでいく。

落書きできるという画面は二つあるが、万が一壊したら怖いので、隆二は触れない。触らない

。

その落書きも終わって、出て来たシートを見る。

「……字、ヘタだなあー」

最初一枚に書かれた、「まお」と「りゅーじ」という字。ミミズが這ったようなその字をみながら呟くと、またマオが膨れた。というか、「ま」の丸のついている向きが逆だ。

「難しいだもん！ はじめたばかりだもん！」

「はいはい。帰りに平仮名練習帳買ってやるから」

言いながら、一応他の写真に目を通す。

きらきらした星やらハートやらに紛れて、「このとーへんぼく！」なんて書いてある。怒ったマオと、呆れたような隆二の写真。

「本当、こんなはずじゃなかったのに」

むすっと膨れるマオの頭を、軽くこづく。

「……俺はいいと思うよ」

「なにが」

「らしくて」

言うと、マオにシートを手渡して、帰ろう、と歩き出す。

「あ、待ってよ」

慌てて隣に並んだマオが、

「らしい？」

首を傾げる。

「……お前らしいだろ、バカっぽくって」

言うとまた一度膨れてから、

「でも、確かに隆二らしいね」

ふふんっと勝ち誇ったように言った。

「隆二はいつも、こういう顔してるもんね」

目の前にシートをかざし、眺めてから、満足そうに頷く。

「うん、日常の一コマって感じで、悪くないかも」

とんだ日常だな。

思いながらも、自分の感想と一緒にだったので何も言わない。

納得して機嫌を直したのか、マオはそれを鞆にしまう。

変に固まって、笑顔を作っているよりも、さっきの写真の方がよっぽどいい。

「転ぶなよー」

それを確認すると、空いた手を掴む。

外を歩くとき、手を繋いでいないと少し不安だ。どこかに行ってしまうようで。

「転ばないよ！」

転ばないように手を繋ぐ、という隆二の言葉を信じているマオも満更ではないらしい。口では

なんだかんだいいながら、手を握ってきた。

「ねー、りゅーじ、カレー食べたい」

「カレー？ おこちゃま用甘口カレーでいいか」

「よくなーい」

マオの言葉に適当に言葉を返しながら、家路についた。

第三幕 猫には首輪を。

「マオ、買い物行くけど、どうする？」

テレビの前に座ったマオに尋ねる。今は絶賛実体化中だ。

「んー、待ってるうー」

テレビから目を離さずにマオが言う。

だと、思ったよ。

今やっているのは、四苦八苦久美子、だ。疑心暗鬼ミチコと同じ美少女四字熟語シリーズでありながら、実写版は予算の都合で作成されず、アニメ版ではじめて作成された話だそうだ。

まあ、当然のことながら、マオはそれに夢中だった。もう今更、それには何も言うまい。

しかし、ウェディングドレス姿で戦う少女が四苦八苦とは。なんというか、皮肉っぽいよなあ

。

「留守番しとけよ、勝手にでかけんなよ」

一応釘を刺しておく。一人で出かけた先でなにかあったら困るから、一人での外出は禁じている。

「んー」

「マオ」

「はーい」

片手をあげての返事に、逆に不安になりながらも、家を出る。

マオが実体化して、隆二が助かっていることがあるとすれば、テレビの操作をマオ自身が行えるようになったということだ。前は、やれ電源いれろ、チャンネル変えろと寝ていようが本を読んでいようがおかまいなしにリモコン代わりに使われていたが。

久美子が終わって次の番組がつまらなくても、適当にチャンネルまわして楽しい番組を見つけてくれるだろう。

マオの相手は、テレビに任せておくことにする。まったく、優秀なベビーシッターだ。

今日の夕飯は何にするか、考えながらスーパーに向かう。

手を抜いてコンビニで買うことも多いが、やはり自炊の方が体にいいのではないかと気づいてから、それなりに積極的に料理するように気をつけている。簡単なものしか作れないが。

こんなことになるとわかっていたら、京介に料理でも習ったのになー。そんなことを思う自分に苦笑する。

しかし、仮定の話、自分の心の中での話とはいえ、京介のことをこんな風に思い出すことができる。それに思い至ると、なんとも言えない気分になる。

思い出すのが辛くて避ける時期は終わった。そのことを意識すると、喜ぶべきなのか、悲しむべきなのかわからなくなる。

そんなことをつらつら思いながら歩いていたからだろうか。

前方に、なんだか見覚えのある黒髪が見えた。

そろそろ切った方がいいんじゃないか、と思うぐらいの長さの黒髪。

思わず、早足になってそちらに向かう。

地面に座りこんだ、その体格は似ている。

神野京介に。

「きょっ……」

近づいて呼んだところで、その人物が顔をあげた。

確かに似ている髪型で、体格だったけれども、見えた顔は女のものだった。

違った。当たり前だ。

やっぱりまだ、踏ん切りがついていない。

「……すまない、知り合いに似てて」

怪訝そうな顔をする女にそう告げる。

「あら、昔の女にでも似てた？」

言いながら女がくすくすと笑った。

「いや男」

正直に答えると、

「うわっ、失礼な！ 何か買いなさいよ」

地面に座り込んで何をやっているのかと思ったら、路上でアクセサリーを販売しているらしい

。

まあ確かに、男に間違えるのは失礼だったな、いくら、よくいえばスレンダーな体格が似ているからといって。

並べられた手作りアクセサリーとおぼしきそれらを眺めていく。

まあしかし、眺めたところでどうしたらいいのか。適当になんか安いのを買って逃げるか。

そんなことを思っていると、視線が一点でとまった。

猫のチャームがついた、ペンダント。猫の横にちょこんと緑色の石がついている。

「それねー、キャッツアイ」

隆二の視線を追って、女が言う。

「キャッツアイ？」

「そー、猫目石。光があたると、猫の眼っぽい筋がでるから」

「へー」

「えっとね、邪悪を祓うとか、そういう効果があるらしいよ」

適当で投げやりな台詞。売る気あるのか。

「触っても？」

「どうぞ」

それを手に取って、目の前まで掲げる。そっと値札を確認したが、お手頃価格だった。

緑色、猫。おまけに邪悪を祓うとか。

これはもう、ぴったりだろ。家でテレビを見ている、緑の瞳を持つ居候猫に。

「……じゃあ、これ」

「どーも」

手渡すと、女が袋に入れてくれる。

「カノジョに？」

金銭と引換に袋を受け取りながら、その質問に苦笑いを返す。

「いや？ 猫に」

「猫？」

「そういえば、まだ首輪をつけていなかったんでね」

「ただいま」

スーパーでの買い物を終えて、家に戻ると、

「おかえりなさい」

ぱたぱたとマオが玄関まで出て来た。

「走らない」

「走ってない！」

うそつけ、走っていただろうが今。

テレビはニュースを流している。ああ、飽きたんだな、さては。

「夜ご飯なにー？」

スーパーの袋を覗き込んでくる。

「んー、シチュー。っていうか」

野菜達と一緒にいれていた、ペンダントの袋を渡す。

「これやる」

「え？ なになに？」

小さな袋を受け取ったマオが、驚いたような顔をする。

「あけていい？」

「どーぞ」

びりびりと、酷く乱暴に袋をあけたマオが、

「わー」

出て来たペンダントを目の前にかざして、きらきらと顔を輝かせた。

「え、なに、どうしたの？ どういう風のふきだまり？」

「強引に売りつけられた。あと、吹き回しな」

また優しいから気味が悪い、とか言われぬように言い訳する。浮かれたマオは、そんなこと聞いちゃいなかったが。

「えー、わー、嬉しい！ 猫、可愛い！ 緑お揃い！」

えへへ、っとだらしなく頬を緩ませる。

思っていた以上に喜んでくれたので、こちらも小さく唇を緩ませた。

「ね、つけて！ つけて！」

はいっと渡される。自分でつけろよ、とは思ったが、ここまで喜ぶのならば、多少サービスしてもいいかもしれない。

「後ろ向いて、髪じゃま」

後ろ向いたマオが、髪の毛をひとまとめにする。ペンダントをそっととめた。

「はい」

「ありがとー！ 大事にするね！」

こちらを向いて、マオがまた、さらに笑う。首元の猫を指で弾く。

かわいいねーなんてペンダントに向かって話かけていたが、

「そうだ！」

ソファーに置いてあった自分のケータイをとってくる。

「写真撮って！」

そしてそれを隆二に渡した。

途端に、渋い顔になったのが自分でわかった。撮ってって、お前。

「もー、待って」

それを見て、マオが呆れたような顔をしながら、ケータイを操作する。

「はい、これで大丈夫。あたしに向けて、そのカメラのマークそっと触ればいいから」

ご丁寧にカメラを起動させてくれた。

しゅしゅ、それを持ってマオに向ける。

浮かれた顔をしたマオとペンダントが画面にはいるようにして、言われたとおりカメラのマークに触れた。

かしゃっと音がする。

「撮れた？」

横からひょいっとケータイを奪いとられた。

「あ、うん、撮れてる撮れてる。ほら」

見せられた画面には、確かに浮かれたマオの写真があった。

よかった、取り直しを要求されなくて。

「そうだ」

隆二のズボンのポケットからひょいっと、隆二のケータイを抜き取った。

今度は何を企んでいる。

「マオ」

呆れて名前を呼ぶと、マオは手慣れた様子で隆二のと自分のケータイを操作しながら、

「これ、隆二のケータイの待ち受けにしてあげる！」

とんでもない発言をした。

「ちょっ」

慌てて取り返そうとすると、それよりもはやく、マオはひょいっとソファーに飛び乗った。

「跳ねない！」

「もー、あとちょっとなのー！」

ソファーのうえに立ち上がり、隆二からケータイを庇うように背中を向ける。

「ちょっとじゃなくて、返せ」

近づいて手を伸ばすと、マオはそれを避けるように身をよじった。ソファの端っこでそんなことをするから、バランスを崩して倒れそうになる。片足がソファから落ちる。

「ひゃっ」

「マオっ！」

それほど高くないとはいえ、足を捻るぐらいはしかねない。慌てて手を伸ばし、その体を支えた。

「わ、びっくりしたー」

無事着地したマオが、驚いたような顔をする。

びっくりしたのはこちらの方だ。頼むから、むやみやたらに怪我するようなことをしないで欲しい。なんで家の中でまで、こんなに肝を冷やさなきゃいけないんだ。

「マオ！ お前な」

「助けてくれて、ありがとー」

小言の一つ二つ言ってやろうと口を開いたが、笑顔でそうお礼を言われて言葉につまる。わかっているのか、わかってないのか。

マオはそんな隆二のことは気にせず、ケータイを操作し、

「あ、はい、できたよ」

隆二にケータイを返した。

受け取ってみると、確かに待ち受け画面がさっきの浮かれたマオの写真になっていた。

「勝手になにすんだよ！」

直せないだろうがっ！

「それが嫌なら隆二が、自分でがんばって直せばいいんだよー」

どうせ無理でしょう？ と言いたげに勝ち誇って笑われる。実際無理なのだが。

しばらくケータイを睨みつけていたが、

「……まあ、いいか」

誰に見せるものでもないし。

そう自分を納得させると、諦めてケータイをテーブルの上に置いた。

「……怒った？」

ここにきて、急にマオがそう尋ねてくる。恐る恐る、隆二の顔色を伺うようにして。不安になるぐらいなら、最初からこういうことするなよ。

「呆れてるだけ」

溜息まじりにそう言うと、片手でその頭をぞんざいに撫でた。それにマオが、安心したようにちょっとだけ笑う。

「あと、あんまり飛び跳ねたりしないように。危ないし、下の人に迷惑になるから」

「……危ないし、心配？」

なんでそこでちょっと嬉しそうな顔をするんだ。

「下の人迷惑になるから」

後半の理由を強く推すと、

「……はあーい」

ちょっと頬をふくらませる。

「ほら、夕飯作るから」

ちょっとどいてて、と言おうとすると、

「手伝う！」

元気よく言われた。

手伝う、ね。台所って刃物も火もあって危ないんだがなー、とは思いつつ、

「じゃあ、とりあえず買って来たものしまっというて」

無難なところを頼む。

「はーい」

マオは持っていたケータイをテーブルの上に置くと、代わりにスーパーの袋を手にとった。

マオのケータイには、猫のぬいぐるみがついている。ストラップにしてはでかすぎだろ、とは思いますが本人は気にしていないらしい。裏返しておかれたケータイ。そこには、この前とったプリクラが貼られていた。最初の、一番うまくとれたやつ。

それを見て少しだけ微笑む。

まあ、マオが楽しそうだし、いいか。

「りゅーじー！」

「はいはい」

台所で手招きしているマオの方へと向かった。

胸元で揺れる猫を、ぴんっと軽く弾く。

ふふふっと、笑みがこぼれた。

ソファーに横になりながら、マオは存分にペンダントを楽しんでいた。

もうすぐ日付が変わるころ。お風呂に入るからと外していたそれを、つけ直したところだった

。

やっぱり、これ、可愛いなー。

「……お前、寝るならベッドいけよ」

マオの足元の方、床に座った隆二がつまらなさそうに声をかけてくる。

「わかってるよー」

「あとちゃんと、髪の毛乾かせよ」

「わかってるってばあー」

今、ネックレスを愛でるので忙しいんだから、放っておいて欲しい。

隆二は、マオを一瞥すると、どうだか、とでも言いたげに肩を竦めた。

まったく、隆二は本当、ちっともマオの気持ちをわかってくれない。すっごく嬉しいからこうしているのに。嬉しいっていう気持ち、ちゃんと伝わっているんだらうか。

飄々と本を読んでいる隆二を見ていると不安になる。

傍においていてくれることも、面倒をみてくれていることも、本当に嬉しいと思っているし、感謝しているし、こんなに大好きなのに隆二にはいまひとつ、伝わっていないんじゃないかなーと思うときがある。

だってほら、ひとでなしだし。

それに、マオも言葉で全部を伝えられるほど、賢くない。

溜息まじりに起き上がると、タオルで濡れた髪を拭く。

「……ドライヤー使えよ。せっかく買ったんだから」

やっぱり呆れたように言われる。

本当、隆二は注文が多い。

「めんどうなんだもん」

なんだか素直になれなくてそう言って唇を尖らせると、

「……やってやるから、もってこい」

心底面倒くさそうだったが、思ってもないことを言われた。

「え、本当!？」

「嫌なら自分でやれ」

言って隆二の視線がまた本に戻る。

「やじゃない!」

慌ててそう言うと、立ち上がって洗面所にドライヤーをとりに行く。

戻ってくると、隆二は読みかけの本を適当に床において、ソファーに腰掛けた。

「そこ」

「はい」

指差された隆二の足元、床に座る。

「……あ、これかスイッチ」

背後からちょっぴり不安な声が聞こえるけれども、気にしない。もしかしたら、隆二がやると酷いことになるかもしれないけれども、気にしない。

大事なのは結果じゃないのだ。隆二が髪を乾かしてくれる、と言い出したことなのだ。

ぶおおっと、ドライヤーから出た温風が髪を揺らす。

思っていたよりも手慣れた手つきだった。そっと触れる手と風が嬉しくて心地よくて、目を細める。

機械の類いにはめっぽう弱いけど、決して隆二は不器用じゃないのだ。機械さえなければ、なんでもそつなくこなしてしまう。

料理だって、すっかり上手になったし。

「隆二は一」

ドライヤーの音に負けないように声をはりあげる。

「なんでもできてすごいねー!」

素直な感嘆の言葉に、

「お前がなんにもできなさすぎなんだよ」

ちょっと笑いながら言われた。

それはまあ、そうかもしれない。字も、練習しているけれども難しいし。なんにもできない。ちょっと落ち込んでしまうと、

「ばーか」

くしゃくしゃっと髪の毛をかきまわされた。

「ちょっとおー」

振り返ると、隆二が笑っていた。楽しそうに。

それになんとか嬉しくなる。最近の隆二は優しいし、前よりもいっぱい笑ってくれる。多分、本人は無自覚だから言わないけど。言ったら恥ずかしがって、もう笑ってくれないかもしれないし、また意地悪されるかもしれないから。

ドライヤーを止めて、

「いいんだよ、ゆっくりで」

隆二が優しく言った。

「零歳児なんだから」

からかうような言い方だったけど、やっぱりいつもよりちょっと声が優しい。

「……もう、一年経つよ」

発生してから。

小声でそう訂正すると、

「あれ、そうだっけ」

時間の感覚に乏しい隆二は軽く首を傾げた。

隆二のところにきてからだって、一年経った。

「まあ、対して変わらないよな」

「隆二から見たらそうだろうね」

「だからまあ、ゆっくりでいいんだよ」

ぽんぽんっと頭を軽く叩かれた。

「ん」

それに素直に頷く。

それを見て隆二は満足したのか、またドライヤーのスイッチをいれた。

「それに、ほら、あれだろ」

「んー？」

「ケータイは、お前の方が使いこなしてるだろ」

「それは、ねー？」

だって、機械は隆二が不得意過ぎるから。

「それに」

そこで隆二は、躊躇うようにちょっと間をおいてから、

「一緒に学んでいこうって言っただろ」

なんだか早口で言った。

それに思わず振り返りそうになるのを、

「前向いてろ」

ぐっと頭を押さえつけられて、妨害される。

多分、今、隆二はちょっと照れている。

それに思い至ると、ふふっと笑みがこぼれた。

隆二が約束をちゃんと覚えていてくれたことが嬉しい。すぐに色々忘れちゃう人だから。

「はい、終わり」

「ありがとー」

振り返ると、

「どういたしまして」

いつもどおりの、ちょっとつまらなさそうな顔で隆二が答えた。

「ほら、そろそろ寝ろ」

「はいー」

実体化している時に嫌だな、と思うのは、ちゃんと夜寝るように言われることだ。幽霊のときだったら、夜中どんなに起きていても何も言われぬのに。

でもやっぱり、幽霊のときよりも眠くなる。実体化していると動き回るからしかたない。

「寝る時それ、外して寝ろよ」

首元を指差される。

「これ？」

ペンダントをつまむと、頷かれた。

「お前、寝相悪いから寝ている間に首しまるかも」

そっけなく言われる。

バカにされて一瞬むっとしたけれども、よくよく考えてみれば心配されている気がしてきた。だから怒るのを一度ぐっと堪えて、

「わかったー」

小さく頷くにとどめた。

「それじゃあ、おやすみなさい」

立ち上がる。

「うん、おやすみ」

軽く片手を振った隆二は、また本の世界に戻っていた。

隣の部屋のベッドに潜り込む。すっかりマオ専用となったスペースだ。

ペンダントを外すと、ちょっと迷ってからタンスの上に置いた。

何かお洒落な箱かなにかにいれておきたいな。幽霊に戻っている時に、万が一どっかにいってしまったら困るし。とりあえず、明日何か箱がないか隆二に訊いてみよう。

思いながら目を閉じる。

うつらうつらしながら、思う。

何かお返しがしたいな、と。

実体化したなら、なにかお礼の品を買いに行くこともできるじゃないか。言葉や態度だけじゃなくて、物をプレゼントできる。そうしたら、マオの気持ち、ちょっとはわかってくれるかもしれない。あの駄目駄目隆二でも。

今月はもう、明後日には元に戻ってしまうから難しいけど、来月になったら隆二がいない隙について、買い物に行こう。一人ででかけるなどか言われているけど……。まあ、いいや。怒っている隆二も笑顔になるぐらいの、なにか素敵なものを探そう。

自分の想像にふふっと笑みが溢れる。

喜んでくれるもの、あるといいな。

そんなことを思いながら、意識は落ちていった。

第四幕 少女の心は、今も猫の眼

「失礼します」

出来るだけいつもと同じ、平坦な口調に聞こえるように気をつけてそう言うと、ドアを閉めた。

進藤エミリは現在、端的に言うと干されていた。

まわってくるのは、しょうもない事後処理ばかり。今提出してきた書類だって、逃げ出した人面犬を捕獲するというしょうもないもので、人面犬が逃げ出すのはエミリが知っているだけで二十六回目だ。もうわざと逃がしているんじゃないかと思うレベルだ。

何故こんなに地味な仕事しかまわってこないのか。その理由はよくわかっていた。

先日のGナンバーの一件で、隆二達の側に立ち、あまつさえ研究班に銃を向けたからだ。ただでさえ、自分は周りによく思われていない。仕事ができることだけが取り柄だったのに、京介の一件で自分の評判は地に落ちて、先日の件でマイナスだ。人が足りないから、首にならないだけマシなのだろう。

周りのひそひそ話は不愉快だし、仕事がないのはつまらない。

それでもエミリは後悔などしていなかった。自分は間違っただけはしていない。胸を張ってそう言える。

確かにマオの永遠に手を加える結果になってしまったが、それでもやはり、あの時あのままマオが消えるに任せているよりもよっぽどいい結果だっただろう。もっと上手く動けたかもしれないが、それでもあの時銃をつきつけたことは、動いたことは、間違いだなんて思っていなかった。

結果的に、マオをまた実験体に戻してしまったことは心苦しけれども。毎月毎月研究所に呼びつけて、申し訳ない。二人は気にしていないみたいだけれども、エミリは気にしているのだ。

なんとか働きかけて、実験に協力してもらおう報酬として金銭を支払うようにしたが、その解決方法も、あまり愉快なものではないな、とも思っている。

小さく溜息。

思ったようには動けない。エミリ個人で動ける範囲には限度がある。そしてエミリは、組織の枠から抜け出せない。

自分にうんざりしながら、自宅に向かう。

途中、鞆にいていたケータイが震えた。

してみると、マオからのメールだった。実体化している時のマオは、やたらとたくさんメールを送ってくれる。他に送る相手がないからかもしれないが、実のところ、エミリはそれが最近楽しみだった。

今回霊体に戻るの、明日だったっけな。

カレンダーを思い描きながら、メールを確認する。

その内容に小さく微笑むと、自宅へ向かう足を速めた。

「ただいまー」

「おかえり、エミリ」

自宅には既に父がいた。

「ただいま、ダディ」

いつものように軽く笑いかけてから、

「ね、わたしの子どものおもちゃって、どこにしまってあるっけ？」

早口で尋ねた。

「おもちゃ？」

和広は怪訝な顔をしてから、

「エミリの部屋の、クローゼットのうえ、かな」

「ありがとう」

頷くと、足早に部屋に戻る。クローゼットのうえの方は、あまり気にしていなかった。椅子を持ってくると、クローゼットの上の棚を覗き込む。確かにダンボールがいくつかあった。

おもちゃ、と書かれた箱を見つけると、ひっぱりだしてくる。

色々と物をとっておいてくれる家でよかった。

少し埃っぽいそれに軽く咳き込みながら、ダンボールを開ける。昔親しんでいたおもちゃがたくさんつまっていた。

多分、あると思うのだが。

人形やおままごとのセットをかきわけて、お目当てのものを探す。

「あ、あった」

ピンク色の箱を取り出す。これならきっとぴったりだろう。

「ダディ」

それを持ってリビングに戻る。

和広は一度エミリを見てから、

「これはまた、懐かしいものを」

目を細めた。

「これ、マオさんにあげてもいい？」

「それはエミリのものだから、好きにすればいいが」

「ありがとう」

明日持って行こう。心に決める。

「しかし、なんでまた」

「お洒落な箱が欲しいっていうから」

「.....最近は、すっかり仲がいいね」

ほんの少し、和広が笑った。

改めて言われると、なんだか照れくさい。

「おまえは、ずっと実験体と距離を置いて生きていくのかと思っていたよ」

「.....わたしだって、色々考えて、変わるんだよ」

いつだかも言ったようなことを言うと、

「そうか」

微笑んだまま頷かれた。

父はずっと、Uナンバーである隆二達を担当していた。彼らと普通の人間のように接する父のことを、変わっていると思ったこともあった。

でも、今ならわかる。彼らはなにも変わらない。自分達と。

父のことはずっと大好きだけれども、最近は特に誇りに思う。組織に流されず、自分の価値観を築いている父を。

「恵美理は今後、神山さんたちと敵対する命令がでたら、できなさそうだねえ」

巫山戯た調子で言われた。

そんなこと、考えてみたこともなかった。彼らともう敵対するつもりなんて、エミリにはなかった。

そんなことになったら自分はどうするのだろう？

一瞬悩んだものの、

「そんなのダディ、決まってるよ」

軽く肩を竦めて答えた。

「もうそういう命令はわたしのところに来ないよ」

干されているんだから。

言外に込めた意味に、和広も少し苦笑いをした。

「恵美理」

「なに？」

「やめるのならば、遠慮せずにやめなさい」

真面目な顔で言われた言葉になんて返事をするべきか悩む。

色々考えていることはあるけれども、干されている現状があるけれども、研究所をやめることはそんなにすぐには考えられなかった。だって、エミリから研究所をとったら何も残らない。そのことが自分でわかっているから。ここまでの人生、研究所を中心に生きてきた。今更、それなしでの生き方を考えられない。

「うん、考えとく」

それだけいうと、真面目な父の視線から逃げるように、きびすを返し、

「あ、そうだ恵美理」

引き止められた。

振り返ると、父はいつもの穏やかな笑みを浮かべていた。安心して、そっと肩から力を抜いた。

「なんだったか、深夜にやっていたテレビ番組。心霊写真がどうたらとかいう」

「ああ、オカルトクエスト？」

おおよそ父が言うとは思えないテレビ番組に、語尾が奇妙に跳ね上がった。

「ああそうそう。それ、ビデオとっていたよな？」

「うん、録画しているけど」

マオに頼まれて写真を番組に送って以来、いつ採用されるか楽しみにして、こっそり録画していたのだ。なんだか恥ずかしいからこれは内緒だけれども。

「なんだか知り合いが見たいと言っていてな」

「そうなの？ いつの？ あんまり古いのだともう消しちゃったけど」

「今月のだとは思うんだが。もう一回確認しとく」

「うん。わかったらDVDに焼いておく」

頼むよ、という父の言葉に頷きかけて、今度こそ自室に戻った。マオにメールの返事を打たなければ。

その日は、朝からマオが目に見えてそわそわしていた。

目の前をうろうろうろうろ行ったり来たりする居候猫を見ながら、隆二は一言。

「おすわり」

「犬じゃないよ！」

すぐに怒ったような言葉が返って来た。

「とりあえず、座れ」

ソファの隣を軽く叩くと、大人しくマオは隣に座った。

「どうした」

尋ねる。今日は、実体化がとける日だ。なにかやり残したことでもあるのだろうか。

実体化は、食事をとった日の翌日から、十四日後の午前九時にとける。食事が何時であっても午前九時に。あと三十分ほどで、霊体に戻ることになる。

「んー」

マオは片手にもったケータイと玄関のドアを何度か見比べながら、

「あのね、エミリさんがあ」

「嬢ちゃん？」

問い返したところで、ぴんぽーんっと玄関のチャイムがなった。

「きた！」

ぴょんっと立ち上がると、マオが小走りで玄関に向かう。

「走らない！ あと確認してからあける」

注意を促すと、一応覗き穴から外を確認してから、ドアをあけていた。

「こんにちは。すみません、ぎりぎりでしたね」

「こんにちは！ いらっしゃい」

確かに入って来たのはエミリだった。

「どうした、嬢ちゃん」

ソファに座ったまま声をかける。

「エミリです。マオさんに用がありまして」

そうしてエミリは、どうぞ、と片手に持っていた紙袋をマオに渡した。

「いい？」

「はい」

マオがそれをあけて、中身を取り出す。

「わああ」

そうして嬉しそうに声をあげた。

マオが取り出したのは、薄いピンクの箱だった。

「かわいい！ 魔法っぽい！」

プラスチック製のチープなつくり。蓋の部分には、金色で何か模様がついていた。よくみたら何かの花の形になっているようだ。ひまわり……？

マオがそれを開ける。中はオルゴールになっていたようで、開けるとチープな音楽が途切れ切れ聞こえた。真ん中の部分は、蓋と同じような金色の模様に囲われ、ついでになんとか光っている。

「なにぶん、古いものなので、音質はあんまりよくないのですが」

エミリが申し訳なさそうな顔をするが、箱に夢中なマオは聞きちゃいなかった。

「ここが、小物入れ？」

「はい」

マオが指差したのは、赤いフェルトが敷いてあり、他の部分とは区切られた場所だった。

マオは軽く頷き、つけていたペンダントを外すと、その部分にそっと置いた。

ぱたん、と蓋を閉めると、

「うん」

なんだか満足そうに大きく頷いた。

「お気に召しましたか？」

「とっても！ ありがとう」

満面の笑顔で嬉しそうに言うと、エミリも小さく微笑んだ。

「あー、悪い、説明してもらってもいいか」

置いてきぼりになった隆二が声をかけると、

「もらったの！」

嬉しそうにそのピンクの箱を胸に抱きながら、マオが言った。それは大体わかったんだが。

「わたしが説明しますから、マオさんはそろそろ準備なさった方がいいのでは」

時計をちらりと見てエミリが言う

「あ、本当だ」

あと九時まで、十分ほどしかない。

「それじゃあ、エミリさん」

「ええ」

マオはぺこっと軽くエミリに頭をさげてから、大切そうに箱を抱いて、ベッドのある部屋に消えて行った。襖が閉まる。

何度か実体化を経験して、元に戻るときのルールもできていた。

霊体に戻る時には、いつものワンピースに着替えること。何を着ていても、霊体に戻ったときは、あのワンピース姿になる。ただ、その場合、元々着ていた洋服は、中身を失い床に落ちることになる。そうすると、隆二が片付けることになる。それが面倒なので、予め洋服を着替えておくことになった。

それから、他の洋服や散らかしていた小物達もきちんと片付けておくこと。無くしたら困るものは、自分できちんとしまっておくこと。触れなくなってから隆二に片付けを頼んで、それで壊したのなんなの言われては、隆二もたまったものじゃないからだ。

今頃、部屋を片付けて、着替えているころだろう。

「えっと、それで？」

とりあえず座れば？ と片手でダイニングの椅子を勧めながら、エミリに尋ねる。

「昨日、マオさんからメールがありました。神山さんにとっても素敵なペンダントをプレゼントされたのに」

とっても素敵なペンダントを嫌に強調して言われて、むず痒くなる。わざわざそんなことメールしたのか。

「しまう場所がない。箱かなにかにいれておこうにも、いいものが家になかった。なにかないか、というものでした」

「それで、あれ？」

「はい」

ピンクなプラスチック製の少しチープなオルゴール。

「おもちゃっぽかったけど」

「おもちゃなんですよ」

そこでエミリが小さく微笑んだ。

「わたしが子どものころにやっていたアニメのおもちゃです。魔法のひまわりリーガルユカナっていうんですけれども。魔法の力で女の子が弁護士になる魔女っ子もので、大好きだったんです」

途中ででてくるパワーアップアイテムで、なんて続ける。

「……嬢ちゃんも、そういうアニメ見たりしてたんだな」

あとなんだ、その魔法の力で弁護士になるっていう微妙な設定は。

「エミリです。わたしも、普通の女の子ですから」

普通概念を一度問いただしたかったが、怒られるに決まっているのでやめておいた。

「それにでてくる魔法のオルゴールなんです。しまい込んであったんですけれども、マオさん、こういうの好きだろうな、と思って」

「そりゃあ、好きだろうな、ああいうの」

疑心暗鬼ミチコと通じるなにかがある。

「でもいいのか、そんなものもらって。思い入れとかあるんだろう？」

「思い入れはありますが、今のわたしがとおっぴらに使うわけにもいきませんし。使っていただけけるのならば、そちらのほうがいいです。それに、わたし、ああいうおもちゃは、まだまだたく

さん持っているんですよ」

一人娘で甘やかされていましたから、と続けた。

「ああ」

苦笑する。

彼女が小さい頃にも何度か会ったことがあるが、確かに見るたびに色々なものを買い与えられていた気がする。

「おっちゃん、元気？」

なかなか子煩悩な彼女の父親を思い出しながら問うと、

「ええ。おかげさまで。まったく何の問題もありません」

しっかりと頷かれた。

「それはよかった」

少し安心する。彼はまだ、いなくなるらない。

「しかし、物持ちいいねー」

「父が色々とおいてくれたので」

そんな会話をしていると、

『りゅーじ』

ひょこんっと壁から顔が生えた。

「おかえり」

片手をあげる。

『ただいま』

霊体に戻ったマオが、するりと壁抜けをして、隆二の隣、ソファに座った。

『エミリさん、オルゴール、ありがとう！』

「いいえ。気に入っていただけでよかったです」

『うん、大事にするね！ 今度、エミリさんにもなにかお礼用意するね！』

「お気遣いなく」

エミリは小さく微笑むと、

「それじゃあ、今日は失礼します」

立ち上がった。

「ああ、悪い。忙しいのに」

研究所からここまで距離がある。マオが霊体に戻る前に来ようと思ったら、結構早くから出て来たんじゃないだろうか。

「いえ」

エミリは軽く首を横にふった。

『エミリさん、ありがとう』

「いいえ。それじゃあ、また」

「ああ、また」

『ばいばーい』

エミリが軽く頭をさげて立ち去るのを、それをマオが大きく手を振って見送った。

エミリを見送り、部屋のドアをしめる。

「よかったな、マオ」

『うん！』

マオが大きく頷いた。

『隆二がくれたペンダントね、本当に気に入ったから、大事にしまっとくものが欲しかったの！

エミリさんに相談してよかった！ あのオルゴールもすごく可愛いし、ぴったりだし、本当嬉しい！』

見ているこっちまで思わず微笑んでしまいそうな笑顔でそう言う。

そこまで気に入ってくれるならば、流れとはいえ買って良かったな。そう思った。

『隆二も、本当にありがとね！』

それから、

『ところで、隆二！ テレビつけて！』

そのままのテンションで、なんの躊躇いもなく隆二をリモコン代わりに扱った。

「……はいはい」

ほんの少し面倒だが、これから半月はマオの挙動にはらはらすることは無い。そう思うと、リモコン代わりになることぐらいなんでも無い。

テレビをつけながら、安定の半月を思ってそっと息を吐いた。

第五幕 居候猫の恩返し

「ごちそうさまでした」

唇を離れたマオが、小さく呟いた。

「おそまつさまで」

いつものようにだらけたように、隆二は言葉を返した。

一カ月、はやいなあ。

「着替えてくるー」

隣の部屋に消えるマオを見送りながら、ぼんやりそんなことを思う。

今日から半月、またマオは実体化していることになる。

マオが消えてすぐに、隣の部屋から、途切れ途切れの音楽が聞こえて来た。これ、なんだっけな。

見えるわけでもないのに、ソファーに座ったまま隣の部屋への壁を見る。しばらく考えて、エミリが持って来たオルゴールの音楽だと気づいた。

実体化してすぐに、あのペンダントが入っているオルゴールを開けたのか。そのことに思い至ると、なんだかすぐったい気分になる。

ふっと唇が緩んで、慌てて片手で口元を押さえた。

「着替えたー」

戻って来たマオは、ラフな部屋着姿だったが、首元にちゃんとあのペンダントをつけていた。そして、すどんと隆二の隣に腰掛けた。

「コーヒー、飲むか？」

なんとなく照れくさくて、マオと入れ替わるようにソファーから立ち上がる。

「牛乳ある？」

「買ったよ、昨日」

「じゃあ、飲むー！」

マオがはしゃいだ声をあげる。

実体化してすぐに、コーヒーが飲みたいなどと言っていたマオだったが、中身と同じおこちゃま舌の彼女には、ブラックでコーヒーを飲むことなんてできなかった。それでも隆二とお茶がしたい、と主張する彼女のため、色々と調整した結果が、ミルクと砂糖たっぷりのコーヒーだ。

それ、もうコーヒーじゃないだろ。とは思うが。

二人分のコーヒーを作って、ソファーまで戻る。マオは早速テレビをつけたところだった。

「はい」

「ありがとー！」

マオ用に購入した猫の柄のコーヒーカップを手渡すと、嬉しそうに受け取った。

ソファーの足によりかかるようにして、床に腰を下ろした。

「そうだ、検査、明後日な」

さっきエミリからきたメールを思い出して言う。

「……はい」

露骨に下がったテンションでマオが返事をした。まあ、そうなるよな。

「帰り、買い物でもなんでも付き合うから」

なだめるようにそう言うと、

「じゃあ、行く前に、なんかお菓子とか買いたいの」

「前に？」

「うん、エミリさんにこの前のお礼。オルゴールの」

「……ああ」

小さく頷く。

「そうだな、色々世話になってるし」

エミリが研究所内で隆二達の担当であるにしても、橋渡し役になってくれていることには感謝している。きっと、研究班と隆二達との間に挟まれて色々面倒な思いもしていることだろう。仕事としての領域を越えて、面倒を見てもらっている、という自覚はある。

「じゃあ、それ買ってからだな」

「うん！」

嬉しそうにマオが大きく頷いた。

検査の日、マオがテレビで見たというバームクーヘンを買ってから、研究所に赴いた。

「わざわざすみません、ありがとうございます」

「いや、いつもありがとう」

隆二が素直に礼を言うと、エミリがなんだかまた微妙な顔をした。礼を言うたびにそういう顔をされるんじゃ、本当、割にあわない。

硝子の向こうでは、今日もマオが白衣と何か話している。右手が胸元のペンダントを掴んでいるのを見て、小さく目を細めた。

「あ、そうだ」

エミリもエミリで何かを思い出したのか、置いてあった鞆から小さな袋を差し出す。

「これ、一応渡しておきます」

「何これ」

開けてみると、円盤状の何かが入っていた。

「先日の、マオさんの写真が採用されたテレビ番組の録画です。丁度同じ回を、父の知り合いが、知人ののが採用されただったか、映っているだったかで見たがっていたので、一緒に焼いておきました」

「……なに、これ、どうすればいいの」

中身とかよりもそこを説明して欲しい。

エミリは一瞬軽く眉をひそめてから、

「DVDです。プレイヤーで再生して見て頂きたいのですが、そういえば神山さんの家にはありませんよね。マオさん、レコーダー欲しがっていましたが、今度購入されてはいかがですか？」

言っていることの内容があまり理解できなかったが、ひとつだけよくわかったことがある。

「これ以上、うちに変な機械を増やせと」

「真っ当な機械です」

思わず渋い顔になってそう言うと、真顔で訂正された。使い方がわからないものは、全部変な機械、だ。

「神山さんが使えなくても、マオさんが使えるでしょうから大丈夫ですよ。休みの日でしたら、買いに行くのも付き合いますよ」

「それは大変ありがたい申し出だがな」

「なにがご不満ですか？」

「すべてだよ」

などと不毛なやりとりを繰り返している間にも、無事検査は終わったらしい。マオが安心した顔でやってきた。

「おつかれ」

片手をあげる。

「おつかれさまです。この前の、オカルトクエストの録画、DVDに焼いて神山さんに渡しておきましたので」

「え、本当!？」

ぱあっとマオの顔が明るくなった。

「あー、でもうちじゃ見られないのかー。隆二ー、プレイヤー買って帰ろう？」

「お前は……。さらっと変な機械を俺の家に増やそうとするんじゃない」

「変じゃないよー、普通の機械だよー」

軽く唇を尖らせたマオが、エミリと同じようなことを言う。

「買い方わかんないし。知らないけど、色々あるんだろ、そういうの」

「うーん。さすがにあたしも、家電については調べてないんだよなあ。……。あ、エミリさんは？」

「わたしは、このあとちょっと用事がありますので」

「……そっか」

「今度、一緒に買いに行きましょう」

「うん、それじゃあ、約束！」

はしゃいだ声で勝手に約束をする二人に、呆れてしまう。だから、誰の家に置くと思っているんだよ、それ。

二人の間で勝手に話はまとまったらしく、メールしますね、なんて言っている。まあ、この二人が仲良くしているのを見るのは、割と楽しいからいいのだが。

「帰るぞー」

呆れ半分で声をかけると、

「え、まって」

慌ててマオがこっちにきた。

「じゃあね、エミリさん」

「はい、また」

「どーも」

挨拶を交わして、研究所を後にする。

「ねー、りゅーじ！ 電気屋さん行こう！」

「はあ？」

「下見、下見！」

「やだよ」

なんでそんな変な機械ばかり売っているところに行かなきゃなんないんだ。

「普通の機械だからね！」

心を読んだかのようにマオが言った。

「はいはい」

「もー」

あっきたーとマオが呟いた。誰にでも、向き不向きがあるのだ、仕方あるまい。

「……ねー」

呆れたような顔をしていたマオだが、急に何かに気づいたかのように、隆二の顔を見た。伺うように。恐る恐る。

「何を企んでる？」

そういう顔は、過去何度も見てきた。

「た、企んでなんかないよ！」

どうだか。どうせまた、意味のわからないおねだりでもするつもりなんだろう。

「ちがくて！ あたしばかり欲しいもの言ってるけど、隆二は欲しいものとかないのかなって思ったの！」

なんだか怒った調子で言われる。

「欲しいもの？」

考えたこともなかった。

元々性根が怠惰なのだ。物欲だって錆び付いている。何かを欲するということが、あまりない。

「……ないなあ」

コーヒーが飲めて、のんびり本が読めれば、それで満足だった。

「なんかないの！？」

強い口調で言われる。何を怒っているんだか。

「ないよ」

「……ああ、そうっ！」

ふいっとマオがそっぽを向いた。おおかた、こちらが欲しいものを聞き出して、それにあわせて強引に自分の欲しいものでもねじ込んでくるつもりだったのだろう。

苦笑する。

「別に俺欲しいものないし、マオが欲しいものがあるんだったら、まあ、相談ぐらいにはのるよ」

変な機械が家にくることはいやだが、だからといって過度にマオに我慢を強いるつもりもない。マオに渡している金額分で足りなければ、ちっともない貯金を多少渡してもいいし。多少なら。

そうやって譲歩したにもかかわらず、

「別にっ」

マオの機嫌はなおらなかった。変なやつ。いつものことだけど。

片手をあげて軽くマオの頭を叩く。ぽんぽんっと。既に一種の流れのようになっている。臍を曲げたマオの頭を撫でること。

マオへの字に曲げられた口元が、ほんの少しだけ緩んだのを視界の端で確認すると、

「電気屋、ちょっとだけだぞ」

言って、彼女の片手を掴んだ。

「……はい」

不機嫌を装った返事は明るい。現金なやつ。小さく笑った。

「俺、買い物行くけどどうするー？」

隆二が声をかけてくる。それに、きた！ と思った。のは、なるべく見せないように頑張って

「待ってるー！」

テレビ画面を睨んだまま答えた。

隆二が呆れたように笑ったのがわかった。

「ちゃんと留守番してろよー」

「……はい」

ちょっと後ろめたくて、一瞬言葉が遅れた。ばれたかな、と思ったけれども、隆二は別段気に留めなかったらしい。

「じゃあ、いってくる」

靴をはいて、ドアが開く音。

「行ってらっしゃーい」

テレビを見たまま、告げる。

がちゃり、とドアがしまった。

しばらくそのままテレビを睨み続けて、

「よしっ」

もういいだろう、と思ったところで立ち上がる。

テレビの中では、四苦八苦久美子が戦っている。正直、すごくいい場面だけれども、今日ばかりはしかたない。

未練を断ち切るように電源を切ると、ベッドの上に置きっぱなしにした鞆を手取る。

鞆の奥の方で、眠っていた鍵をひっぱり出す。念のため、と渡されていたが、これまで使う機会のなかった合鍵。目の前に掲げて、ふふっと笑う。

今日という今日は、探し出すんだ。隆二へのプレゼント。

浮かれて口元がにやけてしまう。

メモ帳に隆二に対するメッセージを残す。

勝手にでかけたらきっと怒られちゃうだろうな。でも、これでも実体化してだいぶたったのだ。そろそろ一人ででかけたって平気だ。大丈夫。

「ごめんね、りゅーじ」

テーブルに置いたメモに向かって両手をあわせて謝る。それから、やっぱり、にへらっと笑って家を出た。

一人で町中を歩くのは初めてだ。だけど、幽霊のころからずっとうろろうろしていた町だから、どこになにがあるのかは熟知している。多分、隆二以上に。

「なにがいいかなー」

歌うように呟いて、辺りに視線をさまよわせる。

さりげなく隆二に欲しいものがないか探りをいれたところ、あっさりもない、と言われてしまった。

まったく、隆二は本当、ひとでなしなんだから。

思い出したら、ちょっとむかむかしてきた。小さく唇を尖らせる。

一緒にでかけるたびに、さりげなく様子をうかがったものの、やっぱり隆二が欲しいものはわからなかった。

そうこうしているうちに、今月の実体化期間も明日までになってしまった。

これじゃあいけない、と今日こそは何がなんでもでかけることに決めたのだ。昨日見ていたドラマで、「贈物は選んでくれたという事実が嬉しいものよ」とか言っていたし。ドラマの人と違って、そういう事実喜んでくれるような素直さが隆二にあるとも思えないけど。

駅前に向かう。あの辺りが一番、お店がある。

さて何にしよう。洋服？ いつも同じようなのを着ているから、ちょっと違うものをプレゼントとか？ 靴もいいかもしれない。こっそりサイズをチェックしていたのだ。あとはなんだろう？ 本？ でもたくさん持ってるしな。機械式のものは論外。うーん、何かぴぴっとくるものあるかなー。

駅前まで来ると、辺りを見回す。

さて、どこのお店から見ようか。あんまり遅くなると、すっごく怒られそうだからな。そんなことを考えながら辺りを見ていると、

「おじょーさん」

軽薄な声が横からかけられた。

そちらを見ると、若い男が二人。

「一人？ 今ひま？」

「すっごく忙しいの」

そうだ、誰だか知らないけど、

「ねえ、隆二に何あげたらいいと思う？」

訊いてみよう。

「は？」

「プレゼント。もらうんだったら、なにがいい？」

男の人が欲しいもの訊いたら、何かヒントになるかもしれない。

「カレシに？」

「ちがうよー」

「ああ、好きな人？」

「……まあ」

好きな人では、あるよなあ？

「私をプレゼント！ とかやればいいじゃん」

「おまえ、やめろよー」

「なんだよ」

二人でなんだか楽しそうに笑う。答えてくれる気がないなら、もういい。

「自分で探す」

くると背を向けて歩き出そうとしたところを、

「まあまあ、待ちなよ」

右手を掴んで引き止められた。

ぞわっと一気に鳥肌がたった。

右手に感じる熱が不愉快だ、とても。

「離してっ」

咄嗟に振り払おうとするが、相手の力が強くて振りほどけない。

「プレゼント？ 一緒に探してあげるって」

「とりあえずお茶でも行こうよ」

腕をひっぱられる。

「痛いつ」

引っ張られる方に、軽くよろめく。

なんだか凄く不愉快で、ちょっと怖くて泣きそうになる。

隆二もたまたま強引に手をひっぱることがあるけれども、こんな風に痛いと思ったことはない。ああ、手加減してくれていたのか、と今更ながらに気づいた。あの唐変木なひとでなしの優しさに。だってそうだ、隆二はひとじゃないのに。それなのにマオが嫌がったら振りほどけるぐらいの力でしか、手を握って来なかった。彼が本気を出したら、マオの腕なんて簡単にへし折れる。それでも隆二に手を握られることを、怖いと思ったことなんて一度もなかった。嫌だったこともない。

今、このなんでもない人間に手を握られることが、こんなに不愉快なのに。

「離してっ！」

一度息を吸い込んでから大声をだす。

やっぱり隆二じゃなくちゃだめなんだ。わかっていたことだけど。例え実体化して、他の人に見えるようになっても、隆二じゃなくちゃ駄目だ。

マオの大声に、二人は少し驚いたような顔をした。

「あかし、行かなくっちゃ」

はやくプレゼントを買って帰らなくっちゃいけない。邪魔しないで欲しい。

きっと二人を睨みつけると、男達は一瞬たじろいのような顔をした。それでも手は離さない。お互い、どうにも引っ込みがつかなくなり、睨み合っているところを、

「ちょっと」

やる気のない声が横からかかった。

「嫌がってんじゃん、離してあげなよ」

声の方を見る。

黒髪をなんとなく伸ばした、スレンダーな女性がそこにいた。

「……きょーすけさん？」

あまりに似ている姿に一瞬眩く。明らかに性別からして違うのだけれども。

マオの眩きに、女性が小さく目を見開いた。

男達は女性とマオとを見比べてから、

「ちょっと声かけただけじゃん」

ぶつぶつ言いながら、マオの手を離すと足早に去って行った。

なんだったんだろう、あの人達。

その後ろ姿を見送っていると、

「大丈夫？」

女性が声をかけてきて、慌てて頷く。

「ナンパのかわし方、もうちょい覚えた方がいいよ」

やる気なさそうな言葉に、

「え？」

素っ頓狂な声をあげる。

「……あれがナンパなんだ？」

ドラマではよく見るが、ああいうものなんだ？

マオの返答に、

「気づいてなかったの？」

女性は楽しそうに笑う。それから、

「ね、それ」

マオの首元を指差す。

「そのペンダント」

「あ、これ？ もらったの」

かわいいでしょう？ と笑ってみせる。

「なんかさ、やる気のなさそうな男の人にもらった？」

「うん」

「私、誰か知り合いに似てるんでしょう？ それも男」

「うん」

なんでこんなこと訊くんだろう？

「やっぱりね」

何に納得したのか、女性は満足そうに頷くと、

「それ作ったの、私」

「え？」

女性とペンダントを交互に見比べる。

「これ、おねーさんが作ったの？」

「そうそう」

「へー！ かわいいからお気に入りなの！ ありがとう」

「どういたしまして。そこまで喜んでもらえるなら嬉しい」

それからちょっと悪戯っぽく、彼女は笑った。

「じゃあ、貴方があの人のカノジョなんだ？」

その言葉に、慌てて首を横にふった。そんなこと隆二が聞いたら怒るに決まっている。隆二にとってカノジョは茜だけだ。

「そんなんじゃないよ。あたしはただの居候」

隆二に訊いたって、そう答えるだろう。あれはうちの居候猫、って。

もう一年以上も一緒にいるのに、居候でしかない。

「……あたしは、いつまで居候なのかな」

小さく呟いた。

「ただいま」

スーパーの袋を片手に帰って来た隆二は、言いながらドアをあけた。

「……マオ？」

いつもならとんでくる居候猫の姿がない。部屋も暗い。テレビもついていない。

「マオっ」

急に不安になって、靴を脱ぐのももどかしく、片足は脱がないまま部屋に上がった。

いつものソファに居候猫の姿はない。

「マオっ」

もう一度名前を呼んだところで、テーブルの上のメモに気づいた。慌ててそれに目を通す。

マオのあの、へたくそな字で、「おかいものってきます。ごはんにはかえってきます。ごめんなさい」なんて書いてあった。

「出かけるなつただろうが、あのバカっ」

舌打ちすると、ポケットからケータイをとりだす。慣れない手つきでマオの番号を呼び出すと、電話をかけた。

ぷるると呼び出し音はするが、マオは出ない。いらいらと指でテーブルを何度も叩く。

落ち着け。何かがあったから出ないとは限らない。マオのことだ、約束を破ったことはわかっていて、怒られるのが嫌で電話を無視しているだけかもしれない。

留守番電話サービスに接続される。

「怒ってないからこれ聞いたらすぐに電話しろ」

吐きすてるようにそう言ってから、どう考えてもこの言い方は怒っているな、と考えを改めた。

「かけ直さないともっと怒るぞ、このバカ」

早口で続けた。

そのまま電話を切る。

まったく、あのバカは。

舌打ちを一つすると、いつでも出られるようにケータイをまたポケットにしまう。

探しに行って入れ違いになるのも嫌だし、ご飯までに帰ると言っているのならば、ぼちぼち戻ってくるころだろう。出かけたから即、何があるわけでもない。落ち着け。

自分に言い聞かせると、一つ深呼吸。

とりあえず、少しだけ待ってみよう。

そう決めると、履いたままだった靴を脱ぎ、買ったものを冷蔵庫にしまいはじめた。

「うげっ」

留守電に残された隆二のメッセージを聞いて、マオは小さく悲鳴のような声をあげた。

「ん？」

向かいの女が首を傾げる。

「……なんでもなあーい」

聞かなかったことにしよう。そう決めると、ケータイをテーブルの上に置いた。

あの後、ナンパから助けてくれた女と少し会話し、なんだか意気投合した。

柚香と名乗ったその女性は、自分で作ったアクセサリーを売って生計をたてているらしい。マオが隆二へのプレゼントを探している話を聞くと、アクセサリーを見立ててくれると言い出した。

アクセサリーなんて隆二絶対買わないし、いいかもしれない！ この人、隆二に合ったことがあるらしいし、このペンダントを作った人のアクセサリーなら申し分ないし！

渡りに舟な申し出にマオも乗っかり、柚香の作品を見るために近くのファーストフードに入ったところだ。

あとちょっとで終わるのだ。途中で連れ戻されたり、隆二に來られたりしたら意味がない。こ

れが終わるまでは、留守電を聞かなかったことにしておこう。用事が終わったら、ちゃんと電話するから。自分にそう言い訳する。

「ならいいけど？」

言いながら柚香は、片手に持っていた大きめの紙袋から、いくつかのアクセサリーをテーブルに並べていく。

「まあ、あの人アクセサリーとか頓着なさそうだったけど」

「隆二が興味あるのは本とコーヒーだけだよ」

小さく唇を尖らせながらマオが言うと、そんな感じっぽいね、と柚香も笑った。

「だから、シンプルな方がいいよね」

メンズはこれぐらいかなー、と並べられたアクセサリーを見ていく。

うーん、そもそも何かを身につけている隆二が思い浮かばない。

「ピアスは？」

「あいてないよ」

「じゃあ、この辺は論外」

ピアスが幾つか袋に戻される。

「ペンダント系か、ブレスレット系か」

「んー」

それらを眺めながら、まだちょっと痛い右手を擦る。そうしながら、隆二と言えば、手だな、と思った。

最初にした約束も、そういえばそのうちに頭を撫でてくれる、というものだった。

いつも頭を撫でてくれる手。最初の時、逃げようと繋いだ手。最近は、普通に繋いでくれる手

。

「……ブレスレットだなあ」

小さく呟くと、

「そう？」

とペンダント系統が袋にしまわれる。

いくつか残ったブレスレットを眺めて、

「……これ、いいかなあ」

つかみあげたのは、シンプルな革のブレスレットだった。茶色い一枚の革が編み込まれている

。

「ああ、いいんじゃない？ シンプルだし」

「……うん、これにする。これください」

「はい、毎度」

柚香が笑って受け取ると、袋にいれてくれる。値札に書かれた金額を手渡し、商品を受け取った。

「ありがとう」

「いいえ。喜んでくれるといいけど」

「んー、隆二が喜んだりするところ、想像できないけど」

それよりも先に怒られそうだし。

「それでもきっと、嫌がらないでつけてくれると思うから」

「じゃあ、また、どこかで見かけるの楽しみにしてる」

「うん」

大きく頷いた。

遅い。

時計を見て、隆二は一つ舌打ちをした。

ご飯までに帰ってくるって言ったのに、帰ってくる気配がない。あれから三回追加で電話をかけたがちっともでないし。

苛立ちは段々不安に変わっていく。もう一度電話をかけて出なかったら、探しに行こう。

そう決めて、電話をかけると、意外にも今度はかけはじめて直ぐに電話に出る音がした。

「マオっ」

怒鳴りつけるように名前を呼ぶと、

「あー、もしもし？」

返ってきたのは、マオの声じゃなかった。

「……誰だ」

低い声で誰何。

「あー、あのおに一さん？ この前ペンダント買ってくれた。私私、アクセサリー売りの」

言われてみれば、そのやる気のなさそうな声には聞き覚えがあった。京介似のアクセサリー売りの女。

それがなんで、マオの電話に？

「ええっと、話せば長くなるんだけど、マオちゃん？ とは道であって。私のペンダントつけてくれてるから話してて。ちょっと一緒にお茶してて」

「……ああ」

その言葉に、ちょっとだけ安堵する。おしゃべりに夢中になって、電話に気がつかなかったのか。ありそうなことだ。

「……あの、マオは？」

「それなんだけど」

女はなんだか言いにくそうにした。それに収まっていた不安がまた暴れ出す。

「追加の飲み物をね、買いに行ってくれたの。……それから三十分ぐらい経つんだけど戻って来なくて。レジ一階だから見に行ったんだけどいなくて。ケータイはテーブルにおきっぱなしだし。そしたら、おに一さんからの電話があったから」

言われた言葉に、目眩がする。

いなくなった？

「今、どこに？」

あげられたのは駅前のファーストフードの名前だった。そこならマオと二人で行ったことがあるから知っている。

一階にレジがあって、二階が客席になっていた。駅前だからかいつも混んでいるが、そんな三十分も戻って来られないような混雑ではないし、ましてや行方をくらますスペースがあるわけではない。

「あんのバカっ」

舌打ち。

何があったというのだ。どうしてこうなるんだ。

もっと早く探しに行けばよかった。

「今から行くんで待っていてください」

一方的にそう言い切ると、電話の向こうの女の返事も待たずに通話を終えた。

ひっかけるように靴を履くと、駅前に向かって容赦ないスピードで走り出した。

第六幕 The cat is in the cream pot.

件のファーストフード店につくと、京介似のあの女性が、困ったような顔をして座っていた。

「マオはっ？」

挨拶や礼儀なんて抜きに、斬りつけるように尋ねると、軽く首を横に振られた。

「一階に飲み物を買いに？」

「そう。奢ってくれるっていうからお言葉に甘えちゃって。……なんかごめんなさい」

「いや」

別にこの女性が悪いわけではない。

というか、何があったのか今の段階ではわからない。ろくでもないことになっているのは、わかるけれども。

飲み物を買いに行って姿を消した。鞆は持っていったようだが、ケータイがここにあるんじゃないの意味もない。

「……俺、探すんで。万が一見つかったら、今から言う番号に電話して欲しい」

覚えている自分の電話番号を告げると、慌てたように女がメモをした。機械音痴でも、数字を覚えることは苦ではない。

「それじゃあ」

と、マオのケータイをもって立ち去ろうとするところを、

「待って」

慌てたように呼び止められた。

「これ」

渡されたのは、いつだったかペンダントを買った時のと同じような袋。

「貴方にとって、マオちゃんが」

「マオが？」

予想外の言葉に、怪訝な顔になる。

それから、そっと袋を開けてみた。出て来たのはシンプルな革のブレスレットだった。

「今日は、それを買いに出て来たみたいよ。いつもお世話になってるからって、嬉しそうに言ってたけど？」

付け足された言葉に、なんとも言えない気分になる。

そんなことのために、わざわざ一人で出かけたのか。お世話になっているお礼？ そんなこと、考えたりしなくてよかったのに。

ブレスレットをもう一度袋に戻す。

これはちゃんと、マオの手から渡してもらおう。じゃないと、素直に喜べない。喜びたいと、嬉しいと思っているのだから、俺は。

「……ありがとう」

女になんとかそれだけいうと、足早に店を後にした。

そうでもしないと、何故だか知らないが泣きそうだった。

駅のファッションビル、その女子トイレにマオはかけこんだ。変な顔をする周りの人は気にせず、洗面台に手をつき、あがった呼吸を整える。走り過ぎて喉が痛い。

顔をあげると、鏡の中の自分は泣きそうな顔をしていた。髪の毛も乱れている。

一体、なんだっていうの。

柚香と話していて、ブレスレットが買えたのが、あまりにも嬉しかったからお礼に飲み物をご馳走することにした。一階のレジに並んでいたら、後ろから肩を掴まれた。そのままぐいっと、力任せの後ろに引っ張られる。

「いたっ」

振り返ると、見たこともない中年の男性がいて、マオを見ると驚いたような顔をした。それから次に、泣きそうな顔になり、

「ようやく見つけたっ、花音！」

大きな声でそう言った。

花音？ 誰それ。

「ちが、あたしはっ、マオで」

言いかけた言葉は無視され、右手を掴まれる。そのまま、男は黙ってマオの腕を掴んで店を出て行く。

「ちょっと、おじさんっ！ 離してよっ」

「花音」

男は呆れたような顔で振り返ると、

「お父さんに向かって、おじさんとはなんだ。いい加減、機嫌を直せ」

なんてわけのわからないことを言う。

「マオだってばっ！」

周りの客達は様子をうかがうようにマオ達を見ていたが、男が父親だと言ったことで、年頃の娘のプチ家出とでも思ったのか、視線を逸らした。

男はまた前を向くと、ぐいぐい歩いて行く。ファーストフード店が遠くなる。

一体誰と勘違いしているのか。

「おじさんっ！ ちょっと、あたしはマオで！ 花音なんて名前じゃないし！ おじさんのことなんて知らないし！ っていうか、父親なんていないしっ！」

ぎゃんぎゃん叫んでも、男は無視をする。

路上に停められた黒い車。男はポケットから鍵を出しながら、それに近づく。男の持ち物らしい。

これは本格的にヤバいかもしれない。

どきどきと心拍数がはやくなる。

なんでもいいから逃げなくっちゃ。

男が助手席のドアをあげ、

「乗りなさい」

突き飛ばすようにマオを押し込む。

「いっ」

悲鳴をあげたマオを気にせず、男はドアを閉める。そして自分は車の前をまわって、運転席側にまわった。

逃げるなら、今だ。

落ち着け落ち着け。ドラマの主人公みたいに、最高の瞬間を狙わなくっちゃ。

男が運転席のドアに手をかける。がちゃり、とドアがあき、それと同時にマオもドアをあけた。転げ落ちるようにして車から飛び出すと、後ろをみないで走り出す。

「花音っ！」

後ろから男の声がする。

逃げなくっちゃ。どこか安全なところ。

ぱっと目に入ったのが、駅ビルだった。息を切らしながら駆け込み、男が入れない女子トイレにまで逃げ込んだ。

それが今だ。

一体、なんだっていうのよ。

思い返したら、怖くて体が震える。

大きく息を吸って、呼吸と気持ちを整えた。

それにしても、どうしよう。いつまでもここにはいられない。あの様子だとすぐには諦めなさそうだし、また出会ったら嫌だし。怒られるかもしれないけれど、隆二に迎えに来てもらおう。

そう決めると、ずっと肩からかけたままだった小さなポシェットをあける。そこからケータイを取り出そうとして、

「あれ？」

そこにケータイはなかった。そういえば、ファーストフード店のテーブルに置きっぱなしかもしれない。

「……もうっ」

隆二に連絡が取れないなんて、どうしたらいいんだろう。

鏡の中、泣きそうな自分と見つめ合う。考えなくっちゃ。

家に帰ればあとは心配いらない。だけど、あの男がまだうろうろしていたら、ちゃんと帰れるだろうか。そんなに距離はないけれども。

隆二は多分、あんまりにもマオが帰ってこかなかったら探しに来てくれるはずだ。ぶつぶつ怒りながらも。いつも、そうだから。

だから、うまくどこかで隆二と会えるのが一番いい。連絡とれない以上、運任せになるけど。

隆二がいそうなところを通過して、家まで帰る？ 普段、お買い物で通る道を通して。

マオが考えついたのは、そこまでだった。

自分でも行き当たりばったりだなあ、と思う。

溜息。

でもまあ、もしかしたら、あのおじさんの本当の娘を見つけて帰ったかもしれないし。楽観的な考え方は、ここでもむくむくと持ち上がる。そう考えたら、なんだか帰れる気がしてきた。

手を洗って、髪の毛を整える。

ひょいっと女子トイレの外を伺うが、あの男の姿はない。

よしじゃあ、なるべく目立たないようにして、何かあったら悲鳴があげられるように人通りの多いところ通って、ついでに隆二がいそうなところ通って帰ろう。

そう決めると、そろそろと女子トイレから脱出した。

しかし、探すと言っても全く当てがない。

そのことに舌打ちしながら、隆二はいつも通る道を中心にマオを探しはじめた。

途中でエミリに電話を入れたが、取り込み中なのか出なかった。折り返し連絡くれるように、留守電を残しておいたが。

一人で探すには、限度がある。だからといって、何もしないわけにはいかない。

辺りはすっかり暗くなってしまった。ケータイで時間を確認する。もう二十二時か。

いつかマオはいなくなる。

それは、覚悟を決めつつあることだった。

それでも、今すぐではないと思っていた。遠い未来のことだと思っていた。

でも、今すぐではない、と思っていたのは、結局目をそらしていたということなのだ。と、気づいたときには遅かった。

いつもそうだ。いつも気づかない。いつも最善を見逃す。

茜のことも、京介のことも、この間のGナンバーのことも。いつもそうだ。

だからって、今諦めるわけにはいかない。

マオに一人での外出を禁じた、本当の理由を言わなかったのは自分だ。言っておけば、マオだってこっそり出かけたりしなかったかもしれない。言わなかったのは自分の過失だ。だからこんなことになった。だから、結果の発生は阻止しなければ。

まだ、覚悟はできていない。

だから、まだ、一人にはなれない。

だから、一緒に帰ろう。

ぜえぜえと、自分の呼吸が乱れているのがわかる。それでも足を止めることはできない。

ビルとビルの中の細い隙間。そこに目をつけると、マオはするりと身を滑り込ませた。ぎりぎりなんとか入り込めた。胸がないとか悩んだりもしたけれども、今は感謝だ。

横歩きで奥に進み、ビルの影にしゃがみこむ。

男が走って行くのが見えた。

ふーっと一息つく。

駅ビルから出た後、途中までは順調に帰っていたのに、安心しきったところであの男はまた現れた。

「花音！」

なんて叫びながら追いかけてくる。

本当、いい加減にして欲しい。きっと、なんか変な人なのだ。

今、何時ぐらいだろう。辺りはすっかり暗い。あちらこちらのお店のシャッターも閉まっている。

隆二、心配しているだろうな。

胸元に手を伸ばし、ペンダントに触れる。

そうすると、少しだけ安心できた。

明日の午前九時には実体化がとける。

それならばいっそ、ここに隠れて実体化がとけるまで待ってしようか。幽霊に戻ってしまえば、あの男に追いかけて回されることもないだろう。明日の午前九時まで、何時間あるんだか知らないけれども。

ゆっくり奥に進むと、少し広いスペースがあった。ビルとビルに囲まれた場所。

そこまで行こうと、横歩きを続けていると、

「いったっ」

置いてあった木の板、その破片で右腕を引っ掻いた。

「ああもう」

血が出て来た。痛い。

痛いには慣れていない。ずっと感じたことがない感情だったから。幽霊のときは、痛いとか熱いとか寒いとかそんなこと、関係なかった。痛いのは、実体化しているときだけだ。

そこまで考えて、嫌なことを思いついた。

「あたし、酷い怪我したら、どうなっちゃうんだろう」

今の今まで考えたことがなかった。人間と同じように、身の危険が生じるんだろうか。ああ、だから、だから隆二はあんなにも気を使ってくれていたのか。全然気がつかなかった。だから、一人で出かけるなどと言っていたのか。こんなことになるから。

視界がぼやける。

ビルの影に座り込む。膝を抱える。

実体化がとけるまでここにしよう。あとどれぐらいの時間があるのかわからないし、それまで隆二に心配をかけることになってしまうけれども、へたに動き回ってあの男に見つかるよりもずっといい。

一人にしないと誓った。約束した。

だから、帰らなくちゃ。なんとしてでも、彼のところに。

一人じゃないから大丈夫だと、約束したのは自分なのだから。だから、帰らなくっちゃ。絶対に。

隆二は、一度試しに家に戻って来た。入れ違いになっている可能性も考慮して。けれども、やはりそこにマオの姿はなかった。

舌打ちすると、マオのケータイをテーブルの上に置く。戻って来たら連絡しろ、のメッセージをつけて。

それから、ブレスレットの袋も隣に置いた。マオから直接渡されるまで、これは自分のものじゃない。

時計を見る。夜中の三時だ。

ここまで本当に姿が見えないなんて、本当になにかあったんじゃないか。もう、戻って来ないんじゃないか。

考えると、心臓がぞっと凍える。

と、ポケットにいれたケータイが震えた。

慌てて取り出す。着信表示は、進藤エミリだった。

「もしもし。夜分にすみません。今、留守電聞きました。今日は珍しく、ずっと外だったので」
眠気を噛み殺したような声。

「どうしました？」

「マオが帰って来ないんだ」

告げると、電話の向こうの空気が変わった。

「いつから？」

返ってきた声は、張りつめていた。

「夕方から」

言いながら、ここまでの出来事を説明する。

「……わかりました」

返事をしたエミリには、もう眠気は感じられなかった。

「わたしもすぐにそちらに……」

「いや、それは大丈夫」

エミリがここに来るまでには、また時間がかかってしまう。研究所とは距離が離れているし、もう電車もない時間だ。それにあんな赤服に夜間出歩かれたら、また別のトラブルを引き起こしてしまうだろう。

それよりも、

「調べて欲しいことがある」

「はい」

それを告げるには、勇気が必要だった。一拍おいてから、早口で。

「夕方から今まで、うちの辺りで起きた事件事故、調べてくれないか」

電話の向こうで、エミリが息を呑んだのがわかった。

「神山、さん。それは……」

「そうじゃなければいいと思ってる。だけど」

なんらかの事件事故に巻き込まれたんじゃないか。そして怪我なりなんなりして病院に搬送されて、連絡先がわからず隆二のところに連絡が来ない。その可能性だって十分考えられる。

「可能性を否定して、見逃すなんてことの方が、あってはならないだろ」

怪我をしているのならばはやく会いに言ってやりたいし、最悪なことがあるのだとしてもはやく傍に行きたい。このまま見逃してひとりぼっちにさせてしまうことが、一番あってはならないことだ。

絞り出すように発した言葉に、エミリは少し躊躇ってから、

「わかりました」

力強い声で返事した。

「なにかわかったらすぐに連絡します」

「すまない、夜遅くに」

「いつものことですよ」

「頼む」

「はい」

通話を終える。

何も無いのが一番いい。だけれども、何も無いままここまで連絡がないわけがないのだ。何かあったことは、否定できない。

もう一度マオを探すために部屋を出た。

覚悟はしている。けれど、希望は捨てない。次にこの部屋に入るときは、二人一緒に、だ。

第七幕 猫の手だって厭わない

いつの間にか、少しうとうとしてしまったらしい。

マオは慌てて顔をあげた。

辺りは明るくなりはじめている。

今、何時ぐらいだろうな。

抱えた膝にぎゅっと力をこめた。

隆二、心配しているかな、しているだろうな。イマイチ素直じゃないし、なんか冷たいし、ひとでなしかけど、隆二はいつだって心配してくれている。

最初は、隆二が初めて自分のことを認識してくれる人だから一緒にいた。

今は違う。隆二がそういう風に優しいこと知っていて、大好きだから一緒にいるのだ。

一晩も隆二から離れていたなんて、初めてだから、寂しい。心細い。

ペンダントをぎゅっと掴む。

もうちょっと、もうちょっと待てば実体化がとける。そうすれば、隆二のところに帰れる。

そう、思った時。

「花音」

声が上から降ってきた。

全身が冷水を浴びたように凍えた。

恐る恐る上を見る。

マオがもたれかかっているビルの屋上に、あの男がいた。

「やっと見つけた。すぐに行く。待っていなさい」

そんな声が降ってくる。

冗談じゃない。

慌てて立ち上がると、ビルの間隙に体をつっこむ。

「花音」

呆れたような声がする。

「花音じゃないっ、しつこいし！」

また何カ所か擦り傷を作ったけれども、気にしない。もうそんな細かいことはどうでもいい。

あとちょっとなのに、なんなのっ。

通りにでると、走り出す。なるべく家に近づくように。隆二の家に向かって走り出した。

すっかり朝になって、通りは通勤通学の人々であふれはじめた。

隆二は走りにくくなった通りに舌打ちする。

エミリから一度連絡があったが、特にマオがかかわっていそうな事件事故はないらしい。それにひとまず胸を撫で下ろしたものの、だったら何故ここまで見つからないのかが不安になるところだ。

人の間をすり抜けて、勢いよく走りながら、角を曲がったところで、

「わ」

「きゃっ」

反対側から来た人影にぶつかりそうになった。慌てて立ち止まる。

「うわっ、びっくりした」

角でぶつかりそうになったのは、例のコンビニのオカルトマニアな店員、菊だった。

「あ、お久しぶりですー、お元気でしたか？ どうしたんですか血相をかえて、またヴァンパイア」

「こいつ、知らないかっ!？」

なんだか無駄な話をはじめそうな菊を遮って、二つ折りのケータイを開く。待ち受けに設定された、マオの写真。それがまさかこんなところで、役に立つとは。

「わ、かわいー。どなたです？ 恋人さん？」

「いいからっ」

「……んー、見たことないですね」

「そうか、ありがとう」

ケータイを奪い返すと、再び走り出そうとした隆二に、

「あの」

菊が躊躇いがちに声をかける。

「また人探しですか？ 手伝いましょうか？」

「頼む」

迷わなかった。その手を掴むことに。

「じゃあ、連絡先と、あとその写真いいですか？ 皆に回します」

「……ごめん、やって」

ケータイをそのまま渡す。写真いいですか？ ってどういうことだよ。

菊はきょとんとした顔をしてから、少し微笑むと、

「わかりました」

うけとったそれを操作する。ああ、やっぱり若い子ってすごーな。

「できました」

しばらくしてから、菊が隆二にケータイを返す。

「写真をまわして友達に見なかったか聞いてみます。なにかあったら、電話しますね」

「頼んだ」

いつだったか、エミリを探し出してくれた彼女の情報網ならば、見つかるかもしれない。ならばそれにすぎることには躊躇わない。

手段は選ばない。差し出された手は拒まない。プライドや見栄なんてどうだっていい。自分だって成長するのだ。びびるものだけ。

菊に軽く頭をさげると、また走り出した。

マオは先ほどとは違う路地裏の、駐車場の影隠れた。

乱れた呼吸を整える。

あと、ちょっと。

体内の感覚でわかる。あと少しで実体化がとける。そうすれば、遠慮なく飛んで帰ればいい。隆二の家へ。

それまで見つかりませんように。

祈るようにペンダントを握りしめる。

「かのーん」

男の音がする。思っていたよりも近くだ。

あと少し。あと少しだから。

ぎゅっと目をつぶる。

声。足音。

あっち行け。あっち行けあっち行け！

体から体温が消えていくのがわかる。実体化がとける前兆。

あとちょっとだ。

ここまで来たら、あとはもう待つだけだ。

少し視界が揺らぐ。

耐えるように一度目を閉じる。

ふわりと、体が浮くような感覚。浮遊感。

目を開ける。

目の前に手をかざすと、透けて地面が見えた。よかった、ようやく実体化がとけた。

今なら逃げ出せる。

そう思って動き出そうとしたとき、かしゃんっと何かの音がした。視線を落とすと、着ていた服と、ペンダントが転がっていた。

それに一瞬、足が止まる。

ペンダント。せっかく隆二がくれたペンダント。それをこの場所においておくことに、一瞬の躊躇いが生じた。

それが、間違っていた。

「見つけた」

すぐ後ろから声がして悲鳴をあげかけたときにはもう遅かった。

腕を掴まれる。

その白い手袋は、エミリがつけているものによく似ている。幽霊が触れるというあの手袋。

そんな風に思った次の瞬間には、銃を突きつけられ、撃たれた。

隆二はケータイを取り出し、時間を確認した。午前九時。マオの実体化がとける時間だ。

今頃どこにいるのか。変なところで実体化がとけて、面倒なことになっていなければいいが。

思ったところで、手の中のケータイが震えた。見知らぬ番号。慌てて出ると、

「もしもし。えっと、コンビニ店員の菊です」

「ああ。なにかわかったか？」

「カレシがこの写真に似た人を見たって。あと」

そこで菊は一度躊躇うように口ごもってから、

「……このペンダントに似ているのと、なんか服が落ちているって」

さすが、若者の情報網。

「場所は？」

ペンダントや服が落ちていること事態は、危惧することではない。実体化がとけたからだろう。つまり、実体化がとけるまでマオは近くにいたことになる。

近くにいたのに、なんで戻って来なかったのかはわからないが。

菊から場所を聞くと、そこに向かって走り出した。

件の場所に行ってみると、大学生ぐらいの青年がケータイ片手に立っていた。

「あの」

「あ、あなたが菊の知り合いの？」

そう問われた言葉に頷く。

こっちなんですけど、と案内された駐車場の影。そこにはペンダントと洋服、ポシェットが落ちていた。

「これ、そうですよね？」

指差されたペンダントをそっと拾い上げる。マオのものに間違いない。

辺りを見回すが、霊体に戻ったマオがいる様子はない。

大事にするねと笑っていたこれが、こんなところに無造作に落ちているわけないのに。

少し、期待していたのだ。町中で元に戻ってしまって、途方に暮れているんじゃないかって。だけれども、やっぱり、ここにも居ない。

ついさっきまでは、ここにいたはずなのに。一体どこに行ったというんだ。もしかしたらここで会えるんじゃないかと思っていた。その分、失望の念を禁じえない。

「男に追いかけているの見たんです」

ペンダントを握ったまま何も言わない隆二をみて、青年がそう話をはじめ。

「なんかヤバそうだなと思って、警察呼んだ方がいいか悩んで、一応あと追いかけてみて。見失ったと思ったらこれがあって」

地面に散らばった衣服。ああ、どうみても事件性大だ。

「これ、ヤバいですよね？ 警察にとどけますか？」

「……いや」

それになんとか、首を横にふった。

「わけありなんだ。それはできない」

「そうですか」

予想以上にすんなり頷かれた。

それが意外で、青年に視線を向けると、彼は苦笑した。

「菊の紹介してくる人なんて多かれ少なかれそうですよ」

どんな人付き合いしているんだ、あの小娘は。それに助けられた自分が言うべきことじゃないが。

「あ、あとこれ。その男がそのあと車に乗って立ち去るの見かけて」

言いながら、青年が自分のケータイを操作する。

「一人だったんですけど。念のためナンバー写真とって」

渡されたケータイには、確かに黒い車のナンバーがしっかり映っていた。それにしても、

「……なんでそんなことを」

用意周到過ぎるだろ。

「子どもの頃から探偵に憧れ続けるとこうなっちゃいます」

「ああ」

その言葉に苦笑する。なんとなくわかってしまって。マオみたいなものか。

渡された写真にうつるナンバーを覚えると、電話をかけた。

「見つかりましたか？」

電話の相手、エミリは出ると同時にそう言った。

「手がかりだけ。嬢ちゃん、車のナンバーから持ち主調べられるか？」

「わたしの権限外ですが……、父に頼めば、恐らく」

訊いといてなんだができるのか。相変わらず嫌な組織だ。それでも、頼るしかない。研究所の力に。

「頼む」

問題のナンバーと、軽く経緯を説明すると、

「わかりました。なるべく早めに連絡します」

言って通話が切れた。

地面に落ちているマオの衣服と鞆を拾い上げる。それらはぞんざいにまとめたが、ペンダントだけは無くさないように、そっと財布の中にしまった。ここが一番安全だろう。これはちゃんと、マオに渡さなくては。無くしたなんてことになったら、きっとあいつは怒るから。

「あの」

青年が躊躇いがちに声をかけてくる。

「助かった。ありがとう」

それに頭を下げた。

「あ、いえ。……あの？」

「このあとはこちらでどうにかするから大丈夫。万が一、またその車を見かけたら連絡ください。あのコンビニの子にもお礼を言っておいてください」

早口で告げる。

車の行方はエミリに任せるとして、隆二は隆二でマオを探すことをやめるわけにはいかない。立ち止まっているなんてできない。まだ、近くにいるかもしれないから。

じっとなんてしてられない。止まっていることは怖いから。

「本当にありがとう」

困惑の表情を浮かべる青年にもう一度そう言うと、足早にその場を後にした。

残された菊のカレシ、志田葉平は立ち去った隆二の背中を見て首を傾げた。

まったく、一体あの人はなんなのだろうか。ナンバー照会をどこかに依頼していたが。

怪訝に思っていると、ケータイがなった。菊から電話だ。

「もしもし？」

「葉平、無事に常連さんに会えた？」

「会えたよ」

とりあえず手がかりぐらいにはなったみたい、と続ける。

「っていうか、菊、あの人は何者？」

「バイト先のコンビニの常連さんで。んー、内緒って言われたんだけども葉平にだけは教えちゃう」

内緒って言われたなら内緒にしとけよ。

「内緒だよ、あのね、吸血鬼さんなの」

「……ああ、そう」

気が抜けた返事をかえす。

声をひそめて、さも重大なことのように言うから何かと思ったら、またそんな夢物語か。

なんで俺のカノジョはこんなに夢見がちなんだろう。未だに探偵なんていうものに、僅かな憧れを抱いている自分が言えた義理じゃないけど。

一つ、溜息をついた。

「ダディ、お願いがあるの」

隆二との通話を終わると、エミリは足早にリビングに向かった。まだ自宅にいた父親に声をかける。

「どうした？」

「車のナンバーから持ち主を調べて欲しいの」

言いながらナンバーをメモした紙を差し出す。和広の説明を求めるとエミリを見る。

「マオさんが行方不明で」

簡潔にここまでの出来事を説明すると、そうか、と和広は頷いた。

それからリビングのパソコンの前に移動する。

「やってくれるの？」

「研究所の方針に反しない範囲では、神山さんたちの味方をしようと決めているからね」

言いながら和広がパソコンを操作する。事後処理を担当している和広ならば、ナンバー照会のデータベースにログインすることもできる。

和広の操作を、固唾を飲んで見守っていると、

「……駄目だ」

和広が小さく呟いた。

パソコンの画面には、赤い字で「error:000」の文字が出ている。

「……エラー？」

エミリが呟くと、

「調べられない」

和広が淡々とそう答えた。

「なんでっ。そもそもなんでエラーなの?!」

「エラーナンバー000は、研究所内部の人間情報だ」

「……じゃあ、マオさんをおいかけまわしていたっていうのは、研究所の人間なのっ？」

そうか、でもそれならば、霊体に戻ったあとも姿が見えないことも説明がつく。研究所の人間ならば、見ることも触ることも出来る道具を持っているだろう。

「このエラー解除できないの？」

できないことはないはずだ。研究所内部の人間の情報だから一応保護しているが、内部の情報が必要になることだってあるはずなのだから。

「できないこともないが」

「だったら」

「でも、できない」

和広はエミリの目を見ると、しっかりとそう答えた。

「なんでっ」

父なら引き受けてくれると思っていたのに。

「研究所の規定や意思に反することはできない」

「マオさんが危ないかもしれないのに？」

「それとこれとは話が別だ」

そして、あろうことか和広は溜息をついた。呆れたように。

「わきまえなさい、恵美理。我々は、組織なのだから」

冷静に吐かれた言葉に、頭を殴られたような気がした。目の前が真っ暗になる。

今、この人はなんと言った？

絶対に、父ならば助けしてくれると思った。信じていた。だって、エミリが知っている和広は、いつだって隆二達の側に立って、彼らを守っていたから。今回だって、多少目をつぶって調べてくれると、何故だか信じていた。その彼が、こんな風に組織だから、なんて言うなんて。

「……恵美理、神山さん達に気を使うようになったのはいいが、勘違いしてはいけない。我々は研究所あつてのものなのだから」

研究所内部の人間がマオを連れ去ったかもしれないのに、研究所内部の人間だからわたしは真実にたどり着けない？

今頃きっと、隆二はエミリからの連絡を待っているのに。

ぐっと唇を噛むと、リビングを後にする。

「恵美理」

我が侏な子どもをなだめるような父親の声がする。

自分の部屋に戻ると、ベッドの下から手提げ金庫を取り出した。派遣執行官には一人一つ配給されているもの。本当はこんな風に使うものではないけれども、背に腹は代えられない。

それを握るとリビングに戻る。和広は同じようにパソコンの前に座っていたが、エミリが持っているのを見ると、小さく眉をあげた。

エミリはそれを、銃を、和広の頭に突きつけた。

「調べて」

和広はそれをちらりと見ると、

「そんなことをしても無駄だよ、恵美理」

子どものいたずらをたしなめるような口調で言われた。

温度差を感じる。父親と、自分との間に。こんなこと、初めてだ。

「お前に引き金を引けないことはわかっている。人間を撃ったことなど、ないだろう」

確かにそうだ。今までに人間を撃ったことはないし、ましてや父親だ。自他ともに認めるファザコンの自分に、そんなことができるわけがない。

ならば。

「これなら？」

銃口を自分のこめかみに押しあてた。

「……なんのつもりだい？」

ほんの少し和広の顔色が変わる。しめたものだ。

ためらうことなく引き金に指を引っかける。

「恵美理っ」

和広が父親の顔をして、椅子から腰を浮かせた。

それに少しだけ安心する。たった二人の家族だもの。その絆が研究所の規定なんていうものの前に負けていなくてよかった。ここで和広の顔色を変えなかったら。そんなこと考えるだけで、娘としてのエミリは辛いし悲しい。

「勘違いしないで」

そんな父親に、エミリは小さく笑ってみせる。

「自分の命を人質にとっているんじゃない。娘の命が人質にとられているのだから、しぶしぶ調べても仕方ない、という口実をダディに与えているの」

破天荒な娘を持って大変だ、と所内は元々和広に同情的だ。そこをつけば、上手く立ち回れる。そう判断した。

和広の研究所内での立場を危うくすることはないはずだ。

和広はしばらく、中腰のままエミリをみていたが、

「……わかった」

うんざりしたように溜息をつく、椅子に座り直した。

「……お前は本当、おばあちゃん似だな」

パソコンを操作しながら、和広が小さく呟いた言葉に、思わず少し笑った。

マオ探しを続けていた隆二は、ポケットのケータイが震えたことで足を止めた。

「わかりました」

電話の相手、エミリは前置き無しでそう言った。

「車の持ち主は、一条稔」

「……一条？」

偶然なんだろうが、嫌な名字だな。

「お知り合いですか？」

「いや、悪い、続けてくれ」

「一条は、研究所の事務担当の一人です」

「研究所か。そうか、それならマオが霊体に戻っても見えるし触れるな」

「はい。諸々のことから、一条がマオさんを攫った可能性が高いと考えられます。それで、その、諸々のこと、なのですが」

そこで珍しく、エミリが一瞬口ごもった。

「一条には、一人娘が居たんです。名前は花音。三年前、十五歳の時に亡くなっているんですが。……その外見が似ているんです、マオさんと」

「は？」

言われた意味がわからなくて問い返す。

「写真、あとでケータイに送ります。本当に似ているんです。髪や目の色が、マオさんとは違って漆黒なぐらいで、あとはまったく一緒です」

「……あいつら、マジな人霊を使ったってことか」

Gナンバーは人工的に作られた幽霊。その原理についてエミリが以前色々言っていたが、研究班が嘘をついている可能性もある、とも言っていた。やはり嘘をついていて、本当に亡くなったというその一条の娘の魂を使って、マオを作ったというのか。死して必ず幽霊になるわけでもない。成仏するはずだったその魂を、現世に縛り付けたとでも？

「わかりません。それが本当だったとして、一条が実験に絡んでいるのかもわかりません。だけど、一条、娘の幽霊を見たって最近言っていたらしいんです。テレビで！」

エミリの声が高く、大きくなった。

「テレビで？」

「父の、知人なんです。わたしがオカルトクエストのDVDを渡した！」

マオのあの、浮かれた心靈写真が採用されたテレビ番組。

「それって、あの心霊写真ですよ？ どうしよう、わたしが、送らなければっ。そしたら、一条がマオさんのことに気がつくこともなかったのに、わたしのせいでっ」

「落ち着け。嬢ちゃんのせいじゃない」

確かに、その写真を見て娘の幽霊の存在に気がついたのかもしれない。だからといって、エミリのせいなわけじゃない。

「だけどっ！ エクスカリバーもないんです、一つっ！」

上擦った声に、一瞬思考回路がとまった。

「……エクスカリバーが？」

「さっき電話かかってきて。わたしが持ち出したと思われたみたいでっ」

なんだそれ。マオが元々人間で？ マオの父親がマオを攫って？ そしてエクスカリバーを持っている？ どういう状況だよ、これ。

何も言えない隆二にかわって、電話の向こうのエミリは早口でまくしたてている。

「もうやだなんでっ！ 研究班が隠し事しているのはわかっていたけど、まさかここまでっ！ ダディもあんなだし、なんなのよっ！」

それは素の彼女の言葉だった。普段冷静な彼女の、取り乱した声を聞いていたら逆に冷静になれた。

「嬢ちゃん」

「はい？」

なんだか泣きそうな声に、

「頼む、助けてくれ」

頼み込む。一人じゃ動けない。一条がどこに行ったのかもわからないようじゃ。

エクスカリバーを持っているのならば、はやくしなければ。霊体に戻ったからといってマオが無事だとは限らない。

「でも、もうこれ以上は」

電話の向こうの声はなんだか、慌てたようだった。

「ダディもあんなだし、研究所として動きようが……。研究班としては一条のことは隠したい出来事でしょうし、この後はきっと隠蔽合戦になって、わたしも動きようが……。これ以上動いたら確実に睨まれて」

「頼むよ」

エミリのおろおろとした言葉を遮る。

エミリに頼ってはいけない。エミリは研究所の人間だ。命令に背けということを、エミリに願ってはいけない。それは踏み込んではいけない領域だ。そんなこと、わかっている。

わかっているけれども、頼むより他がないのだ。

「頼む、エミリ」

強い口調で、しっかりと告げた。彼女の名前を呼んで。

「……ずるいです」

一呼吸置いて、電話の向こうが絞り出すようにして言った。

「わかってる」

「なんで……、こんな時にはじめて、名前でご呼んでくださるなんて」

声が震えている。

「うん、ずるいんだ、俺」

使えるものならなんだって使う。それが結果発生を阻止してくれるのなら、躊躇わない。

例え、どんなに罵られても。非人道的でも構わない。マオを助けられるのなら。

「手伝って欲しい、エミリ」

駄目押しのようにもう一度。

電話の向こうではしばらく沈黙が続いていたが、

「……わかりました」

次に聞こえた声は、どこかふっきれたように聞こえた。

「わたし一人で、どこまでお役にたてるかわかりませんが、マオさんのためですから」

「ありがとう」

「だけど、一つだけ、いいですか？」

「なに？」

すうっと息を吸う音が聞こえる。なんだ？ と思っていると、

「このっ、ひとでなしっ！」

大声で一言、罵られた。

「っ」

慌ててケータイを耳から離す。不意の大音量に、耳が痛い。

「すっきりしました」

落ち着いた声が聞こえて、また耳にあてる。

「今の……」

「ずっと言いたかったんです。それじゃあ、車の行く先など、わかったらまた連絡します」

言ってぷつりと、ケータイが切れた。

ひとでなし？ 上等だ。

唇を皮肉っぽく歪める。

ひとじゃないんだ、ひとでなしだ。もう一人のひとでなしを連れて帰るためならば、そんな誹りいくらでも甘んじよう。

だからマオ、

「もうちょっと待ってろよ」

第八幕 迷い仔猫の素性

ゆっくりと、マオは目を覚ました。

顔をあげる。

知らない場所だった。

正面には十字架。二列に並べられた長椅子。天井のスタンドグラス。

テレビやなんかで見たことがある。ここは、

『……教会？』

ゆっくり体を起こす。動こうとしたが、右足が上手く動かなかった。何かに縛られているかのように。

視線をやると、黒い鎖のようなものが右足に絡み付いていた。今、幽霊なのに。

動かそうとするが、どうにもうまく動かない。

『なにこれっ』

「足枷の一種だよ」

声がして、慌ててそちらを向く。

「おはよう、花音。手荒な真似して悪いが、逃げないようにつけさせてもらったよ。それは花音が研究所から逃げ出したときに反省して、研究班が作ったものらしいよ」

あの男がそこに居た。

『誰、あなた？』

ただの変な人じゃない。そんなことはもうわかっている。霊体に戻ったのに逃げられなかった。捕まった。

『研究所の、人？』

「そうだよ、花音」

男が両手を広げて言う。

『花音じゃないっ』

「花音だよ。一条花音、わたしの娘」

男、一条稔が微笑む。

『……何を、言っているの？』

一条から距離をとろうと、少し後ろに下がる。少しでも、後ろに。

『娘？ あたしが？ あなたの？ ありえない。だって』

認めたくないけれども、こんなこと自分で言いたくないけれども。

『あたしは、実験体ナンバーG〇一六。人工的に作られた幽霊で、父親なんていない』

覚えている。発生して最初のこと。記憶にあるのは、あの嫌な液体で満たされた水槽。

『あたしは、ただのひとでなしだもの』

何を勘違いしているのか知らないが、わかったなら帰して欲しい。

「いいや、花音だよ」

『だからっ！』

「実験体ナンバーG〇一六の元になったのは、花音の魂だよ」

『……え？』

意味がわからなくて、抗議のために開いた口をそのまま、ぽかんっと間抜けにあける。

『たましい？』

「そうだよ、花音」

一条は手近な椅子に腰をおろした。

「やはり、忘れてしまったんだね」

そうして、少し悲しそうな顔をする。

「花音が亡くなったのは、交通事故だった」

そのまま、ゆっくりと話始めた。マオはただ黙ってそれを聞いていた。

「三年ほど、前だね。悲しむわたしの元に、研究班がやってきたんだ。新しい研究のために、花音の魂を献体として使わせてくれないか、と」

そこで一条は、じっとマオを見た。マオは視線から自分の体を守るかのように、両腕で肩を抱いた。

「最初は渋ったが、研究所内のしがらみと、それから花音にもう一度会えるかもしれない、という言葉にそそのかされたんだ」

『……研究班は、その人の魂を使ってあたしを作ったの？』

「その人、じゃない。花音自身のだ」

睨まれて口ごもる。

だけど本当は大声で言いたかった。花音なんて人、知らない。あたしは、マオだ。

「だけれども、研究班からそれからしばらく音沙汰がなかった。一年ぐらいして届いた書類には失敗した、とあったよ。愕然としたね。わたしは」

一条の声が震えた。何かを耐えるかのように。

「花音をまた失ってしまったんだっ」

張り上げられた声が室内に響く。

「そのまま眠らせてあげるべきだったのに。花音の魂は消滅したという。わたしは完全に娘を失った！」

荒げられた声に、ひっと息を呑む。怖い。

「それから二年、わたしはずっと抜け殻のようだった。何も考えられなくて、気づいたら妻とも離婚していた。そんなときだよ、テレビで花音を見たのは」

『……テレビ？』

「心霊写真としてだったが、笑顔の花音の写真を見たんだ」

『っ、オカルトクエスト！』

テレビに映った自分の姿といえば、それしか考えられない。

ああ、と一条は頷いた。

「そこから調べたよ。花音のことを。研究班の資料を勝手にね。実験は成功していたんだ。だけれども、わたしに花音を引渡すつもりがないから、研究班は失敗したことにしたんだ、とわか

った。わたしのところに通知がきたときには、まだ実験の途中だったのに、失敗したことにした。それに腹がたったけれども、冷静に考えれば研究所ではよくあることだからね」

『……それで、あたしを？』

「そう。G〇一六という実験体ナンバーが花音なことも、U〇七八のところにいることも、全部調べた。肝心の、U〇七八の居場所がわからなくて、時間がかかってしまったがね」

一条は立ち上がり、ゆっくりとマオに近づく。マオは少し後ろにさがった。

「待たせたね、花音。一緒に帰ろう」

そんなマオを気にすることなく、一条はそう言った。そうして片手を差し出す。

「わたしたちの家に帰ろう、花音」

畳み掛けるように言われる。

差し出された手と、一条の顔を順番に見る。

『あなたが、……あたしの父親かもしれないっていうことは、わかりました』

震える声で言葉を発する。

一条の視線はどこか定まっていなくて怖い。

「ああ、そうだよ。まだ思い出せなくても、いつか思い出せるかもしれない。花音」

一条が満足そうに頷く。

この人が、悲しい思いをしたことはわかった。大事な娘を亡くして、一人になってしまって、色々後悔して、悲しくて、必死に娘を探していたことはわかった。それには同情するし、マオが娘だと知って嬉しかった気持ちを、期待を裏切るようなことは出来ればしたくなかった。一人が淋しいのは知っているから。

だけど、

『あたしは、あなたとは一緒に行けない』

それとこれとは話が別だ。

一条の顔をじっと見つめる。

『あたしは帰らなくちゃいけない。それは、あなたのところじゃなくて、隆二のところに。だって、あたし、約束したんだもの。隆二と。ずっと一緒にいるって』

だから貴方とは帰れない、と続ける。

一条の表情は変わらない。僅かに微笑んだまま。それがまた、少し怖い。

だけれども、思っていることはちゃんと言わないと。

『それに、あたしは、花音なんていう名前じゃない。ましてや、G〇一六でもない。あたしは、マオ』

あの日、初めてあった日に隆二が名付けてくれてから、ずっとマオだ。この名前を大切にしてきた。それ以外の何者でもない。それ以外の名前ならば、例え本物であっても要らない。

『マオだから、あなたとは一緒に行けない』

この手が掴むのは、隆二の手だけだ。

ごめんなさい、と続ける。

一条はしばらく何も言わなかった。

沈黙に耐えながら、じっと一条の顔を見る。

どれぐらいそうしていただけるか。一条がゆっくりと息を吐くと、手を下ろした。そうして、椅子の方に向かう。

「わかったよ、花音じゃない」

背中を向けたまま、一条が言う。

納得してくれたのだろうか？

そう思って胸をなでおろしていると、一条が振り返った。

「花音はそんなことを言わない」

その右手に握られているものに、視線が釘付けになる。

「花音の形をした紛いものに用はない」

右手に握られているもの。見た目は小型の剣。だけれども、それがただの剣でないことを知っている。

あの時見た。公園で京介と話した時に。

あれは、

『エクスカリバーっ』

霊体であるマオも、不死者である隆二や京介も、実験体である以上すべてを消し去る唯一のもの。

「わたしはまた、花音を失うことに耐えられない」

マオの悲鳴に返事はせず、一条はエクスカリバーを片手にマオに近づく。

「同じぐらい、わたしが死んだあと花音の形をしたものが存在していることも耐えられない。花音でもなくせに」

何を言っているのかわからない。だけれども、一つだけわかる。

このままじゃ、絶体絶命だ。

なんとか逃げられないかと身をよじるが、右足が上手く動かない。動けない。

刃が光る。

「やっぱりこうするのが一番いいんだ。花音の形をしたものがいなくなってしまうえば、わたしは安心して、死ぬる！」

エクスカリバーが振り上げられる。

咄嗟に転がるようにして避けた。体は。

『やっ！』

右腕が避け切れず、刃に触れた。

何が起きたのか、最初わからなかった。

刃に触れた先を見る。何もない。

『いやああああ！』

理解すると同時に悲鳴をあげた。

斬り落とされたように、刃に触れたよりも先、肘から先が無かった。

痛みもなにも無いのに。

左手を伸ばすけれども、やはり、ない。

「ああ、避けるから」

眉根を寄せて一条が言った。

「花音の顔がそうやって歪むのは見ていられないんだ。頼むから、避けないでくれ」

『なにをっ！』

「エクスカリバーは突き刺した箇所から消える。突き刺さないで今みたいに斬っただけじゃ、そこから先が消えるだけで本体の抹消には繋がらないんだ」

なんでもない口調で一条が言う。

なにを言っているかわからない。

なんで、そんな、なんでもないように言うのだろう。

だって、消えるって、どういうことかわかっているんだろうか、この人は。

逃げようともがくが、どうやっても動けない。

一条がエクスカリバーを振り上げる。

消える。

消えてしまう。

アレに刺されたら、消えてしまう。

今度は腕だけじゃない。あたし自身が。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ。

だって、約束したのだ。

ずっと一緒に居るって。居なくならないって。約束したのだ。

約束は、守らなくっちゃいけないんだ。

約束したのに。一緒に居るって。

一人にはしないって。

違う。ずっと、一緒に居たいのは、あたしの方だ。隆二じゃなくって。

あたしが、隆二と一緒に居たい。

ずっと一緒に居たい。

『嫌だっ！』

消えたくない消えたくない消えたくない消えたくないっ。

刃が眼前で光る。

嫌だ。助けてっ。

助けてっ！

『隆二いっ！』

一際大きな悲鳴が漏れたのと、ばりんっという音がしたのはほぼ同時だった。

音は上からして、マオは思わず視線をそちらに向ける。一条も同じように一瞬視線を上を逸らした。

屋根のスタンドグラスが割られて、きらきらと光を浴びながら破片が降ってくる。綺麗に輝きながら。

そして、

「マオっ！」

一緒に落ちて来た黒い影が、彼女の名前を呼びながら、着地と同時に一条を蹴りとばす。蹴りとばされた一条は吹き飛ばされ、長椅子にぶつかった。

「マオっ、大丈夫かっ！」

そのままふりかえり、マオに駆け寄って来たのは、

『りゅ、うじ』

神山隆二、その人だった。

破片で切ったのか、頬から血を流しながら隆二はマオにかけより、

「怪我とかっ」

そこまで言って、隆二は言葉をのんだ。

マオの右腕を見て、言葉を失う。

なんだかそれが恥ずかしくて、マオが左手でそれを隠そうとするのを、

「ごめんっ」

ぐいっと手を引っ張られて妨げられる。代わりにぎゅっと抱きしめられる。

「ごめん、遅くなってっ」

言われた言葉に、ぶわっと目元が熱くなる。気づいたらぼろぼろと涙がこぼれていた。

『りゅーじ』

左手でぎゅうっと彼にしがみつく。

『りゅーじ、りゅーじっ』

「ごめん。遅くなってごめん」

『ごめんなさいっ』

あたしが勝手に外に出たから。言いつけを破って一人で外に出たから。だから隆二に心配をかけて、こんなことになってしまった。

「マオ」

優しく名前を呼ばれる。それにあわせて、またぼろぼろと涙が出る。

頭を撫でられる。いつもの隆二の手で。

「遅くなってごめん。だけど、よかった、また会えて」

掠れた声で囁かれた言葉に、隆二にしがみついている左手に力をいれた。

『約束、したからっ』

隆二のこんな声を聞くのはあの時以来だ。神野京介の一件があった時以来。

『ごめんなさい』

泣かないで。あたしはここにいるから。まだいるから。

「……うん」

隆二の手がマオの肩をそっと押した。隆二の顔が見えた。泣きそうに歪んでいたけれども、小さく微笑んでいた。

「一緒に帰ろう」

一晩ぶりに見るマオの顔は、涙でぐちゃぐちゃになっていた。こんな風に泣かせてしまったことが心苦しい。

「……ごめん」

隆二が右肩にそっと触れると、ぴくっとマオの肩が震えた。

間に合わなかったことが、悔しい。

マオが泣き顔のまま、ふるふると顔を横にふった。それでもまた、泣きそうになる。

それを見ているのが耐えられなくて、マオの頭をそっと抱き寄せようとしたとき、

『隆二っ、後ろっ！』

隆二の肩越しに何かを見たマオが悲鳴をあげた。慌てて視線を動かした隆二の目に映ったのは、エクスカリバーを片手に立ち上がる一条の姿だった。

咄嗟に、マオの頭を抱え込む。守るように。これ以上、傷つけさせないために。

『りゅーじっ』

そんなことよりも、迎撃した方がいいと気づいた時には、一条はもう真後ろまで来ていて、

『隆二っ！』

マオの悲鳴をかき消すように、ばんっと大きな音がした。銃声。

「っ！」

振り返ると、一条が、右手を押さえて呻いていた。

からんっと持っていたエクスカリバーが落下し、隆二は慌ててそれを奪い取った。

視線を音の方に向けると、真っ青な顔をしたエミリが、まだ硝煙のでる銃を片手に立っていた

。

「それ以上、動かないでください」

斬りつけるように一条に言いながら、銃を構えたままゆっくりと近づいてくる。

「両手をあげて！」

エミリの声に、一条はしばらく悩むようなそぶりを見せたが、血の出る右手を押さえながら手をあげた。

「助かった。ありがとう、エミリ」

マオを背後に庇うようにしながらも礼を言う。

「いえ、遅くなってすみません」

一条から目を離さずにエミリが答えた。

「……どうしてここが」

一条が苦々しい口調で言った。

「ここは花音との思い出の場所なのに。よく家族できた、思い出の……」

「知るかそんなこと」

吐きすてるように隆二は答えた。だからなんだ。この場所がわかった理由なんて、ただ一つだ

。

「人間の若者の情報網はすげーんだよ」

菊や葉平といったなんでもない人間の若者のおかげだ。隆二が、一晩走り回ってもわからなかった手がかりをみつけてくれた。

その情報を元に、エミリが車の行き先を探しだしてくれたのだ。だから厳密には、研究所の力もちよっと入っているが。

郊外の古びた教会。その場所を聞いた瞬間、走りだしていた。

入り口には、鍵がかかっていた。合鍵をエミリが手に入れてくると言っていたが、それを待っている余裕はなく、手っ取り早く天井のガラスをぶち破って入った。それだけのことだ。

完全には間に合わなかったけれども、最悪は避けることができてよかった。

「一条稔。エクスカリバーをはじめとした道具を許可無く持ち出したことは重罪ですよ」

エミリは銃口を向けたまま一条に近づくと、鞆から取り出した手錠を片手にかけた。一条は大人しくされるがままになっていたが、

「……進藤の娘。実験体に肩入れするお前も似たようなものだろう」

負け惜しみのように呟いた。

「研究所から見たらそうかもしれませぬね」

吐き出された言葉をエミリは受け流した。

「でも、わたしからすれば全然違います。そのことをわたしは知っていますので」

言いながら手錠の片方を長椅子に繋ぐ。手慣れた様子で身体検査をし、他に武器を持っていないことを確認すると、ようやく銃口を外し、隆二達の元に駆け寄った。

「マオさん、大丈夫ですか！」

隆二の影に隠れているマオに声をかける。

『エミリさん……』

泣きそうな顔をしたマオがエミリを見た。

そうすると、隠れていた右腕も見えた。

「……それ」

エミリが小さく呟くと、マオは慌てたように隆二の背中に隠れた。腕を隠すように。

『……ごめんなさいっ』

「マオ」

涙声の謝罪に、隆二がその頭をそっと撫でる。

それを見て、

「一条っ！」

一声吠えると、エミリは再び銃口を一条に向けた。かっと激情に駆られたように。

それを、

「エミリ」

隆二は、名前を呼ぶことで止めた。

「だけど、神山さんっ」

たしなめるように名前を呼ばれて、エミリが顔だけで振り返る。

「だって、こいつはっ」

振り返ったエミリは怒ってもいたが、泣きそうな顔でもあった。

「あんたはその引き金を引くべきじゃない」

まだ戻れるんだから。

「でもっ」

「やるなら俺がやる」

その言葉に、エミリが小さく息を呑んだ。

ゆっくりと立ち上がると、

「マオを頼む」

エミリの肩をマオの方に押し、そっと前に出た。

『りゅーじっ』

マオの声を背中に受けながら、ゆっくりと一条の前に立つ。

「U〇七八」

隆二の視線を受けて、一条が呟いた。

「神山隆二だよ」

今更実験体ナンバーで呼ばれることに、何か特別な感慨を抱くわけでもないが、そう訂正する

。

「うちの居候猫が世話になったな」

「……わたしの娘だ」

「違う」

座り込んだその胸倉を掴む。椅子に繋がった右手がひっぱられたのか、一条がうめき声をあげた。

その耳元に顔を近づけると、低い声で小さく、一言告げた。一条だけに聞こえるように。

「俺のだ」

そのまま返事は待たず、腹に一発拳をぶちこんだ。

ぐっと呻いて、一条の体が崩れる。手を離すと、ぼたりと床に体が落ちた。

手加減してやったのに。

咳き込みながら、恨みがましい目でこちらを見てくる。

たったこれだけのことで、そんな被害者面しやがって。自分がしたこと、わかってんのか？

ドス黒い感情が足元から立ち上ってきた。呻いている一条を見下ろす。

だってまだ、息の根がある。

止めてしまえ。不愉快だから。

倒れた体に、更に足を叩き込んだ。一発、二発、三発。

『りゅーじっ』

怯えたようなマオの音がする。

それで我に返った。

久しぶりに黒い感情に支配されて動くところだった。

足元的一条にまだ息があることを確認すると、一つ溜息をつく。

本当はここで翩り殺してもおつりがくるぐらい、この男が不愉快だが、そうするわけにもいきまい。エミリの立場もあるし、このまま殺してしまったら諸々のことが闇に葬られることになる。ここで一条を生かすことは、研究所に対して、一つ貸しぐらいになるはずだ。

必死に自分に言い聞かせる。そうでもない、本当に殺しかねない。

「エミリ」

「はい」

背を向けたまま声をかけると、意外にもしっかりした声でエミリは返事をした。

「あと、頼んでいいか」

「はい。それがわたしの仕事ですので」

深呼吸して、強張った顔を繕ってから振り返る。

泣き顔のマオの肩を支えて、青い顔で、それでもしっかりとエミリが立っていた。

「ありがとう」

「いいえ」

二人のところに近づくと、入れ替わるかのようにエミリが立ち上がった。一条の方に向かって行く。

「マオ」

名前を呼ぶと、マオがすぎるように左手を伸ばして来た。その手を掴み、そっと頭を撫でる。

「ごめんな」

怖がらせて。

『ごめんなさいっ』

何故だか謝るマオに、小さく微笑んでみせる。

「帰ろう。一緒に」

その言葉に、マオは小さく頷いた。

第九幕 迷い仔猫の同居人

一条の件はエミリに丸投げし、自宅に戻ったところで全てが元通りというわけにはいかなかった。

研究班を締め上げてどうにかしろと脅しをかけたが、マオの右手は元には戻らないらしい。痛みはないから大丈夫、とマオは言っていたが、大丈夫なわけあるまい。

見られるのが嫌なようで、あれ以来、隆二の右隣に居るようになった。すぐに隠すように動かすから、隆二はあまりそのことに触れないことにした。

隆二に見られるのは嫌なようだが、隆二の傍から離れるのも極端に嫌がるようになった。今までも隆二についてまわっていたが、最近は本当にべったりだ。テレビをつけていても、それが四苦八苦久美子でも、テレビより隆二を優先する。コーヒーをいれるためにソファから立ち上がる時でさえ、怯えたような顔をする。すぐそこなのに。ソファからでも姿が見えるのに。

寝ているときにはうなされているし、突然起きて泣き出すこともある。夜は怖くて眠れないと言い、元々幽霊のときは不規則だった睡眠時間が、めっきり昼間に集中するようになった。

一晚追い回されて、自分の身の上を急に明らかにされて、斬られて、消されかけて。あれだけの目に遭ったのだから、一人になるのを恐れるのも、眠れないのも仕方が無いことだと思う。

そして、何もできない自分は、心がいない。出来るだけマオが安心できるように努めることしかできない。

特に問題だと思うのが、ことあるごとにマオが呟く、ごめんなさいという言葉だ。思えばあのときから、ずっとごめんなさいと言っていた。

約束を破って一人で出かけたから、こんなことになった。心霊写真を撮りたいと駄々をこねて、一条にバレることになった。隆二に心配をかけた。だから、ごめんなさい。そういうことらしい。

確かに約束は破られたけれども、その約束の理由を説明しなかったのは隆二だ。説明していればマオだって、出かけたりしなかつたらう。だから、非は隆二にだってある。

それ以外のことにかんして、マオに原因がある部分はない。心霊写真のことだって、出かけたことだって、誰がこんなことになると思えただらう。

マオは悪くないから謝らなくていい。そう何度も言っているのに、今だって隣で眠っているマオは、寝言でごめんなさいと呟いている。

まったく、どうしたものかね。

上手い解決方法が欠片も思いつかない、自分のひとりでなしさに呆れ返り、溜息をつく。

眠っているマオの頭をそっと撫でる。歪められていた顔が、少しだけ和らいだように見えた。

心の傷は時間が治してくれるかもしれない。今は待っていればいいのかもわからない。

だけれども、待っていてくれないことだってある。

ぴんぽーんっと、チャイムが鳴った。マオを起こさないようにそっと立ち上がると、玄関に向かう。

「こんにちは」

ぺこりと頭を下げたのは、勿論赤い彼女だった。

「来てもらって悪いな、エミリ」

「いえ。マオさんは？」

「寝てる」

「そうですか」

なんとなく小声で会話しながら、部屋の中に入る。二人分のコーヒーをいれると、ダイニングテーブルに向かいあった。

エミリがソファで眠るマオに視線を移す。

「……やはり、嫌がりますか？」

「ああ」

今もっとも困っていて、問題視していることは、マオが食事を取りたがらないことだ。あれから半月経って、食事の日が来ても嫌がった。

「実体化するのが怖いっていうのは、わかるからなあ」

先月まではあんなに楽しみにしていたのに。実体化しているときは、普通の人間としてしか生活できないこと、つまり肉体の死が生じることを知ってしまった今、実体化したくないらしい。

だからといって、このままでいいわけがない。このままじゃ、エネルギー不足で消えてしまうだけだ。

「食事と実体化が切り離せないところが問題ですよね」

「強引に与えようとしたんだけど、人に物喰わせるのと違って、本人に食べる意思がないとどうしようもないみたいだな」

「……そうですか」

「マオ本人も、このままじゃただ消えることになるのはわかっているみたいなんだけどな。エネルギーが不足してきているのは本人が一番わかっているだろうし」

だけれども、どうしても勇気がでないのだと言う。こればかりは、気長に待つ訳にもいかない。もたもたしていると本当にマオが消えてしまう。

「でしたら、これがマオさんに勇気を与えるきっかけになればいいんですけど」

言いながら、エミリが鞆からクリアファイルを出してきた。

「お話ししていた件、研究所に飲ませることに成功しました」

「本当に！？」

思わず声が大きくなる。慌ててマオの方を見るが、僅かに顔をしかめたものの、目は醒まさなかった。

クリアファイルの中の書類を手取る。ゆっくりと、それに目を通していく。

「……本当だ」

今回のことの責任をとれ、と押し付けた要望書。無理難題をふっかけている自覚はあったので、こちらの条件が全て通るとは思っていなかった。それらが多少条件はついているものの、全て通っている。

「……大変だったんじゃないのか？」

澄ました顔でコーヒーを飲むエミリを見る。

「半分は父のおかげです」

「……ああ」

では、残り半分は？

尋ねようとしたとき、

『りゅうじっ』

マオの怯えたような声がして、慌てて立ち上がった。

目を覚まして、ソファで上体を起こしたマオの前に膝をつく。

「おはよう」

軽く頭を撫でながらそう言うと、マオは小さく頷いた。

『あ、エミリさん』

腰を浮かしかけたエミリに気づき、そう呟く。

「お邪魔しています」

エミリはいつものように応えた。

「……お腹、空いてないか？」

尋ねるとマオは戸惑ったように沈黙した。嘘がつけないマオのことだから、やはり空いているのだろう。

「話があるんだ、いいか？」

マオは小さく首を傾げたが、嫌がったりはしなかった。

「席、外しましょうか？」

エミリがそう声をかけてくる。

別にいてもらっても構わないが、そう言いかけて、これから自分が口走ることを考えたら、

「あー、悪い」

苦々しくそう呟くしか出来なかった。エミリに聞かれて困る話ではないのだが、エミリに聞かれたら恥ずかしいことを言うような気がする。

エミリは一度小さく笑ってから、

「外に居ます。終わったら呼んでください」

躊躇い無く外に出て行った。

『……隆二？』

小さな声で尋ねてくるマオに、安心させるように微笑みかける。それから告げた。

「引っ越そう」

突然の申し出に、マオがきょとんとした顔をする。最近怯えたような顔ばかり見ていたから、こんな顔でも表情が動くと思える。

「行き先はマオが決めていい。どこでもいいよ、俺は」

『……え、なんで？』

「今回知り合いを増やし過ぎたから」

『……ごめんなさい』

ああ、もう。だからなんで謝るかな、こいつは。

一瞬、苛立ちが胸中に湧き起こり、慌てて深呼吸してそれを押し込めた。

「マオのせいじゃなくって。っていうか、そもそもコンビニの人に正体はバレてただけどさ」
菊だけだったならば放っておいた。なんか、オカルトマニアだったし、実害がなさそうで。だけれども、緊急事態だったとはいえマオの写真をばらまいたし、柚香とも葉平ともしっかり面識が出来てしまった。さすがに、これは問題だと思う。

『……あ、柚香さんに、あたし連絡してない。急に消えたままだ』

「ああ、それはやっといたから大丈夫」

まあ、一週間経ってからだけど。世話になったり心配をかけた人へ、無事だった報告をすることなんて、すっかり頭から抜けていた。仕方ない、ひとでなしなんだから、と自己弁護。
「とりあえず大丈夫だったって、連絡してある。……だけどさ、やっぱりこれ、あんまりいい状態じゃないと思うんだ」

今はまだいい。だけれども、時が流れればいずれ不審に思われるだろう。容貌に変化がないことも、マオが半月ごとにしか姿を現さないことも、どこで不審に思われるかわからない。

自分一人だったら、多少不審に思われても構わなかった。でも、今はマオがいる。不安の種は減らしておきたい。

「だから引っ越そう。どこでもいいけど、そうだな、どこか田舎でのんびり暮らせたら一番いいな」

正直、今回頑張り過ぎて怠惰な生活が恋しい。

『……引っ越しって、でも平気なの？ 急にそんな……』

「これ」

クリアファイルから書類をだして、マオに見えるように床に並べる。

「今回のことの迷惑料ってことで、研究所にふっかけた」

一条のことを隠蔽して、マオのことを見捨てようとしたことを、ちくりちくりとやりながら、マオになにかあったらここを壊滅させるぞ、と躊躇いなく脅した。一条を生かしてそちらに引渡したことも感謝しろよ、と半殺しにしておきながら偉そうに告げた。

久しぶりにU〇七八であることを、存分に使った。死神のいない今、トラウマもなにもない研究所など何も恐れることがない。どさくさに紛れて、一条の持ち出したエクスカリバーも破壊したし。電話越しとはいえ、相手方の怯えるさまはなかなか痛快だった。

「引っ越しも条件のひとつ」

引っ越し費用は向こう持ち。新しい家も用意しろ。我ながらむちゃくちゃな要望だが、エミリと和広の協力があってねじ込めた。

「あとまあ、当面の生活費なんかももぎ取ったし。あー、定期検査無しには出来なかった。回数は減ったけど。ごめんな」

『……それは、うん。……行かなきゃいけないのは、わかってるから』

語尾が震える言葉に、ぽんぽんっと頭を撫でる。

「まあ、俺も一緒に行くし」

『ん、ごめんなさい……』

「謝らなくていいから」

だから何故謝る。

「一条のことは」

その名を口にすると、びくっとマオの体が震えた。しかし、避けて通れない話題だ。

「あいつらに全部任せた。ただ、二度と俺たちに近づかせないことを誓わせた。居場所も教えるなって」

次にその姿を見かけることがあったら、研究所もろともただじゃおかないぞ、と言っておいた。まあ、その前に、一条がまた隆二達の前に姿を現せるほど、元気になるかも疑問だが。身体的な意味で。というのは、マオには言わないでおく。

「だから一条のことは大丈夫」

それからエミりに調べてもらったところ、一条稔は、あ的一条と、茜の一条と親戚関係にあるらしいこともわかったが、まあそれは蛇足。一条花音が茜と親戚関係にある、それになんともいえない感慨を抱いたが、それはマオとは関係ないことだ。一条花音とマオは、何にも関係がないことだ。

マオがこくりと小さく頷いた。

『ごめんなさい』

「謝らなくていいから。それから、あと、そうそう義手」

この話をするのは嫌がるだろう。だけれども、言わないと先には進めない。

「右手」

告げると、マオは身をよじるようにして右手を隠そうとした。

「元には戻らないけど、義手作るように頼んだから。実体化している時は勿論、霊体になってからも使えるもの。不便はあるだろうけれども、見た目は気にしなくていいはずだから」

『……本当？』

「ああ」

マオが少し安心したように笑った。のも、束の間。

『ごめんなさい』

また謝った。

ぷちっとどこかで何かが切れる音が聞こえた気がした。

あ、駄目だ。我慢の限界だ。半月我慢してきたのに、ここで限界だ。

マオの頬を包むように、両手を伸ばす。

『……隆二？』

不思議そうなマオ。

寧ろ優しく微笑みかけると、

『ひゃあっ、ちょっ』

その頬をぐっと引っ張った。

『りゅーじっ』

「お前は本当に一体なんだってそうやっていちいち人の神経を逆撫でして俺を一体なんだと思ってるんだ」

そこまで一息に言ってから手を離す。そのまま、また頬を包むように手を置いた。

「ひとでなしだぞ」

『……ええ？』

「お前はあれだけ普段人のことを、やれひとでなしだの、唐変木だの言うておいて、それでも気を使えというのか、この俺に」

自分でも、なに駄目なこと自信満々に言っているんだろなあ、という気はするが。

『え？ ごめんなさ』

「だからそれ」

また謝ろうとしたマオを遮る。

「今後、この話題について謝罪禁止。だって別にマオは悪くないだろ。悪くないのに謝罪されるほど不愉快なことはないだろう」

マオの目が大きく見開かれる。驚いたように。

さてはお前、自分が二言目には謝罪していたことにも気づいてなかったな。

「大変だったのも辛かったのも怖かったのもわかるよ。だから、無理に笑え、とは言わない。だけど、せめて謝るのはやめろよ」

ああ、やっぱりエミリに席を外しておいてもらって正解だったな。そう思いながら、続きを口にする。

「俺はずっと、この一年、お前の無駄な明るさに救われてたんだよ」

最初はただ振り回されて、面倒だなと思っていた。今だって、たまに面倒だなと思うけれども、面倒だなと思うこともひっくるめて楽しいと思っている。マオとの生活を。

マオを拾ってすぐは、久しぶりの誰かと一緒に生活も悪くないものだな、と思っていた。今は、マオと一緒に生活じゃなければ意味がないと思っている。誰かじゃなくて、マオとの。

「調子が狂うんだよ、マオがそんなだと」

マオの存在は、すっかり隆二の生活に組み込まれているのだから。

「無理に笑えとは言わない。時間がかかってもいい。それぐらいちゃんと待つ。俺だって、たまにはそういう努力をする。だけど、謝るのだけはやめてくれ。頼むから」

怯えさせたくて、泣かせたくて、謝罪させたくて、傍に置いているわけではないのだ。

マオは目を見開いたまま隆二の顔を見つめていたが、やがて、

『うん』

頷いた。それから言葉を探すように少し沈黙して、

『……ありがとう』

まだどこかぎこちなくだが、そう言って微笑んだ。

それに安堵すると、ぽんぽんっと頭を撫でる。

「……マオ」

左手をそっと繋ぐ。

「……食事、しよう。そろそろ、本当に」

その途端、マオの顔がまたくしゃりと歪んだ。

「大丈夫。あんなこと、そうそうないから。今度はちゃんと、俺が傍にいるから。危ない目には遭わせないから」

マオが今までよりも少し気を使って、隆二がちゃんと見ておけば、きっと平気なはずだから。

「それでもまだ、やっぱり、怖い？」

『……怖いよ』

泣きそうな顔でマオが答える。

『だって、約束破っちゃうかもしれない』

「……ん？」

それは想定と違う返答だった。約束？

『ずっとあたしが、傍にいるって言ったのに。一緒にいるって言ったのに、それを破っちゃうかもしれないの、すごく怖い。隆二がまた、一人になっちゃう……』

泣きそうな顔で、それでもはっきりとマオはそう言った。

約束って、ああ、そうか。

「……お前は、本当にっ」

繋いだ手をひっぱって、頭を抱き寄せる。

『わっ。……隆二？』

「怖いって、それかよ」

声が掠れた。

「他にも色々あるだろうが。最初にでるのが、それかよ」

『……隆二、大丈夫？』

腕の中のマオが心配そうに呟く。立場が逆転した。

だって、そうだろ？

「なんで俺の心配なんだよ、お前」

『……なんでって』

どうしてそんなことを訊くのかわからない、とでも言いたげな不思議そうな口調で、

『だって、約束したから』

当たり前のようにそう続ける。

『一人じゃないから大丈夫だよ、って言ったの、あたしだもの。絶対に一人にしない、って言ったの、あたしだもの。だって』

マオの左手がそっと背中にまわされる。

『泣いていたじゃない、あのとき、隆二』

「……京介の？」

『そう。あたしね、びっくりしたの。隆二は泣いたりしないって勝手に思ってたから』

「あー、うん」

出来れば泣いていたことは忘れて欲しいんだが……。

『隆二が泣いているの見るの、なんだかとっても悲しいから。だから、もう二度と、隆二を泣かせないって決めたの。今また、泣かせたけど……』

「……泣いてない」

『うそ』

ぎゅっとマオの額が胸に押し付けられる。

『声で、わかるよ』

そっと囁かれた言葉に、ぐっと言葉につまる。まあ確かに、今少し泣きそうだったけれども、それは、

「……世の中にはうれし泣きってという言葉があっただな」

『……うれし泣き？』

「……そのうち学んでくれ」

心配してくれていたことが嬉しかったのだと、どうして自分の口から言えよう。

「ともかく」

気を取り直して咳払い。

「俺のことでそんなに気に病まなくていいから」

肩を押して体を離す。マオの眉間に寄った皺を指先でぐぐっと押した。

『ちょっ』

「大丈夫だから、俺は」

抗議の声を無視して、指でぐいぐい押したまま続ける。

「マオが実体化してから、少しずつだけど、ちゃんと覚悟をしてきたから」

『……覚悟？』

「一人になること」

微笑んでみせると、マオはまた泣きそうな顔をした。眉間から手を離し、マオの頬に手を移すとぐいっと唇を笑みの形にした。

『ちょっと』

「泣かれたら嫌なのは俺もなんだよ」

早口でそう言うと、手を離す。

マオはなんだか驚いたような顔をして、それから小さく頷いた。

長い時間をかけて覚悟してきたのだと、茜が言っていた。それならば、きっと。

「一緒にいる時間は、いつくる別れのための準備期間なんだ」

それがいつのことかはわからない。でも、別れが避けられないのであるならば、せめて悔いなくその日まで過ごしたい。今は、そう思う。

「だから、その、残された俺のことは気にしなくていい」

『……でも』

「代わりに、今のことを気にしてくれ」

『……今？』

そう、と一つ頷く。

「別れの時に悔いたりしないように。悲しいのは避けられないとしても、悔いがないように」
ここまでの別れはずっと悔いばかりのこった。茜のことも、京介のことも。今度は、それを避けたい。

「出来るだけ楽しく、笑って過ごせたらいいな、と俺は思うわけだ」

なんだかとっても恥ずかしいことを口にした気がしてきたので、

「あとだらだらしたいよな」

照れ隠しにそう続ける。いや、本心だけど。

『……ん』

マオが小さく頷いた。

「……だからマオ、食事をとろう」

ここまで言っても、今ひとつ押しが足りないらしい。困惑の表情を浮かべる。

「お前さ、わかってるだろ。食事とらないと消えるんだぞ」

さすがに苛立ってきた。人にここまで恥ずかしいこと言わせて、何を躊躇っているんだ。

『……そうだけど』

マオの左手が、自身の右肩にそっと触れる。

「今のことを考えろ」

その左手ごと、肩に触れる。

「悲しませたくないなど言ってもな、俺は」

なんだかもう色々面倒になって、睨みつけた。マオが怯えたような顔をする。もう知るか。ひとでなしなのにここまでよく頑張った方だと自分でも思う。怯えようが結構。優しい言葉なんてこれ以上かけられるか。むず痒くて仕方ない。

「今、マオに消えられたら、悲しいし、困るんだよ！　いつまでも甘えないでくれよ、困るんだよ、ひとでなしなんだから！」

マオの目が大きく見開かれる。

それを容赦なく見つめ返した。というか、睨み返した。

マオはしばらく黙っていたが、ふいに唇を重ねてきた。咄嗟のことに目を閉じるのが遅れた。触れていた部分に熱があらわれる。

「いただきますぐらい言えよ」

唇を離れたマオにそう毒づいた。

マオは一瞬、不満そうに唇を尖らせたあと、

「ごちそうさまでした」

肉声をふるわせて、そう答えた。

実体化した彼女の右手はやっぱりなくて、白い肩が痛々しかった。

「……痛みは？」

「平気」

マオは少し微笑み頷いた。それから、

「……ねえ、隆二」

「ん？」

「さっきの、引っ越しの話。あたし、住みたい場所があるの」

提示された場所はとっても意外な場所だった。

とりあえず着替えて来い、とマオを隣の部屋に連れて行くと、次に玄関の扉をあけた。

「……あ、お話終わりました？」

扉の横に寄りかかるようにして立ち。ケータイをいじっていたエミリに頷きかける。

「悪かったな」

「いえ」

エミリは再び部屋の中に入りながら、

「どんな恥ずかしい言葉で、マオさんを説得されたんです？」

悪戯っぽく笑った。

見抜かれている。

「ほっとけ」

苦々しく言葉を返した。

またダイニングに戻ってくると、部屋着に着替えたマオも部屋から出て来た。首元にはしっかりとペンダントがついていて、それに少し微笑む。

「マオさん」

エミリが立ち上がると、マオの目の前に立った。

「ごめんなさい」

そこで頭を下げる。

「エミリさん？」

マオが驚いたように声をかける。

「一条のこと知らなくて。研究所のことなのに、何も知らなくて。心霊写真のことも、知ってたら送らなかったのに。ごめんなさい」

早口の謝罪に驚いたのは、隆二も一緒だった。エミリが気に病んでいたのはわかっていたが、まさかここまでとは。ずっと、この半月、どこで謝ろうか考えていたのだろう。

「え、待って。エミリさんが悪いんじゃないよっ」

「でもっ」

「エミリさんが助けてくれたの、知ってるもん。ありがとう」

「マオさん……」

二人ともなんだか声が泣きそうになっている。おいおい大丈夫だろうな、と思っていると、

「本当、最悪の前に間に合って良かったです」

「うん、ありがとうっ」

何故か二人して抱き合って号泣。

なんでこうなった？

感情の波に一人置いて行かれた隆二は、間抜けな顔をして、わんわん泣く少女達を見る。
それにしても、緑の髪と赤い服。クリスマスみたいなやつらだなーと、どこまでもひとでなしなことを思った。

「……あー、そろそろいいか？」

二人が思う存分泣き、落ち着いたところでそう声をかけた。

「はい、すみません」

ハンカチで目元を拭きながら、エミリが頷く。マオはティッシュを探して彷徨いはじめた。

「あー、その引っ越しの件だが」

置いてあったティッシュの箱をマオに渡しなが、本題を切り出す。

「決まりました？ 場所」

「ああ。マオの希望で」

その場所を告げると、エミリが驚いたような顔をした。

「いいか？」

「こちらは構いませんが……、神山さんはそれでいいんですか？」

いいか悪いかで言われたら、正直微妙だけど、

「どこでもいいって言ったの俺だしなー」

そう呟くと、マオがふふっと楽しそうに笑った。僅かなものではあるが久しぶりの笑みに、心の底で安堵する。

「わかりました」

エミリも小さく微笑むと、

「それじゃあ、準備できたらご連絡しますね」

その準備の連絡は意外とはやく、一週間後には、いつでも引っ越せますよ、などと言われた。それならば、マオが実体化しているうちに引っ越してしまおう、と連絡を受けた二日後には、新天地に向かっていた。

どうせ荷物なんて、たいしてないし、面倒な手続は研究所任せだし。

電車を乗り継ぎ、目的地につく。切符の購入も乗り継ぎの案内も、全部エミリに頼んだが。

人の少ない駅で降り立つと、ちらほらと視線が向けられた。

「やっぱり目立つのかな」

向けられる視線に、マオは右手を隆二にくっつけて隠そうとする。必然的に腕を組んだような形になって逆に目立つような気もした。

研究班の寄越した義手をつけているから、ぱっと見はよくわからない。それでも、右手のことは気になるらしい。こればかりは、慣れてもらうしかないな、と思っている。

「そんなことはありません。うちの研究所はバカばかりですが、その腕は優秀ですから。わたしたちが可愛いのに神山さんがむっとりしてるからですよ」

そうって微笑むエミリ。お前の服が真っ赤だから目立っているんだよ、と思うのはどうやら隆二だけらしい。

とはいえ、赤は赤だが、エミリの服はいつもと違っていた。

今までのエミリは、いつも同じような、赤いジャケットに、かろうじてオレンジ色っぽいスカート。赤いブーツ、赤いベレー帽と全身赤コーデだった。

今日は白いブラウスに赤いカーディガン、赤いチェックのスカートで、靴は黒のポンプスだ。帽子も被っていない。

赤は赤だが、いつもと違う。控えめだ。

その理由を考えながらエミリを見ていると、

「なにか？」

視線に気づいたエミリに、不思議そうな顔をされた。

「いや、別に？」

「そうですか」

駅から先は隆二を先頭に歩いて行く。

ところどころ、見慣れた景色がある。自然に、歩く速度がはやくなっていく。

「隆二、はやい」

マオの抗議の声に、慌てて歩く速度を落とした。

でも、もうすぐそこだ。

その角を曲がれば……。

角を曲がって、その場所を見た時、一瞬息を呑んだ。

そこは昔と何もかわっていなかった。

近代化にのりおくれたようにぽつんと家が立っていた。寂しげに。

もうずっと来ていなかった場所。一条茜と過ごした場所。そして、これから住む場所。

「……ただいま」

崩れかけた門扉を撫でながら小さく呟いた。

感傷に浸る隆二の横を、すすっとマオが通り抜ける。

「へー、ここに住んでたんだ」

言いながらマオが家に向かう。

「マオさん、鍵あけますね」

それをエミリが慌てたように追う。

まさかまた、ここに住むようになるとは思わなかった。未だ一条の持ち物だったらしいが、持て余していてすぐに購入できたらしい。一条稔が親戚筋だったことも関係しているらしい。ありがたもない話だが。

「隆二い、はやくうー」

家の方からはしゃいだマオの声がする。それに苦笑しながら返事をした。

「今行くー」

部屋の中は、一通り掃除と修繕がしてあるようだった。

ゆっくりと辺りを見回し、茜との日々を思い出そうと、

「お風呂が変！」

「ああ、五右衛門風呂だから」

「あ、知ってる！ テレビで見た！ 釜ゆでにされるのね」

「ああ、まあ……」

「ねえねえ、あれは一！」

思い出そうとしたけれども、出来なかった。はしゃいだマオの声が色々と話かけてくる。

それに答えながら、まあいいか、とも思った。今後一緒に住むのはマオだ。茜じゃない。茜のことを今、無理に思い出さなくても。

大事なものは、今とこれからだから。

一通り家の中を見たあと、居間に向かう。

家具や食器類は予め運び込まれているので、コーヒーぐらいならば直ぐに飲むことができた。

隆二が人数分のコーヒーを、運び込まれたダイニングテーブルの上に置いた。

エミリはそれを受け取ると、自分の向かいでなにやら楽しそうに話す、隆二とマオを見る。

そろそろ、あの話をしよう。

きっと、隆二はなんらかのことを察しているだろうけれども。

「……あの」

二人の会話が途切れたところを見計らって声をかける。

「お話が、あるんですけど」

「エミリさん、どうしたの？」

一つ深呼吸してから、

「……わたし、研究所をやめることにしました」

「ええ！？」

エミリの言葉に、マオは驚いたように声をあげたが、隆二は少し眉を動かしたただけだった。やはりそれなりに察していたか。

「え、あれ、もしかして、あたしのせい？ あたしのこと助けたから？」

慌てたようにマオが言うが、

「いえ、自分で決めたことです」

それはしっかり否定した。

確かに直接のきっかけは、マオ達の側についたことだ。だけれども、マオ達の側につくことを選んだのは自分自身だ。研究所とはかりにかけて、マオ達を選んだ。

「正直、自分の人生において研究所よりも大きな存在ができるとは思っていませんでした」

それぐらい、研究所の存在はエミリにとって大きいものだったから。

「でもだったら、辞めてもわたしはきっと平気だな、と思ったんです」

研究所を辞めたら何もなくなってしまうと、昔は思っていた。今は違う。何もないかもしれな

いけれども、それは何かを掴めるということなのだと、知っている。

辞める前に最後の我が侘だ、と今回の引っ越しのことなど全てをねじ込んだ。あれが自分の最後の仕事だ。最後にこの二人の役に立てたのならば、言うことはない。

「……おっちゃんは？」

「父は好きにしろと言っていましたから」

「ふーん、ならいいか」

隆二は興味なさそうな顔をして、呟いた。

「……だから今日、ちょっと地味な格好なんだな」

そのまま呟かれた言葉に苦笑する。見ていないようで、この人は意外とよく見ている。

「ええ、まあ。あれはなんとなく、制服みたいなものだったので」

真っ赤な格好は研究所の人間として働くときの、制服のようなものだった。私服ではあるものの。戦闘服と言い換えてもいい。あれを着ると身が引き締まる気がしていた。

今となっては、もうあれを着ることもないのだろう。そう思う。

「え、でも、辞めてどうするの？」

「イギリスに行きます」

マオの言葉に小さく微笑み返す。

「わたし、高校も行ってませんし、どうしようかと思っていたんですけど、祖父の友人がこちらで勉強しないか、と言ってくれたんです。数年、向こうで勉強しようと思っています。自分がなにをやりたいか、を」

それから小さく息を吸い込み、一番大切なことを告げた。

「ですから、しばらくお会い出来ません」

エミリの言葉を聞き終わると、マオが横の隆二に訊いた。いつもわからないことを訊くのと同じ口調で。とても軽く。

「イギリスって遠いの？」

「遠いだろ。海越えるし」

「へー、いいな。あたしも行きたい！」

「パスポートないだろお前」

「実体化してない時にいけばいいじゃん」

「俺が無理。あんな鉄のかたまりが空飛ぶ何てありえない、絶対乗ったら落ちる」

「隆二おじいちゃんだもんねー」

そうやって、ぽんぽんといつもとおりの会話をしていく。それなりに意を決しての発言だったのにいつもの会話を。

そんな二人の会話に圧倒されて、エミリはぼかんっと間抜けな顔をした。

そんなエミリのことは気にせず、

「まあ、帰って来たらまた遊びにきてね」

「どうせ俺たち暇してるから。いつでもいいからさ」

二人は微笑んだ。

それになんだか、きゅっと心臓が痛くなる。視界が歪む。

「……エミリさん？」

マオの心配そうな声に慌てて深呼吸をすると、微笑んだ。

「ありがとうございます」

もう二度と、会わないぐらいの心づもりだった。そちらの方が、彼らの負担にならないと思ったのだ。

だけれども、来ていいと言ってくれるのならば、自分はまた彼らに会いたい。そして、彼らが社交辞令を言うなんて、そんなことが出来る人じゃないことをエミリはよく知っている。本心から、来ていいと思ってくれている。

それは、とても、嬉しい。

「絶対にまた来ます」

力強く言い切った。

事務的な話を終えて、エミリを駅まで見送った。

帰り道、のんびりと手を繋いで帰る。マオの左手と繋いだ隆二の右手には、あのブレスレットが巻かれていた。

「ところでさ」

隆二は歩きながら、隣のマオに話かける。

「んー？」

「お前、なんであそこに住みたいって言ったわけ？」

「え、今？」

驚いたようにマオが目を見開く。まあ、タイミング逃して、訊くのが遅くなってしまったことは否めないが。

マオは、隆二らしいね、と小さく笑うと、

「隆二が住んでいたところに住んでみたかったんだよー」

と、なんでもないように続けた。

「この前来たときはすぐ帰っちゃったし。じっくり見てみたかったの。隆二が住んでいたところ。隆二が見てたものとかも」

そこまで言ってから、ちょっと困ったような顔をして、

「もしかして、嫌だった？」

こちらの顔を伺ってくる。

「……や、別に？」

嫌ではないのだ。ただ、なんとなく微妙なだけで。現在と過去が交差する感じが、うまく言えないけれども、不思議な気分になるだけで。

「嫌ではないよ」

「そっか」

よかった、とマオが笑う。

さっきからよく笑っているな、とその顔を見て思う。楽しそうに笑っているのならば、まあ引越しも悪くなかった。

角を曲がり、自宅が見えてくる。

門のところで、一度マオが立ち止まった。つられて一緒に立ち止まる。

マオは家全体を見回すと、

「ねえ、隆二、ここは、あたしたちの家よね？」

隆二の顔を見て首を傾げた。

「ん？ ああ」

なに当たり前のこと訊いているんだか。

「ふふーん！ これでも居候なんて言わせないんだからねっ！」

するとマオは、何故だかやたらと勝ち誇った声でそう言った。

「は？」

予想外の展開にあっけにとられる。

「隆二の家に居たら居候だけど、隆二とあたしの家なら同居人でしょう？」

そう言って楽しそうに笑うと、隆二の手から鍵を奪いとって、さっさと玄関の鍵をあける。

居候？ ああ、なんだ、そんなこと気にしていたのか。

そう言えば、確かにいつまでも居候猫だと言っていたけれども、それは便宜上そう呼んでいただけで、隆二の中ではとっくの昔に居候から同居人ぐらいには格上げされていたのに。

言ってくればよかったのに。そんなに気にしているのならば、言ってくればよかったのに。

そう思いながら、同居猫の後ろ姿を見てみると、

「あ、あとさ」

玄関に入ってすぐのところでマオが振り返った。

「ん？」

「あたし、決めたから」

「何を？」

「覚悟を」

言ってマオは、悠然と微笑む。

予想だにしない言葉に、思わず息を呑んだ。覚悟を、決めた？ 何の？

「もしも死んでも、また幽霊になるから。絶対になるから。そう決めたの。元々幽霊なんだもの、またなるのなんて、簡単だよ、きっと。未練があればなるっていうし、未練たらたらだし？」

猫に九生あり、って君子で言ってたしね！」

なんだか悪戯っぽく笑って、歌うように続ける。

「隆二が泣いて喚いたって、一人になんかしないから」

くすくすと笑うと、あっけにとられる隆二を残し、くるっとターンして家の中に入って行く。

幽霊になる？ 何を言っているんだ、こいつは。そんなこと、出来ると思っているのだろうか

。

でもそうか。幽霊になったら、また元に戻るだけなのか。それがもしも、可能ならば、それも
ありなのかもしれない。

相変わらず想定外の斜め上をいく。想定外の存在だ。想定外の存在だから、もしかしたら本当に
幽霊になって、またまとわりついてくるのかもしれない。それならば、それでいいかもしれない

。

見ていて飽きない、と茜に言った。あれはやっぱりそのとおりだ。一緒にいて飽きない、退屈
しない。いささか振り回されてはいるけれども。

この同居人が何を考えているのか、まだまだわからないことだらけだ。

まあ、ゆっくり知っていけばいいさ。時間はまだまだあるのだから。

とりあえず今は。

「さって、テレビ見ようっと！」

マオが、既に運び込まれていた赤いソファーにぼんっと飛び乗る。今までと同じように。

「マオ」

そこに声をかけた。

「ん？」

「ただいま」

言ってみる。ここは二人の家なのだから。

マオは驚いたように目を見開き、

「おかえりなさい、隆二」

ぱっと花が咲くように、笑った。

ひとでなしの二人組

<http://p.booklog.jp/book/78927>

サイト版 : <http://freedom.lolipop.jp/novels/cruel/index.html>

著者 : 小高まあな

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kmaana/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78927>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78927>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ